

# 向日庵

5



## 目次

W.H. ハドソンの共生思想と寿岳文章——ウィリアム・ブレイクの系譜の上で	1
佐藤光（東京大学大学院総合文化研究科教授）	
寿岳文章の抵抗——『滴る雫』の柔軟心	8
川端康雄（日本女子大学文学部英文科教授）	
竹友藻風と寿岳文章	15
藤原弘一郎（英学史家）	
寿岳文章の本づくりと思索の生成 ——『ブレイクとホキットマン』の製本技法再生の試み	38
磯部直希（立命館大学研究員）	
寿岳文章の和紙研究—柳宗悦と新村出との交流から—	49
吉野政治（同志社女子大学名誉教授）	
<b>展覧会・講演会 報告にかえて</b>	
版名としての「向日庵」	67
玉城玲子（向日市文化資料館館長）	
寿岳文章と向日庵本の時代	70
高木博志（京都大学人文科学研究所教授）	
寿岳文章の軌跡	81
中島俊郎（甲南大学名誉教授）	
寿岳文章・しづ ——「思想と生活」の実践	98
長野裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）	
《書評》クレア・クッチオ、伊部京子「雁皮について」	114
《文学地図》 小説『朝』の舞台 大正デモクラシー期の大阪	117
あとがき 井上琢智（特定非営利活動法人向日庵副理事長）／編集後記	119

佐藤 光（東京大学大学院総合文化研究科教授）

アルゼンチンからの移民として英国へ渡り、鳥類愛護運動家として活動した作家 W. H. ハドソン (William Henry Hudson, 1841-1922) がロンドンで死去した時、その名声は絶頂期にあった。『タイムズ』紙に追悼記事が掲載された。小説『緑の館』( *Green Mansions*, 1904) はアメリカでベストセラーだった。1925年には『緑の館』の登場人物リマをモチーフとした記念碑がハイド・パークに建てられ、スタンリー・ボールドウィン首相 (Stanley Baldwin, 1867-1947) が除幕を行った<sup>1</sup>。しかし、その後、1959年に『緑の館』に基づく映画がオードリー・ヘップバーン主演で制作されたが、ハドソンは急速に忘れられた<sup>2</sup>。ジェイコブ・エプスタイン (Sir Jacob Epstein, 1880-1959) が手掛けた記念碑の所在は 'A-Z London maps' に記載されておらず、訪れる人もまばらであるという<sup>3</sup>。

ハドソンが忘れられたのは、ハドソン自身がそれを望んだから、と言えるのかもしれない。ハドソンは伝記を書かれることを嫌って、後世の研究者が資料として活用しそうな書簡や覚え書きを焼き捨てた<sup>4</sup>。ハドソンの親しい友人であり、最初のハドソン伝の執筆者モーリー・ロバーツは、ハドソンの親族から必要な情報を得たと記している<sup>5</sup>。

英米におけるハドソン忘却の流れに逆らうかのように、寿岳文章 (1900-92) と寿岳しづ (1901-81) はハドソンを読み続けた。寿岳文章はエドワード・ガーネット編『ハドソン詞華集』を購入して英語の教材を作成し、関西学院の授業で用いた。寿岳しづは、ハドソンの少年の日々の回想録『はるかな国とおい昔』を翻訳し、「その後、全訳ではないが、『ラ・プラタの博物学者』や『博物学者の本』も手がけ、彼女とハドソンのつながりあいは、ずいぶん長く深い」<sup>6</sup>。

寿岳夫妻とハドソンとの関わりについて、二点の先行研究がある。中島俊郎「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」(『向日庵』1号、2018) は、寿岳文章のハドソンに対する関心を自然愛、愛国者、自伝文学という三つの要点に整理し、寿岳しづ訳『はるかな国とおい昔』の訳文の検討を行った。長野裕子「寿岳しづ——書いて、ともに生きて」(『向日庵』4号、2021) は、ハドソンを教材に用いた寿岳文章の授業の様子を庄野英二の言葉からたどり、古在由重の書簡をもとに治安維持法下の獄中で『はるかな国とほい昔』が読まれたことを指摘

<sup>1</sup> Jason Wilson, *Living in the Sound of the Wind* (London: Constable, 2015), pp. 11-12, 344. 『緑の館』のリマは、森の中に暮らし、動物と交流する神秘的な少女である。森に迷い込んだ若者エイブルと心を通わせるようになるが、エイブルが不在の時に、村人たちに捕らえられ、魔女として焼き殺される。本作品は、自然と対比する形で、人間の活動の攻撃性を描き出しており、「エコ・ロマンス」(‘ecoromance’) と呼ばれる。David Trotter, *The English Novel in History, 1895-1920* (London and New York: Routledge, 1993), p. 90.

<sup>2</sup> Ida Marie Olsen, ‘Outlines of Ecological Consciousness in W. H. Hudson’s Environmentalism’, *English Literature in Transition, 1880-1920*, 63 (2020), p. 195.

<sup>3</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, p. 11.

<sup>4</sup> Ruth Tomalin, *W. H. Hudson: A Biography* (London: Faber and Faber, 1982), p. 231.

<sup>5</sup> Morley Roberts, *W. H. Hudson: A Portrait* (New York: E. P. Dutton, 1924), p. 7.

<sup>6</sup> 寿岳文章「野の博物学者 ハドソンの遺産」(『婦人の友』、1972年11月)、寿岳文章『わが日わが歩み——文学を中軸として』(荒竹出版、1977)、169頁。『ハドソン詞華集』は *A Hudson Anthology*, ed. by Edward Garnett (London: J. M. Dent, 1924) と推定される。寿岳しづによる翻訳の書誌情報を列挙する。ハドソン『はるかな国 とほい昔』寿岳しづ訳(岩波文庫、1937)。W・H・ハドソン「ラ・プラタの博物学者」寿岳しづ訳、『世界教養全集』第34巻(平凡社、1962)。ウィリアム・ヘンリー・ハドソン「博物学者の本」寿岳しづ訳、伊藤貴麿他編『少年少女世界文学全集』第8巻(講談社、1961)。

する。また、中西悟堂、竹友藻風、寿岳夫妻の交流を資料に基づいて掘り起こし、中西悟堂を発起人の一人とする日本野鳥の会を、ハドソンの鳥類愛護と自然保護の精神に対応するものとして位置付けた。

本論はこれらの先行研究に続くものとして、寿岳文章『自然・文学・人間——W・H・ハドソンの出発』（1973初版、新日本出版社、2002）に注目し、なぜ、ウィリアム・ブレイクの研究者であった寿岳がハドソンに興味を持ち続けたのか、という問いから出発して、ハドソンがブレイクの読者であったことを示す。

## 1 「生かされねばならない」

『自然・文学・人間』の方針と特徴は「あとがき」に端的に示されている。

主権が国民の一人一人にあることをはっきり定め、戦争の永久放棄・戦力の不保持・交戦権の否認を高らかにうたいあげた私たちの憲法にふさわしく、身も心も正常にのびてほしいと願う若い世代を対象に、いつか書いてみたいと考えていたこの『自然・文学・人間』を、「かもしか文庫」の一冊とするに際し、寿岳しづ訳、岩波文庫版『はるかな国とおい昔』からの七章の転載を、こころよく許された岩波書店に、あつくお礼申しあげます。（『自然・文学・人間』、237頁）

同書は七つの章と各章の後ろに置かれた「この章と私」という随筆から構成される。七つの章は寿岳しづ訳『はるかな国とおい昔』からの抜粋であり、随筆の書き手は寿岳文章である。寿岳しづ訳のハドソンの言葉をもとに、想定読者の「若い世代」に向けて、寿岳文章はですます調で語りかける。「あとがき」の日付が1973年3月18日であることに注目するならば、「身も心も正常にのびてほしい」という言葉の裏側に、健全な成長を妨げる公害問題を読みとることができる。憲法を話題にして、戦争を拒否する姿勢を確認したのは、ベトナム戦争が寿岳の脳裡にあったからであろう。

冒頭に置かれた「はじめに——自然を愛するという事」で、寿岳は図版をまじえて、戦争と公害について語り始める。アメリカ軍の絨毯爆撃による自然破壊と大量殺戮に触れた頁には、「ベトナムの民族舞踊「竹おどり」」の写真が置かれた。日本で発生した公害として「大気汚染・水質汚濁・騒音・地盤沈下・悪臭・振動・土壌汚染」を列挙した頁には、「東北地方の「ぼんどり」（山仕事の際の背あて）」の図版が置かれた<sup>7</sup>。戦争と公害がもたらす災厄と平穏な日常生活との対比が、伝統芸能と民藝品の図版によって鮮やかに示される。寿岳は、さらに、足尾銅山鉍毒事件やレイチェル・カーソン『沈黙の春』を話題にしながら、「自然と人民大衆の存在を忘れた、日本の為政者や企業家たちを告発」<sup>8</sup>し、日常生活に根差した作家としてハドソンの名を挙げる。ハドソンを評価する理由について、寿岳は次のように述べる。

だからその人の文体は、うつしだされる自然の風光や、人間のいとなみと完全に一つとなっており、作為のあとを感じさせません。文学には、いろいろの型や定義があり、それぞれ存在の理由をもっています。きわめて高度の、また広い知識がなければ、理解できない作品もあります。しかし、自然と、自然にさからわず自然の中にとけこむ素朴な人間とを、なによりも愛したその人には、なんの抵抗もなしに、自分の気持ちそのまま読者の胸にしみ入るものしか書けませんでした。私は、そういう作品を、文学として高く評価いたします。（『自然・文学・人間』、21-22頁）

<sup>7</sup> 寿岳『自然・文学・人間』、7頁、16頁。

<sup>8</sup> 寿岳『自然・文学・人間』、18頁。

ハドソンを語る寿岳の口調は民藝論と共通する。ハドソンの文体を評して「作為のあとを感じさせません」と述べたところには、「作為こそは拘束である」<sup>9</sup>という柳宗悦の言葉や、民藝においては「どれをとっても個人の作為はなく」<sup>10</sup>という寿岳の言葉が透けて見える。同じように「自然にさからわず自然の中にとけこむ素朴な人間」という表現は、「材料の性質に逆らへばよい模様はむづかしい」<sup>11</sup>という柳の模様論や、「その材料の性質が要求する方法」<sup>12</sup>で装幀を行うことを唱えた寿岳の書物論と響き合う。「材料の性質をそのまま受けて、少しもこれに逆らはず、それが求める必然な作り方」<sup>13</sup>に美の源を見る民藝理論では、ものづくりとは、人が材料を自由自在に制御して、思い通りに加工することではない。材料を征服するのではなく、その特質を活かすことが作り手に求められる。

ハドソンも自然を征服の対象ではなく、共存の相手と見なした。寿岳はハドソンの自然観を次のように説明する。

人間はたしかに、社会的存在であり、人類自身が築きあげてきた文明のなかで生活しています。しかし同時に、小鳥や草木と同じく、明るい太陽の光と、きれいな空気や水、目にしみる若葉の緑なくしては、決して健全に生きられない自然的存在でもあるのです。(『自然・文学・人間』、18-19頁)

人間は、生物は、生きられるかぎり生きねばならない、生かされねばならない。ここから、生命を破壊するすべての行為への、かれの生涯の非難と抗議が出発します。(『自然・文学・人間』、226頁)

「生かされねばならない」という言葉は、あらゆる生命を尊重する態度を示しており、倫理的には美しいが、実践するのは容易ではない。蚊に生まれ変わったら、知人を嘔みに行きたいからという理由で、蚊を撲滅することに反対したのは、ハドソンと同じ時代をハドソンと同じように移民作家として生きたラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)だった<sup>14</sup>。人にとって有害とされる生物を、ハドソンはどのようにとらえたのだろうか。

## 2 ヘビとの遭遇

『はるかな国とおい昔』から『自然・文学・人間』に転載された七つの章には、第十五章「ヘビと子ども」と第十六章「ヘビの神秘」が含まれる。「ヘビと子ども」でハドソンは、幼い頃にヘビを見つけたら長い棒で叩き殺すように教えられたので、「ヘビの迫害者になっていた」<sup>15</sup>と語る。ところが、ある日、殺されそうになったヘビを一人の女性に取り上げて、草むらに逃がすのを目撃した。なぜ、殺さないのか、なぜその女性はうれしそうにしているのか、をハドソン少年は考える。この事件について、寿岳はハドソンの言葉を引用しながら、次のように述べた。

<sup>9</sup> 柳宗悦「下手ものゝ美」、『越後タイムス』771号(1926年9月)、『柳宗悦全集』(筑摩書房、1980-92)8巻、11頁。

<sup>10</sup> 寿岳文章「私の民芸教室」、『日本の民芸』(1961年7月-1962年3月)、『柳宗悦と共に』(集英社、1980)、95頁。

<sup>11</sup> 柳宗悦「模様とは何か」、『工藝』20号(1932年8月)、『柳宗悦全集』13巻、559頁。

<sup>12</sup> 寿岳文章「書物」、『世界大百科事典』11巻(平凡社、1939年)、『寿岳文章書物論集成』(沖積舎、1989)、177頁。

<sup>13</sup> 柳宗悦「自力と他力」、『在家仏教』2号(1954年5月)、『柳宗悦全集』18巻、60頁。

<sup>14</sup> Lafcadio Hearn, 'Mosquitoes', in *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things* (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1904), p. 212.

<sup>15</sup> 寿岳『自然・文学・人間』、161頁。

「殺すよりは逃がしてやるほうがよいかもしれぬ、助けられた動物のためばかりではなく、助けた人間の魂のためにもよいことかもしれぬ」と考え始めるハドソンに芽ばえてくるのは、階層の低い序列にある生物を、人間が自己の必要のために殺すのは神の摂理にかなう、とするキリスト教の見方からはほど遠く、むしろ、生きとし生けるもの一切の殺害を禁じ、草木禽獣一切成仏を説く仏教的な世界観に近い、と見られないでしょうか。（『自然・文学・人間』、172頁）

ハドソンのヘビ観を「草木禽獣一切成仏」に近いと説明した寿岳は、続けて原著第十六章「ヘビの神秘」を紹介する。「ヘビの神秘」はハドソン少年とヘビとの遭遇を描く。二メートル以上のヘビが近くを進んでいることに気が付いて、ハドソン少年は恐怖で立ちすくむが、ヘビはそのまま流れるように去っていった。また、別のときには、黒い大きなヘビが「私の足の甲を横ぎって、長い胴体を、そろそろと引きずっていた」のに気が付き、少年はただ見おろすことしかできなかった。この体験について、ハドソンは「じっと静かにしておりさえすれば、ヘビは私に襲いかからず、ほどなく姿を消すことも知りました」<sup>16</sup>と振り返る。寿岳はハドソンのテキストから「アニミズム」という言葉を拾い上げる。

ハドソン自身の言葉を借りますと、アニミズムとは、自然界には文明開化の人間にあらわれないなものかが宿っており、ただ子どもだけに、かすかながら残っているその痕跡、木にも石にも、人間以外のどんな動物にも、人間がもっているのと同じ生命をあたえようとする傾向、衝動、本能をさし、ヘビならばヘビを、人間自身の投影だと見る感情なのです。（『自然・文学・人間』、190-191頁）

ヘビを助けた女性の話とハドソン少年の足の上を通り過ぎたヘビの話は、ハドソンの自然観の基礎を形作る逸話として、ハドソンの伝記では必ず紹介される。寿岳はハドソンの自然観を「草木禽獣一切成仏を説く仏教的な世界観に近い」と述べたが、ウィリアム・ブレイクが『天国と地獄の結婚』に記した「生きとし生けるものはすべて神聖である」<sup>17</sup>という言葉と重なる。

『自然・文学・人間』でハドソンについて語りながら、寿岳は英国ロマン派詩人の作品よりウィリアム・ワーズワス「わたしたちは七人よ」(‘We are Seven’)、ジョン・キーツ「つれなきたおやめ」(‘La Belle Dame sans Merci’)、ワーズワス「虹の歌」(‘The Rainbow’)の全訳を紹介し、ジョン・ミルトン『失樂園』(‘Paradise Lost’)とサミュエル・テイラー・コールリッジ「老水夫の歌」(‘The Rime of the Ancient Mariner’)を話題にする<sup>18</sup>。英文学者の面目躍如と言うべき話の進め方だが、ブレイクへの言及は見られない。しかし、前年に発表した「野の博物学者 ハドソンの遺産」で、寿岳はブレイクを引用した。

「人間がいないと、自然は索漠をきわめる。」これは詩人ウィリアム・ブレイクの、深い哲理をひそめた発言である。そして発言の背後には、自然一辺倒のルソーの世界観へのきびしい批判があることを、私たちは忘れてはならない。キリスト教の根底に横たわる思想からすれば、人間も自然も、決して完全なものとして造られてはいない。自然を野放図のままに捨てておかず、人間と自然とが相寄り相助けて、共存の実をあげるとき、完全そのものではないにしても、完全に近い美しい調和が、初めて人間と自然の世界に実

<sup>16</sup> 寿岳『自然・文学・人間』、183、184頁。

<sup>17</sup> ‘For every thing that lives is Holy’. William Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, in *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. by David V. Erdman (New York: Doubleday, 1988), p. 45. 以下Eと略記して頁数を示す。

<sup>18</sup> 寿岳『自然・文学・人間』、51-56、148-151、192-193、172、193-195頁。

現する。<sup>19</sup>

寿岳が引用したブレイクの言葉は『天国と地獄の結婚』の一節である<sup>20</sup>。『天国と地獄の結婚』には、古代の詩人たちは万物を生命の宿る存在としてとらえ、森や川や山や湖や都市や民族などに神々の属性を与えた、というくだりがあり、ハドソンの自然観と呼応する。寿岳はハドソンの自然観について、「草木禽獣一切成仏を説く仏教的世界観に近い」と述べた。同じように寿岳は「この世の有情非情は、みなブレイクの心の眼に人間の神聖な形となつて現れる。山川草木が悉く人間に外ならないのである」<sup>21</sup>と記した。寿岳がハドソンにブレイクに通じる要素を読みとっていた可能性は高い。

寿岳のハドソン論から 50 年近くの時が流れた。現在のハドソン研究は、移民文学<sup>22</sup>と環境文学の観点から、着実に進みつつある。例えば、寿岳が「作為のあとを感じさせません」と評したハドソンの文体は、ガウチョ (gaucho) と呼ばれる南米草原地帯のカウボーイの口承説話の伝統によって形作られた、と考えられるようになった<sup>23</sup>。また、ハドソンにとっての自然は、万物が相互に関連し合った網状の体系であり、人間をその一部と位置付けたところに、環境保護と生態学の観点が見られる、という指摘もなされた<sup>24</sup>。アルゼンチンで暮らした若い頃に、ハドソンは多くの鳥を撃って、標本として米国や英国の博物館へ送ったが、渡英後は、自然の中に分け入って観察することに徹し、そうすることによって生態系の多様性と相互作用を理解しようとした。このようなハドソンの態度を「参与観察者」(‘participant-observer’) と呼ぶ研究もある<sup>25</sup>。ハドソンの自然観は、ハドソン自身が無神論者 (‘religious atheist’) を自称したように、キリスト教に基づくものではない<sup>26</sup>。人類を特別視せず、万物の生命を平等に見る姿勢は、ブレイクの神秘主義思想に近い<sup>27</sup>。これらのハドソン研究の動向を見渡すならば、寿岳が 1973 年に『自然・文学・人間』で示したハドソン理解は先駆的なものだったと言えそうである。

### 3 ブレイクの愛読者として

寿岳文章が 1929 年に刊行した『キルヤムブレイク書誌』には、ブレイク関連の文献として‘AN OUTLINE HISTORY OF ENGLISH LITERATURE. By William Henry Hudson. London: G. Bell and Sons. 1912’<sup>28</sup> という項目がある。大英図書館のオンライン・カタログで同書を検索すると、著者について‘William Henry Hudson, 1862-1918’ という説明があり、作家ハドソンとは生没年が異なる。また、同書の扉には表題と著者名に続いて、‘STAFF LECTURER IN LITERATURE TO THE EXTENSION BOARD / LONDON UNIVERSITY’ とあるの

<sup>19</sup> 寿岳文章「野の博物学者 ハドソンの遺産」、『わが日わが歩み』、166 頁。

<sup>20</sup> ‘Where man is not nature is barren’ (Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E38).

<sup>21</sup> 寿岳文章「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホケットマン』1 巻 1 号 (1931 年 1 月)、32 頁。

<sup>22</sup> Jessie Reeder, ‘William Henry Hudson, Hybridity, and Storytelling in the Pampas’, *Studies in English Literature 1500-1900*, 56 (2016), pp. 561-581.

<sup>23</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, pp. 66, 73. W. J. Keith, *The Rural Tradition: A Study of the Non-Fiction Prose Writers of the English Countryside* (Toronto and Buffalo: University of Toronto Press, 1974), p. 186.

<sup>24</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, p. 340. Olsen, ‘Outlines of Ecological Consciousness’, p. 194. 『動物生態学』の著者チャールズ・エルトンは、ハドソンの著作から多くを得た、と述べている。Charles Elton, *Animal Ecology* (New York: Macmillan, 1927), p. 7.

<sup>25</sup> Reid Echols, ‘“A Traveler in Little Things”: Nature, Nostalgia, and Nativism in W. H. Hudson’s English Country Books’, *Texas Studies in Literature and Language*, 62 (2020), pp. 231-233, 241.

<sup>26</sup> Keith, *The Rural Tradition*, p. 187.

<sup>27</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, pp. 130, 321. Keith, *The Rural Tradition*, pp. 187-188.

<sup>28</sup> 寿岳文章『キルヤムブレイク書誌』(ぐろりあそさえて、1929)、486 頁。

で、同書の著者はロンドン大学の教員であり、同姓同名の別人であることがわかる。なお、ウィルソンのハドソン伝によると、作家ハドソンは友人のリンダ・ガーディナー (Linda Gardiner) 宛の書簡に、自分の学識は同姓同名のロンドン大学教授と同等だ、と書いているらしい<sup>29</sup>。

寿岳の『ブレイク書誌』に作家ハドソンの著作は登録されていない。その後 G. E. Bentley Jr が刊行したブレイク書誌にも見当たらない<sup>30</sup>。ブレイクとハドソンとの関係は未開拓の領域のようだ。しかし、ブレイクからの影響は、ハドソンが子ども向けに書いた幻想小説『迷子の少年』 (*A Little Boy Lost*, 1905) に顕著に見ることができる。主人公のマーティン (Martin) は南米と思われる草原地帯に両親と住んでいる。「家の近くには子どものすがたさえ見えない」環境で、「家のまわりにいる動物なら、何でも友だち」<sup>31</sup>であり、マーティンはヘビを家に持ち込もうとして父親に叱られるような少年である。誤って銃でヘラサギを殺した後、マーティンは「きらきら光ってゆれながら、踊るようなもの」<sup>32</sup>を追いかけて、家を離れ、草原をさまよいはじめ。遊び友だちを探すヘビの歌を聴いたり、血を流すヘラサギのような若者に会ったり、原住民に衣服を奪われたりするうちに、イタチやハゲタカの言葉がわかるようになり、「山の精」 (*The Lady of the Hills*) と暮らし始める。「山の精」はマーティンに対して「おかあさん」として振る舞い<sup>33</sup>、ヘビの気持ちや銃と槍と剣を持った「血に染まったおそろしい男たち」<sup>34</sup>の暴力性をマーティンに教える。やがて、マーティンは「山の精」のもとを離れて海へ向かい、途中で小人の老人の姿をしたフクロウや老女の姿をした蛾と出会う。海では波が白髪の老人として現れ、マーティンが筏の上で眠り込む場面で物語が終わる。

『迷子の少年』については、表題がブレイクの『無垢の歌と経験の歌』に収録された詩「迷子の少年」 ('A Little Boy Lost') に由来すること<sup>35</sup>、19世紀英国の幻想小説に共通する漂泊の旅という設定が見られることが確認されている<sup>36</sup>。これらに加えて、二つの特徴を指摘したい。一つは少年の自主的な彷徨である。マーティンは父母の家に戻ろうとしないし、戻りたいとも思わない。「山の精」に保護された後も、保護されることを拒むかのように、再び流浪の旅に出る。保護とは、保護されるものに対して、安全を確保し、必要な援助を与えることを意味するが、それは、ともすれば、保護されるものの自立を阻むことにつながる。マーティンは一貫して保護されることを拒否しており、自主的にさまよひ続ける姿勢は、ブレイクの『無垢の歌と経験の歌』に収録された「失われた少女」と「見つかった少女」の主人公ライカに見られる特徴でもある<sup>37</sup>。もう一つは、物語が進展するにつれて、動植物と自然現象が人の姿でマーティンの前に現れるようになることである。老人の姿をしたフクロウや老女の姿をした蛾には、「内なる眼には白髪の老人／外なる眼には道端のアザミ」<sup>38</sup>というブレイ

<sup>29</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, p. 105. リンダ・ガーディナーは英国王立鳥類保護協会 (The Royal Society for the Protection of Birds) に35年にわたって勤務し、ハドソンの死後に遺著 *Rare, Vanishing and British Birds* (London: J. M. Dent; New York: E. P. Dutton, 1923) を編集した。

<sup>30</sup> G. E. Bentley Jr, *Blake Books* (Oxford: Clarendon, 1977) と G. E. Bentley Jr, *Blake Books Supplement* (Oxford: Clarendon, 1995) にハドソンは登録されていない。

<sup>31</sup> W・H・ハドソン『夢を追う子』西田実訳 (福音館書店、1972)、4頁。W. H. Hudson, *A Little Boy Lost* (London: Duckworth, 1905), p. 3.

<sup>32</sup> ハドソン『夢を追う子』、20頁。Hudson, *A Little Boy Lost*, p. 21.

<sup>33</sup> ハドソン『夢を追う子』、120頁。Hudson, *A Little Boy Lost*, p. 123.

<sup>34</sup> ハドソン『夢を追う子』、159頁。Hudson, *A Little Boy Lost*, p. 163.

<sup>35</sup> Wilson, *Living in the Sound of the Wind*, p. 328. ハドソンは「ブレイクの詩の中にこの物語の題名を見出したことなどを、思い出すことができた」と述べている (「ハドソンの手紙」、『夢を追う子』、199頁)。W. H. Hudson, [A Letter to Alfred A. Knopf, 14 November 1917], in W. H. Hudson, *A Little Boy Lost* (New York: Alfred A Knopf, 1920), p. 185.

<sup>36</sup> Colin Manlove, *The Fantasy Literature of England* (Eugene: Resource Publications, 2020), p. 177.

<sup>37</sup> Blake, 'The Little Girl Lost', 'The Little Girl Found', *Songs of Innocence and of Experience*, E20-22.

<sup>38</sup> 'With my inward Eye 'tis an old Man grey / With my outward a Thistle across my way' (Blake, 'A Letter to Thomas Butts, 22



クの詩句に通じるものがある。作中のマーティン少年は、まるでブレイクであるかのように、万物に生命を幻視する。

ハドソンは鳥や自然を扱った随筆でブレイクに言及した。『村の鳥』において、籠の中で飼われることは鳥にとって不幸である、と述べた後、ハドソンは「籠にとらわれた赤い胸毛の駒鳥は／天国じゅうを憤らせる」（「無心のまえぶれ」）というブレイクの詩句を引用する<sup>39</sup>。『ダウンランドの自然』では、同じ句を引用しながら、籠の中で生ける屍のようになったフクロウについて語った<sup>40</sup>。『ランズ・エンド』には、同じ句を踏まえて、語り手「私」が少年たちに小鳥を捕まえることの残酷さを説く場面がある<sup>41</sup>。『ダウンランドの自然』に収録された別の随筆では、タゲリが激しく飛び回る様子を描写した後、ブレイクの「虎」より「またどんな肩　どんな技が／おまえの心臓の筋を　ねじり得たか」を引用し、タゲリも見事な心臓や脳や神経を持っているに違いない、と書いた<sup>42</sup>。『鳥と人間』で大鴉とハヤブサとの激しい格闘を描いたときには、「仔羊を創った神が　おまえを創られたか？」（「虎」）という一行を引用した<sup>43</sup>。

ロバーツのハドソン伝によると、1920年11月21日に、ブレイクをどのように思うか、と尋ねられて、ハドソンは「彼の長い神秘的なものは読めない、しかし、もちろん無垢の歌は好きだ」と答えたという<sup>44</sup>。ハドソンの著作にちりばめられたブレイクからの引用と、ハドソンの伝記的事実より、ハドソンが『無垢の歌と経験の歌』を愛読したことは明らかである。想像力の世界に沈潜したブレイクと自然界へ分け入ったハドソンとでは、その方向性は異なるが、ブレイクが虎と仔羊をともに神の創造物として受け入れたように、ハドソンもまた万物が共存する状態を目指して、人の力を抑制することに積極的な意義を見出した。人と自然との共生を説いたハドソンは「生きとし生けるものはすべて神聖である」と記したブレイクの系譜の上にあった。公害と戦争の時代に、ハドソンに託して、自然と文学と人間について若い世代に語りかけた寿岳文章も、この系譜に連なる者の一人であった。ブレイクとハドソンと寿岳文章を共生思想という一本の線でつなぐことができる。

## 付記

本論は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「ウィリアム・ブレイクとウィリアム・モリスにおける自他共生思想の比較研究」（19K00388）の研究成果の一部である

---

November 1802', E721).

<sup>39</sup> 寿岳文章訳『ブレイク詩集』（岩波文庫、2013）、122頁。Blake, 'Auguries of Innocence', E490. W. H. Hudson, *Birds in a Village* (London: Chapman & Hall, 1893), pp. 124-125. W. H. Hudson, *Birds in Town & Village* (London and Toronto: J. M. Dent, 1919), p. 172.

<sup>40</sup> W. H. Hudson, *Nature in Downland*, 2nd edn (London: Longmans Green, 1900), p. 272.

<sup>41</sup> W. H. Hudson, *The Land's End: A Naturalist's Impressions in West Cornwall* (London: Hutchinson, 1908), p. 274.

<sup>42</sup> 寿岳訳『ブレイク詩集』、72頁。Blake, 'The Tyger', *Songs of Innocence and of Experience*, E24. Hudson, *Nature in Downland*, pp. 244-245.

<sup>43</sup> 寿岳訳『ブレイク詩集』、73頁。Blake, 'The Tyger', *Songs of Innocence and of Experience*, E25. W. H. Hudson, *Birds and Man* (London: Duckworth, 1915), pp. 168-169.

<sup>44</sup> 'R. "What do you think of Blake?" / H. "I can't read his long mystical stuff, but of course I like Songs of Innocence' (Roberts, Hudson, p. 192).

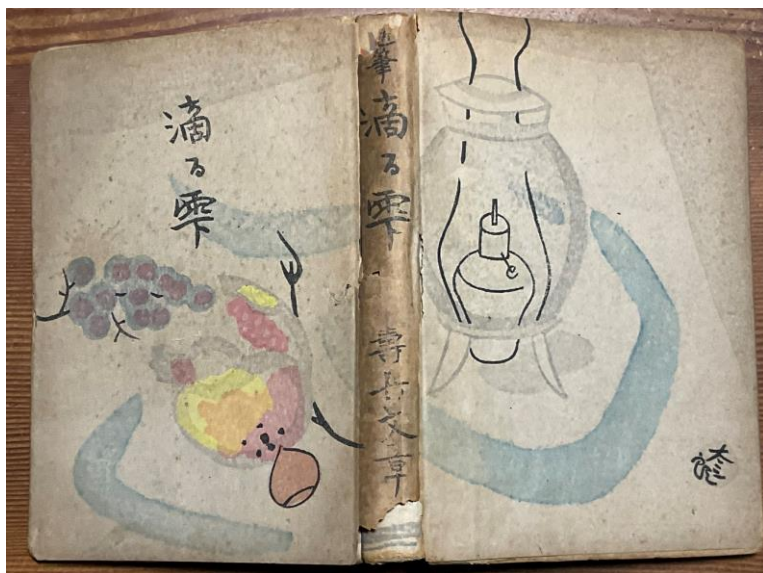
## 壽岳文章の抵抗——『滴る雫』の柔軟心

川端 康雄（日本女子大学文学部英文科教授）

小津安二郎監督の映画『秋刀魚の味』（松竹、1962年）で戦友（上官と部下）のふたり平山周平（笠智衆）と坂本芳太郎（加藤大介）が思いがけずバーで再会して酒を酌み交わす場面で、平山が「けど〔戦争に〕負けてよかったじゃないか」と言うと、坂本が「そうかもしれねえなあ。馬鹿な野郎が威張らなくなっただけでもね」と返すやりとりがある。国際的な評価も高い、小津監督の代表的な家庭劇で、メッセージ性の強い映画ではないのだが、それだからかえってこういう台詞が印象に残るといふことなのかもしれない。軍隊生活にとどまらず、戦時の翼賛体制のなかで、「敵米英撃滅」だとか「聖戦完遂」だとかいったスローガンを唱えて威張り散らすナショナリストたちのことが脚本を書いた小津と野田高梧と頭にあつたのではないかと推測される。

壽岳文章が敗戦後まもない1947（昭和22）年に刊行した『滴る雫』（河原書店刊）をこのたび75年の時を経て読んでいて、小津映画の上記の場面がふと蘇った。この本も、大上段に天下国家を論じるようなものではなく、長短さまざまな随筆31篇をまとめたもので、著者の日常を淡々と綴り、時折笑いを誘う諧謔も加わり、なんともいえぬ味わいがある。そんな静かな書物のなかに、戦前戦中の（部分的には戦後の）「威張る輩」への著者一流の抵抗の身ぶりが感じられるのだ。以下、それについて書いてみたい。

敗戦後に壽岳が刊行した本としては1945年暮れに『紙漉村旅日記』の復刊本（明治書房）、1946年に『日本の紙』（改訂再版、大八洲出版）、そして1947年に入ると『紙障子』（復刻版、靖文社）、翻訳2点——『対訳詳注 ワイルド童話選』（府中書院）と『エルサレムへの道——ブレイク詩文選』（西村書店）——、『平日抄』（靖文社）、英文による『日本におけるエマーソン書誌』（*A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan*, Sunward Press）、そして『滴る雫』と続く<sup>1</sup>。1947年は出版の点では壽岳にとって豊作の年であったといえよう。ただし、強調しておくべきことだが、和紙および工藝全般の随筆を集めた『平日抄』と同様に、『滴る雫』も、収録エッセイの多くが戦前戦中に書かれたものであった。掲載順にタイトル、および文末に記された初出（もしくは執筆）年月を以下に書き写しておく（初出年は原文では元号だが西暦に直して記す）。



壽岳文章『滴る雫』（河原書店、1947年12月10日刊）表紙カバー

<sup>1</sup> 壽岳文章の書誌情報については大久保久雄・笠原勝朗編『壽岳文章書誌』（壽岳文章書誌刊行会、1985年）を参照した（以下、『書誌』と略記する）。なお、『滴る雫』所収の31篇の随筆のうちかなり多くの初出情報がこの書誌に記されていないか、あるいは『滴る雫』に紐付けられていない。書誌の増補改訂版が望まれる。

「序」(1947年3月10日)／「滴る雫」(1939年4月)／「春を待つ心」(1937年2月)／「桜」(1941年4月)／「名」(1938年12月)／「秋」(1935年12月)／「洛外の秋」(1937年10月)／「折畳式雨傘」(1938年4月23日)／「愕儒先生旅行談」(1934年10月)／「教授」(1939年2月)／「新劇の観方」(1943年6月)／「日本文学の宿命」(1940年2月)／「古典に於ける文学復興」(1940年2月)／「萬葉管見」(1939年1月)／「先人の読書」(1940年4月)／「書評機関誌の必要」(1936年10月)／「このごろ思ふこと」(1946年9月)／「思ひ出す本と人と」(1940年3月)／「国字の闇市場」(1945年8月)／「言葉」(1946年11月)／「バストゥールと日本」(1942年10月)／「防霰堂」(1941年11月)／「法明院」(1942年9月)／「ヘンリィ・グリーンの手紙」(1946年6月)／「王堂と八雲」(1946年8月)／「法隆寺」(1946年6月)／「灯ともし頃」(1939年12月)／「蠟燭」(1936年2月)／「もう一つのアメリカ」(1946年12月)／「靈性アメリカ」(1946年12月)／「トルストイの一つの限界」(1932年10月)／「慈雲尊者」(1938年10月)<sup>2</sup>

執筆年代で見ると、31篇の随筆のうち、もっとも古いのが1932(昭和7)年10月の「トルストイの一つの限界」で、これを含み1930年代発表の随筆が14篇、1940年から43年までが9篇、戦争末期のブランクをへて戦後1945年8月から46年12月までが8篇となっている。それを執筆順に並べるのではなく、ある程度関連しあうトピックを緩やかにつなげるかたちで構成されている。「闇市場」や「新しい憲法」が言及されていれば戦後であることがすぐわかるのだが、そうした点を除けば、戦前、戦中、戦後を区別するものはあまりなくて、むしろそれらを貫く心構えが印象的である。その心構えを壽岳は「柔軟心」と呼んでいる。「序」の冒頭で、過去10年あまりの間に書いた随筆のうち、「柔軟心の発揚に力点を置いたもの、または柔軟心から表現されたもの三十一篇」を選んだと説明し、こう続けている。

思へば悲劇的な十余年であった。日本はその民族性に必ずしも欠けてはみない柔軟心を日々に失つて、排他的・孤立的な一方にのみ傾いた。敗戦は日本をさう云ふ病症から一応解放したが、最近の動向を見ると、再び同じ危険にさらされる兆無しとしない。批評がいつまでも柔軟性や無私性にとどまつてゐてはならぬことは、私も十分に知つてゐるが、しかしどんな立場を取るにもせよ、その立場の足がためのためには、あくまでもものをありのままに見ると云ふキャソリシティが要請される。多くは発言の不自由な時局下に書かれたこれら硬軟軽重さまさまの随筆が、いささかにもせよ著者の意のあるところを伝えてくれるならば喜びである。

昭和二十二年三月十日

壽 岳 文 章

この「序」の冒頭部分の「柔軟心の発揚」という語句の使い方が面白い。「発揚」といえばすぐに思い浮かぶ熟語は(当時も、また残念ながら当今も)「国威発揚」なので、「柔軟心」と結びつけてこの語を用いることによって、それが「国威」にぶつけられて、ある種の柔らかな反骨心のニュアンスが醸し出されている。「キャソリシティ」(catholicity)は、ここでは物事を大らかに捉えようとする度量の広さの謂であろう。

書題は巻頭に収録された随筆の題名に因んでいるが、その表題作のなかでこれが詩人T・S・エリオットの代表作『荒地』(*The Waste Land*, 1922; 壽岳は『荒廢の国土』と訳している)から採ったものであることを伝え

<sup>2</sup> 『滴る雫』の各随筆の表題および以下の引用では、原文の旧仮名遣いを残すが、漢字については一部を除いて旧字を新字に変えた。なお、引用文の末尾に当該ページを注記する。

ている。日本の各地でなされている村祭をまず話題にして、その祭の根幹は「生命の意欲の象徴的な表現」(2) であるとし、「わが国の村の祭ほど、一方で純粹に土俗的でありながら、他方人類全体の祈願を現はしてゐる日本的存在は、ほかにさう多く見出せないのではあるまいか」(3) と述べ、土俗信仰の生命力の強さを強調してこう続ける。

かう云ふ風に考へてくると、明日の生活に希望をもち、生命の豊満と開花と増殖とを祈ることほど、その拠るところの遠く且つ深い人類の願望は無いと言つてよい。それは昔も今も変わらないし、西でも東でも同様である。それが藝術を産み、人生を産む。〔……〕世界大戦後の混乱と絶望とを象徴的に描いたと思はれるエリオットの「荒廢の国土」の中で、今もなほ忘れがたく胸にひびいてくる一節は、渴ききつた国土の一隅から聞える水の雫の滴りである。(3-4)

エリオットの代表作の表題を『荒廢の国土』と訳した人を私は壽岳以外に知らない。確かに『荒地』とするのでは十分に伝えきれないその詩世界をよく表しているし、またその作品の刊行時の英国および欧州と、敗戦直後の日本とのアナロジー（英国は敗戦国ではなかったものの、これまでにない死傷者が出て、devastating であったのは敗戦国とおなじだった）がよく伝わるタイトル訳であると思える。そこでの「水の雫の滴り」はその長篇詩の第5部「雷鳴の言ったこと (What the Thunder Said)」のなか、岩に水の雫が滴り落ちるのを「ぽつ、ぽと、ぽつ、ぽと、ぽと、ぽと、ぽと (drip drop drip drop drop drop drop)」とエリオットは半ば擬音を用いて表現している。この滴りを壽岳は「渴ききつた国土の一隅から聞える水の雫の滴り」と評して、廢墟のなかの希望を示す象徴として捉えていることが窺える。おなじ随筆の終わりのほうで彼はこう述べる。

世界はいま大きな混乱のうちにある。この世相は、過去の一つの主義、一つの主張、のみを持つ人々には、もの悲しく絶望的に映るかも知れない。しかし人類の悠久な歴史から見れば、百年二百年は瞬く間に過ぎる一刹那だ。歪められたものは、やがて正される日が来よう。報償の理は自然界の到るところに証明されてゐる。〔・・・〕どんな小さな片隅に押しこめられても、なほ心楽しくあるほどに動的で柔軟な心を所有するものは、無限に広がる生命の明日を見てゐる。だから私は、希望をもつこと、生きることこそ、人間の本性であり、強ひられずに果される義務だと言ふのである。中世の聖者たちは、喜びがそれだけ強まるために苦痛の烈しさを願つた。苦しみは喜びを痛感させるための神の恩寵と観じた。そこまで思ひつめなくてもよい。生きよ、ただ自然に。世界が調和ある軌道から外れたら、それが戻る日を心楽しく待て。但し、——そしてこれが最も大切である、——我々の生活の中心をなすものは、過去でも未来でもなく、常に現在であることを忘れずに。ここから諸君の叡知が誕生する。(6-8 頁)

末尾に「昭和十四年四月」の年記がある。『書誌』ではこれの初出が明記されていないが、最後のセンテンスで「諸君」とあることからして、学生に向けての激励文として書いたものであると見てよいだろう。未確認であるが、『書誌』の第582番に示された『神戸商大新聞』（神戸商業大学）1939年4月15日号に掲載の随筆「何よりも柔軟を」がその初出なのではないだろうか。その時点で世界が大混乱の状態にあること。そんな時代状況が「一つの主義、一つの主張」のみの持ち主には「悲しく絶望的」に映りうる——というその主義、主張とは、社会主義か共産主義か、あるいは民主主義、平和主義、反戦論でさえもありうる、反体制的な主義主張であることが仄めかされている。「世界が調和ある軌道から外れたら」という表現も含めて、「発言の不自由な時局下」としては随分思い切った表現で、その意を汲むことができる学生はさぞや強く響く激励として受けとめたことだろう。

「柔軟心」からの表現が発揮された随筆としては、「愕儒先生旅行談」(1934年)、「折畳式雨傘」(1938年)、「教授」(1939年)の3篇が寿岳の教師稼業と家庭生活について自分自身を戯画的に描いて見せて、たいへ面白い。「愕儒先生旅行談」の「愕儒」とは見てのとおり寿岳のことで、書き出しはこうだ。

愕儒先生は永いこと英語の教師をして居る。しかし先生は英語の教師なるものが嫌ひらしい。習慣の力は恐ろしいもので、永の年月英語の先生をしてみると、一種の「英語教師臭」と言つたやうなものが、何かにつけて頭をもたげる。実に困る。ものの言ひ方、本の持ち方、歩きぶり、電車に乗つた折の足の重ねかた、バスに乗るまいか乗らうかと思案する時の蝙蝠傘の突きかた。しかしかうした目に見える姿態に現はれる英語教師臭味はまだ良いが、物の考へ方にまでこの臭味がはひつてきて、女中に缶詰のレッチェルの講義などを始めるに至つては、全くやりきれないと先生は云ふ。過去十数年に亙る先生の教師生活——彼は学生時代の当初から教師生活を強ひられた——の絶えない努力は、いかにしてよき典型的な教師になるかよりは、いかにしてなさけなくも日毎にしみゆく教師臭味を己が身から抜き去るべきかにかかつてみたらしい。だから先生は学校から帰ると、先づ足をすすぎ、手を拭ひ、顔を洗ひチョークによごれた洋服を和服にぬぎかへ、高青邱の古版詩集のやうなものに眼をうつす。けだし「英語教師臭」から一刻も早く抜け、一個の人間として、自然にあるがままに物を見たい思ひからである。(52-53)

このように「英語教師臭」から抜ける努力をしても、なにかにつけ言葉の語源の詮索をしたがるところがあって、やはり教師の「素性を隠し了せない」(53)というふうに話はその「性癖」のほうに移ってゆく。これは『書誌』によれば『関西学院新聞』(関西学院)1934年10月27日号に掲載とある(第476番)。寿岳のこういう「告白」を聞いて学生たちはさぞや面白がったことだろう。

その5年後に発表した随筆「教授」も、ある英語教師を第三者の目から客観的に描くような書き方をして行って、読み進むうちにそれが著者自身であることが読者にわかるような仕掛けになっている。こちらの随筆でも「教師臭」という語句がキーワードとして使われている。「教授」という呼称を自身に使われることに抵抗を覚える「彼」は、「電車などで、青白い顔をして、抱き鞆をかかへ、黒ずんだ洋服のスタイルにまで教授臭を漂はせてゐる人たち——凡ての教授がさうであると言ふのではないが——を見ると、何かわが身につまされて、寒々とした反省を覚える」(65)と言う。そう思うのには、教授と呼ばれる職業の現状が、あるべきものとは異なるという批評意識があるからだ。だから言葉を続けて寿岳はこう書く。「学問の世界が、もつといきいきと人間の世界と結ばれるわけにはいかないものか。大学の職能が、もつと全体的な意味をもつてみた時代のそれへ還元されるわけには行かないものか。大学の転落が云為され、教授の無能が論議されるごとに、彼はエウロップの大学の始りと言はれるアベラールの魅惑的な講義を想ひ、自己や自己満足をすてて、全体の観念の獲得保持を念とするニウマンの大学論を想ひ、現実とあこがれとの間の距離の甚しさに長大息するのである」(65-66)。

「折畳式雨傘」の初出は『書誌』によれば『文藝春秋』の1938年6月1日発行の号とのことである(『書誌』550番)。1937年10月から40年3月まで、著者は妻静子とともに紙漉村の調査で全国各地を旅した。1週間以上にわたる旅ともなると雨に逢う機会が増える。それで携帯に便利な傘が要するというので、折畳式雨傘を買うことにした。

この雨傘の重宝さを如実に示されたのは、「一日本淑女の欧州紀行」の著者で、欧米人に愉快的灸をすゑられた市河晴子夫人である。いつであつたか、病床の令弟市河三祿博士を見まはれての帰るさ、雨中、しかも初めての道であつたのに、夫人は屈託もなく、あのきびきびした容姿と饒舌とを、私の家へもちこまれた。たまたま私の家へは、河井寛次郎、村岡景夫、水谷良一、柳宗悦の面々が集まつて、工藝論の花を咲

かせてあるところであつた。『民藝館の出店みたいね。』と、早速の評語を与えた夫人は、私たち夫婦としばらく元気のいい話を交されたのち、これから伊勢へ行くと言つて、再び降りしきる雨の中に下り立たれた。その時、『ヨーロッパを持ち廻つていためたけれど、これ、とても便利よ。』と言つて、パンパンシュツシュツと開いてみせられたのが、折畳式雨傘である。なるほど、便利だな、と感心した私は、それを買ひ得る日の到来を、ひそかに心待ちしてゐたのである。(46-47)

向日庵が柳や河井らが集つて工藝論を交わすサロンになつていて、そこに才気煥発な市河晴子(1896-1943)が参入していつそう華やかな場になる(「一日本淑女の欧州紀行」は前年の1937年にロンドンとニューヨークの2つの書肆から刊行された彼女の紀行文 *Japanese Lady in Europe* のことだろう)、そんな様子がじつに生き生きと描写されていて、読んでいて気持ちが高揚してくる。

かくして著者は市河晴子に感化されて百貨店に赴き、売り子に薦められるままに最新の折畳式雨傘を購入したのだが、開き方が十分に飲み込めない。それでも何度か練習して開けるようになったので安心してスーツケースにしまっておいた。そして紙漉村の調査に出かけて、いよいよ雨が降ったときに、著者は「意外に早く折畳式雨傘の恩沢に浴する時期の来たことを、内心いささか喜びつつ、私は、あの骨を折られた家鴨みたいな格好の傘をとり出して操作にかかつたが、どう取り違へたものか、一向に骨が伸びない。あせればあせるほど開かない。何事が始まつたかと人は寄つてくる」(48)というので、いざとなつて傘が役に立たないということになつてしまった。「骨を折られた家鴨みたいな格好の傘」とは、笑わずにいられないが、くっきりと傘の形状を思い浮かべることができる。実に秀逸な比喻ではないだろうか。その後、別の旅の途中、東京の柳宗悦宅に泊まった際に著者はその傘を開いて見せた。「内心不安であつたにも拘はらず、どう云ふはずみか嘗て覚えたことのないほど軽快に開き、柳さんと兼子夫人を感嘆させた。もうこれならば大丈夫と、私はそれ以来、この傘に絶対の信頼をつなぎ、開ける稽古をやめた」(49)。

これは油断だつた。このあと、ふたたび紙漉村調査に夫婦で旅立つ雨模様の朝、またのトラブルに見舞われる——このくだりもまた生气に富み、おかしみに満ちている。

二條駅を午前六時四十三分の汽車で立たねばならぬ私たちは、朝食もとらず、六時五分に西向日町駅へ着く新京阪電車に乗るつもりで、家を出ようとした。ところが、開く筈の折畳式雨傘が、その朝はどうしても開かぬのである。ビュウビュウビュウ、といくら心棒に沿うて骨を上下させても、開かぬのである。あせればあせるほど、開かぬのである。額からは汗がぽたぽたと落ち、骨を堅く持つたために右手の人さし指と小指の皮が破れて、血がにじんできた。二人の子供と女中は玄関に立つて、物狂ほしくビュウビュウと開かぬ傘の骨をしごく父の愚かしいしわざを、笑へば叱られるものだから、をかしさをこらへて見下ろしてゐる。時計を見ると既に六時十五分となつてゐる。六時二十分に出る電車を外せば、もう汽車の間に合はない。私はかんを立てて、あちらへ行けと子供たちを叱りつけるなり、特別大型の荷厄介な普通の雨傘を手につつた。玄関の板間へ無残に投げ出された開かぬ雨傘を、その儘恭しく手にのせて、長女が私の書齋へ運んだ。あとで聞けば、その日一日子供たちは、私が傘をあけようとしてもがいた真似をして喜んださうな。(49-50)

この子供たち(当時14歳の章子と10歳の潤の姉弟)の様子は旅から帰つて女中から聞き出したのであろうが、著者自身がこれを書きながら一緒になつて呵々大笑している、そしてそれを読んでいる読者がその笑いに巻き込まれてしまうという、楽しい一文で、まさに著者の言う「柔軟心」が存分に発揮されている。

いま引いたくだりにあつたように、柳宗悦や河井寛次郎など、民藝運動の担い手たちとの交遊のエピソード

が書き留められているのも『滴る雫』の価値と魅力を高めていると言えるだろう。「愕儒先生旅行談」では柳と京都の山を歩いていて刑事に「つかまつた」際のやりとりを記している（これは別のところでも書いていたかと思う）。この「先生」（壽岳）は草鞋、脚絆、菅笠という出立ちでいて、それが怪しまれたようだ。

その日先生は、仲よしの柳宗悦氏と一緒にだつたと言ふが、刑事は柳氏をやりすごして先生をとつつかまへ、「どこへ行く、ちよつと待て。」とやつたさうだ。無産党の闘士が変装でもしてゐるものと、刑事は察したにちがひない。だがさつぱり訳がわからず、——先生は極めて浮世の事情にうといのである、——そのままおし黙つてみると、柳氏がいきなり刑事の前に立つて、「君は馬鹿だな。」と浴びせた。「何が馬鹿だ。」「だつてさうぢやないか。学校の善良な先生かどうか、人相を見て分からぬくらみなら、そんな商売はやめたまへ。僕もこの間神戸で果物を買つて持つてゐたら、君達の仲間が爆裂弾かと思つてあけさせたが、馬鹿馬鹿しくて話にならないや。だから馬鹿と言ふんだ。」刑事はぶんぶん怒つて、「きさまも怪しいぞ。」と、こんどは柳氏に喰つてかかり、結局住所氏名を告げてけりはついたが、先生はその時、刑事の眼に善良な学校の先生と映らなかつたのが、うれしいやうなまた悲しいやうな、一種錯雑した妙な気持だつたと言ふ。(57-58)

権力を傘に来て威張り散らす輩に我慢がならない柳のリアクションを伝えながら、著者自身のやわらかな反骨心をも巧みな措辞で表現し得ている。

日米の開戦の前、英米への排外主義がいや増すなかで、ぎりぎりになるまで壽岳らは日本を訪れる英米人との交遊を持続した。彼らを伴つての紙漉村などへの旅は上記の刑事のような連中から不審の目で見られ、じっさいに妨害も受けた。そんななかでの壽岳や柳や河井らの国際間の友情の発露は胸を打つ。戦後の1946年に書かれた随筆「ヘンリィ・グリーンの手紙」にもそれが書かれている。バーナード・リーチの紹介状を持って米国人のグリーン夫妻が作陶の修行のために京都の河井寛次郎宅に現われたのは1936年か、あるいは37年か。グリーンは「高い教養や裕福な境遇を微塵も誇示するやうな点はなく、ただもう無邪気に、天真爛漫に、土をこね、轆轤を廻はし、釉薬を掛けることを楽しんだ。私は通訳格で屢々河井邸へ赴いた。しかしたいの事は、もどかしさうな河井さんの身振りや、珍無頼なその英語とで、どしどしかたづいて行つた」(157-58)。アメリカの轆轤がモーター仕掛けだということで、河井は轆轤に座るグリーンを冗談めかして「ユウ・エレクトリック・マン」と呼ぶ。するとこれが「われわれの会話になくてならぬ重要語」(158)となる。最初はたどたどしい作陶ぶりであったのが、グリーン夫妻はみるみる力を上げて、河井が感心するような「一種不思議な持ち味」(159)の作品を作るようになる。そして友情も深まる。「民族や国境を超越した水入らずの親しさは、忽ちにしてグリーン夫婦と河井一家、及び私の一家との間にもりあがつた」(158)。グリーン夫妻は一度帰国したあと翌年再来日し、河井の指導を引き続きうける。しかし別れの時が来た。

これが河井邸での最後の語らひだと云ふ日、バーサ夫人は〔河井〕やす子夫人と相抱いて泣き、河井さんはグリーンの手を幾度となく強く握りしめては、涙にうるんだ眼をしばたたきながら、「カム・アゲン・マイ・ボーイ。」や、「ユウ・エレクトリック・マン。」を連発してゐる。見送りに行つた京都駅でも、再びこの異様な光景を現出して、何も知らぬ旅客や駅員に怪訝な眼を向けさせた。もうあのころ、日米関係の雲行は、そろそろ陰悪となりかけてゐたのである。(159)

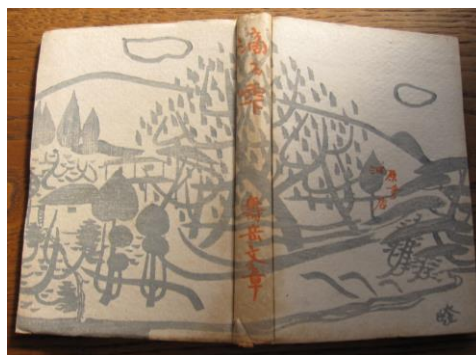
京都東山五条の、登り窯と素焼き窯のある陶房兼住居で、国境を越えたこのような厚い交遊があったことを銘記したい。そして海外から河井のもとを訪れて指導を仰いだ者は、グリーン夫妻だけではなかつた。河井の

没後に月刊『民藝』の追悼号に寄せた一文のなかで壽岳は、「河井さんを頼って、海外から陶器の修行にやってくる貧しい若者〔……〕の熱意にほだされると、河井さんはそれらの若者をわが子のように面倒見た」と指摘したうえで、「一種の施設外交機関として、河井家が真の日本文化の姿を、生活の根底から海外に紹介したことでは、益子の浜田家と同様特筆されねばならないと思う」<sup>3</sup>と述べている。随筆「ヘンリィ・グリーンの手紙」に戻ると、それは戦争と平和についての省察から書き出されていた。「日本が平和国家として新しく誕生するためには、まづ何よりも、国民の一人一人が、本能的に平和の愛好者たることを必要とする」(152)と著者は断言する。

最悪状態の平和といへども、最良状態の戦争（そんなものがあると仮定して）にまさること幾千倍だという真理を、肝に銘じておく必要がある。さうしておいても、物忘れの早い人間は、とかく戦争したがる習性を発揮しやすいのだから、過去十数年来のわが国のやうに、ただもう戦争へ戦争へと民の心を煽り立てたのではたまつたものではない。天罰は靦面であつた。願はくばこのみじめな敗戦の惨苦を転じて、平和国家誕生の陣痛たらしめたいものである。私たちが敗戦の痛苦から救ふ強心剤は、これを措いてほかに無い。(153)

「ポスト冷戦」という語もほぼ過去のものとなり、世界の各地で紛争の火種がくすぶり、わが国でも臆面もなく戦争へと人びとの心を煽り立てる者が目立ってきた。そうしたなかで壽岳の上記の言葉は確かに肝に銘じておくべきことだろう。『滴る雫』の「序」のなかの言葉をもう一度引くならば、「柔軟性」という性質は日本人に欠けているわけではないのに、それを次第に失い、「排他的・孤立的な一方にのみ傾い」て戦争に突き進み、破局を迎えた。「敗戦は日本をさう云ふ病症から一応解放したが、最近の動向を見ると、再び同じ危険にさらされる兆無しとしない」——壽岳の言う「最近」とは、1945年の敗戦から2年をへた1947年当時のことであったが、それは私たちの「最近」に読み換えることもできる。「再び同じ危険にさらされる兆」があるのだが、おそらく1947年当時よりも一般にそれが見えにくくなっているところに、より深刻な危機があると言えるのかもしれない。

本稿では『滴る雫』所収の随筆を部分的にしか取り上げることができなかったが、概ね猛々しさとは無縁の話題について、ゆったりとした調子で語りながら、「過去十数年来」に幅を利かせていた、排他的な、威張る輩への抵抗の身振りが、この静かな本を貫いているように思われる。その精神を学ぶべき、大事な先人の著作であると確信して、寄稿のお誘いを受けたこの機会に以上のような拙文を綴ってみた。



壽岳文章『滴る雫』（河原書店、1947年12月10日刊）表紙

<sup>3</sup> 壽岳文章「回想の寛次郎翁」『民藝』第170号、1967年2月、40頁。『柳宗悦と共に』集英社、1980年、290頁。



## 竹友藻風と壽岳文章

藤原 弘一郎 (英学史家)

本稿では共に戦前から英文学者として著名であった竹友藻風(明治24年9月—昭和29年10月)と壽岳文章(明治33年3月—平成4年1月)の二人についてみてゆきたい。藻風と壽岳はもちろん年齢差による先進と後進の違いはあるが、同じ関西圏で生まれ育ち、同じく関西学院の中学部や高等部に学び、いずれも京都帝大文学部英文科選科に進学し卒業、後に関西学院大学で同時期に教鞭をとった同僚であり、二人ともダンテの『神曲』の全訳翻訳(韻文訳と散文訳)を成し遂げ、また、ともに Gilbert White や W. H. Hudson や Richard Jefferies 作品等の英国自然文学の我が国における本格的な紹介・翻訳を成し、さらには藻風は中西悟堂を説いて昭和9年に我が国において「日本野鳥の会」の発足とその会誌『野鳥』発行を実現せしめ、一方、壽岳は同時期に創刊された雑誌『動物文學』に拠り『セルボーンの博物誌』の部分訳を掲げる等、その研究対象や業績、愛好した文学分野等、それぞれの生涯において共通する面が多かった。

先ず竹友藻風<sup>そうふう</sup>の経歴から見てゆこう。竹友藻風の「藻風」は(森)鷗外、(夏目)漱石、(坪内)逍遥、(薄田)泣菫、(北原)白秋などと同じく雅号である。藻風は一部の英文著書や英文学叢書の註釈本などを除けば本名の<sup>とらお</sup>厩雄を使うことは少なく、著書等でもすべて藻風で通している。英文学者でも戸川秋骨、平田禿木、戸澤姑射、浅野憑虚、畔柳芥舟、厨川白村、日夏耿之介、矢野峰人など、国文学者では笹川臨風、佐々醒雪、沼波瓊音等皆雅号で知られているのと同じである。早熟な文学青年にしばしば見られる通り、藻風の場合もその文学活動は早くも十四、五歳の頃、即ち明治38、39年に始まっている。藻風は明治40年頃三木露風に会いそれまでの「花笛」(かてき)という雅号を「藻風」に改めている。藻風は明治24年9月に実業家であった父、竹友安治郎と母、楳(うめ)代との間に大阪中之島で生まれた。楳代は神戸女学院の初期の卒業生(第七回生)であった。藻風の家庭は敬虔なクリスチャン一家で、母の清教徒的な信仰は藻風に大きな影響を与えた。明治37年4月、藻風は同志社中学部へ入学したが、2年生の時肺炎カタルに罹患し静養のため同志社を辞め、明治39年4月に関西学院普通学部(中学部)へ転校した。関西学院中学部では藻風は学内文藝誌『関西文壇』に毎号詩文を載せ、はやくも麒麟児の片鱗を示していた。最初は日本文学的作品を載せていたが藻風が学院の英語力を吸収するとともに次第に英詩訳文を載せるようになっていったという。これには当時学院高等部で教鞭をとっていたガーナー女史から受けた感化が大きかったと言われている。当時の関西学院は4年生のハイスクールであり、文部省による上級学校(旧制の官立高等学校等)へ進学するための資格を備えた中学校として認定されていなかったため、藻風は進学のため明治42年9月、中学5年生の2学期から大阪の桃山中学校(進学指定校)へ編入学し、在学7ヶ月で同校を卒業(同校では後にアメリカ文学者となった高垣松雄と同級であった)、その後同志社神学校へ進学、そこで明治43年の春、同校へ出講で来ていた訳詩集『海潮音』で有名な当時京都帝国大学で英語・英文学の教授をしていた上田 敏と運命的な出会いをして個人的に親炙、敏の家庭へも親しく出入りし、敏から次々と海外文学の書物を借り当時の新しい文学に対し目を開かされてゆくことになった。藻風は一日でも早く上田 敏について学びたい一心で、その翌年(明治44年)9月京都帝国大学英文科の選科へ入学している。藻風は「大学三年間はもっぱら上田 敏先生の手塩にかかって勉強した」と言っているが、大学の上田 敏の研究室へ自由に入出入りしてそこにあった蔵書を自由に閲覧することを許され、英・佛・白・典・伊・露等の作家・詩人の著作を借りて読むと同時に、引き続いて敏の家庭にも親しく出入りしていたので学問・人物両面にわたって藻風が敏に感化された影響は測り知れないほど大きなものがあった。藻風の専攻は英文学であったが、師の上田 敏の仏文学愛好の学風の影響を受けてフランスの象徴派、高踏派の詩人の詩に親しみ、それらの仏詩人

の訳詩を發表し、またサマンの短編小説『イアリス』、モリス・ド・ゲランの散文詩的短篇『サントオル』、我が国初となるアンドレ・ジッドの『狭き門』の部分訳、アナートル・フランスの『シルヴェストル・ボナルの罪』第一部「丸太」の翻訳など主として仏文学の詩文作品を文芸誌に翻訳發表、大正10年6月に『ヴェルレーヌ選集』、同13年6月には翻訳集『近代仏蘭西短篇小集 丸太』を上梓している。

\* \* \*

藻風は大正3年7月京都帝大を卒業、卒業後の一年間は恩師の上田 敏と共同で文芸誌の編集などに従事していたが、大正4年8月米国留学の途に就いた。藻風の米国留学期間は、大正4年8月から同9年1月末帰国迄の4年5ヶ月であるが、この間イエール大学、次いでコロンビア大学大学院に学び、大正8年(1919年)コロンビア大学からM.A.の学位を受けた。同大学では当時米国留学中であった厨川白村の紹介でJohn Erskine教授に師事、大正7年(1918)に同教授の序文を得て鷗外、荷風、藤村の短篇小説七篇の英訳本 *Paulownia* をNew YorkのDuffield and Companyから上梓した。コロンビア大学大学院在学中の藻風の様子に就いてはアースキン教授の回顧録 *My Life as a Teacher* (1948刊)の中で優秀な生徒だった藻風の思い出が記されている。

藻風は大正9年1月末帰朝、同年4月より慶應義塾大学文学部の教授として着任した。藻風が慶應義塾大学で教鞭をとったのは大正9年と同10年の2年間と極めて短期間であった。藻風は大正11年春に慶應大を辞し、同年4月から東京高等師範学校から招聘され、英語科の教授として着任、東京高師在任期間は12年間の長きに亘った。東京高師時代は藻風の生涯に於いても最も脂の乗った時期であり、教師、英文学者として、詩人、訳詩家として、あるいは文芸誌(第二次)『明星』の同人として、更には中西悟堂と一緒に日本野鳥の会創立と同会の会誌『野鳥』創刊の産婆役を勤める等、多彩な活動をした時期であった。この間に刊行された著書だけでも24冊に上り、文壇、詩壇、英文学界に広くその名を知られた。また、東京高師では若き僚友、福原麟太郎との終生渝らぬ友情を得た。

\* \* \*

関西学院は昭和7年3月に大学令による大学設置の認可を得て大学に昇格し、昭和9年4月から法文学部が開講したが、この中には英文学科があり、初代英文学科の主任教授(学科長)として東京高等師範学校教授だった藻風が招聘された。学院の高等学部から分離された文学部の初代部長であったHarold F. Woodsworthが新たに開設する大学部の英文科の専任教授に就き東京帝国大学英文学科教授の齋藤 勇博士に推薦を求め、齋藤博士が藻風を推したのであった。新しく大学英文科の創設に際し藻風は学院の研究室の壁面の書架にぎっしり自己の蔵書を収めて学生の利用に供した。さらに藻風は関西学院大学着任後当時の京都帝国大学の英文学科の主任教授であった石田憲次博士に請われて昭和10年から同15年にかけて京都帝大へ出講した(週一回)。大著『英文學史 670-1660』や『ドライデン』、『叙情詩論』等はこの時期に執筆され上梓されている。また、関西学院大学学内紀要である『法文學部研究年誌』第四輯(昭和14年1月発行)に「エドモンド・スペンサアの詩に於けるプレイトニズムと基督教」(菊判54頁に亘る分量)を、第五輯(昭和16年9月発行)に「ジョン・ドンの形而上學」(菊判57頁に亘る分量)、それぞれの論考を載せ發表している(いずれも藻風の著書未収載)。

(註) 藻風はジョン・ダンをジョン・ドンと表記したが、この点に就き当該論考の末尾でその理由を説明している。

戦後になって藻風は東京高師教授時代以来の旧知の英語学者で当時東京文理科大学教授であった大塚高信を関西学院大学教授として招聘した。大塚教授は昭和21年7月より着任、ここに藻風、志賀勝、大塚高信、壽岳文章と看板教授4人の揃い踏みとなり、人も羨む関西学院大学英文科の黄金時代が出現したのであった。しかしこの四人体制は長くは続かず、昭和23年秋に藻風が新設の大阪大学法文学部英文学科の初代教授として転出し、その後、昭和27年3月に壽岳文章、翌28年3月に大塚高信の両教授が相次いで新設の甲南大学へ移ったので、関西学院大学の学部と大学院の講義は身体の弱い志賀勝教授一人が残って双肩に担い、孤軍奮闘の状態となった。このような状況下、関西学院は阪大の藻風に学院の大学院の講師として出講を懇請、当時藻風は昭

和 26 年の夏ごろから眼底出血を起こしたことにより視力が衰えていたが出講の要請を受け入れて昭和 27 年 8 月頃から病床に就く直前の昭和 29 年 2 月初まで志賀教授を助けて関学大学院の出講を続けたが、病状は悪化の一途を辿った。藻風は昭和 29 年 10 月 7 日に享年 63 歳で亡くなった。藻風没後、昭和 36 年に藻風訳ダンテ『新生』が、昭和 57 年に『竹友藻風選集』（全二巻）が刊行されたが、これは大塚高信教授がそれぞれ出版元に斡旋の労をとって実現したものであった。藻風には関西学院の中学校用に編んだ英語の教科書 *The Crescent Readers* がある。各学年に合わせて Book I から Book V 迄あり、黒色の表紙に関学の徽章弦月を象った装幀となっていた。

\* \* \*

壽岳文章は大正 8 年 4 月当時まだ神戸にあった関西学院高等学部英文科に入学、同級に後にロバート・ブラウニングの研究で知られた英文学者曾根保と後に日本ライトハウスを創立し、昭和 12 年ヘレン・ケラーの初来日を実現させ、女史の著書『わたしの生涯』を翻訳した失明学生岩橋武夫がいた。（岩橋には英文学の研究書『失樂園の詩的形而上學』もある。）当時岩橋の妹しづは盲目となった兄のため雨の日も風の日も杖となって通学を助け、当時男だけであった学校の教室で兄に付き添って授業のノートをとった。壽岳は大正 12 年関西学院を卒業、卒業と同時に岩橋の妹しづと結婚している。大正 13 年 4 月より昭和 2 年 3 月まで京都帝大文学部英文学科に選科生として学んだ。昭和 7 年から母校関西学院の文学部の講師として出講、その後昭和 23 年の新制大学発足に伴い教授に進み、藻風が昭和 23 年秋に新設の大阪大学へ転出した後は昭和 27 年に新設の甲南大学に転ずるまで志賀勝、大塚高信と並んで同学院英文科の看板教授であった。壽岳が関西学院の文学部の講師として出講し始めた昭和 7 年は春に関西学院高等部の大学昇格が認可された時期で、その年から予科が開講となり壽岳は志賀と一緒に「C. E. L. の會」（The Society of Contemporary English and American Literature）の指導顧問として活躍していた。昭和 9 年の 4 月より関西学院の（旧制）大学が開設され、法文学部は最初六教授、三助教授体制でスタートし、英文学科は主任教授（学科長）として新たに藻風が東京高等師範学校から着任し、志賀勝が助教授（昭和 12 年 4 月に教授昇任）であった。藻風と壽岳が初めて会ったのはこの時であった。

壽岳文章は『英語青年』の藻風追悼号で真言宗立京都中学二年生（15 歳）の時、当時京都市寺町三条通りにあった山中崑松堂の店頭で藻風の第二詩集『浮彫』（大正 4 年 1 月山中崑松堂発行）を見かけたのが藻風の名前を知った初めてであったと述べている。また、藻風の処女詩集である『祈禱』（大正 2 年 7 月昂發行所）に就いては当時その中学に英語教師として着任した百瀬清志の自宅で見たと記している（「教壇生活三十年」研究社『新英語教育講座』別巻所収）。百瀬は広島高師出身で当時京都帝大英文科の第三学年に在学しており、上田 敏教授の指導の下、D. G. Rossetti を卒業論文に選び、大正 4 年に卒業した人物であるが、今で言うアルバイトで当時壽岳文章が在学していた宗教法人の私立中学校へ英語を教えに来ていたのである。百瀬は京都帝大英文科の卒業年次では藻風より一年後輩となる。壽岳は百瀬から「君は字を綺麗に書くから」と云われ百瀬の卒業論文の浄書も壽岳がすることになったが、「もとより幼稚な中学下級生に、D.G. Rossetti などの判る筈はないが、こうしたことが機縁となって、やがて「海潮音」にしたしみ、柳村博士（上田敏）の学風をしたう気もちがついたばかりか、自分の将来の荷車を英文学という星につなぐ決心は、この先生のおかげで確立したのである」と言い、「私にとっては、自分の生涯を方向づけた原動力として、先生の思ひ出は墓場まで続くであろう」と述べている（「教壇生活三十年」）

昭和 13 年 3 月に刊行された藻風の最後の刊行詩集第八詩集非売品となる『石庭』は新設の関西学院大学英文科の第二回卒業生となった中川龍一他五名の卒業生が卒業に際し親しく教えを受けた藻風に対して感謝の気持ちを込めて藻風の関西に転任以来の自作詩九篇を纏めて詩集として刊行し藻風に捧げたもので、装幀は中川龍一等の依頼を受けて壽岳文章が担当、和紙高野紙に印刷された純和風の詩集限定 200 部である。

同じ関西学院の同窓及び同僚教師として志賀勝と壽岳文章は親友であった。志賀勝は明治 25 年 3 月愛媛県

宇和島に生れた。藻風より半歳年少である。最初第一高等学校へ入学し（入学時の成績は二番であったと伝えられる）、大学は法科へ進む予定であったが、病気のため大学進学をあきらめて一高を中退、大正6年関西学院文学部へ入り直し、英米文学を専攻した。在学時から俊秀で、その上年齡的にも一般学生よりも大分上であったため（入学時25歳）、教師からも学生からも別格扱いされていたという。「学生の身分で先生の風格を具えた不思議な存在」（寿岳文章）であった。昭和6年3月に新生堂から刊行されたユージン・オニールの『ダイナモ』の翻訳で志賀はアメリカ文学者として注目されるようになり、昭和10年6月刊行の『現代英米文學研究』（創元社刊）で翌年岡倉賞に輝き、志賀は一躍英米文学研究者として広く認められた。志賀はアメリカ文学に関する著書が多く、高垣松雄と並んで我が国の代表的なアメリカ文学者として著名であったが、英文学にも造詣が深かった。志賀がアメリカ文学専門となったことについて壽岳は次のように述べている。

その志賀君がアメリカ文学の専門家として見られるようになったのは、昭和九年から関西学院大学法文学部が開設され、新しく来学した竹友藻風教授が、主として英文学を講じた事情による。そして、いつとはなしに、英文学は竹友、米文学は志賀という縄張りができてしまった。竹友さんは時々、僕は本場のコロムビア大学でアメリカ文学も勉強してきたのに、アメリカ文学をやらせないのは片手落ちだと私に不満をもらした。竹友さんがこんなことを言ってるぜと志賀君に話したら、それじゃ僕は一体何をやっていいんだ、日本文学か、しかし僕が日本文学をやると、竹友さんはきっと、日本文学もわしの領分だと言い出すだろう、と笑っていた。（『英語青年』志賀 勝教授追悼号（昭和30年11月発行））

上記引用文の中で志賀は藻風が「日本文学もわしの領分と言い出すだろう」と笑っていた、とあるが、この時志賀は藻風の持つ該博な国文学（日本文学）の学識を知っていたに違いないと思われる。藻風は15、16歳頃から富山房から出た袖珍名著文庫、次いで有朋堂文庫（全百廿一冊の叢書）を次々に読破していた。後年専門の西洋文学に加えてその豊かな国文学の知識で教え子たちを驚かせ、文芸誌『明星』（第二次）誌上での縦横無尽の文筆活動に於て和漢洋の三舟の才（与謝野晶子評）を謳われた藻風の国文学の幅広い教養の基となったのは学生時代に読んだこの有朋堂文庫で培われたと言っても過言ではないであろう。東京高等師範学校の文科第二部（国漢科）で藻風に英語を習った渡部栄（後の国文学者北小路健）は一日藻風の家遊びに行った時の思い出を次のように述べている。

私はもう二年生になっていた。（中略）私はマシュー・アーノルドの詩が好きで、詩集のなかから数十篇を翻訳して竹友師に提出したことがある。多分それが、師に近付くきっかけだったように思う。師はたずねてくるようにと下すった。家はすぐ近くだった。書齋につづいて書庫があり、そこには部屋いっぱいいくつもの書棚が並び、天井まで本が積み上げられていたが、それらは外国関係のものばかりでなく、意外に日本の古典物が揃っているのに驚いた、以後私はたびたびお邪魔することになった。師はその度毎に、何かしらの本を二、三冊ずつ貸して下さるのが例になった。（北小路健『古文書の面白さ』（新潮選書）p.15）

渡部栄は当時 Arthur Waley が英訳した源氏物語の第一巻 *The Tale of Genji* (George Allen & Co., 初版 1925) を入手し、「桐壺」の巻から「夕顔」の巻までを原文と対照しながら現代語に訳し、両者の比較を論じた50枚を超す論文を藻風へ見せたところ、当該論文は藻風の推薦で校友会雑誌『學藝』へ掲載されたという（『古文書の面白さ』p.16）。このように藻風に親しんだ渡部栄であったが、渡部が昭和9年4月に東京文理科大学へ入学すると入れ違いに藻風は関西学院大学教授として東京を去っていった。

藻風の国文学の素養の深さを証するもう一つの例を引こう。大正9年4月から大正10年にかけて慶応義塾大学で藻風の講義に接した河口真一（後の慶應義塾大学教授）は藻風追悼の新聞記事の中で次のように述べている。

（前節略）別に国文学に関して、なみなみならぬ愛着を抱いておられた。——それはかつて小島政二郎氏

が「竹友君はぼくらの知らない国文学書を読んでいる」と、感嘆されたほどであった。むしろ先生の場合には、国文学を身につけて、世界文学に臨むといった態度であった。これまたやはり先師上田敏の遺訓であった。

(昭和 29 年 11 月 13 日付の「時事新報」追悼記事)

\* \* \*

志賀勝の人柄は学院の僚友や友人の追悼記によると「学問研究に純粹に生きた風格の高い」人で、「率直で、高潔な、わけて表裏のない、やさしい人」であったようだ。志賀は病弱で生涯病氣と闘い続けた。学生として関西学院に在学した時から病氣のため授業には殆んど出て来なかったといい、母校で教えるようになってからも出勤した時間数よりも欠勤した時間数の方が遥かに上回っていたという。志賀を知ること 40 年に及んだという親友壽岳文章によれば志賀は生前「僕の名前は「死が勝る」だからこうして生きているのが不思議だ」とよく冗談を言っていたという。壽岳は志賀について次のように述べている。

純学究肌の志賀君は終生ひどい待遇をうけたようである。おまけに戦争中は、病弱で勤労働員の責任がとれぬと言うので、専任教授の地位を剥奪された。生活には随分苦勞し、ことに病氣が悪化して、長い間学校を休まねばならぬようになると、側の見る目も氣の毒であった。私が奉加帳をこしらえ、有志の人から毎月三円ずつ志賀君のために出して貰い、月額百円足らずの金を一年あまり集めたことがあった。度重なると皆あまりよい顔をしないので、集めに廻る私もいやであったが、受けとる志賀君はなおいやだったろう。しかし理性にすぐれた同君は、何事もじっとこらえ、一生の大半、病と戦いながら粘りづよく精進した。もちろん書物なども思うように買えないから、殆んどが借覽である。同君は生前、蔵書らしい蔵書の無いことを恥じていたと和子夫人から聞いたが、私はむしろその点をこそ偉いと思う。多くの書物が座右にあり、自由に使えての業績ならば、ある程度まで誰にでも可能であろう。今わが国で英米文学の研究者として名を成した者のうち、誰が同君のように極度の書物の不自由さととりくみながら、あれだけの仕事をなしとげたであろうか。恐らくは他に例があるまい。(『英語青年』志賀追悼号)

志賀は自著『文學と信念』(昭和 15 年 6 月 理想社出版部刊)の序の最後で「竹友藻風氏と壽岳文章氏が、常にその書庫を開いて筆者の微力を助けられた好意」を感謝の念を以って記している。

藻風が死去した時、志賀は関西学院新聞(昭和 29 年 10 月 25 日発行)に「稀な知識と情操の結合 — 故竹友藻風氏の業績」と題し藻風の追悼記事を寄せた。これは簡潔にしてよく纏まった一文であるので以下に全文を掲げる。

竹友さんは、よくキャソリシティということをやっていた。学問が一人の作家や一時代に片寄らず全体に及ばねばならぬという意である。英文学者のなかでも、竹友さんほどキャソリシティをもった人は、あまりないように思われる。その研究の範囲は、古典から現代に及び詩小説戯曲評論の全般にわたっていた。アメリカ文学にも関心があった。エマソンやメルヴィルを翻訳したり紹介したりした。フォークナーの「サンクチュアリ」などを早くから読んでいて、氏らしい批評を加えていた。その巨大な業績を分類してみると(一)文学論(「文学論」「詩の起源」「文学総論」「叙情試論」「エッセイとエッセイスト」等)(二)文学史(「英文学史 670—1660」「英詩史」)(三)作家研究(クリスティナ・ロゼッデ、ドライデン、スペンサー、ジョンソン、ダン、ハーバート)(四)注釈(五)翻訳となるようである。文学論は、ギリシャや日本の古典をも吸収し、精緻な学問と共に詩人としての豊かな鑑賞の裏づけを持っている。それはまた文学史作家研究にまで共通する特色であるが、その作家研究のなかでは「スペンサーとその周囲」を代表とする十六・七世紀の英詩人の研究が主要なものである。学位もそれによって得られたのだが、氏の精神と学風に最も適切な題材がそこにあったということが出来る。注釈としては英文学叢書にペイター、ハズリット、

ワーズワースなど数冊入っているが、中でもペイターの「ルネサンス」は精密周到な注釈ぶりに学界の目を見張らされたもので、今なお一つの名著といえることができる。翻訳については、あまりに有名な「神曲」の全訳があるが、独自の工夫をこらした格調とともに、その苦心の成果には不朽のものがあるだろう。「天路歷程」や「ルバイヤット」の翻訳についても同様のことを言うことができる。シェイクスピアも、他の翻訳者とは違った味のある訳筆で既に数篇発表されているが、これも今は永久に後を断たれることになった。竹友さんの業績を数えあげるなら、容易に終ることができない。エッセイや詩の方面に入るとなお更である。今はこれで止めなければならぬが、氏ほど毎日を生き生きとした気持ちで暮し、学問と芸術に絶えざる関心と、努力をそいだ人は珍しい。そして学芸のためであるならば、自己の信ずるところを曲げず、直言と論争をも辞することがなかった。これに（マ）あまりに平和な日本の英文学界に貴重な刺激であったと言えるが、ともかく様々な意味で氏の存在は、常に人々の注目を去らなかつたのであり、今度の急な逝去によって、輝かしい一つの星が落ちたとの感じは深いものがある。そういう竹友さんは、昭和九年学界には意外の感じを与えたであろうが、急に東都を去って、上ヶ原の学園に移ってきた。おびただしくまた見事な氏の蔵書を壁面におさめて、我々の英文学科は発足したのだが、その研究室に机をかまえた氏の、なお若々しく、希望にみちた風貌を想起するのである。竹友さんが上ヶ原に植えた英文学の苗木も、その業績の大きなものに数えらるべきだと思う。

上記のように藻風を悼んだ志賀であったが、自身も藻風の後を追うかの如く翌年昭和 30 年 8 月に亡くなった。

壽岳文章も藻風が亡くなった時、いち早く新聞に追悼記事を寄せ、その多彩な業績を回顧している。当該追悼記事は「竹友藻風をしのぶ」と題して藻風逝去の二日後の昭和 29 年 10 月 9 日付の神戸新聞に載ったものであるが、今では世人や学界の研究者の記憶から殆んど忘れ去られた感のある藻風の若かりし日の業績についてもきちんと言及している貴重な文章なので以下に全文を掲げておこう。

二十年来の知り合いとして覚悟しておったこととはいえ竹友藻風氏の死去の知らせを受けて感慨にたえない。京都大学の竹友博士の恩師上田 敏先生、あるいは当時の東京大学でかつて英文学を教えた夏目漱石先生、これらの人たちはみな早く世を去られたのに比べれば竹友博士の場合はまだいくらかの長寿であったとはいえ、もっともっと長らえてもらって学界のためにつくして頂きたかった。ただそういう諸先覚に比べて今までに竹友博士が英文学の上でされた仕事、ことに戦後ダンテの神曲をイタリア語から美しい韻文訳に直接訳された仕事などは立派な業績としてこの国の学界に残るであろうが、学界はまだまだ同博士の仕事に期待するところが多かった。またそれを十分果たし得る同博士でもあった。病の床につかれてから博士自身もそういうことを思い浮かべて心の中がいつも充たされておっただろうと想像される。まことに口惜しいとも残念とも言葉の術を知らない。博士は最後までその天性の自然的な資質を失うことなくそれがあるいは野鳥や風物のような自然への愛に移ることもあり、また戦後の人の心のはなはだしい移行きに対する悲憤の言葉となることもあり、そこに藻風文学の特色をみせて今日にいたったが、そうした天真らんまん言葉をもはや聞かれなくなったのは長らく同氏を知るものとしてさびしさにたえない。まことに関西としては長らく親しみのあるこの文人を失った意味が一しお強く感じられるだろう。竹友博士の業績は実に多方面にわたっており、若き日アメリカ留学の間に島崎藤村、永井荷風などの短篇を英訳していち早く日本文学を海外に紹介したことなども今は余り記憶する人もなかりうが忘れてはならない仕事の一つである。このように同博士は先覚者としていろいろな方面にその才能を伸ばされた。仏文学の方でも私たちはヴェルレーヌの詩集の翻訳やまたその他たしかアナトール・フランスの短篇の翻訳などを昔から愛唱して来たものである。ことにペルシャの詩人オーマー・カイヤームの「ルバイヤット」の名訳はそれが出たとき土居光知氏の絶賛を浴びたものであった。そのころ英文学の勉強に身を入れかけていた私など

はほとんど暗証するくらいにその美しい訳文に心を引かれ口ずさんだものであった。英国の詩人ではいろいろの作家のものを訳しているが、ことに女流詩人クリスチナ・ロゼッティの詩の訳は評判が高かった。戦後は単独でシェークスピア全作品の翻訳を企てすでに二、三冊が出版されているけれども書店がつぶれたためにこれのあとを見ないのは残念である。非常に広く読みまた筆の早い人で、もし今までに発表されたものを集めるとなれば相当な量に上るだろうと思われる。学問的な業績は何と言っても関西学院大学教授時代に書かれた英文学史が第一に推さるべきものであり、これがミルトンの時代までしか書かれていないのは残念で、そのあとが完成していたならばと願う人が多だろう。私は今教室で同博士の最も新しい仕事の一つであるワーズワースのプレリュードの講読をやっているが、その短い序文にはすでに目を悪くして書きたいことも今は書けないため第二巻に譲るといういたましい言葉が見えるが、その約束を果たさずして氏独特のこの注釈が未完に終わったことも返す返すも残念である。そのほか個人的な思い出は私としては尽きないがいずれ時を改めて書きつづって見たいと思っている。

壽岳による藻風追悼はこの外に10月9日付の毎日新聞(大阪版)に「竹友藻風先生を惜しむ」と題してその談話が掲載されているがこれは比較的短いものである。藻風死去に際しては京都大学名誉教授の石田憲次博士も昭和29年10月9日付朝日新聞大阪版に「竹友藻風博士をいたむ」と題して藻風追悼記事を寄せその死を悼んだ。

\* \* \*

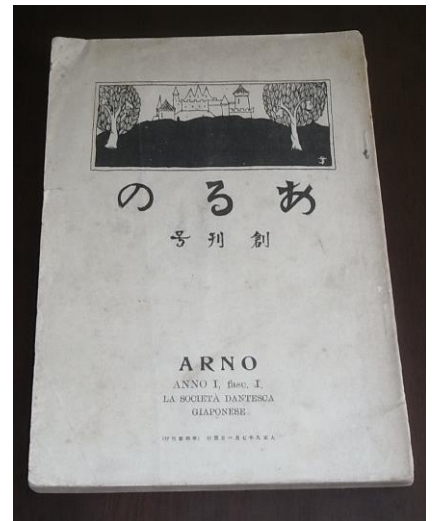
### 藻風訳ダンテ『神曲』完訳(韻文訳)

藻風は初めてダンテの『神曲』の名前に接したのは鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』によってであったと言っている。藻風は『即興詩人』は「十七、八歳の時から幾度となく讀んだ」と記している(「森 林太郎博士」『冬扇帖』所収)。藻風が17,8歳という明治41年、42年頃であろう。藻風が本格的にダンテに興味を持ち始めたのは明治44年9月藻風が京都帝国大学に進学した後、上田敏の研究室で敏に『神曲』の「地獄界」の原文を読んでもらった時からであろう。同時に明治26年から31年にかけて発行された文藝雑誌『文學界』に掲載された上田敏、平田禿木、戸川秋骨、島崎藤村によるダンテに関する諸寄稿文にも目を通し、感銘するところ大きかったものと思われる。特に平田禿木による「地獄の巻の一節」(『文學界』の臨時増刊として出た『うらわか草』に掲載)と「神曲餘韻」の両文章には深く印象付けられたことであろう。藻風は晩年「神曲餘韻考」を発表しているが(『近代史の史的展望』(山宮 允教授華甲記念文集 昭和29年3月刊)所収)、その中で禿木の「神曲餘韻」の背景、原典出所(出典)、解釈の問題等に就き精細な考証を行なっている。この藻風の「神曲餘韻考」に就いて矢野峰人は「この方面に於ける氏の蘊蓄と共にその細心精緻なる学風を示せる代表的なものと言えよう」と評している(『英語青年』藻風追悼号)。

藻風が『神曲』全巻の韻文訳を決意したのは米国留学中の大正5年8月にNew Yorkで師の上田 敏の訃報に接した時であったであろう。師の遺志を継いで『神曲』の完全訳をつくることを堅く決意し、師の遺志を完成させようと心に誓ったものと思われる。そして大正7年の秋に同じくNew Yorkで『ダンテ神曲・上田 敏未定稿』(大正7年1月刊)の複製を贈られた時に愈々その思いを強め、終にはそれが藻風の使命となったのであろう。藻風はNew York滞在中に暇を見つけては古書店を廻り「零細な金子であったが、自分に許せるだけのもの」でダンテの文献を漁ったと言っている(『神曲』地獄界篇序)。藻風訳の『神曲』については土居光知教授は『英語青年』の藻風追悼号で「大正7年の秋に神曲訳稿の複製を贈られてからは、「神曲」の完全な日本訳を作ることが竹友さんの殆ど運命的な仕事になった。これこそ竹友さんの中にある詩人と学者とが協力してなしうる大事業であった。竹友さんはその後、殆ど二十年間の準備、研究、試訳の時代をすごし、第二次大戦の間に神曲の韻文訳を完成されたことには深い敬意をさしあげる」と述べている。

## 日本ダンテ協会の創設と会誌『あるの』の創刊

藻風は大正8年3月頃に当時 New York に滞在中であった<sup>いのう</sup>団伊能、税所篤二、長谷川潔と現地で日本ダンテ協会の設立を話し合い、米国から帰国直後の大正9年2月21日(土)及び同23日(月)の「讀賣新聞」の文藝欄で(上)(下)二回にわたって「(日本)ダンテ協會の創設」と会誌『あるの』創刊を告げる記事を掲げた。『あるの』創刊号は大正9年6月1日に発行された。版型は四六版を一回り大きくしたサイズで188頁、平田禿木の「神曲餘韻」(再録)の外、藻風による「地獄界」(『神曲』の「地獄界」の韻文訳)、と「ダンテ・アリギエリ」(評伝)、大賀旭江(壽吉)「近刊のダンテ圖書に就いて」、税所篤二の論考、与謝野晶子の短歌、日夏耿之介の詩、他2氏による翻訳が掲載されていた。『あるの』は当初年4回季刊を目指していたが、実際には第2号は大幅に遅延して大正10年11月の発行となり、その後は続かなかった。第2号には大賀旭江「ダンテ研究概況」、竹友藻風「ダンテ・アリギエリ」(評伝―続き―)、竹友藻風「神曲(地獄界)」(韻文訳―続き―)が掲載された。藻風の「ダンテ・アリギエリ」は創刊号に載せたダンテの評伝の続編でダンテの結婚以後、晩年の流離の生涯に至るまでの評伝である。



日本ダンテ協會は自然消滅の形となり、会誌『あるの』も第二号以降続かず、藻風の「地獄界」の韻文訳は中断されたまゝの形であった。大正12年5月に藻風は京都の文献書院から「地獄界」の第一歌から第十六歌までの七五調韻文訳を取めた『地獄界 上』を刊行した。本文では第一歌から第十六歌までの各歌の初めに各歌の概要が書かれ読者の便となっている。続刊の『地獄界 下』は発行されなかった。この出版について藻風は後に「ダンテの十一音節を七五調に翻譯することは全然無理ではないまでも極めて窮屈であった。私はもう少し待たうと思った。さうしてもっと自由な詩形を発見して、もう一度始めからやり直すことに極めた」と述べている。「地獄界上」の刊行以降は藻風にとって『神曲』の韻文訳に最も適した詩形を模索する期間が続いた。藻風は書いている。

やがてイギリス文學が本職のやうなものになり、次から次へと仕事に追はれてゐる間にタイレストン夫人も大賀氏もすべて他界の人となった。しかしながら、ダンテの研究は私が自ら自分に約束した生涯の事業である。私は絶えず『神曲』を読み、『神曲』の人物や思想や風景の中に生活した。幾度も翻譯を試み、又必ずそれを成就する機会のあるべきことを信じてゐた。或時「天堂界」初數行を引用する必要があつたので、ふと思ひついた新しい詩形を試みて見たところが意外にすらすらと事が運んで行った。それは五七五、五七七、五五七を自由に屈折させて行く詩形であり、時には七五七といふやうな破格をも許し得るものである。上田先生の譯詩集『海潮音』の中に収載せられたユーゴーの詩「良心」'La Conscience'は大體五七五に終始するものであるが、叙述の體裁に於いて十分に効果を取めたものと言ひ得るであらう。唯『神曲』のやうな長詩で、その中には叙情的なところもあり、劇的なところもあり、論述もあれば、描寫もある、といふやうな叙述の詩を翻譯するには、その内容に適應する自由な詩形に依るか、さもなければ散文を採るより外に道はない。私は五五七をもう少し自由な形にすれば或は適當な詩形を得ることが出来るのではないかと思つた。そこで、改めてこの譯にとりかかったのである。ちょうどその頃日伊協會の『日伊文化研究』からの寄稿を求められたので、「地獄界」の翻譯をおくることとなり、昭和十七年三月より昭和十九年一月に至るまで、ざつと二年間の同誌〔第五號より第十六號まで〕に「地獄界」全部の譯と註とが掲載せられた。引續いて「淨罪界」を寄稿する約束であつたが、世界の風雲愈々急を告ぐるに至り、イタリアの降伏と共に『日伊文化研究』の刊行もおぼつかなくなつたので、一應そこで掲載をうち切ることにした。その



間、私自身の翻譯はそのまま繼續せられ、「淨罪界」は昭和十七年九月二十五日に稿を起こして昭和十八年八月三十日に稿を終り、「天堂界」は昭和十八年八月三十一日に稿を起こして昭和十九年一月二十四日に稿を終った。『日伊文化研究』に掲載せられた「地獄界」には誤植と脱落があったので、昭和十九年九月より十二月までの間に修正淨書した。

(創元社版『神曲』地獄界 序)

このようにして戦時中に完了した『神曲』の韻文訳稿は戦後創元社から四分冊の形で相次いで刊行され、藻風は先師上田敏の遣り残した『神曲』完訳という偉業を成し遂げたのである。各巻の巻頭には故上田敏への dedication の辞がイタリア語で記されている。このような長年にわたる研鑽、努力を経て『神曲』は晴れて出版されたのであるが、その代償は大きなものであった。『英語青年』の藻風追悼号で大塚高信教授は「晩年のダンテの『神曲』の翻譯、その印刷にあたっての苦心など、つぶさに筆者(註：大塚)は目撃しているが、眼を悪くされた原因の一つは確かに、この仕事にあると、筆者は思っている。」と言い、齊藤 勇博士は「四五年前、用事のため関西学院に行ったついでに、私は竹友邸に寄って久闊を謝した。ダンテ『神曲』の見事な訳が出て間もない時のことであった。自然、話題はそれに及び、その苦心のなみなみならぬことを聞いた。視力がそのために衰えたというようなことであった。それが原因であったろうか、眼病がもとで終に長逝されたことは、痛惜に堪えない。」と記している。

藻風訳『神曲』の持つ価値、他の邦訳と違う点は文語体韻文訳である点に存する。戦前の山川丙三郎訳、中山昌樹訳、生田長江訳、戦後の平川祐弘訳、壽岳文章訳等はいずれも散文訳である。原作のダンテの *Divina Commedia* は言うまでもなく詩形で書かれているので、その翻譯も我が国の学匠詩人によって韻文訳でなされるのが理想的であることは何人も首肯するところであるが、原詩は厳重な韻律を踏み、その格調は壯麗端正で圧縮された内容を盛り込んでいるので、韻文での邦訳は言うは易いが、その実現は想像を絶するほどに難しいものがある。これが為『神曲』の翻譯は藻風訳を除いてすべて散文訳となっている。藻風はこの困難を乗り越えて文語定型律(五七五等の定型律)を駆使して原文の一行は訳文の一行に完全に対比して韻文訳を完成させたもので、血のにじむような苦勞の結晶であった。藻風訳『神曲』の第一巻「地獄界」が刊行された時、矢野峰人は『季刊 英文学』創刊号(昭和 23 年 5 月発行)誌上で「竹友藻風譯『神曲』地獄界」と題して以下の通り書評を行った。

(前節省略) 思ふに、今日迄われらの有する『神曲』完譯としては、山川丙三郎、中山昌樹、生田長江等三氏のものを擧げる事が出来よう。その出来榮えの如何に就いては、見る人によって或は意見を異にするかも知れない。然し、全體として言ひ得る事は、これらが何れも詩人の手にならざる散文譯であるといふ事である。然しながら、『神曲』の如く峻嚴なる詩形、壯重なる聲調に壓縮されたる内容を盛れるものを散文に改める事は、如何にこれを律動化したにしても、説明に墮し散漫冗長に流れ詩美は失はれ易い。而も、われわれの要求するは「詩」としての『神曲』譯である。われわれが一般詩歌の翻譯に對して禁じ得ざる不滿の念も望蜀の感も、一に茲に胚胎すると言へよう。然るに、竹友氏の場合に於ては、世の常の翻譯とは異なり、彼の韻語は見事に我の韻語に、寸分の隙無き迄に整齊の美を以て移されて居るのである。これこそは、われわれのはじめて有する『神曲』の邦文韻文譯である。われわれは、今日これを得たる事を心から祝福すると共に、これが不朽の位置を占むべき事を確信する。ビニヨンの新譯の出来榮えの程は知らないが、今迄の『神曲』の韻文英譯ではロングフェローの手に成れるものを推すのが定説である。斯くいふ事は、或は竹友氏にとっては不滿であるかも知れないが、氏の新譯が邦譯の間に占むべき位置は、正にこの米詩人のそれであらうか。(中略) 竹友氏が舊譯に於て試みたものは七五調であったが、西詩をこの詩形に移さんとした人は誰でも發見するであらうやうに、意長くして辭は短きに過ぐるため、甚だしい不自由さを感じざるを得ない。斯くして、竹友氏も新稿に於ては五七五を根幹として採用し、これに交錯せしむる

に、その變形とも言ふべき五五七、五七七等を以てした。(後略)

まさに藻風をよく知る人の言葉で、藻風訳『神曲』の特色と価値を説いて余す所が無い。藻風訳『神曲』は四分冊刊行の最後の「天堂界」第二部が昭和 25 年 6 月に刊行されて完結したが、その後、河出書房版世界文学全集に入り、その古典篇第五巻として昭和 27 年 1 月に一卷に纏まって出版された。註釈は少し簡略になっている。この河出書房版『神曲』が出た時にも矢野峰人は世界文学全集の月報に「『文学界』とダンテ」と題する一文を寄せ、その中で、「竹友氏新訳の強みと不二性はそれが詩人の手になれる韻文訳なる点に存する」と述べている。昭和 27 年 10 月に学生版と称し紙装の廉価版も出ている。学生版の方は巻末にはダンテの生涯と『神曲』に就いての簡潔な解説がある。このダンテ『神曲』韻文訳完成出版により、藻風は世界文学賞、大阪府の藝術賞を受けた。

戦後の文部省編纂の『高等國語(二の下)』(昭和 22 年 9 月 26 日教育図書発行)に藻風訳の『神曲』「地獄界」から冒頭の第一歌が採られている。戦後の我が国の国語教育には世界的視野が求められた結果、『高等國語』には世界文学最高の古典に親しむ観点からゲーテの『ファウスト』及びシェイクスピアの『ヴェニスの商人』とともにダンテの『神曲』も採り上げられたのである。ダンテ『神曲』地獄界(昭和 23 年 2 月刊)の「序」で藻風は「セルモネータの公爵、ミケランジェロ・カエターニの精巧な圖版より複製を作ることが出来たのは、かって壽岳文章氏より贈られた原本を所蔵してみたからである。」と壽岳へ謝意を表している。

\* \* \*

### 英文学に於ける自然エッセイの鑑賞・紹介、論考、翻訳、訳注

英文学の中に自然エッセイの伝統を認めることが出来る。『釣魚大全』のアイザック・ウォールトン(Izzack Walton 1593-1683)、『セルボーンの博物誌』のギルバート・ホワイト(Gilbert White 1720-1793)、『はるかな国、とおい昔』の W. H. ハドソン(William Henry Hudson 1841-1922)、『野外にて』のリチャード・ジェフリーズ(Richard Jefferies 1848-1887)、『ファロドン雑考』のエドワード・グレイ(Edward Grey 1862-1933)、『南英地方』のエドワード・トマス(Philip Edward Thomas 1878-1917)、『未踏の道』の H. J. マッシング(H. J. Massingham 1888-1952)、『かわうそタルカ』のヘンリー・ウィリアムソン(Henry Williamson 1895-1977)等々と続く流れである。竹友藻風も壽岳文章(及び妻、しづ)もともにこの自然文学を愛好し、それぞれに先駆的な業績を残している所以以下に見てゆこう。

### 英文学に於ける自然エッセイの日本での受容

日本の近代、即ち、明治維新(1868)以降は西洋の文物が一斉に移入されたが、Nature Essayist の名では例えば Izaak Walton とその著『釣魚大全』*The Compleat Angler*も文部省により明治 11 年 2 月に刊行された『百科全書』釣魚篇の中に於いて「コムプレートエングレール」(釣魚全書ノ義)として早くも紹介されている。この『百科全書』は英国の Chambers 社から刊行された *Information for the People*(1857)を翻訳したものである。次いで直接英文学の範疇には属さないが我が国の自然、特に身近な生物を紹介した英文著述で注目されるのは明治 23 年(1890 年)に来日し、終には日本に帰化した小泉八雲こと、Lafcadio Hearn(1850-1904)で、彼は日本紹介の様々な自著の中でしばしば自然、特に好んで昆虫に就きその生態や伝説、昆虫に関する詩等を記述・紹介していることである。ハーンが書いた蝶、蝉、蜻蛉、蟻、蠅、草雲雀等の文章はハーン没後教え子であった大谷正信(雅号：繞石、1875-1933)によって『蟲の文學』(*Insect Literature* 総頁 515 頁)として纏められ、1921 年に北星堂書店から出版された。1988 年 9 月にはハーン来日 100 年を記念して昆虫学者長澤純夫によってハーンの昆虫関係の作品の翻訳が『蝶の幻想』の書名の下に纏められ築地書館から出版されている。ハーンの著書はわが国では広く読まれており、従って、その著作も何回も reprint されているので自然愛好の面でもその影響するところは大きいものと思われる。明治期に続く大正期(1912~1926)に入ると我が国に於ける英文学研究は一段と進み、精緻な英米文学の註釈叢書が現われ、また鑑賞も深まっていった。このような状況下、

英文学に於ける自然文学の紹介・鑑賞も進み Izaak Walton、Gilbert White、Richard Jefferies、W. H. Hudson 等が相次いで紹介され、翻訳の部分訳も現れた。

### ***The Compleat Angler* (『釣魚大全』)**

先ず Izaak Walton から見てゆこう。Walton の代表作である *The Compleat Angler* (『釣魚大全』) に就いては英文学者平田禿木が大正 8 年 (1919 年) 10 月発行の雑誌『帝國文學』(第 25 巻第 10 号) に寄せた「『釣魚大全』に就て」という一文があり、当時既に *The Compleat Angler* の訳名として『釣魚大全』が用いられていることが判る。これは主として第一次世界大戦中に出た edition (Marston 編) に対する Holbrook Jackson による紹介文を参照して書いたそうである(平田禿木『英文學印象記』後記)。大正 12 年 6 月 15 日から翌年 3 月 15 日にかけて当時東京高等師範学校教授であった竹友藻風が「英語青年」(当時は 1 日と 15 日の月二回発行)誌上で抄訳註を連載した(第 49 巻第 6 号から第 50 巻第 12 号まで 8 回の連載)。これは『釣魚大全』の梗概を述べながらそのところどころを訳註したものであるが、原書第四章の半ば迄で、中断の形で終わっている。続いて大正 15 年 5 月に研究社の英文學叢書 (Kenkyusha English Classics) の一冊として同じく東京高等師範学校教授岡倉由三郎による *The Compleat Angler* (第一部) の authentic な註釈本が刊行された。更にほぼ時を同じくして釣魚雑誌『釣之研究』誌上に飯田道彦が大正 15 年 1 月～昭和 3 年 10 月迄 24 回に亘り邦訳を連載した。この飯田訳も当該雑誌が廃刊となったため中断となっている(丸山信「『釣魚大全』ほんやく小史」『釣本の周辺』(昭和 51 年 白川書院刊 p.27)。『釣魚大全』第一部の最初の完訳(原書第五版本に基づく)は昭和に入って平田禿木によってなされ、昭和 11 年に国民文庫刊行会より刊行された。さらに昭和 14 年谷島彦三郎訳(春秋社刊)、昭和 29 年下島連訳(元々社刊)、昭和 32 年木下祐次訳(長谷川書房刊)と続き、昭和 38 年の小澤準作による第四章までの抄訳(筑摩書房『世界人生論全集』第四巻所収)を経て昭和 45 年になって初めて Charles Cotton による第二部を加えた原書第五版からの完全訳が出現した。即ち、森秀人訳(虎見書房刊、昭和 49 年角川書店より普及版刊行)である。一方、昭和 52 年には杉瀬祐により初めて原書初版本から第一部の翻訳がなされ(関西のつり社刊)、さらに平成 9 年に飯田操訳による第二部及び R.ヴェナブルスによる第三部を含む原書第五版からの完訳が平凡社ライブラリーに二分冊で収められて刊行され、ここに我々は日本で第二部・第三部を含む最終完訳を持つこととなった。猶、霜田俊憲による第二部だけの翻訳が平成 10 年に刊行されている(フライの雑誌社)。

尚、*The Compleat Angler* (『釣魚大全』) に就いて忘れてはならないことは(原書第五版)第一部最終章の最後に於て“*study to be quiet*”の言葉が記されていることである。これは新約聖書のテサロニケ前書 (The First Epistle of Paul to the Thessalonians) 第 4 章 11 節にある言葉を Walton が引用しているのであるが、我が国でも平田禿木、藻風、福原麟太郎の三人がそれぞれにこの言葉を愛好し(禿木は「務めて静かなれ」、藻風は「安静(しずか)ならんことをつとめよ」、福原は「静かに過すことを習え」と訳している)、人生訓、座右の銘としていたことも興味深い。

### **Gilbert White 『セルボーンの博物誌』**

Gilbert White の『セルボーンの博物誌』の日本の文献は以下の通りである。

- ・竹友藻風「セルボオンの博物學者」昭和 3 年(1928)8 月雑誌『思想』82 号(岩波書店発行)後、藻風の著書『英文學論攷』(昭和 5 年刊)及び『藻風小品』(昭和 18 年刊)に「ギルバート・ホワイト」と改題して収録。
- ・戸川秋骨「セルボーンの博物誌」『英語青年』第六十八巻・第六十九巻(昭和 7 年 10 月より 8 年 9 月まで。訳註)・戸川秋骨「セルボーン博物誌中の亀の子」『英語青年』第七十巻(昭和 8 年 10 月より 9 年 3 月まで。訳註)・戸川秋骨「ギルバート・ホワイトの事」随筆集『自畫像』(昭和 10 年 10 月、第一書房刊)所収
- ・上林 暁「セルボオン博物誌抄」『動物文學』昭和 12 年 7 月号所収
- ・市河三喜注釈 *The Natural History of Selborne* (『セルボーンの博物誌』研究社英文學叢書、昭和 15 年 9 月刊)
- ・内田清之助「ギルバート・ホワ

イト」(創元選書『鳥』(昭和17年2月刊)の中の「鳥の文學」の項)

・雑誌「動物文學」(75~78輯、80~82輯、86輯) 戦時中に壽岳文章による「セルボーンの博物誌」の抄訳が掲載された。・山内義雄訳『セルボーンの博物誌』(昭和18年10月訳出、昭和23年(1948年)養徳社刊(上下二巻))。この訳書は後に昭和51年に出帆社より一冊本として再刊され、さらに1992年に講談社学術文庫に収められた。出帆社刊行本の巻末には日本女子大学 奥田夏子教授による「『セルボーンの博物誌』と自然風物エッセイの伝統」と題する解説が付せられている。・壽岳文章訳『セルボーンの博物誌』(岩波文庫上下二冊、昭和24年(1949年)2月&8月刊)・西谷退三訳『セルボーンの博物誌』(昭和33年(1958年)非売品頒布、市販品昭和36年11月博友社刊)。この訳書は後に平成4年(1992年)に八坂書房より再刊された。・奥田夏子「イギリスの野鳥と文学」『野鳥と文学』(昭和57年大修館書店刊)所収。イギリスの野鳥の種類、習性の観察に就きしばしば Gilbert White、Richard Jefferies、W. H. Hudson に言及し、それぞれの著書から引用・解説されている。・奥田夏子:「イギリス探鳥文学散歩」(『野鳥歳時記 別巻①』)所収。昭和60年6月小学館刊行。のち奥田の著書『英語 米語 鳥語』(平成2年3月 中京出版刊)に再録。この中で“ホワイトの村のセルボーン”と“セルボーンの野鳥”に就き記述。・奥本大三郎:「若き隠遁者—ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』」。『本を枕に』(昭和60年、集英社刊)所収。・吉良幸世「セルボーンの博物学者 ギルバート・ホワイトにあこがれて」。『野鳥』第556号(1993年3月号)所収。・新妻昭夫抄訳・解説『セルボーンの博物誌』(平成9年小学館刊)。上記リストから分る通り『セルボーンの博物誌』に就いては昭和の初めから部分的には紹介・抄訳されていたが、その完訳三種類が出版されたのは皆第二次大戦の終戦後となっている。但し、この三種類の翻訳はそれぞれ戦時中(昭和16年~昭和20年)に完成していたか、乃至は鋭意訳筆が進められていたものである。山内訳及び壽岳訳はそれぞれ市河三喜による註釈を参照して訳筆を進めており、市河の当該註釈本は大きな助けとなっていると云えよう。市河の註釈本は Introduction だけでも72頁に及び、その中でホワイトの一族とその家系、セルボーンの村、ホワイトの生涯、ホワイトの風貌と性格、著書『セルボーンの博物誌』、同書の文体と言語、年表・参考書目等が記載されている。特に『セルボーンの博物誌』の文体と言語の項目では同書を読解する上で必要となる文法上の諸点に就いても懇切丁寧な解説がなされており、爾後の翻訳者等を裨益するところ多大なものがある。市河は当時東京帝国大学の英文科主任教授で、我が国に於ける英語学を学問として確立させた第一人者であったが、自身、少年の頃から博物愛好家であった。(市河には随筆集『昆虫・言葉・国民性』(昭和14年 研究社)や『私の博物誌』(昭和31年 中央公論社)の著書もある。)三人の完訳者のうちの一人である西谷退三(本名は竹村源兵衛、明治18年7月21日~昭和32年6月25日)の生涯はホワイトを偶像とするものであった。西谷は若い時に偶然『セルボーンの博物誌』を手にしてすっかり魅了され、その翻訳を思い立ったのであった。西谷は1923年1月から1925年1月まで英米に遊び、ロンドンでは同地の古書肆を通じて当時刊行されていた『セルボーンの博物誌』130余種中91冊を得て帰国したという(奥田夏子:『セルボーンの博物誌』と自然風物エッセイの伝統)。氏は生涯独身で通し、郷里に隠棲してただひたすら『セルボーンの博物誌』の翻訳に精力を傾け、逝去の直前に訳業を完成させたのであった(享年73歳)。西谷退三に就いては壽岳文章が昭和34年3月の『英語青年』に於いて「ホワイトに捧げられた生涯—故西谷退三氏のしごと」と題して書いている。西谷の蒐集した各種の『セルボーンの博物誌』版本及び旧蔵書は西谷が亡くなった後、高知県佐川町立の「青山文庫」に収められた。

内田清之助(明治17年(1884)~昭和50年(1975))は日本鳥学会会頭も務めた日本に於ける鳥学の第一人者で、専門の学術書の著述はもちろんであるが、また一方で幾多の滋味あふれる随筆集を著しそれを通じ一般読者に鳥の知識を普及せしめた功績は大きいものがある。内田は著書『鳥』(創元選書)に於いて Gilbert White の外に John James Audubon、Richard Jefferies、W. H. Hudson、Viscount Grey 等の naturalist 達についても簡潔に紹介している。

『セルボーンの博物誌』における 1784 年の Timothy と云う亀の子の記述は名高いもので、日本でも上記文献リストに見られるように『英語青年』誌上で戸川秋骨による訳註がなされているが、ケンブリッジ英文学史に引用された評言では著者 G. ホワイトを a man the power of whose writings has immortalized an obscure village and a tortoise as long as the English language lives (「その名文で名もない村と一匹の亀を、英語の存(ながら)えるかぎり不朽ならしめた人」(大和資雄『新版 英米文学史』p.176)とあり、簡潔にしてよく本書の価値と魅力を評したいつまでも心に残る名言である。なお、我が国における『セルボーンの博物誌』に関する最初の纏まった文献は昭和 3 年(1928 年)8 月発行の雑誌『思想』82 号(岩波書店発行)に載った藻風による論考「セルボオンの博物学者」である点に注目しておきたい。藻風の著書『英文學論攷』が刊行(昭和 5 年 6 月)された時、早稲田大学の日高只一教授は昭和 5 年 7 月 18 日付東京朝日新聞に書評を寄せたが、その中で「實際この著は苦心惨たん研究の餘りになれるといふよりも、著者が好むがまゝに英米文學を味讀して得た印象を著者独自の美しい言葉で書」いていると言ひ、続けて次のように評した。

巻頭に掲げてあるギルバート・ホワイトの如きは十八世紀の博物学者でありながら、その著「博物誌」が藻風氏の温かい詩情に触れると美しい光を發し、暖かい文學として浮き上がってくるのである。否、ホワイトの見た自然の中には當時十八世紀の冷灰のやうな擬古典時代でありながら、温かい、フレッシュなロマンチズムの精神のみなぎってみるのが、藻風氏の鋭感に反映したのである。このやうな博物学者の著作すら藻風氏の筆に上ると一段の光彩を放つ感がする。まして、詩人なら、たとひフッドのやうなマイナアの者でも、氏の筆の力を借りて益眞價を發揚するの感がするのである。(中略)著者は何れの編にも、作者の詩句や、文章を引用し、美しい邦文譯を添へて、兎角陥り易い抽象的解説を避け、直ちに作者の面影に接し、作の香気をかぎ、詩味を味ははしめるのである。この點こそこの著の持つ最も大なる特色であると思ふ。

#### リチャード・ジェフリーズ

Richard Jefferies に関する日本の文献を一瞥してみると以下のとおりである。

- (1) 戸川秋骨：「自然と精靈」『文章世界』(明治 41 年 12 月発行)に掲載。秋骨が同誌上に連載した英詩文評釈の第六回として The Story of My Heart の一節の評釈・紹介文を載せたもの。秋骨は明治 44 年 10 月発行の同誌に寄せた「英國に於ける自然文學」と題する短い紹介文の中でも The Story of My Heart に言及している。
- (2) 戸川秋骨：著書『英文學精講』(大正 4 年 5 月、東亜堂書房刊)。書中の「田園文學」の一章に於いて Richard Jefferies をとりあげ、*The Story of My Heart* から 14 passages を引用し、訳述して紹介。他に *The Open Air* 所収の Wild Flower の章から 3 passages を、Outside London の章から 1 passage を引いて訳述紹介している。
- (3) *The Story of My Heart With Introduction and Notes by E(arnest) E(dwin) Speight* 大正 10 (1921) 年 岩波書店刊。*The Story of My Heart* の註釈付翻刻版。15 頁の Introduction 及び Bibliographical Notes が付いている。本書は後に研究社の小英文叢書の一冊として再刊され、版を重ねた。
- (4) リチャード・ジェフリーズ「草原の思」(竹友藻風訳註) Richard Jefferies の自然エッセイ *Meadow Thoughts* の訳註。『英語青年』第 47 卷第 9 号(大正 11 年 8 月 1 日発行)から同第 12 号(大正 11 年 9 月 15 日発行)まで四回に亙って訳載。これは後に『草原の想』と改題して昭和 2 年 10 月 斯文書院から刊行された。
- (5) 本庄圭輔：「高垣先生のことなど」『英語研究の 70 年』(1975 年 4 月 研究社刊)所収。1921 年頃立教大学予科でシカゴ大学での留学から帰朝したばかりの高垣松雄教授が Jefferies の *The Story of My Heart* を教材に使って生徒に教えていたことが述べられている。
- (6) 岡倉由三郎：“The July Grass”と“Meadow Thoughts”の二篇の註釈。研究社英文学叢書中の一冊 *English Essays* (大正 14 年 4 月刊)所収。
- (7) 竹友藻風訳註 *Meadow Thoughts* 『草原の想』昭和 2 年 10 月 斯文書院刊。Richard Jefferies の著書 *The*

*Life of the Field* (1884) 中の一編の翻訳。大正 11 年に『英語青年』誌上で訳載したものを纏めて上梓したものの。

(8) 竹友藻風：『エッセイとエッセイスト』昭和 2 年 12 月 北文館刊行 書中の「エッセイと批評文學」の項目の中に於いてジェフリーズのエッセイに就いて触れ、特に“Mind under Water”一篇の冒頭の一節を引用してジェフリーズのエッセイの特色を述べている。

(9) 小日向定次郎：「ヂェファリーズの自然の禮讚」同氏著『近世英文學史』（昭和 4 年 6 月、文献書院刊）第三篇第三節 pp.546-552

(10) 柏倉俊三編註： *The Story of My Heart* 註釈付翻刻版。昭和 8 年 1 月 積文堂書店刊。 Edited with Notes(including brief Life) by Shunzou Kashiwagura, Sekibundo Press, 1933

(11) 野津文雄：Richard Jefferies' Earlier Works in Comparison with White's "Selborne" 昭和 8 年 4 月に刊行された大塚英文學茶話会（後の「大塚英友會」の前身）編の『英語・英文學論集』第一輯所収。尚、野津文雄は東京文理科大学英文学科の第一回の卒業生で、昭和 7 年の卒業論文は“Richard Jefferies as an Interpreter of Nature”であった。

(12) 戸川秋骨訳「南部地方の禽鳥」『野鳥』創刊号～第三号に連載（昭和 9（1934）年 4 月～6 月）この翻訳に就いて秋骨は「Richard Jefferies の Wild Life in a Southern County の一節で、野鳥の動静を書いたところである」と述べているが、当該箇所は原書（初版 1879）の 16 章“Notes on Birds”である。

(13) 戸川秋骨『小鳥の英文學』（昭和 11 年 6 月 山本文庫）。上記ジェフリーズ「南部地方の禽鳥」の翻訳の外に W. H. ハドソンの小品「かけす・翡翠」の翻訳、及びグレイ子爵の『ファロドン雜考』中の小品翻訳を収める。

(14) *Under the Acorns and Other Sketches* by Richard Jefferies 教科書版翻刻。昭和 13 年、大洞書房（東京）刊

未見。同社から出た他の翻刻註解本の巻末に添付されている同社刊行図書リストに含まれている。

(15) 壽岳しづ訳『わが心の記』岩波文庫 昭和 14（1939）年 4 月刊 *The Story of My Heart* の全訳

(16) 堀口守「ジェフリーズとハドソン」『動物文學』66 輯 7 卷 6 号（昭和 15 年 6 月発行）

(17) 内田清之助：「リチャード・ジェフリーズ」（創元選書『鳥』（昭和 17 年 2 月刊）の中の項目「鳥の文學」所収）ジェフリーズの生涯と著作に就いて簡潔に記述

(18) 川村 泉訳『わが心の記』昭和 23（1948）年 3 月 養徳社刊。 *The Story of My Heart* の全訳

(19) 板倉勝忠訳『野外にて』岩波文庫 昭和 26 年 10 月刊。 *The Open Air*（原書初版 1893 年）の全訳。

(20) 山崎進注解： *The Story of My Heart* (with Introduction and Notes by Susumu Yamazaki)、昭和 28 年 6 月、大阪教育図書刊。

(21) ジェフリーズ『イギリスの田園』野津文雄編註（*Rural England* compiled with notes by Fumio Nozu）昭和 45 年 10 月刊 研究社小英文叢書の一冊。“Out of Doors in February”、“Hours of Spring”、“The Pageant of Summer”、“A Brook”、“Meadow Thoughts”、“Nutty Autumn”、“Thoughts on the Downs”の七篇の短篇を収め註を付した。

(22) 柏倉俊三：「ジェフリーズところどころ」— W. H. ハドソンを背景にして— 『学鏡』71 卷 9 号（昭和 49 年 9 月、丸善刊）。ハドソンと対比してジェフリーズを論じている。

(23) 奥田夏子「イギリスの野鳥と文学」『野鳥と文学』（昭和 57 年（1982 年）大修館書店刊）所収。Chaffinch の鳴き声に関しジェフリーズに言及している。

(24) 根岸彰訳『森の中で』平成 14 年 6 月、鳥影社刊。Jefferies の Nature Essay 10 篇を蒐めた *Under the Acorns A Selection of Nature Essays*（1982, Horizon-Cholerton 刊）の全訳。

上記の文献リストからも分るように日本に於ける Richard Jefferies の紹介文・翻訳は大別して *The Story of My Heart* (翻訳二種類、翻刻編註三種類) の著者としてのジェフリーズと Nature Essayist としてのジェフリーズに分けられよう。上記文献リストの(3)の *The Story of My Heart* の翻刻の編者の E.E. Speight は日本の若い世代の読者、特に学生向けに懇切丁寧な Introduction を書き残してくれており、ジェフリーズの日本での文献として読者を裨益するところ多大である。Richard Jefferies の nature essay は W. H. Hudson の著作ともども大正時代の半ば頃から一部の自然文学愛読家・研究者の間で読まれていたが、昭和に入り、野鳥研究家で詩人でもある中西悟堂と英文学者・詩人の竹友藻風の発議により昭和 9 年 3 月 11 日に鳥学界・操觚界・学者・美術界(画家)・民俗学の各分野から賛同者を得て「日本野鳥の会」が発足し、その会誌である『野鳥』の創刊号が同年 5 月に発刊されると専門の鳥関係の記事とともに戸川秋骨、平田禿木、竹友藻風等によって同誌上にて Jefferies、Hudson、Edward Grey 等の英国の自然エッセイが翻訳・紹介されたことは注目されてよい。この『野鳥』は現在も「日本野鳥の会」の会誌として継続刊行されている。「日本野鳥の会」が設立されて以降、日本各地で支部が出来、日本でのバード・ウォッチングが全国的に普及して来ることになった。また、昭和 9 年 6 月には平岩米吉主宰の月刊誌『動物文學』(1934-2014)も創刊され、日本に於ける動物文学・自然文学愛好普及の一翼を担うことになり、同誌でも岩田良吉による W. H. Hudson の *The Book of a Naturalist* (1919)からの抄訳、壽岳文章による『セルボーンの博物誌』の部分訳が掲載され、また八波直則による Henry Williamson の『鮭』*Salar the Salmon*(1935)の翻訳(全訳)が連載(1940-1942、昭和 18 年単行本として刊行)された。

(註) *Salar the Salmon* は海保真夫による新訳『鮭サラの一生』が至誠堂より昭和 43 年に刊行されている。

#### 「日本野鳥の会」の創設とその会誌『野鳥』の創刊 —中西悟堂と竹友藻風—

昭和 9 年 3 月に中西悟堂によって「日本野鳥の会」が創設され、その会誌『野鳥』が創刊されたことは普く知られているが、始めはまったく気乗りしなかった中西悟堂を説いて遂に鳥の雑誌『野鳥』の創刊を実現せしめた陰の功労者が竹友藻風であったことはあまり知られていない。現在会員数約五万人、日本全国に 87 の支部を持つ著名な「日本野鳥の会」であるが、そもそもこの「日本野鳥の会」は会誌『野鳥』発刊の母体として発足したのであって、若し、『野鳥』が創刊されなかったら「日本野鳥の会」は誕生してなかったかも知れないのである。即ち、雑誌『野鳥』創刊の運動の方が先にあったのであって、若し『野鳥』創刊がなかったとしたら、少なくとも「日本野鳥の会」と同趣旨の会は、或は誕生したとしてもその後の太平洋戦争もあり、ずっと遅れ、戦後、世相が漸く落ち着いてからになったであろうと思われるのである。確かに「日本野鳥の会」の運営とその会誌『野鳥』の発行は中西悟堂が主宰したものであり、会の継続と発展は偏に悟堂の努力によるものであり、その功績に帰せられるものであるが、先ず最初に悟堂に対し鳥の雑誌の発刊を強く勧め、それに対し躊躇し、消極的でしたらあった悟堂をして終に発刊に踏み切らせた藻風の熱意なくしては『野鳥』創刊も、それに伴って発足した「日本野鳥の会」の誕生もなかったであろう。しかも『野鳥』の創刊に到る裏面の実情は薄氷を踏む思いで、危うく流産となりかねなかったのである。藻風は悟堂とともに『野鳥』創刊の産みの親の一人なのである。『野鳥』創刊及び「日本野鳥の会」創設に就いては藻風自身は一切黙して語っていないが、『野鳥』二十五周年記念特集号(昭和 35 年 5 月発行)に寄せた悟堂による「日本野鳥の会二十五年史」(第一回)と「地下の竹友藻風氏へ」と題する寄稿に於いて、さらに悟堂の著書『定本 野鳥記』や『愛鳥自伝』の中で、また岡 茂雄著『本屋風情』(昭和 49 年 7 月 平凡社刊)の中の「『野鳥』創刊のお手伝いとそれから」と題する一篇に詳しく述べられている。『野鳥』の刊行を実現させた中西悟堂と竹友藻風はともにこの世を去っているが、現在の盛大な「日本野鳥の会」を見る時、その設立を実現せしめた陰の功労者である藻風を偲ぶのも意義のある事であろう。

#### 藻風と悟堂との出会いと交流

悟堂宅のある杉並区井荻町(善福寺風致地区内)は東京女子大学の敷地と接しているところであった。東京

女子大学は大正7年4月に当時の東京府豊多摩郡淀橋町字角筈（現在の新宿区角筈）に設立されたが、同13年には豊多摩郡井荻村（現在の杉並区善福寺）へ移転していた。藻風は大正9年9月から東京女子大学の英文学の教授として出講していたので、ここに旧知の悟堂との新たな交流が開始されることとなったのである。藻風が初めて悟堂宅を訪ねたのは昭和8年であった。藻風と悟堂はともに昭和4年3月に創刊された雑誌『現代詩評』の編集委員であったので（因みに悟堂は最初詩人として出発している）、両者は昭和の初めの頃からの旧知の間柄であった。悟堂は藻風との出会いとその後の両者の親交について次のように述べている。

（前節略）当時、竹友氏は私の住居に近い東京女子大学の英文学教授であって、ハドスンやジェフリーズを溺愛していたことから、今度は日本身辺の鳥の実際を知りたくなって、その頃、鳥の放飼で聊か知られていた私を訪ねる気になったらしい。そして私の放飼状況に驚きの目を見張ると共に、進んで野外の鳥に触れなくなられたらしく、女子大の講義の帰りには必ず立ち寄られた。私の話が何時間でも厭きぬが「ネエザランドみたいな善福寺地区の丘や低地」をいっしょに歩いてくれぬかというご注文である。もとよりそうしたことが私の日常生活でもあったことで、私も欣々として快諾し、その後は実にしげく夏一秋一冬一春の野づらを二人で歩いた。（『野鳥』二十五周年記念特集号 pp.248-249）

（前節略）爾來、竹友さんと私とのあひだには人の羨む交誼が結ばれ、屢々相携へて野外の観察にも出かけたばかりでなく、精神上の親身な忠言者にもなられ、更に『野鳥』の發刊にも根原の斡旋役となられた。凡そ鳥を仲介として始ったいろいろの御方との友情は、常に透明素朴で、その親しみの深さも他の場合とは比較にならぬものがあるが、竹友さんのことは此の際特記して置きたかったので、尾長に因んで書留めたわけでもある。（『野鳥』第二卷第一号（昭和十年一月）pp.50-51、後に悟堂の著書『野鳥と共に』に収録）

藻風は『野鳥』第九卷第三号（昭和17年4月1日発行）に「尾長」と題して随筆を寄せているが、悟堂は同号の後記で藻風の当該随筆にふれ、丸八年前の『野鳥』創刊時の思い出を回顧して以下のように記している。

巻頭は關西学院大學教授竹友藻風氏から詩情に富むエッセイを頂いた。竹友氏は抑々の本誌誕生の産婆役。丸八年前の季節も恰度いまごろのこと、場所も同じい現在の私の編輯室で、竹友氏と二人で額を寄せ合っては本誌の題を考へたり創刊號の立案をしたりした。すぐそばの東京女子大學の講義がすむと私の家へ來られたり、いっしょに武蔵野をさまよったりしたが、それもついきのふのやうな気がする。以來八年間の野鳥運動發展の歴史、あるひは野鳥の會の發展史は、内田清之助博士や柳田國男先生はじめ、實に多くの人々の絶えざる扶助に負うてゐる。が、その當初に浮ぶ吾々二人の素朴な姿は、顧みて感慨なきを得ぬ。この間私個人としては、胸も擴がるやうな楽しいこともあり、齒を食ひしぼるやうな苦しいこともあり、どちらの思ひ出も繩の如くにもつれてゐるが、あの發足の思ひ出のみは、竹友氏と私とのあひだでは特別なものがあると言へる。月刊に復して竹友氏また筆意の動くものありしにや、早速巻頭を寄せられてうれしい。

悟堂は「恩顧の人々」の中の「内田清之助博士」の一篇で、以下のように感謝の念をもって結んでいる。

伊豆大島の探鳥会などにも世話をやかれ、さらに前述のごとく、京都、大阪くんだりまで、支部結成のための講演会にわざわざ出向いて下さったなどの恩は深い。私が初めてお逢いしたころからの大御所だし、それよりも、以上の高恩は尋常のものではなかったのである。野鳥の会としてもたいへんな幸運であったことを、しみじみと思わずにはいられない。すなわち竹友藻風氏と内田清之助博士とは、この会発足の双柱であったのである。（『定本 野鳥記』第八卷「私の風土」p.256 圈点筆者）

『野鳥』創刊時藻風は満43歳（数え年で44歳）、悟堂は満39歳（数え年で40歳）であった。悟堂自身は40歳の時であったと記している（『愛鳥自伝』p.480）。当初『野鳥』の編集は藻風と悟堂の二人でやる計画であったが、藻風は『野鳥』の創刊号が出る一ヶ月前の昭和9年3月30日に関西学院大学に赴任のため長年住み



慣れた東京を後にしたので、悟堂は一時片羽を失ったように感じた。

『野鳥』の編集も竹友さんと私とでやることにしていた。その竹友さんが、『野鳥』の創刊号の顔を見ずに東京を去って、関西学院大学に赴任することになったので、私は一時片羽を失ったように淋しい 思いをした。が、竹友さんは六甲山麓仁川へ移ってから、しきりに鳥を眺めて歩き、鳥のエッセイを書いた。

(『定本 野鳥記』第五巻 p.187)

当時藻風は既に新設された関西学院の大学部法文学部（開講は昭和9年4月）へ赴任することが内々決まっていたので、悟堂と共同でやる鳥の雑誌発刊の件も自身の関西赴任前に是非実現しておきたいとの強い思いがあったものと思われる。藻風が少し強引とも思われるほどに熱を入れて急いで『野鳥』誌発刊の実現を目指した一つの理由には関西学院大学赴任前までに雑誌発行の目処をつけておきたいという心理的な deadline が背景にあったものと考えられる。但し、関西学院赴任の件に就いては藻風は最終決定するまでは悟堂にすら打明けていなかったのではないかとと思われる。

\* \* \*

藻風が鳥の放し飼いを始めたのは中西悟堂に手引きを受けて始めたのが最初であり、その時期は昭和8年の12月の初旬であった。藻風の最初の放飼の小鳥は悟堂から贈られた山(やま)雀(がら)であった。風呂敷に包んで渡された山雀の入った鳥籠を抱えて悟堂宅から帰途に就いた藻風はその時の気持ちを以下のように述べている。

(前節略) 歸途電車の中でも私は絶えず小鳥のことを考へてみた。ギルバート・ホワイト (Gilbert White) や W. H. ハドスン (W. H. Hudson) の書物の中で垣間見た小鳥の世界が今や私のものとならうとしているのである。デイヴィッド・ガーネットの小説 *Go She Must* の中に、自分の家を鳥籠にして小鳥と一緒に生活してゐる老牧師の姿が描かれてゐるが、私の椅子のぐりにこの山雀を遊ばせながら勉強するといふやうな不思議なことが少なくとも明日から實現せられるのだ。

(「山雀」『文藝春秋』昭和9年2月号、後『鶴鴿』所収 pp.7-10)

当時藻風は大塚仲町の借家に住んでいたが、ヤマガラ(山雀)は家の壁紙を食い破ったりいろいろと悪戯をする、家主に叱られそうなので藻風は暫らくしてこのヤマガラを悟堂のところへ返している。そこで悟堂は山雀の代わりに鶇の子を飼ってみることを勧め、藻風は鶇を自宅へ持ち帰った。ところがその鶇が風邪を引き、藻風の必死の手当ての甲斐もなく、焦れば焦るほど衰弱し、到頭、翌年(昭和9年)正月2日に死んで了った。藻風はすっかり滅入って了った。この時の気持ちを藻風は詩に作り、「鶇」と題して自作の詩集『剥製』(昭和9年5月 文教閣刊)に収めている。藻風は尾長を三羽(三度)飼育している。尾長に就いては特に好み、思い入れが強かったようである。このうちの二羽は悟堂から分けて貰ったもので、最初の一羽は昭和8年生まれの小鳥で、この尾長に就いては昭和9年1月16日付東京朝日新聞(朝刊)に連載シリーズ「わが家のペット」の第11回目として「尾長 竹友藻風氏」の見出しで藻風がこの尾長を可愛がっている写真とともに記事が載っている。もう一羽は昭和7年生まれの小鳥で、悟堂の著書『野鳥と共に』(昭和10年12月 巢林書房刊)の中で紹介されている尾長であった。藻風はいずれの尾長も悟堂が名付けた「パー」をそのまま踏襲して「パー」と呼んで飼っていた。しかしこの悟堂から譲られた二羽の尾長は或いは知らぬ間に灰の中に頭を突っ込んだり、或いは子供が落とした塩豆を食べたりして短期間で死んで了ったので、三羽目の尾長を小鳥銀三郎翁の商っていた小鳥屋から買ってきて室内で放し飼いにしていた。この尾長(藻風はこれも「パー」と呼んでいたようだ)については昭和10年3月27日付「大阪朝日新聞」の朝刊に「玩具の好きな尾長「パー嬢」人間を嗤ふ賢明さ」と題して新聞記事が載っている。この尾長は藻風の手許で9年以上長生きした。昭和9年3月末で東京を離れ関西に移った藻風であったが、飼育中の小鳥がいたのでその引っ越しが大変であった。即ち小鳥用に夜行列車の客席を一人分余計に確保して運んだのであった。藻風は兵庫県武庫郡甲東村仁川に新居を構えたが、その新居



を訪れた壽岳文章は室内で小鳥が飛び回っている姿を見て驚いたという。

藻風は関西に移ってから悟堂から手引きされたその愛鳥趣味は決して衰えることはなかった。藻風が飼育した野鳥は山雀、鴝、尾長、小雀、鶯、鶯、<sup>やまがら もず こがら うそ</sup>頬白、黒鶇、大瑠璃、駒鳥などである。短期間飼ったものとしては葎五位があり<sup>くろつぐみ おおるり</sup>（昭和12年12月）、その飼育の様子は『野鳥』第五卷第二号（昭和13年2月発行）に掲載され、後に藻風の著書『鶴鴿』に収められている。昭和12年2月14日の大阪朝日新聞（朝刊9面）に「鶯 — 聲は野で聞くべきもの」

との表題で記者が藻風にインタビューした記事が載っている。この記事の中で藻風は鶯に就いての豊富な知識を語っている。

\* \* \*

藻風の随筆集『鶴鴿』（昭和17年6月、七文書院刊）は前半に野鳥や自然文学を中心としたエッセイや論考、後半に英文学関係の古書、古版本関係のエッセイや物故した先進英文学者等の追悼記や紀行文等を取めるが、本書の紹介・書評では（特に本書の前半部分に関しては）藻風を良く知る中西悟堂によるものに勝るものはない。

悟堂による藻風の随筆集『鶴鴿』の書評エッセイ「鳥影明滅—竹友藻風氏の文集『鶴鴿』を讀みつつ—」は最初昭和19年1月に書かれ、のち悟堂の著書『鳥を語る』（昭和22年6月、星書房刊）に収められた（後に『全集日本野鳥記』第三卷（昭和60年10月刊）所収）。さらに後に同文が「竹友藻風氏と『鶴鴿』—鳥影明滅—」と若干表題を変えて悟堂の『定本 野鳥記』第5巻の「人と鳥」の巻に収められている。

私は一冊の本を携へて林の中に入って行った。それは竹友藻風さんの随筆集『鶴鴿』であった。もう一年餘一度に通讀する暇がなくて、電車の中で人ごみに揉まれながら讀んだり、客の絶え間や仕事の合ひ間に書齋の日ざしのなかで五六頁をよんだり、ステッキは持たなくてもこの本を手にして林を歩いたりしてゐるうちに、どの頁といふことなくめくったところを讀む癖がついて、従って同じところを二度も三度も讀む。鳥のことと、英文學に関するエッセイを集めた本だが、著者の深い教養と、純正な詩人的心情と、静かな觀照との醸す、渾然とした一冊の品位が、私をしてこの本の愛讀者たらしめたのである。（『鳥を語る』pp.113-114）

『鶴鴿』は鳥のことだけの本ではない。十七世紀の英國の詩書の話や、辭書の話や、ラムの傳記のことや、ディケンズや、さういふことに交って、岡倉由三郎先生、戸川秋骨先生、上田 敏先生などのありし日の俳なども交錯して、たのしいエッセイ集をつくつてゐるのだが、わけても鳥のことは私にはたのしい。嘗て私は竹友さんに、一卷の鳥の隨筆集をまとめられるやう、おすゝめしたことがあったが、さういふ本はまた藻風さんのいろいろの片鱗を全貌的に見る心地がして、鳥だけの本といふより、どうもかうある方が、如何にも藻風さんらしくも思へるのである。「文は人なり」といふ、あの高山樗牛の名調子とは別に、この言葉なりに藻風さんの文集は著者のその人とぴったりするやうに思ふ。（同書 p.126）

悟堂は「鳥だけの本と言ふより、どうもかうある方が、如何にも藻風さんらしくも思へるのである」と記しているが、悟堂の感じている通り、藻風のエッセイの大きな特色と魅力は実は鳥に限らず、草木虫魚の自然を語ってもそれが単なる個々の対象物の記述に留まることなく、往々にして英文学を始めとする文学作品に出て来る当該対象の自然に関連のある箇所が自家薬籠中のものとして実に適切に引用され、比較して論じられていることである。単なる生物觀察エッセイ、飼育報告であるなら日本の他の多くの生物学者・自然愛好者の文章と大して変わりがないであろうが、藻風の場合は同じ生物觀察エッセイでも英文学等の作品に現れている当該生物描写箇所が実に自然に連想されてその情景が紹介されていて、それが藻風の文章に大きな潤いと効果を齎している。この特色が藻風の文章を容易に他人の追隨を許さぬ魅力あるものになっているのである。従って、

悟堂も感じたように藻風の人となりを一面的に味わうには『鶴鶴』の如く藻風の文学方面の随筆などと一緒に読んだ方が自然文学愛好者としての藻風の一面がより解り、望ましいと言えるであろう。

\* \* \*

藻風は大正時代から W. H. Hudson や Richard Jefferies の著作に親しんでいた。例えば Hudson の *Far Away and Long Ago* を読んでいてパンパスの鳥カランチョ (Carancho) の記述があると、傍らに 1920 年にデント社から刊行されたハドソンの著書 *Birds of La Plata* (2 巻本) を置き、その挿絵と解説文を参照しながら読み、また、ハドソンの無名時代の初期の著作 *A Crystal Age* (『水晶時代』) も疾うに読み終えている程の本格的な打ち込み様であった (『英語研究』W. H. ハドソン特集号大正 15 年 2 月発行)。

昭和 8 年 11 月以降藻風は悟堂との交流が親密となる中で、悟堂に英文学に於ける自然エッセイ関係の著作、即ち、W. H. Hudson の *The Naturalist in La Plata*, *Far Away and Long Ago*, Gilbert White の *The Natural History of Selborne*, Richard Jefferies の著作、さらには H. J. Massingham の本などを紹介して読むことを勧め、これらの英書を貸したり、贈呈したりした (上記 *Birds of La Plata* も悟堂へ進呈している)。悟堂はマシingham の著書の一節を翻訳し、藻風に見てもらって後に『野鳥』(第一巻第六号)に掲載したりしている。

### 『野鳥』に掲載された鳥を中心とした海外の自然文学関係の翻訳

創刊から昭和 13~15 年頃迄の『野鳥』には英仏を中心とした海外の鳥関係の自然文学のわが国への紹介から見て貴重な文献となっているものが含まれている。『野鳥』に掲載された鳥を中心とした海外の自然文学関係の翻訳 (本邦初訳となるものも多い)、紹介、考証、小論 (エッセイ) を一瞥すると、英文学・英国自然文学関係翻訳・紹介では、リチャード・ジェフリーズ (Richard Jefferies 1848-1887)、W. H. ハドソン (W. H. Hudson 1841-1922)、グレイ子爵 (Viscount Grey (Edward Grey): 1862-1933)、M. J. マシingham (M. J. Massingham : 1888-1952)、E. D. カミング (Edward Dirom Cuming : 1862-1941)、ボスワース・スミス (Reginald Bosworth Smith : 1839-1908)、ジョージ・メレディス (George Meredith : 1828-1909) : 石川欣一「Love in the Valley に出て来る鳥」、中里富次郎「春の鳥」(蘇・仏・希の古謡や英文人の作品から春の鳥を歌った詩歌を論じたエッセイ)、八代田貫一郎「王立キウ・ガーデンに居た頃」(八代田がロンドン郊外のキュー・ガーデンで働いていた頃の園内に巣くっていた各種の小鳥類との交流の思い出を記した文) があり、米文学・米国自然文学関係翻訳・紹介ではヘンリー・ソロー (Henry David Thoreau : 1817-1862)、J. J. オージュボン (John James Audubon :

1785-1851) があり、佛文学・佛自然文学関係翻訳・紹介ではジャック・ドゥラマン (Jacques Delamain, 1874-1953)、アンドレ・チューリエ (André Theuriet : 1833-1907) があり、さらに比較論考、考証として秋元蘆風「外國民謡に歌はれた鳥」、馬場孤蝶「外國文學に現われた鳥と昔の東京の鳥」がある。

『野鳥』に載せた藻風自身による海外の自然文学の翻訳は W. H. Hudson の『ハンプシャ時代』(*Hampshire Days*) の第一章のみの抄訳であるが、一方で、津田英学塾での教え子を励まして J. J. Audubon の伝記の抄訳や Richard Jefferies の著書からの抄訳を『野鳥』に掲載させている陰の助力も見逃せない。

\* \* \*

### W. H. ハドソン

日本に於ける W. H. Hudson の紹介・評論及びその著作の翻訳は柳田 泉が丸善(株)から発行されていた雑誌

『學鏡』の大正 10 年(1921)12 月～大正 11 年(1922)1 月号に二回に亘って寄せた「ウィリアム・ヘンリー・ハドソンのこと」と題する一文を皮切りとして今日に至るまでその数量は Richard Jefferies を上廻っており、従ってより広く読まれている。柳田の当該文は Edward Thomas の著書 *A Literary Pilgrim in England* (1917) の一章“William Henry Hudson”に基づいてハドソンを紹介したものである。長くなるのでハドソンの日本への受容の歴史をここで述べるのは差し控えるが、日本に於けるハドソン文献に就いては柏倉俊三教授による訳書『老木哀話・エル:オンブ、』か『パープル・ランド』(いずれも英宝社英米名作ライブラリー)の巻末に参考文献リストが載っている所以他们を参照されたい。(同文献リストにも増補すべき資料が幾つかあるが、紙幅の関係もあり此处では一切省く。)ここで、藻風による W. H. ハドソンの翻訳・評論・論考を一瞥しておこう。

- ・「死者の土地」竹友藻風訳：Hudson の短篇小説 *Dead Man's Plack* の翻訳(『明星』(第二次)第七卷第二号及び第三号(大正 14 年 8 月、9 月)に二回に分けて掲載。第二回連載分の最後に(つづく)と記されているが、中断した形で終わっている。これは同作品の我が国で初の訳出として先鞭を付けたものであったが、未完に終わったのは惜しまれる。
- ・「キリヤム・ヘンリ・ハドソン」(評論)『英語研究(ハドソン号)』第十八卷第十号大正 15 年 2 月、研究社発行。のち、藻風の著書『書物と人』(昭和 2 年 3 月、斯文書院刊)に「ハドソンの自叙伝」と改題して収められた。
- ・「ハンプシャ時代」竹友藻風訳：『野鳥』第一卷第二号(昭和 9 年 6 月)に掲載(pp.65-68)。これは Hudson の著書 *Hampshire Days* (初版 1903, Longman, Green, and Co.刊)第一章の翻訳である。この作品の翻訳としては全 14 章の内の第 1 章分のみ訳ではあるが、ある程度まとまった長さの翻訳としては本邦初訳であろう。上記の『英語研究(ハドソン号)』には壽岳文章も「ハドソン三篇」と題して訳註を載せている。この「三篇」とは *The Peach Orchard*「桃の園」、*Insect on Ivy Blossoms*「常春藤の花にまつはる昆虫」、*An Orphaned Blackbird*「親なき鶉」で、出典は示されていないが、最初的一篇が *Far Away and Long Ago* の第四章 *The Plantation* の一節から、第二篇と第三篇は *Hampshire Days* の第 6 章と第 13 章の passage から採られたものである。尚、*Far Away and Long Ago* の全訳は『はるかな国 とほい昔』の訳名で昭和 12 年 1 月に壽岳しづ訳で岩波文庫の一冊として刊行された。因みに 1918 年に出版された W. H. Hudson の *Far Away and Long Ago* の原書初版は挿絵の無い本であった。最初の挿絵入り版は 1931 年になって刊行され、Eric Fitch Dalglish の素晴らしい wood engraving による一頁大の挿絵 12 葉が挿入されていた。岩波文庫版の「はるかな国 とほい昔」の挿画はこの edition から採られている。戦後になって壽岳しづは『ラ・プラタの博物学者』からの抄訳\* (世界教養全集第 34 巻、昭和 37 年 平凡社刊)、及び『博物学者の本』からの抄訳\*\* (講談社版世界の名作図書館第 47 巻、昭和 41 年刊)を出し、壽岳文章は『自然・文学・人間—W. H. Hudson の出発』(昭和 48 年 新日本出版社刊)と題した著書を出している。



\* *The Naturalist in La Plata* 所収全 24 篇の内 12 篇を訳出。尚、*The Naturalist in La Plata* は戦前に岩波文庫から岩田良吉譯『ラ・プラタの博物学者』が出ている(初版昭和 9 年 2 月刊、この時は原書の数章が割愛されたが、昭和 50 年 8 月に改訳された際全 24 章を含む完訳となった。) \*\**The Book of a Naturalist* から *The Discontented Squirrel*, *Mary's Little Lamb*, *The Strenuous Mole*, *The Little Red Dog* の四篇を訳出。尚、*The Book of a Naturalist* については戦前に訳書が出ている(『博物学者の手記』伊集院 哲譯、昭和 16 年 2 月 東洋書館)

昭和 47 年 8 月 17 日、東京有楽町の朝日講堂に於て元アルゼンチン大使(赴任期間：昭和 33 年～38 年)の津田正夫氏が帰国後日本で同好者とともに立ち上げて主宰した「ハドソン友の会」主催で「ハドソン五十年忌記念講演会」が開催されたが、壽岳文章・しづ夫妻も招待されて出席し、文章が「野の博物学者 ハドソンの遺

産」と題して講演しており、当該講演内容は「ハドソン友の会パンフレット」第二集（1972年8月17日発行）に収められている（後、壽岳文章『わが日わが歩み』（昭和52年7月荒竹出版刊）所収）。

\* \* \*

### 《自然文学の定義》

藻風は『英語青年』（第49巻第1号～同第3号（大正12年4月1日、同15日、5月1日発行））に載せた「自然文学」と題する論考（後、自著『英文學論攷』に収録）において「自然文学」に就いて次のように見解を述べている。藻風は先ず自然文学の捉え方として「英文學に現はれた自然を對象とする詩や散文」と言っても「自然文學の重大な點は文學にあるのであって、自然はその文學を生み出す内容の對象であるに過ぎないといふことである。自然のことを歌ったからと言って秀れた自然文學になるわけのものではない。尤も、自然より離れてしまっても自然文學ではなからうが、然し、何より大切なことは詩人なり、散文家なりが自然より受けた印象である」と言い、「多くの文學は個人性の發露を表現の上の眼目とするのであるが、自然文學は對象そのものの説明（註：Matthew Arnoldの言うところの“interpretation”）に傾く。然しながら、その説明は外界にある自然の説明ではなくして、文學の内容、即ち詩人の受けた印象の中にある自然の説明である」と述べ、英文学の歴史の流れの中で、詩と散文それぞれの領域に於ける自然文学を論じている。

上記 Izaak Walton、Gilbert White、Richard Jefferies、W. H. Hudson の外に藻風による英文学に於ける自然エッセイの訳註、紹介には以下がある。

#### エドワード・トマス (Edward Thomas : 1878-1917)

- ・「エドワード・トマス」『詩と音楽』第1巻第1号（大正11年9月）と同第4号（大正11年12月）の二回に分けて掲載。後、藻風の著書『書物と人』（昭和2年）に収められた。
- ・『英語青年』第60巻第5号から同巻第12号にかけて7回に亙り以下の Edward Thomas の小品三篇を訳註。
- ・「人柱」(Caryatids) 第60巻第5号（昭和3年12月1日発行）

Caryatids は Edward Thomas の小品（エッセイ）集 *Rose Acre Papers* に収められている一篇。カリアティッドはギリシャ建築の女人像柱である。訳註では「人柱」と題されているが、日本で言うところの「人柱」の意味ではないと藻風も断っている。

- ・「雪と砂」(Snow and Sand) 第60巻第7号から同巻第10号（昭和4年1月1日～2月15日発行）にかけて四回連載。Snow and Sand は Thomas の小品集 *Rest and Unrest* に収められている一篇である。
- ・「踏段」(The Stile) 第60巻第11号、第12号（昭和4年3月1日、同3月15日発行）に連載。The Stile は Edward Thomas の小品集 *Light and Twilight* に入っている一篇である。

#### ヘンリー・ウィリアムソン (Henry Williamson:1895-1977)

「非情の命」（昭和13年5月執筆）藻風の随筆集『鶴鶴』（昭和17年）に収められている。ウィリアムソンの代表作 *Tarka the Otter*『かわうそタルカ』（1927）の梗概をとところどころ 原文とその訳文を示して述べたものであるが、単に本作品の梗概に終始することなく藻風の感想とこれまでの読書経験から得た比較考察的所見も織り込まれた評論となっている。

#### 『動物文學』の創刊

『野鳥』の創刊と同年の昭和9年6月に平岩米吉によって月刊誌『動物文學』が創刊されたことも同じ自然・博物愛好・動物愛好の気運の高まりを反映するものとして注目される。こちらも、鳥を含む動物関係の記事を載せたりしており、W. H. Hudson の著書からの passage の抄訳（岩田良吉「蛇の舌」、秦 一郎「逃避する犬」）や H. W. Bates の『アマゾンの博物學者』



(大島 侃(かん)訳)、Thomas Belt の『ニカラグアの博物学者』の特集記事や、壽岳文章による Gilbert White の『セルボーンの博物誌』の紹介・部分訳などが掲載された。『野鳥』第2巻第7号(昭和10年7月)以降『野鳥』の巻末広告欄に毎月の『動物文学』の内容が広告されている。第2巻第7号に載った『動物文学』の紹介文によれば「動物を主題とせる唯一の文学雑誌」で、「動物に関する研究・観察・記録・実話・感想・随筆・翻譯・創作・詩歌等凡そ動物を対象とする人間の精神的活動のすべては本誌に網羅されてあります」とある。『野鳥』は鳥が主力の月刊誌とすれば、本誌(『動物文学』)はどちらかと云えば鳥以外の動物に主力を置いた月刊誌であった。中西悟堂も『動物文学』の賛助員に一応名を連ねていたが、もちろん主力傾注は自身の主宰する『野鳥』であった。中には両誌で活躍した寄稿者もいた。例えば堀口守で、『野鳥』誌上で Bosworth Smith の著書 *Bird Life and Bird Lore* から「梟」を第2巻第2号～第5号(昭和10年2月～5月)、及び第9号(昭和10年9月)に五回に分けて連載しているが、堀口は昭和9年12月(第1巻第8号)以降中西悟堂の右腕となって『野鳥』の編集を助けた人であった。一方で堀口は平岩米吉が主宰した『動物文学』の評議員も務め、同誌第66輯(昭和15年6月)に「ジェフリーズとハドスン」と題する一篇(談話会講演記録)が掲載されている。堀口守に就いて内田清之助博士は『野鳥』編集の陰の功労者としてその功績を忘れてはならないと記している。壽岳文章は『動物文学』誌上で G. ホワイトの『セルボーンの博物誌』の抄訳を載せているが、『野鳥』への寄稿はない。一方、藻風も『野鳥』への寄稿はあるが、『動物文学』とは無縁である。

\* \* \*

#### E. ブランデンと藻風と壽岳文章

藻風が初めてブランデンと会ったのは大正13年(1924)の9月に東北帝大の英文学教師として来日したラルフ・ホヂソン(Ralph Hodgson、1871-1962)を帝国ホテルのプロムナードで市河三喜、土居光知、山宮允と共に迎えた折であった。その時、小さなテーブルを囲んで二言三言、言葉を交わす中に、何処からともなく飄然として来て、にこやかに笑いながら藻風の隣の席へ腰掛けた年の若い英国の紳士があり、それがブランデンであったという。ブランデンはその年(大正13年)の5月14日に既に来日し、同月19日より東京帝大で英文学を教えていたのである。ブランデンの初印象を藻風は『英語研究』ブランデン号(昭和2年6月、研究社発行)の中で「印象と感想」と題して寄稿している。ブランデンは自然詩人を思わせる一面があり、それは詩作の中にも十分に窺うことができる。藻風は「印象と感想」の一文の中でブランデンの詩集 *Shepherd* から幾つか例を挙げて説いている。ブランデンは自然文学を愛好し、書物好きであった藻風とは趣味や傾向が合ったようで、セルボーンの博物学者 Gilbert White に関し両者の間で書簡のやり取りも見えている。また、藻風は英文学作品の古版本趣味に就いてブランデンから感化を受けたと述べている。ブランデンが藻風の詩的才能を高く評価して藻風を褒め上げた小詩を藻風に捧げているのは注目に値する。

#### TORAO TAKETOMO

To him whose own poetic power might yield  
Far finer harvest than my stony field,  
I write this word, and thank him that he cares  
To set my 'Waggoner' where gladly fares  
His 'Scholar Gipsy', and where tristram shines,  
And the sky glitters with poetic signs.

(註)「ジブシー学者」は Matthew Arnold (1822-88) の有名な詩 *The Scholar Gipsy* のこと、「荷車ひき」はブランデンの公刊処女詩集 *The Waggoner* (1920) のことである。

当該詩の創作日時が大正13年12月12日となっているので藻風が同年9月に初めてブランデンと会ってから三ヶ月程度で両者はお互いの才能を認め合う親しい間柄となっていることが窺える。当該詩は齋藤 勇博士が

ブランデンが日本の親しい学者・詩人等の友人や教え子等に与えた未公刊の詩作をそれらの人々の協力を得て蒐め、ブランデンの70歳の誕生日を祝して1967年5月に研究社から限定150部で刊行したブランデンの詩集“*Poems on Japan: hereto uncollected and mostly unprinted*”に収められている(p.2)ものである。藻風とブランデンとの交流は太平洋戦争後も渝ることなく続いた。上記の *Poems on Japan* にはブランデンの詩“Here Bunyan finds a home, a house of learning”が収録されているが、これは戦後ブランデンが再来日した時に仁川の藻風宅を訪問した時に作った詩で、日付は昭和23年5月18日となっている。この詩の題は「ここにバニヤンは自己の家を見つけたり、学問の家」とでもいう意味であろうか。極東の地、日本まで自分の著作が読まれていることを知ったならばバニヤンはきっと驚くであろうという内容の詩である。当時藻風は昭和22年5月31日及び6月1日両日に亘って京都帝大での第十九回日本英文学会大会第一日目に「天路歷程」の文學的價值」と題して講演し、『天路歷程』の翻訳を完了したばかりの時期であった(第一部：昭和22年8月、第二部：昭和23年4月、いずれも京都の西村書店刊行)。藻風の三男藤井治彦は「父の思い出」と題する一文の中で次のように書いている。

年取って出来た末っ子であったせい、父は私をずいぶん、可愛がった。珍しい客が在ると、父は私を応接間に呼んで、しばらく同席させるのがつねであった。たとえば、私は、ブランデン氏がこられた夜のことを鮮かに覚えている。幼い私が父に教えられたとおりに「ハウ・ドウ・ユウ・ドウ」と言うのを聞いて、このイギリスの詩人は、父に向かって「おや、この坊やは英語を話すのかね」と言われた。

(『英語文学世界』第8巻第10号(昭和49年1月発行))

上記の藤井の思い出は昭和23年5月18日のブランデンの藻風宅訪問の時のことかも知れない。藤井治彦は昭和10年生まれであるので、当時13歳くらいであったろうか。

一方、ブランデンと壽岳文章の交流は戦後に始まる。即ち、ブランデンが戦後昭和22年末にイギリス政府の文化使節として再来日した時からである。壽岳は戦後駐日英国大使を務めたジョン・ピルチャー(John Pilcher:1912-1990)とは戦前ピルチャーが大阪の英国総領事館勤務時代から交友があり、そのピルチャーが壽岳に対しブランデンを取り持った結果、両者の交流が始まったのであった(中島俊郎「日本と英国の文化交流」甲南大学紀要文学編 No.171)。両者は直ぐに親密となり、壽岳は当時訳したG.ホワイトの『セルボーン博物誌』を岩波文庫として刊行するに際しブランデンに頼んで序文(1948年5月付)を書いて貰っている。また、壽岳はブランデンに母校関西学院の校歌の作詞を依頼し、同学院の古い同窓である山田耕箏が作曲して昭和24年に新校歌 A Song for Kwansei が出来あがりブランデン本人と在校生に披露された。

## 結語

本稿では主として英文学者、西洋文学研究者としての竹友藻風と壽岳文章の二人の業績と関連活動の一側面、即ち二人に共通していた分野に焦点を当てて回顧してみたものである。勿論このほか 藻風には詩人として、英文学者、英詩文の翻訳者として、ルバイヤットの訳者として、文学論の学者として、英国伝承童謡(マザーグース他)の紹介者・訳者として、それぞれ大きな業績があり、壽岳文章にはブレイク研究者として、書誌学者として、和紙研究者としての大きな業績がある。両学者の全貌を捉えるには総合的に考究する必要があることは論を俟たない。

寿岳文章の本づくりと思索の生成  
——『ブレイクとホイットマン』の製本技法再現の試み

磯部 直希（立命館大学研究員）

はじめに

本論は、昭和6（1931）年1月、当時京都市左京区の南禅寺北門外僊壺庵内に居住していた寿岳文章と、<sup>1</sup>同じく京都市左京区に在住していた柳宗悦<sup>2</sup>によって創刊された月刊誌『ブレイクとホイットマン』について、製本技法の観点から考察を試みるものである。<sup>3</sup>寿岳文章が同誌に採用した製本技法や素材の選択は、寿岳の書物づくりや思索の生成を検討する上で、重要な画期の一つと考えられる。本論は同誌の製本技法を仔細に観察、検討し、特に綴じ方の問題に注目をする。筆者は、実寸同技法の模型本を制作し、製本作業に掛かる作業時間や作業量の概要、技法上の特徴等を調査した。制作を通じて得られた知見を元に、寿岳の思索と手を追体験し、論述を行う。

(1) 『ブレイクとホイットマン』に関する先行研究

① 総論的な言及

『ブレイクとホイットマン』はイギリスの詩人、画家、銅版画家のウィリアム・ブレイクとアメリカの詩人、ウォルト・ホイットマンに関する専門的学術雑誌として昭和6（1931）年1月に寿岳文章と柳宗悦によって創刊された。<sup>4</sup>月一回の発刊で、寿岳を中心に企画、編集、執筆、発刊が担われ、翌昭和7（1932）年12月まで合計24号が刊行された。初年は第一巻第一号から第十二号、次年は第二巻第一号から第十二号までの24号であり、ブレイクとホイットマンに関する「伝記と評論と翻訳と書誌」を軸に、寿岳と柳に加え、多彩な執筆者の

<sup>1</sup> 寿岳文章（1900-1992）。南禅寺北門外僊壺庵は、鹿ヶ谷通に建つ大寂門外の塔頭正徳院に相当。同院は臨済宗南禅寺派管長河野古亮（1863-1935）の隠棲の地として復興新築され、僊壺庵と称した。寿岳一家は同庵に1926（大正15）年7月から1933（昭和8）年6月の向日庵転居まで居住した。

<sup>2</sup> 柳宗悦（1889-1961）。1924（大正13）年4月、柳は関東大震災を契機に東京から京都市左京区吉田下大路町に転居。翌年1月同市左京区吉田神楽岡に転居。さらに1929（昭和4）年からは左京区下鴨膳部町に居住した。吉田下大路町および神楽岡から寿岳宅までは今日の地図で計測して約2km、徒歩20分から30分余であり、柳家と寿岳家の親交が深まった所以の一つである。『ブレイクとホイットマン』刊行の段階では柳家は下鴨膳部町在住であり、僊壺庵からは5kmほど離れ、徒歩圏としてはやや遠い。双方どのようなルートで行き来をしていたのか寿岳の日記などから探りたい所である。

<sup>3</sup> 『ブレイクとホイットマン』の「卍」は昭和6（1931）年からの第一巻十二号分の表紙・扉では「井」で翌昭和7（1932）年から終刊までの第二巻十二号では「卍」である。だが第二巻でも奥付では「井」のまま表記され、また芹沢銈介による布張り箱の背と平の表記では第一巻、第二巻ともに「井」であるため「井」と「卍」の表記上の区別は非常に紛らわしい。本論では昭和7（1932）年1月号に依拠して複製制作を実施したこと、また厳密な使い分けは煩瑣にすぎると判断し、全体を通じて「卍」の表記を使用する。

<sup>4</sup> ウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757-1827）、ウォルト・ホイットマン（Walter Whitman, 1819-1892）。ブレイクとホイットマンは柳と寿岳が青年期、壮年期に研究に取り組んだテーマであり、特にブレイクへの深い関心は両者の出会いのきっかけでもあった。1927（昭和2）年はブレイク没後百年のメモリアルイヤーであり、同年12月10日から16日、柳と寿岳らは恩賜京都博物館（今日の京都国立博物館）において「100年忌紀年ブレイク作品文献展覧会」を開催した。ブレイクに関する全国的な関心の高まりを背景に、この展覧会は大いに注目を集めたものと考えられ、宗教専門紙『中外日報』は同展のニュース及び、柳の講演内容を3回にわたって特集している。同紙は柳の講演からブレイクの核心を「一の宗派に拘束されないで凡ての宗教の宗教そのものたる本質に直接通じてみた」点にあると記している。時代や文明、宗派の制約を超越した普遍的法悦を象徴する存在として、ブレイクへの関心が広く高揚していた時代性を窺わせる。中外日報社編『中外日報』（第8479号）、1927（昭和2）年12月13日、2面、（柳宗悦氏「ブレイクの信仰（上）」）。



寄稿によって構成された。<sup>5</sup>毎号およそ4、5本の論考と図版2枚を本文47頁前後のうちに掲載し、柳の意匠による表紙と扉の頁、寿岳の意匠になる奥付で飾られた。(図1、2) また各号は年間で通しの頁番号が振られ、後に染色家の芹沢銈介<sup>6</sup>による布貼帙・箱と合本が各二巻分制作された。(図3)『ブレイクとホキットマン』は日本におけるブレイクとホキットマンに関する研究史、受容史の点から見た重要性はもとより、柳宗悦と寿岳文章それぞれに対する関心や民藝運動に関連する作品としても、言及、紹介、研究が試みられてきた。<sup>7</sup>企画展等における作品展示、キャプション、図録等での解説も繰り返し行われてきた。1997年に三重県立美術館で開催された「柳宗悦展－「平常」の美・「日常」の神秘」では『ブレイクとホキットマン』刊行の前提として柳のアメリカ滞在が指摘されている。1929(昭和4)年8月から翌年7月に掛けて、柳はハーヴァード大学での講義のため渡米し、この機会にホキットマンに関する文献を集中的に集めた。『ブレイクとホキットマン』において、寿岳はブレイクを、柳はホキットマンを担当し、『ブレイクとホキットマン』は柳によるホキットマン文献の紹介と解説の媒体でもあったことが示された。<sup>8</sup>また、2021年1月から3月の向日市文化資料館における「寿岳文章 人と仕事展」においても『ブレイクとホキットマン』の2年分24冊のうち、布貼帙・箱入り二巻、合本の二巻に加え、柳宗悦の意匠、黒田辰秋<sup>9</sup>の木彫になる表紙と題扉の板木が揃って展覧されたことは記憶に新しい。<sup>10</sup>

## ② 活字と意匠に関する注目

東京国立近代美術館において2021年10月から2022年2月に掛けて開催された「民藝の100年」展においても「出版とネットワーク」の観点から、民藝運動の出版活動に注目が向けられた。『ブレイクとホキットマン』は「民藝フォント」の成立に関連する資料として展覧され、新たな関心の対象となった。<sup>11</sup>この視点は、扉野良人による「妙好としての書体 柳宗悦と真宗仮名」の論考に依拠している。<sup>12</sup>柳は敗戦後、晩年のテーマとして法然・親鸞・一遍らの浄土思想を工藝と美の問題に結びつけて思索を展開し、「美の法門」に代表される著述を遺した。真宗の「和讃」に魅了され、その字体を柳自筆の「心偈」に取り入れて多くの書を遺している。また柳が真宗における妙好人の発掘、再評価に取り組んだことも既によく知られてきた事績の一つである。扉野によれば、昭和6(1931)年、柳42歳時の意匠である『ブレイクとホキットマン』の題字は、蓮如の『御文』や版

<sup>5</sup> 柳宗悦／寿岳文章『ブレイクとホキットマン』第一巻第一号、同文館、1931年、p.3。(柳宗悦／寿岳文章「創刊の趣意」)

<sup>6</sup> 芹沢銈介(1895-1984)。静岡市出身の染色家。民藝運動における中心的な作家の一人。『ブレイクとホキットマン』と同時に柳宗悦が創刊した雑誌『工藝』の表紙や帙などによって型絵染の修練を積む。後の『絵本どんきぼうて』(1936年)など書物制作や装丁の仕事によっても寿岳文章と深い関わりを育んだ。1956年「型絵染」により重要無形文化財保持者に指定。

<sup>7</sup> ブレイクとホキットマンの英文学史、美術史的な観点か見た受容論、研究史に関する考察は本論の対象外とするため、掲載された論考の内容自体は本論考察の対象外とする。本論は専ら書物の形態論、技法論的な観点から同誌の性格を考察する。

<sup>8</sup> 三重県立美術館編『柳宗悦展－「平常」の美・「日常」の神秘』展覧会図録1997年、p.32。

<sup>9</sup> 黒田辰秋(1904-1982)。京都市生まれの漆芸家、木工家。20歳で民藝運動に参加し、木地制作から加飾、仕上げまでの過程を一貫制作する作風を確立。民藝から学んだ李朝家具の影響を受けた家具作品や大胆な螺鈿の器、拭漆の作品などで知られる。1970年「木工芸」で重要無形文化財保持者に指定。

<sup>10</sup> 寿岳文章 人と仕事展 実行委員会編『寿岳文章 人と仕事展』展覧会図録、2021年、p.13、p.52などに図版と解説、言及。寿岳文章が所蔵していた『ブレイクとホキットマン』のうち、布貼帙・箱入りの第一巻と合本の二巻分は今日、兵庫県多可郡多可町の寿岳文庫に収められており、布貼帙・箱入りの第二巻が向日庵資料として保管されている。筆者は2007年に寿岳文庫蔵の第一巻と合本の資料調査を行い、2021年に向日市文化資料館において第二巻の調査を行った。また筆者個人としても分冊の状態の『ブレイクとホキットマン』の初年分12冊と次年分7冊を手元に収集しており、本論はこれらの実見資料をもとに分析、考察を行った。

<sup>11</sup> 東京国立近代美術館編『柳宗悦没後60年記念展 民藝の100年』展覧会図録、2021年、p.100。

<sup>12</sup> 扉野良人「妙好としての書体 柳宗悦と真宗仮名」(『ユリイカ』令和2年2月号、青土社、2020年) pp.133-140。

本の『三帖和讃』の仮名文字を模したものではないかという。<sup>13</sup>すなわち柳晩年のテーマを予告するかのような意匠の影響が、柳壮年期の作品である『ブレイクとホキットマン』の題字に表れているとの指摘である。

### ③ 『ブレイクとホキットマン』と和紙

寿岳文章の側面から見た場合、『ブレイクとホキットマン』は寿岳と和紙の最初の出会いを作ったことで特筆される。寿岳自身が、その思い出を次のように書き残している。<sup>14</sup>

「もともと私は、西洋の書誌学という学問に興味を持つようになり（中略）西洋の手漉紙の実物を集め始めた。（中略）柳宗悦と、月刊誌『ブレイクとホキットマン』を出すことになり、執筆・編集のほかにも、用紙の選定や印刷にかかわる諸事万端は私がひきうけた。そうと決まれば、本文に欧文が多くまじる横組だから、欧米の高級な学芸雑誌が使っている漉標入りの別漉印刷紙を使いたい。柳も大賛成で、漉標のために「真理の扉をひらく」鍵のデザインを作成した。そんな紙を漉いてくれるのは越前の五箇以外にあるまいと聞いているので、私は見本としてオランダの有名な手漉紙ファン・ゲルダーの一枚をたずさえて、京都三条東洞院の紙問屋中井商店へ出向いて相談したら、できるという。そこで前年の某日、中井の一番頭の案内で、私は五箇へ旅立った。中井がつれて行ったのは、不老の杉原商店で、（中略）翌日私は、同店関係の手漉工場へ案内され、生まれて初めて、抄紙工程のすべてを仔細に見学した。紙、とりわけ和紙に対する私の眼は、文字通り初めて開いた。」<sup>15</sup> 上記は後年の回想であるが、『ブレイクとホキットマン』第二巻第二号の「雑記」には、寿岳によるリアルタイムの記録が残されている。当該「雑記」によれば、寿岳の越前行は昭和6（1931）年12月14日、15日であり、中井商店の「濱阪君」に「引っ張られて」、腸チフスから退院四日目の病み上がりの身体で出発したという。<sup>16</sup> 寿岳はこの旅で、パルプやマニラ麻を使用した機械漉きの抄紙工程と手漉き紙の工程の双方を実見し、「手で作るものがなぜ美しいかと云ふ工藝上の問題は、漉く時から乾燥まで殆ど全部人の手にのみ委ねられる手漉紙の工程によつて、無言なしかし力強い實證を示されてある。」<sup>17</sup>と述べ「和紙」の世界に開眼する契機になったことを書き記している。またこの「雑記」により、『ブレイクとホキットマン』の用紙に関して、寿岳は初年度の12号分については、京都から発注を掛けて紙だけを受け取っていたことになり、後年の回想とはやや異なった時系列が見えてくる。またこの旅の成果として、昭和7（1932）年1月の第二巻第一号から表紙の紙質が鳥の子色の腰の強い厚手の紙に変わる。昭和6（1931）年12月の第一巻第十二号から昭和7（1932）年1月の第二巻第一号発刊までの間に、寿岳の越前行と和紙への開眼があったことになる。すなわち、同誌の表紙用紙変更は、寿岳の越前和紙産地調査の影響を具体的に示す出来事であったと言えるのではないだろうか。このように、『ブレイクとホキットマン』の刊行事業は、柳と寿岳の双方において後年の仕事を予告する事業として、再評価や注目が集まりつつある。

### ④ 寿岳・柳両家による手づくりの製本作業

本論で筆者は『ブレイクとホキットマン』の製本技法に注目をして考察を試みる。寿岳は同誌の出版に際して用紙の選択や編集だけではなく、製本作業自体を寿岳本人と妻静子、柳宗悦と妻兼子の4人の協働作業で行っていたという。寿岳は後年その思い出を次のように記している。

「製本からなにか全部手作りなんです。これは私の主張もあって、簡単な、真ん中を三ところ絹糸で綴じるといふのではありますけれど、五百部を全部手製本するというのは大変なことで、初めのうちは柳夫婦が

<sup>13</sup> 扉野良人、同論、p.130.

<sup>14</sup> 寿岳文章 人と仕事展 実行委員会編『寿岳文章 人と仕事展』展覧会図録、前掲書、p.52。「和紙への開眼」参照。

<sup>15</sup> 寿岳文章「私の和紙開眼と越前五箇」（前川新一他編『福井県和紙工業協同組合五十年史』、福井県和紙工業協同組合、1982年）pp.476-477.

<sup>16</sup> 柳宗悦／寿岳文章『ブレイクとホキットマン』第二巻第二号、同文館、1932年、pp.93-95.

<sup>17</sup> 同書、p.94.

南禅寺の北門にあった私の住居へやってきて、そして四人が、ぶすぶすぶすぶすと針で穴をあけては絹糸で綴じかがるという仕事をしてもらったんですね。ところが、これは大変だといちばん最初に音をあげたのは柳さんで、兼子夫人は、私は器用で針仕事もうまいもんだから、と言って頑強にやり通したのには感心しました。」<sup>18</sup> 用紙の選定や編集作業、表紙のデザインなどに留まらず、折丁を綴じて冊子を作る工程を寿岳と柳の両家で協働して行なった点が『ブレイクとホキットマン』の大きな特徴である。だが、この部分に関して先行研究での注目は薄いように思われる。寿岳らの行った製本技法や作業量の実態は、未解明の問題と言えよう。そこで筆者は『ブレイクとホキットマン』の製本模型を制作し、一工程ごとに考察を加え、同誌出版事業の知られざる一側面に迫ってみようと考えた。この際、寿岳と和紙の世界とが深く結ばれる契機となった昭和7(1932)年1月の第二巻第一号を模型制作の見本として作業を行った。

## (2) 『ブレイクとホキットマン』の実寸製本模型

### ① 判型と用紙について

『ブレイクとホキットマン』の判型と用紙について最初に確認しておく必要がある。本文の用紙サイズは、1頁あたり縦が約7寸5分、横が4寸5分である。また折丁1台は3回折って8葉16頁で構成されており、元一枚の紙に展開して寸法を求めると、縦がおよそ1尺5寸、横がおよそ1尺8寸の計算になる。用紙は「越前産別漉艶無シ鳥ノ子紙」と奥付に記載があり、和紙の寸法で抄造されたことが想定されるため尺寸で寸法を取ってみた。また、紙の耳は四方全てで切られた跡がなく、四箇所の透かしの位置から考えても、およそ1尺8寸×1尺5寸で全紙1枚として抄造された紙かと考えられる。全紙1枚両面に8頁ずつ16頁を面付けし、3回折って8葉16頁の八つ折り版というのが、『ブレイクとホキットマン』の基本的判型である。また袋は天小口側にあり天袋、横組み左開きである。折丁3台を中に挟み込むようにして丁合いを取り、中綴じの形式で綴じる。頁番号はこの形式に合わせて面付けされている。

本文用紙の簀の目は1寸あたりおよそ15本で、荒い目の簀の目が特徴的である。厚口で腰の強い硬い風合いの紙であり、寿岳の記している通り、オランダのファン・ゲルダー製の古風な洋紙などを参考に、越前和紙の技術で特別に抄造された鳥の子紙と考えると良いと思う。<sup>19</sup> またこの紙には柳宗悦がデザインした鍵とBWの透かしが入っており、第一巻分の表紙に印刷された鍵の意匠と通底するものである。BWのアルファベットはローマン体の大文字、白抜きで表されBlakeとWhitmanの頭文字を合わせた意匠である。これらの透かしは全紙1枚に対して2つずつ、紙の中心に四方から対角になるように配され、折丁になった場合には、後半4葉のやや上より中央に位置するよう配されている。また、図版の用紙は本文用紙同様の簀の目、紙質、色味の紙が使用されているが、やや薄手であり、用途に応じて微妙に異なった紙が漉かれたものと推定される。

表紙の紙は縦8寸、横1尺の紙を耳付きのまま縦に二つ折りにしたもので、第一巻の紙はやや青みがかった色味で、本文用紙と同じ程度の厚さ、第二巻では寸法は同様に、色味厚みが大きく異なるものを使用している。第二巻の表紙では、色味は本文用紙と同じ鳥の子色だが、厚みは本文用紙よりもかなり厚口でより腰が強く、欧州の溜め漉きによる古典的な手漉き紙と越前和紙の間を取ったような紙である。

今回の模型制作に際して、越前和紙の中でできるだけ厚み、色味、風合いの似た紙を探索したが、差当って妥当なものが入手できず、今回は本文用紙、表紙それぞれ厚みだけを基準に機械漉きの和紙を使用した。表紙の紙は張子用の和紙を使用して見たが張りや腰が乏しく、原本の風合いには程遠い。また本来は耳付きの紙にすべきところ寸法の点でも異なる紙であったため、見た目上の配慮から『ブレイクとホキットマン』の用紙サ

<sup>18</sup> 寿岳文章「柳宗悦を語る」(寿岳文章『柳宗悦とともに』集英社、1980年) p.224.

<sup>19</sup> ファン・ゲルダー (Van Gelder) は、17世紀後半の創業まで遡るオランダを代表する製紙メーカー。1981年に倒産、1983年以降 Crown Van Gelder 社が製紙事業を継続。

イズに合わせて水切りし、毛羽を乾かして耳に見立てた。寿岳が取引をしていた中井商店は今日の日本紙パルプ商事株式会社であり、京都営業部は今日も三条通東洞院に所在している。<sup>20</sup>また越前不老の杉原商店も営業を継続しているため、何らかの関係資料が遺っていないか、両社に問い合わせを行ったが、日本紙パルプ商事株式会社京都営業部からは、めぼしい資料が見当たらない旨の連絡を受けた。寿岳が発注した紙の詳細について、継続して調査を行いたい。<sup>21</sup>用紙の必要量を勘案すると、『ブレイクとホキットマン』一冊あたりに用いる紙は、本文用紙3枚、図版用紙1枚、表紙1枚の合計5枚である。(図版4)月500冊の発刊のためには1月あたり本文用紙1,500枚、図版用紙、表紙は各500枚の計1,000枚、本文用紙と併せて毎月2,500枚の紙を要した計算になる。これを年間12回発刊すれば『ブレイクとホキットマン』のために年間30,000枚の紙が発注されていたことになる。

## ② 綴じ糸について

『ブレイクとホキットマン』の綴じ糸は目視で観察した限りでも、寿岳が述べているように絹糸と思われる。色味は麦藁色が近い。現在一般的な16号の絹の穴糸と比較してみると『ブレイクとホキットマン』の綴じ糸はやや太めでS撚り(右撚り)の糸であることが判明する。一般に絹の穴糸はZ撚り(左撚り)、手縫い糸はS撚り(右撚り)であることから、市販の絹の手縫い糸を綴じ糸に転用したようにも推測できるが、この糸がどのような種類、目的の製品だったかは今のところ不明である。今回は多少細かい目だが、16号の絹の穴糸で代用した。色は図版上わかりやすくするために赤を用いた。糸の長さは一冊あたり50cmほどで十分に足りる。また欧州の製本で使用される綴じ糸は麻糸が多く、蠟を塗って糸をしごき毛羽を押さえて張りを保たせる作業を行うが、『ブレイクとホキットマン』の場合には絹糸が用いられ、蠟を塗った痕跡は見当たらない。和綴本や中国の線装本では絹糸を用いる製本が多く、その応用として『ブレイクとホキットマン』にも絹糸を用いた綴じが考えられたのではないだろうか。<sup>22</sup>

## ③ 折丁の作成

『ブレイクとホキットマン』の印刷は、京都、柳馬場三条南入るに所在していた当時の京都を代表する印刷会社、株式会社似玉堂において行われた。<sup>23</sup>寿岳らが取り組んだ製本作業は、紙を折って折丁を制作する段階からであったと推測する。同社で刷り上がった紙が折らないまま届けられ、折丁を作成し、丁合を取って中綴じ

---

<sup>20</sup> 中井商店は前身が和紙商、越三商店、1845(弘化2)年、京都において創業。1876(明治9)年には京都府御用掛として梅津パピール・ファブリックの製品を扱う。日本最初の洋紙販売に取り組んだ。1902(明治35)年、合名会社中井商店となり本店を東京に移していた。杉原商店は1871(明治4)年、杉原半四郎が現在地に和紙問屋を構え、1928(昭和3)年合名会社杉原商店となり、大正天皇、昭和天皇の即位礼に際して御用紙を出荷するなど和紙問屋の老舗、名店として著名である。

<sup>21</sup> 奥付には「越前産別澁艶無シ鳥ノ子紙」とあるが、この紙の紙料については継続調査課題である。現在の越前和紙では雁皮のみを特号、雁皮と三椏の混合を一号、純三椏を二号などと区分している。同誌に使用された「別澁艶無シ鳥ノ子紙」の詳細については追って資料を探索、発掘したい。

<sup>22</sup> 仕上がりの美観や扱い易さ、廉価に入手できる糸であったなどさまざまな理由が考えられる。筆者は、硬く強すぎる糸では、鳥の子紙を裂いてしまう恐れがあるため、和紙と相性の良い絹糸が選択されたのではないかと推測する。

<sup>23</sup> 株式会社似玉堂は、1886(明治19)年三上庄治郎によって創業。大正時代には凸版、凹版、平版を網羅する総合印刷会社に発展し、1932(昭和7)年段階で従業員200名以上、年間印刷数約47,450連、引受定期行物35種類、製本数年間約50万冊と、京都を代表する印刷会社であった。1946年日本写真印刷有限会社に吸収合併され、日本写真印刷株式会社(現在のNISSA株式会社)となった。『印刷と似玉堂』(似玉堂、1932年)、同社の規模、設備から見て、印刷、製本の全工程を委託することも可能であったと思われるが、恐らく同社には印刷のみを依頼し、折丁の作成と綴じの作業を自ら行ったのであろう。寿岳夫妻の製本風景を映した写真でも、文章が紙を裁ち、静子夫人がへらで紙を折っている姿が捉えられており、『ブレイクとホキットマン』についても紙を折って折丁を作成し、綴じる作業が行われていたと考えられる。

の形にし、針穴を開け、糸でかかる作業を皆で行われたのだろう。ここからは筆者による実際の制作作業を辿りながら論を展開する。以下参考として各工程に要した時間を記す。筆者は製本、修復にある程度の経験を有し、今回の模型制作に際し、10 回程度の予行演習を行なって 1 冊を完成させた。寿岳らの作業時間のより正確な推測には、もっと大規模かつ大部数での計測実験が必要であり、以下の作業時間はあくまで参考程度の数値であることを付記しておく。

折丁の作成は、本文用紙 3 枚を 3 回ずつ折って 8 葉 16 頁分を構成する作業である。図版用紙の二つ折りを加え、本文で 9 回の折作業となる。裁縫等で使われるヘラを使用し、折り目を付けたものと思われるが、筆者が観察した限りでは、どの冊子でも折り目が整然として、正確で丁寧に作業されている。また中綴じの形式であるため、折丁 3 台を間違えず重ねる作業も重要である。印刷段階で通しの頁番号が振られているため、間違いは起きにくかったと考えられるが、乱丁を防ぐために一定の注意は必要である。折丁 1 台目の折りには 56 秒、2 台目まで 1 分 51 秒、3 台目まで折るのに 2 分 57 秒を要した。これに図版 1 枚の紙を折るのに 10 秒、表紙の折りに 15 秒を要し、これらの数値を足すと折丁作成には 3 分 22 秒が必要であった。この数値を a とする。折丁の丁合いを取り、中綴じの形になるよう組み合わせ、表紙も合わせて、乱丁がないか確かめるのにさらに 3 分 20 秒を要した。これを b とする。(図 5、6)

#### ④ 綴じ穴開け作業

この作業を寿岳らが自ら行っていたことは、本人の回想から確かであろう。綴じ穴は全ての折丁と表紙にズレがなく貫通していなければならない。そのため全折丁と表紙を冊子の状態に組んでから行う必要がある。この点からも③と④の工程は、ひと続きの作業として行われていたと推測できる。綴じ穴は天から約 1 寸 7 分 (約 5 cm)、そこから約 2 寸 3 分 (約 7 cm)、さらにそこから同寸の約 2 寸 3 分 (約 7 cm) の位置に三箇所開けられている。穴は多くの冊子で、背の山の中心線に正確に当たっており、表裏の表紙の側に穴位置がずれたり外れたりしたものは相対的に少ないように見受けられる。目打ちや針などで折丁に綴じ穴を開ける作業は、集中力が切れると背の中心から穴の位置が外れたりしやすいものである。穴位置を示すガイドなどを用いて作業したとしても、作業量が多ければ、綴じ穴の位置を正確に開け続ける作業は容易ではない。まして製本経験の乏しい業者であれば、かなり神経を使ったのではないだろうか。筆者の場合はこの工程に 1 冊あたり 1 分 30 秒を要した。この時間を c とする。

#### ⑤ 綴じの作業

ここまでの下準備を経てようやく綴じの作業となる。綴じの工程は、筆者が 10 数回試作して再現を検討したやり方では、

- i. 真ん中の綴じ穴の‘のど’側から針と綴じ糸を通し、背に抜く。
- ii. 針と糸を天側の綴じ穴の、背から‘のど’側に通し、ある程度糸を張っておく。(糸の端にはコマを作っていないため引きすぎると抜けるので注意する。)
- iii. 針と糸を再度真ん中の綴じ穴に刺し、背側に抜く。(i の工程の糸を引っ掛けて縫わないように注意する。)糸を引いてある程度テンションを掛ける。
- iv. 針と糸を地小口側の綴じ穴の背から‘のど’へと通す。ここでも糸を程よく引いてテンションを掛ける。(図 7)
- v. ‘のど’の天側の綴じ糸を下から掬うように針を通す。
- vi. 真ん中の綴じ穴から出ている i 工程の糸端と一度結ぶ。この際綴じ糸が緩まないように全体のテンションを調整し、結び目が綴じ穴中央に当たるよう注意する。(図 8)
- vii. 再度こま結びにして糸端を切り完成。

細かく分割すれば以上の 7 工程を経て綴じ作業は完了する。この綴じ方は再製本されることを念頭に置いた簡易的な綴じ方の一つであるが、いくつか注意深く行うべき点がある。第一には糸のテンションの調整である。

三箇所の綴じ穴を渡る間、糸は自由に動く状態であるため、最後に真ん中の穴で糸止めを行う際、糸全体の張りに注意しておかねばならない。綴じ糸のテンションに少しでも緩みがあると、表紙と折丁の結束は弱くなり、容易にバラバラに解体してしまう。またあまりに強く張りすぎても、冊子全体に過度な負荷がかかり、糸が綴じ穴を破り、紙を裂いてしまうなど、様々な不具合が出る可能性がある。そのため、適切な糸の引き方、力の掛け方でテンションを加えて綴じておかねばならない。各所に所蔵されている『ブレイクとホキットマン』を観察した限り、いずれの冊子でも綴じ糸の緩みはほとんど確認できなかった。経年劣化により、背側の絹糸が朽ちて切れた冊子であっても、‘のど’側に遺る糸は、いずれもピンと張った状態のまま残存しており、冊子の結束を保っている。(図9)

また、‘のど’側の中心の綴じ穴にみられる糸の結び目は、どの冊子でも正確に穴の位置に当たっており、横結びで結ばれ、糸の端も丁寧に切れ、‘のど’に対して平行に、小さなハの字形の末端が作られている。これらの糸の状態は、一冊ごとに注意深く製本作業が行われたことを物語っている。(図10)

筆者は針に糸を通す段階から綴じ上がるまでに、2分58秒を要した。これをdとする。そこで試みに上記a,b,c,dの時間を全て足すと、1冊の制作に要した製本時間の総計は670秒すなわち11分10秒となった。(図11、12、13)

### (3)『ブレイクとホキットマン』の作業量に関する考察

#### ① 所要時間からの推測

上記の数値から考えて、1冊あたりの制作時間を全工程合せて約10分と仮定した場合、月500冊の製本に要する時間は5,000分、83時間20分になる。仮に1人が24時間ずっと作業したとしても、3日間と11時間20分かかる計算である。無論そのような作業は不可能であり、また、柳や寿岳が日々この作業に専従していたとは思えないことから、例えば1人で1日3時間この作業を行なったとしたら、27日あまりを要する。これを4人で分割したとしても、およそ7日は必要な計算になるのである。『ブレイクとホキットマン』の執筆作業そのものに加え、他の執筆者との連絡や提出された原稿の編集、校正、印刷所とのやり取り等々、中身の制作に掛かる時間を考えた場合、製本作業のために割かれる時間は相当な負担であったと見て良いのではないだろうか。無論、製本の回数を重ねるごとに、反復による技法の習熟や作業の分業化など、効率の向上や所要時間の短縮はあったものと想像できる。また實際上、橋詰光春など幾人かの協力者が相当な助力をしていたことも記録されている。<sup>24</sup>しかしながら筆者は、今回の模型制作を通じて「五百部を全部手製本する」というのがいかに「大変なこと」であるか、寿岳の回想に対して実感を強くした。<sup>25</sup>また、寿岳、柳双方が日中は大学等での学務など職責を有し、双方の夫人も育児や家事などで多忙を極めていたことを想像するに、柳宗悦が「これは大変だといちばん最初に音をあげた」のも、もっともであろう。<sup>26</sup>

#### ② 多忙を極める柳と寿岳一家の病気

ここで柳と寿岳の年譜を参照してみると、両者(両家)の多忙ぶりがさらに明瞭になる。柳宗悦は昭和6(1931)年4月、16回目の朝鮮半島訪問に臨み、さらに同月は山陰と九州への民藝調査に赴き、5月、8月にも山陰地

<sup>24</sup> 当時同志社の学生であった橋詰光春は製本作業に深く関与した作業者の一人であった。「同君は驚くべき忍耐力をもって、ほとんど一人で五百冊近い製本をやったこともある」(「思い出す本と人と」『滴る雫』、1940(昭和15)年、p.119.)と寿岳は書いている。また洋画家の堀英一なども協力者として名が記されている。本註及び関連する本文中の記述は本稿提出後に中島俊郎先生からご教示をいただき、その内容を反映させた。橋詰光春の所蔵資料は現在愛知県立大学の橋詰文庫に図書363点が収められているようだが、筆者はまだ未確認のため、今後の調査を進め、また新たな事柄が解明できたら報告したい。同様に堀英一の実態も不明な点が多く、ご存知の方のご教示を乞いたい。

<sup>25</sup> 寿岳文章「柳宗悦を語る」、前掲書、p.224.

<sup>26</sup> 同書、p.224.

方を廻っている。9月に入り東北の旅にも出るなど各地の民藝を探求する日々を過ごしている。昭和7（1932）年4月にも朝鮮半島を訪れ、8月には島根県松江市で著述に専念するなど席の温まる暇がない。<sup>27</sup>またこの間、『ブレイクとホキットマン』と同時に刊行が始まった月刊誌『工藝』の編集、執筆、発刊も行なっている。<sup>28</sup>

一方、寿岳文章も昭和6（1931）年9月、妻静子、息子潤が腸チフスに罹患し京大附属病院へ入院する。10月には看病していた文章本人も感染し12月まで入院を余儀なくされるなど危機的な数ヶ月を過ごしている。<sup>29</sup>また翌年4月には私版本の刊行を開始するなど新たな活動にも取り組み、秋には向日町に土地を取得し向日庵建設の準備を進めている。<sup>30</sup>

両者の年譜は、毎月『ブレイクとホキットマン』を刊行し続けることが、いかに困難な事業であったかを一層明白に物語る。24ヶ月に渡り毎月500冊を手製本で仕上げるためには、家族のみならず、理念や技法に通暁した協力者の存在など、広い範囲での協働が不可欠だったのではないだろうか。寿岳の日記等、同時代資料を詳細に検討すれば、製本作業の実態や推移に関して、解明できる部分も大きいと思われる。今後の課題として挙げておきたい。

### ③ 『ブレイクとホキットマン』手製本の意義と特異性

そもそも、寿岳はなぜ『ブレイクとホキットマン』を手製本で刊行しようと考えたのであろうか。ここまで考察してきたように、同誌刊行のために毎月注がれた労力は、寿岳の強い思い入れを伺わせるに足りるものである。

寿岳は『ブレイクとホキットマン』に先立って、1929（昭和4）年に大著、『井ルヤム・ブレイク書誌』を刊行している。同書は、神戸の出版社「ぐろりあ そさえて」の伊藤長蔵、柳宗悦、ナカバヤシ株式会社の祖である製本師の中林安右衛門ら、西欧の書物における製本の様式や技法、美の問題に通じた関係者の協働によって制作が進められた。<sup>31</sup>並装本はパーチメントの代用皮を探し求めて製本に漕ぎ着け、皮と和紙による四半装丁の表紙を有し、背と平の角四点に同様の皮製のコードを表して折丁と表紙を堅固に連結するなど、西欧中世風のパーチメント装を意識した意匠、素材で製本がなされている。<sup>32</sup>寿岳は同書の刊行を通じて、西欧の書物が有する工芸的な側面に知見を深め、様式や技法に関心を高めていったものと推察される。<sup>33</sup>

『ブレイクとホキットマン』は西欧の書物制作を工芸的な側面からも捉え、追体験しようとする寿岳の思いによって、製本の形式が決定された書物だったと思われる。「西欧の高級な学術雑誌」への単純な憧れや模倣に

<sup>27</sup> 三重県立美術館編『柳宗悦展－「平常」の美・「日常」の神秘』、前掲書、p.206.

<sup>28</sup> 同書、p.206

<sup>29</sup> 寿岳文章 人と仕事展 実行委員会編『寿岳文章 人と仕事展』、前掲書 p.4.

<sup>30</sup> 同書、p.43.

<sup>31</sup> 拙論『『井ルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期』多摩美術大学『多摩美術大学紀要』22、pp.123-133.

<sup>32</sup> 同論、p.125.

<sup>33</sup> 同論、p.126. なお、伊藤長蔵は『井ルヤム・ブレイク書誌』と同年に庄司浅水の著した『書籍装釘の歴史と実際』（ぐろりあそさえて、1929年）を発行している。同書は西欧の皮革製本における「工藝的手工的」方面について詳細な紹介を行ったものである。伊藤長蔵は貿易業の傍ら西欧の古書、私家版印刷に関心を深め、稀覯書の収集と出版事業に取り組む。フランスの愛書家であり、皮革製本にグロリエ式装丁と称される独自の様式を残したジャン・グロリエ（Grolier, Jean, 1495-1565）にちなんだ出版社「ぐろりあ そさえて」を1927年に創業。「ぐろりあ そさえて」は、1884年にアメリカで結成された愛書家団体グロリアクラブなどを意識した名称と思われる。伊藤長蔵の活動は、この当時、財界や知識人の愛書家間で、西欧の古典的な皮革製本に関する興味、関心が存在していたことを伺わせる。寿岳文章の書物に対する理想は、古書や稀覯書への偏愛とは一線を画した処にあったが、伊藤長蔵と中林安右衛門の両名から西欧の古書籍に関して学んだ点の多かったことを述懐している。ナカバヤシ株式会社年史編集委員会編『ナカバヤシ五十年史』、ナカバヤシ株式会社、2001年、pp.6-8.

よって作られたのではなく、近代以前、西欧の書籍が未だ版元製本ではなく、印刷と製本が分離していた時代の書物づくりを、寿岳は自らの手と労働によって経験しようと志したのではないだろうか。書物が量産され、消費される近代的な出版メディアに成る以前、印刷と製本は別々の工房によって行われていた。版元製本は量産化に対応した近代的な製本として考案され、普及した形である。『ブレイクとホキットマン』の綴じの形式は、後に製本工房や製本師、ないし愛書家の好みによって上製本などに再製本されることを前提にした仮綴じの形である。西欧の書物の歴史的展開について、表面上の意匠や形をなぞるだけではなく、自ら製本して思索する意図があったのではないだろうか。寿岳は、書物を単なる情報媒体と考えるのではなく、人と学智を繋ぐ工芸の一領域と捉え、書物の共和国を掲げた。量産と効率化によって耐久性を失った書物とは、近代における学智と技芸の衰退を隠喩する存在であり、手製本への取り組みとは、寿岳らによる密かな抵抗と批判の営みだったのではないだろうか。『ブレイクとホキットマン』は、寿岳の思索とものづくりの方向性を決定づけた制作経験だったと考えられる。

一方で書物の理想に関して、柳宗悦は寿岳と微妙な違いを見せている。柳は雑誌『工藝』において、綴じそのものにほとんど重きを置いていない。同誌は表紙を芹沢銈介ら民藝の同人が担当し、本文用紙に各地の和紙を用い、染織品等の現物を貼り込みにするなど、柳のこだわりを強く反映した装丁や内容が名高く、雑誌そのものが「工藝」的な媒体であった。しかしながら同誌の綴じ素材には工業的かつ近代的な素材であるステープラーが使用され、針金平綴で綴じられている。針金は表紙の下に隠れるように仕立てられているが、劣化と錆の発生によって部分的に紙を汚損するなどの現状が見られ、今後の資料保存と利用の点から問題を生じさせている。<sup>34</sup>

柳宗悦が「これは大変だといちばん最初に音をあげた」という寿岳の証言は示唆に富んでいる。柳は『ブレイクとホキットマン』の経験を通じて、有線綴じによる堅固な手製本を、意図的に忌避するようになった可能性も考えられるのではないか。1933（昭和8）年1月に上梓された『民藝の趣旨』（私版本）の装丁、製本に関して、柳は前年に執筆された原稿に凶入りで詳細な指示を書き残している。<sup>35</sup>特装本30冊には雁皮紙、並製本730冊には楮紙を使用し、折丁の図解脇には矢印で「上切ラズ、横ト下切ル」とあり、『ブレイクとホキットマン』における天袋の折丁と酷似したイメージを持っていたことが伺える。だが同頁左上端には大きく「綴は雁皮紙を使用。糸針金糊等用ひず。」と書き込みがあり、その横には綴じ方を表した表紙の絵と「とち五箇所各一寸五分」の注記が見られる。実際に出来上がった特装本では表紙の平に六箇所のスリットを入れ、带状にした雁皮紙のテープでスリットをかがる独特の形式となっている。並製本では二箇所のスリットに楮紙の帯を刺して止める簡略な形が取られている。<sup>36</sup>手作業で作業量が多く制作に時間がかかる糸綴じと、工業的で量産的な針金平綴の両方を避け、和紙で綴じまで網羅した独自の製本を模索していた柳の思考が考察できるのである。柳がこのような製本様式を考案した背景には『ブレイクとホキットマン』における作業経験が影響を与えているのではないだろうか。

## むすび

本論は『ブレイクとホキットマン』の製本技法に注目し、模型制作を通じて基礎的なデータを収集して、作業量等に推論と考察を加えた。その結果、下記の特徴や疑問点が浮かび上がってきた。

第一には、寿岳と柳双方が同誌の制作経験を通じて和紙の世界に開眼したことが挙げられる。後に寿岳が取り

<sup>34</sup> 『工藝』は1951（昭和26）年の120号まで刊行が続いた。全冊子で針金中綴が適用されたかは調査中だが、筆者の手元にある10号（1931年、昭和6）、90号（1939年、昭和14）、114号（1943年、昭和18）、115号（1946年、昭和21）、116号（1947年、昭和22）を目視観察した限りでは、二箇所、ないし三箇所の針金中綴による製本が確認できた。

<sup>35</sup> 東京国立近代美術館編『柳宗悦没後60年記念展 民藝の100年』、前掲書、p.101.

<sup>36</sup> 同書、p.101.



組む和紙研究の第一歩は『ブレイクとホキットマン』にあった。また柳においても民藝運動と和紙を結び付ける契機は同誌の刊行に前後して存在したのである。『ブレイクとホキットマン』刊行の2年間に、柳宗悦は出雲岩坂の製紙家、安部榮四郎と親交を結んで和紙の世界と民藝運動を連動させていったのである。<sup>37</sup>

第二に、『ブレイクとホキットマン』の綴じに見られる寿岳独自の表現や完成度が注目された。絹糸を用いた綴じ糸や、糸の引き方や結び方などに見られる整然とした処理には、細部をおろそかにしない緻密な作業が伺える。仮綴じの簡略な技法といえども等閑視せず、書物の形を疎かにしない端正な佇まいや、慎ましさが表れているのである。手仕事による書物づくりに真摯な理想をもって向き合った寿岳の思念が、同誌の細部にも深く宿っていると言えよう。『ブレイクとホキットマン』の紙や製本技法を考察していくと、和洋皮膜の間とでも表現したくなる寿岳手製本独自の美意識や存在感が、強く籠っているように感じられた。

第三に、『ブレイクとホキットマン』の製本に要した作業量は、本論での仮の推計でも、多大の時間を要する可能性が指摘できる。實際上、毎月どの程度の人数でどれほどの時間を掛けていたのか、製本と刊行の実態に関して謎が深まったように思う。今後の更なる調査に繋げたい。寿岳は製本作業において、柳宗悦の妻、兼子夫人の尽力を挙げているが、筆者が糸の始末などを観察した印象では、専門の製本職人の作業でないのだとしたら、和裁、洋裁などに通じた女性の手が、綴じ作業の遂行に深く関与しているように思われた。この時代、多くの女性たちは縫い物の手仕事に通じていたと考えられ、兼子夫人や静子夫人の貢献も想像に難くないのである。

最後に、今後の課題として『ブレイクとホキットマン』に付せられた芹沢銈介の箱と合本の問題を挙げておきたい。同誌の刊行が2年で終了する際に、寿岳は芹沢銈介の制作による箱と帙、さらに1年ごとの合本の二つの形式を用意して、希望者に提供した。出雲岩坂の安部榮四郎が抄造した紙と芹沢銈介の染めによる布を用いたこれらの装丁は、寿岳が当初から思い描き、また構想していた形だったのだろうか。『ブレイクとホキットマン』は年間12冊で頁番号が通しになっており、当初から合本化を想定していたように思う。だが、芹沢の箱と帙、さらに合本は、型絵染の意匠や和紙の質感を全面に見せる装丁であり、欧風の印象は薄い。寿岳、柳双方の和紙への関心の高まりや民藝運動の進展が『ブレイクとホキットマン』の箱、合本の意匠、素材、技法に反映されているのではないだろうか。その分析、考察についても調査を継続し改めて論考してみたいと思う。<sup>38</sup>

<sup>37</sup> 安倍榮四郎『紙すき五十年』東峰出版株式会社、1963年。同書p.78.によれば安倍榮四郎が柳と初めて面会したのは1931(昭和6)年、6月23日から3日間松江商工会議所で開かれた「正しい工芸の展観」展であり、松江商工会議所の太田直行の紹介であったという。太田は柳の民藝運動に共鳴し、「工芸診察の旅」と銘打って、柳を島根県下に招いた。また寿岳文章は同書に寄せた序文で「柳さんと私とは、毎日のようによく往き来していたが、ある日、柳さんを訪ねると、私を見るなり、「君、素晴らしい紙が来たよ」と声はずませ顔を輝かせて叫んだ。(中略)柳さんの提唱する民芸の道に、紙すきの実践運動を参加させた最初の人、安倍君であった。」(p.2.)と記している。1931(昭和6)年は、『ブレイクとホキットマン』の刊行と並行して、寿岳、柳、安倍榮四郎が出会い、民藝運動と和紙の世界が連動していく画期となった年であったと言える。

<sup>38</sup> 紙の問題や、製本作業の協働者をめぐる問題など、解明すべき課題が改めて浮上しており、現地調査なども加えた資料の発掘を進めて次の論文に発展させる予定である。中井商店の「濱阪君」なども、寿岳の和紙開眼に相当な力を発揮したようだが、本論調査の段階では、この「濱阪君」がどのような人物だったのか調査が及ばなかった。新型コロナの流行など、時節柄、調査旅行を含む資料収集には制約が多く、隔靴搔痒の感を免れなかった。関係者や資料等の所在について、皆様からのご教示を乞いたい。



図 1 『ブレイクとホキットマン』(向日庵資料)



図 2 『ブレイクとホキットマン』扉頁(向日庵資料)



図 3 布貼帙・箱(第二巻)(向日庵資料)



図 4 『ブレイクとホキットマン』1冊に要する紙の全て(右原本筆写蔵)



図 5 折丁制作過程(右筆者蔵原本)



図 6 折丁三台と表紙、図版用紙を一冊に組んだ状況(右筆者蔵原本)

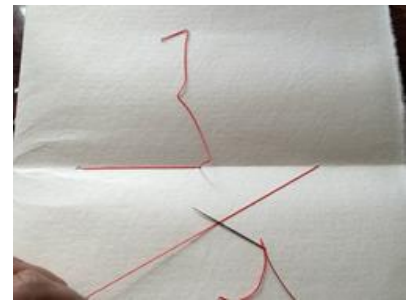


図 7 ivの工程。針と糸を地小口側の綴じ穴の背から‘のど’へと通したところ

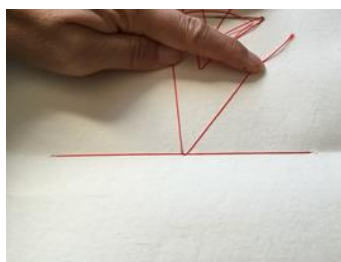


図 8 viの工程。真ん中の綴じ穴から出ている i 工程の糸端と一度結んだところ。



図 9 『ブレイクとホキットマン』背側の綴じ糸現状。状態の良い冊子は背側の糸も緩んでいない。(向日庵資料)

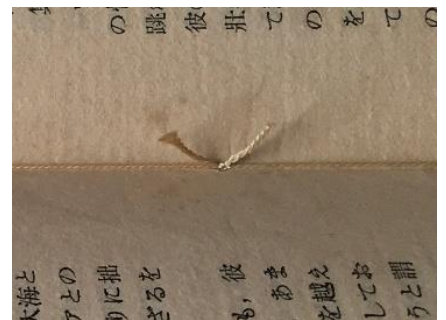


図 10 綴じ糸の結び目。紙の折り方向に対して平行に処理されている。

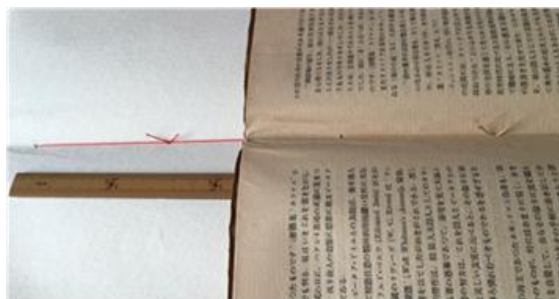


図 11 糸綴じののど側完成状況を原本(筆者蔵)と比較



図 12 同じく原本との比較(背側)



図 13 完成した製本模型を原本(筆者蔵)と比較

寿岳文章の和紙研究には「和紙への敬念と情愛」が濃く働いていると柳宗悦は指摘する。

和紙への敬念と情愛とが背後まで濃く働いていることは、同君の学問を一段と確実なものにしている基礎である。とかくただの考証家に堕した他の学者たちと、はっきりと区別されていい存在である。

（柳「和紙十年」注①）

本稿ではこうした特徴を持つ寿岳の和紙研究の由来について考えてみたい。

## 1 和紙研究以前 一柳宗悦との関係一

和紙研究に本格的に取り組む以前の寿岳にとって、和紙は「書物工芸」の重要な一部門としての用紙の中で、特に出来の良いものというのにすぎなかったようである。『紙漉村旅日記』（明治書房、昭和18年9月刊）の「序文」で、寿岳は「書物工芸の重要な一部門としての紙、特に和紙に、私が興味を持ち始めたのは、もうかれこれ十五六年も昔のことになる」（注②）とあるが、この序文が書かれた昭和18年から15、6年前、昭和2、3年頃には寿岳はブレイク研究に専念していた。寿岳のブレイク研究については、言うまでもなく、柳宗悦との関係が注目されるが（注③）、柳とは「書物工芸」の問題においても寿岳は深い関わりを持ち、さらに寿岳は柳によって和紙の美と徳性ということについても理解するようになったようである。

そこで、以下では寿岳と柳の関係について簡潔に見ておこう。

### 1-1 ブレイク研究

寿岳が柳と初めて会ったのは寿岳がウィリアム・ブレイク研究に関して教えを乞うために東京高樹町の柳宅を訪ねた大正12年2月24日のことである。寿岳23歳、柳34歳の時である。

○あの画期的なブレイク評伝によつて初めて柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や「宗教的奇蹟」によつて愈々深く柳さんにひきつけられてゐた私が、関西学院文学部に在学中、英語科中等教員の試験を受けに上京した折を利用して、青山高樹町のお宅に柳さんを訪ね、ブレイクの版画複製や書物などを見せて貰ったのは、大正十二年二月二十四日（土曜日）の午後であつた。（中略）その日の私の日記には、柳さんを「親しい感じの人」と描き、「宗教の話に時移り、日の暮れかかる頃帰る」とも記してゐる。つとめて平静に書かうとしてこれらの文句のうちに、若い心の感激と喜悦とを今も猶私はありありと追想することができる。

それから今日までの満十四年間、私達の生活に差す柳さんの影は、年と共にその幅をひろげその色を深めて行つた。一切諸法悉く因縁より生ずると仏者は言ふが、柳さんは実にその因縁作りの名人である。いろんな仕事も一緒にやつた。たとひ一緒にやらなかつた仕事にしても、そのどこかに柳さんが座を占めてゐて、かの古い昔の物語に出てくる善霊の役目を果たしてくれたことは甚だ多い。

（「絵本どんきほうて由来」『工芸』76号、昭和12年6月）

○東京赤坂高樹町の自宅を訪ね、初めて私が柳宗悦その人と面語のよろこびを持つのは、一九二三年、私の二十三歳の時であるが、『宗教とその真理』ほか、柳の著書の愛読者となつたのは、まだ十代の、一九一八年前後からだつたので、心の通いは半世紀を超え、死後やがて二十年にもなろうとする今もなお、折にふれ、事に因んで、その言行を思い出さぬ日とてはない。（『柳宗悦と共に』「まえがき」昭和55年集英

社刊)

柳と会う以前に、寿岳は柳の『宗教とその真理』『宗教的奇蹟』『宗教の理解』などを読み、「ぞくぞくするほどの大きな影響を受け」ていたという(寿岳「柳宗悦を語る」)。佐藤光(注④)は「柳が1910年代から1920年代にかけて続々と発表した神秘主義思想を中心とする宗教研究の論文はブレイク研究の延長線上にある」と指摘し、「個性を神聖視する柳の宗教哲学は、柳のブレイク研究に遡る」と言う。15歳の時からブレイクを読んでいたという寿岳も(「ブレイク研究への序説」『ブレイクとホキットマン』第1巻第1号)、「ブレイクの生涯をつらぬく太い一線は、そのたくましい宗教性にある」と言っているが(「ウィリアム・ブレイクの生涯」)、寿岳と柳との交流の基調には常にブレイクの宗教性への共感があるようである。和紙の持つ美と徳性という、やがて柳と寿岳とが共通して抱くようになる和紙に対する思いにも、この宗教性への共感が根底にあるように思われる。

柳が東京から京都へ転居した後に、寿岳と柳との交流は一段と深まる。昭和2年2月には京都博物館で柳と山宮允と共に百年忌記念ブレイク作品文献展を開き(このころ寿岳は南禅寺僊壺庵に住んでおり、徒歩30分ほどの吉田神楽岡町の柳邸に行き来している)、昭和6年1月からは柳と協同で月刊誌『ブレイクとホキットマン』を出すことになる。

### 1-2 「ぐろりあ そさえて」

柳は昭和3年に『工芸の道』を「ぐろりあ そさえて」社から出版した。寿岳もまたその翌年に同社から『キム・ブレイク書誌』を出版している。「ぐろりあ そさえて」は伊藤長蔵によって昭和2年に創業された出版社であった。同社の「営業の趣旨と範囲」と題されたリーフレットには次のように書かれている。

書物は単なる商品ではなく、之を内容より見れば古今学者芸術家の生命であり、之を形より見れば印刷、挿絵、装幀等美術と技術を総合したる工芸であります。之が生産分配に関与して学芸の普及、社会文化の向上、人類の幸福に多少とも貢献し得ることは誠に意義のある事と存じます。弊社は凡そ書物に関する全ての方面には熱心に努力精進して世の需要者の御便益を計ろうと云ふことを以て営業の動機と致します。

工芸としての書物ということを意識した伊藤との出会いは、寿岳に「書物道の一筋に到った因縁の一半」になった。

再び私が装幀の問題を熱心に考へるやうになつたのは、……『ブレイク書誌』の編纂着手した昭和二年からである。その年の春、私は新村出博士の紹介で、始めて伊藤長蔵を識つた(注⑤)。……私が今までに親しく交つてきた出版関係の人達のうち、伊藤氏ほど書物に一途な愛を持ち、その愛を形に現はすために吝みなく財を散じた人を他にしらない。……当時氏は、外遊の旅から帰って、「ぐろりあ そさえて」を創立したばかりで、新興の意気凌げ、まさに日本のジャン・クロニエをもって任ずる概があった。アシエンディン・プレスや、ゴウルデン・コカレル・プレスやナンサッチ・プレスの存在を、浮彫のように鮮かに私の心へ印銘させたのは、実に伊藤氏である。私が遂に書物道の一筋につながるに到つた因縁の一半は、伊藤氏の出現によるといつてもよい。私は自分の書物を作るたびに、必ず伊藤氏のことを想ひ出す。

(「自装本回顧」『寿岳文章しづ著作集』第6巻)

寿岳が「本当に美しい本」を目指して文字通りの手作りで一冊一冊作り上げていった向日庵私版本もまた伊藤と関係する(注⑥)。

伊藤氏がずっと出版事業を続けてみてくれたら、恐らくは私は自分で向日庵私版をおこさず、ナンサッチに於けるメネル、フェイバアに於けるドリンクウォータアの役割を「ぐろりあ・そさえて」のために果たしてあたであらう。

(同前)

### 1-3 『工芸』

「ぐろりあ そさえて」社から出版した柳の『工芸の道』は「工芸としての書物」と言うに相応しい装幀が施

された書物である。それは伊藤のこだわりであったが、柳のこだわりでもあった。柳のそのこだわりは柳の主導する民芸運動の機関誌『工芸』（昭和6年1月創刊）にもそそがれた。『工芸』第2号（昭和6年2月）の「編輯余録」で柳は次のように書いている。

工芸の雑誌であるから、雑誌それ自体をできるだけ工芸的なものにしたい。出版物が工芸であるという意識は一般にまだうすい。……工芸としての書物装幀は、今後もつと留意される問題と思ふ。

『工芸』の第44号（昭和9年8月）は「書物工芸」の特集を組んだ。その号で寿岳は「装幀論」を書き、ウィリアム・モリスの「ケルムスコット・プレス設立の目的について」の訳とエリック・ギルの『印刷に関する論』の一部の訳である「書物」を載せているが、同誌の末にある「同人雑録」で柳は次のように書いている。

此の号は寿岳と村岡との編輯になつたので、特色ある一号を得たことを共に悦びたい。寿岳のことは前にも一寸紹介したことがあるが、工芸としての書物に関し、寿岳程誠実な努力をしてゐる人は日本に殆どみない。書物好きの人は他にも沢山ゐるが、書物道の哲学を有ち、知識に精進し、且実際に其れを試みつゝある人は甚だ少い。寿岳の向日庵の出版物は、もとより是からかも知れぬが、障害の多い周囲を切り抜けて、あれだけ体裁なり、紙質なり、組版なりを用意深く考へて出版してゐる例は日本にはまだ少からう。書物好きの人の出版物が多少あるが、何れも思い就き程度で、書物の正道からは遠い。是から書物工芸への注意が漸次高まることと思ふが、寿岳は私版本の先鞭を附けた人の一人として想ひ起されるであらう。寿岳もまた編集後記（「向日町から」）で次のように書いている。

『工芸』で書物号を出さうとはかねがね柳さんの意向であり、此の春リーチを迎へに西下されたとき、具体的な相談をし、八月に出さうと云ふことになつた。……工芸の基準から、美の観点からも、書物の歴史を誰かが書けばいいとはかねてより私の願ひである。書誌学的な方面や趣味的な方面から書物を取り扱つたものは実に数多いが、書物を工芸美の対象に置いたものは不思議にも少ない。わが国の書物に関しては殊に少い。もしみづから美しい書物を作る立場にある人が此の為事をやつてくれたらどんなによからうかと私は屢々空想する。（下略）

#### 1-4 民芸運動

柳の主導した民芸運動は、宗教哲学者としての柳が行き着いた「他力道」の美を日用の雑器の中に見出したことに始まったものであった。そうした美を持つ日用の雑器を柳は「民芸」（民衆工芸）と呼んだ。柳は「民芸」を次のように説明している（「民芸の趣旨」）。

（前略）それ故民芸とは、生活に忠実な健康な工芸品を指すわけです。我々の日常の最もいい伴侶たらんとするものです。使ひよく便宜なもの、使つてみて便りになる真実なもの、共に暮らしてみても落ち着くもの、使へば使ふ程親しさの出るもの、それが民芸品の有つ徳性です。それ故質素であつても粗悪ではいけないのです。安くても弱ければ駄目なのです。不正直なものや、変態的なものや、贅沢なものや、それ等は民芸品として最も避く可き事柄です。自然なもの、率直なもの、簡素なもの、丈夫なもの、安全なもの、それが民芸の特色なのです。一言で云へば誠実な民衆的工芸、之がその面目です。我々はそれを健康の美、無事の美と呼んでいいでしょう。

ただ、柳の『工芸の道』には和紙は取り上げられていない。柳が和紙を民芸の一つとして明確に意識するようになるのは昭和6年以降のことである（注⑦）。柳は『工芸』第2号（昭和6年2月）の「余録」で、紙も日本には素敵なのがある。恐らく朝鮮を除いたら紙では世界一かと思ふ。……何にしてもいいものが光らねば嘘である。いいものに冷淡な態度はよろしくない。私は寿岳と一緒に今月から始めた『ブレイクとホキットマン』（月刊雑誌）、日本製の紙を特別漉かせて用ひた。この『工芸』より悠に味がよいつもりである。純日本紙を世界に進出させたいものと思ふ。私はしばしばいい紙を見たりいぢつたりして悦んでゐる。

と言ひ、同年に結成された因幡紙頒布会の趣意書に寄せた「因幡の紙」でも、

よい紙には不思議な魅力がある。質が与へる悦びである。そこではいつも堅牢と美とが結ばれてゐる。私はわけても和紙が好きである。日本への讚美をこゝでも味ふ。近代の知識は紙を西洋化さす事に急いでゐる。私達は量に於て助けを得たが、質に於て失つたものは大きい。

と言ひ（注⑧）、さらに同年10月発行の『工芸』第10号（昭和6年10月）の「挿絵解説」でも次のように言っている。

日本紙の美しさに対して、日本人はもつと自覚してもいゝと思ふ。何も西洋ばやりである為、西洋紙でないと新時代に合わぬ様に考へるが、日本紙を現代の需要にもつとは発展させたい。発展と云ふ意味は日本の味を無くす事なく、様々な新しい用途にそれを向ける事である。何にしても質から云つて非常に強く、味ひも無類であるから、それを殺さずにもつと活かして使ひたい。今日のように、悪く西洋化して紙を粗悪なものにすることは賛成出来ない。（西洋のいゝ紙はめつたに日本に入つてこない。そうして其悪い紙を手本に真似て作るもの多く、みじめな結果になつてくる。）皮肉な事の様であるが、日本紙が如何にいゝかは此頃西洋人の方で余計知つてゐるかも知れない。本に日本紙でも使うと必ず「日本製」と云ふ事を特別に自慢して書くからである。

最もいゝ紙を作つた朝鮮は、日本の悪商人どもの犠牲になり、且つ国民の無自覚で近年急激に悪くなつて、再興は一寸むずかしからう。それに昔の手法を知つてゐる職人はまもなく絶え切るだらう。だが幸ひにも日本では状態はずつとよく、越前とか土佐とか云ふ有名な産地のほかに、各地の田舎ではまだ生紙を漉いてゐる所は中々多い。強靱だと云ふ事が、声価を細々乍らも今迄つないでゐる原因であらう。私は今後和紙は発展する余地の多いものと信じる。又どうしても発展させたい日本産業の一つである。

この後『工芸』は第28号（昭和8年4月）に、山陰地方の和紙の特集を編み、第59号（昭和10年6月）でも武州小川の和紙の特集を組んだ。こうした和紙との関わりを柳は「和紙十年」（『和紙の美』昭和18年9月刊所載）で次のように振り返っている。

和紙との濃い縁は、私に出した版本から始まる。最初に上梓したのは『朝鮮の美術』と題した本で、大正十一年のことであるから、もう二十年余りも前のことになる。続いて同年『陶磁器の美』を出し、『思い出』を出した。紙はいずれも信州のものだった。和紙に一段と近づくようになったのは昭和六年のことであった。民芸の調査に雲石の二州を訪ねた時、太田直行氏から二人の人を紹介された。一人は中村和氏で製紙の技師であった。一人は安倍栄四郎君で岩坂村の業者であった。その時幾種かの試作品を示され、私の意見を求められた。その縁がそもそも抄紙の仕事に私が進んで携わる発端を成した。

さて、寿岳は民芸運動が興つた当初にはこの運動にはあまり関心を持っていなかった。

（『ブレイクとホキットマン』の）製本は、私たち夫婦が手綴じした。時には兼子夫人を伴つて柳宗悦も応援にやってくる夜があつた。そういう時、妻はよくビフテキを焼いていた。娘は今も語る。「あの頃は、そういう方面には柳さんの民芸の影響をまだ受けていなかったんで、そのビフテキをのせたお皿も、白地に水色の線のはいつたつまらん西洋皿だった」。

（「ウキリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」）（注⑨）

前述のように、当時の寿岳にとって和紙は「書物工芸の重要な一部門」としての用紙にすぎなかつたようである。柳が「（寿岳は）ブレイク学者でその道の人達にはよく知られてゐる。同君は本好きで、その為紙に関し特別な神経がある」（『工芸』第28号「同人雑録」、昭和8年4月）と言っているのは書物の用紙としての鑑識眼に対してであらう。その寿岳の鑑識眼も当時は十分なものではなかつたようである。昭和6年2月から寿岳と柳は月刊雑誌『ブレイクとホキットマン』を刊行したが、その用紙は寿岳が「オランダのファン・ゲルダの手漉紙を見本に」「越前で特別に漉かせたものであつた」。その紙について、後年寿岳は「今とり出してみ

ると、ずるぶんパルプも混入されてあるのに気付く。勉強せよならぬことが、私たちの前にはたくさんあつた」と書いている（寿岳「民芸の展開」昭和40年10月）。やがて寿岳は柳の民芸運動の共感者となり、さらに共進者となった。「私が民芸品を知るようになったのは、もちろん柳さんを通してである。」（「私の民芸教室」中「民芸との結縁」）

この時、寿岳の和紙を見る眼も書誌学的な鑑識眼だけではなく、和紙そのものの持つ美と徳性を感じ取るようになったものと思われる。月刊誌『ブレイクとホキットマン』の昭和7年2月17日発行の「後記」で、寿岳は次のように記す。傍線部（引用者）は民芸運動家としての和紙観そのものと言ってよいものである。

明日は十五日の公休で動力の電気が来ないから、ロール掛けの実態を見るのなら今日のうちと言ふので、その晩厄介になつた紙問屋の主人杉原さんの案内で、日のくれぬうち、二三の製紙所を訪問する。順良な紙に対して異常な愛着を持つ私には、得るところの多い見学であつた。手で作るものがなぜ美しいかと云ふ工芸上の問題は、漉く時から感想まで、殆ど全部人の手にのみ委ねられる手漉紙の工程によつて、無言なしかし力づよい実証を示されている。近代の資本主義はこの山奥まで製紙原料としてのパルプやマニラ麻を運び、純粹に古格を保つ紙はこゝですら少なくなつてゐるけれども、機械漉きの紙のみが横行する今の世にかかる手漉製紙集団の存在は、甚だ意義深いものと言はねばならぬ。あくる日は本誌の紙を漉いてゐる工場に赴き、つぶさにその状況を視察し、持つてきた外国の手漉紙などを見せて、書物の材料としての紙につきいろいろこの人と話し合つた。費用と綿密な注意とさへあれば、いかなる外国の手漉紙にも負けない美しい紙があそこで漉けると思ふ。

寿岳が実際に伝統を守る地方の紙漉場を訪れたのは昭和6年のことである（『和紙風土記』p.259）。それ以降、寿岳は民芸運動の活動家たちと各地の紙漉村を訪れている。昭和9年8月10日にはバーナード・リーチを鳥取岩坂の安部栄四郎の紙漉き場に案内し、昭和10年の10月20日には武蔵国小川の紙漉場を訪問し（「日記抄」『工芸』59号）、その夜には「小川の一旗亭で、東京から出かけていった柳宗悦・水谷良一・浅野長量・芹沢銈介・及び私（壽岳）の、日本民芸協会の一行、それに写真師、小川から縣議横川禎三氏と永松楮堂氏が来り会し、大いに和紙復興談をやつた」とある（『和紙風土記』pp.250-51）

こうしたことがやがて始まる寿岳の和紙研究に「和紙への敬念と情愛とが背後まで濃く働」く下地となつたのであろう。

## 2 書物愛から和紙の研究へ

民芸運動の当初においては和紙に関する「研究」にはそれほど積極的ではない。柳の言葉で言えば「立場なき立場」、「絶対的立場」、直感による「純粹立場」に立って美を捉え直すのが民芸運動だからであろう。したがって、書誌学や装幀論を研究している寿岳は注目される立場にあつたといえる。柳は次のように寿岳を紹介している。

私はこれで私の親しいまた尊敬する幾多の紙友について語つた。……しかし私はもう一人の友達についても書き添えるべきであるを感じる。それは寿岳文章君である。直接紙の技に携わる人ではないが、今では和紙の学問に励む人として、だれも同君から学恩を受けるであろう。（「和紙十年」）

ところで、柳は右の文章に続けて、「私が同君を語るのは、おそらく紙学に志すに至つた動機の一つが、私たちとの交友にあつたと思えるからである。」と言ひ、寿岳もまた、

私が始めて紙漉場と言ふものを見学したのは、実にこの五箇村（越前今立郡）で、それは昭和六年の十二月十四日、大雪の降つた直後であつた。……その時無理にひきずつた足こそ、私の和紙研究の第一歩で、何かと思ひ出が深い。（再掲『和紙風土記』）

と言っているのは注目される。確かに民芸運動家との交友は、和紙に対するそれまでとは異なる見方を寿岳に教えたであろう。和紙への「敬念と情愛」という感情は、書誌学者の鑑定眼などによって湧くものではなく、書物愛というものとも異なるであろう。それは宗教的な謙虚な態度で接した時に湧くものと思われる。柳が寿岳の和紙研究に感じ取った和紙への「敬念と情愛」がそのようなものであったとすれば、それは他ならぬ柳の民芸運動に関わることによって寿岳が学んだものに他ならない。

しかし、寿岳自身が、「書物愛から出発して、私が和紙の研究に打ち込むようになったのも、先生の導きによる。」（「新村出先生の思い出」新村出追悼文集『美意延年』所収）と述べているように、和紙の本格的な「和紙の研究」は新村の示唆による。『ブレイク書誌』の出版の仲介をし、向日庵私版本を製作する因縁ともなった「ぐろりあ そさえて」の伊藤長蔵を寿岳に紹介したのは新村出であったが、和紙の研究についても新村の示唆によるものであった。それは後述のように昭和12年から始められた寿岳の全国紙漉場調査以降のことであろう。したがって、寿岳が昭和6年12月14日に行った五箇村訪問を「私の和紙研究の第一歩」というのは、本稿で特に採りあげている「ただの考証家に墮した他の学者たちとは区別される」「和紙研究」とは、寿岳自身の意識とは別として、必ずしも一致しないであろう。次節では、新村と寿岳との交流を具体的にたどりながら、寿岳の「和紙研究」の始まりを確認してみたい（注⑩）。

## 2-1 新村出との出会い

寿岳が関西学院英文科を卒業して京都帝国大学文学部選科に入学したのは大正13年であるが、新村と面識を得たのはその卒業年次の昭和2年のことであったようである。寿岳28歳、新村52歳（『寿岳文章しづ著作集2』所載の「年譜」）。24歳の年齢差があり、寿岳にとって新村は「慈父にも等しい恩師」であったという。

私にとっての先生は、大変長い年月にわたっての、心の通いあう慈父にも等しい恩師であった。というのも、先生と私の間には、学芸の世界で共通の話題となるものがずいぶん多かったからであろうか。

（寿岳「新村出先生の思い出」新村出追悼文集『美意延年』所収）

二人の交友は何よりも「書物好き」ということにあったようである。寿岳は京都大学の図書館の館長室に新村をしばしば訪れ、互いの家を訪ねて談笑することもあった（注⑪）。

## 2-2 全国紙漉村調査

寿岳が和紙研究者として注目されるようになるのは、有栖川宮記念奨学資金を得て、全国の紙漉場を廻ったことに始まると考えて良いであろう。少なくとも寿岳の研究と呼べる和紙研究は、それ以降に始まる。この紙漉村現地調査の旅は昭和12年の秋から15年の春まで行われた。寿岳37歳から40歳のことである（注⑫）。『紙漉村旅日記』の「序文」には次のように書かれている（昭和19年7月明治書房刊による）。

書物工芸の重要な一部門としての紙、特に和紙に、私が興味を持ち始めたのは、もうかれこれ十五六年も昔のことになる。もとより本務の暇々にやる仕事なので、はかばかしい進展を見せなかったのであるが、研究そのものはわが国固有の文化の闡明に資すると認められたためであらうか、昭和十二年以降引きつづき三ケ年間、辱くも高松宮家から有栖川宮記念学術奨励金を戴き、わが国に現存する手漉和紙の歴史的地理的研究に従ふこととなった。その眼目とするところは、現地の実地調査にある。私は且つ恐懼し且つ感激し、昭和十二年の秋から、なるべく学校の休暇を利用して、率ね同行の妻を助手格に、全国のめぼしい紙漉村を行脚し、或は古老に質ね、或は文献に拠り、抄紙に関する史実や伝説を隈無く求めてあるいた。……しかし、ともかくも、予定は着々と実行され、昭和十五年の春、実地調査はひとまづ終りを告げ、それ以来、仕事は書庫と机の上に移されて今日に至つてある。

この有栖川宮記念奨学資金受領者候補者として寿岳を学士院に推薦したのも新村出であった。新村は寿岳に「和紙の文化史的研究は、かねて自分の念願とするところであるが、老来、山間僻遠の地の旅行など意に任せぬゆゑ、自分に代つてやるやうに」と言ったというが（『紙漉村旅日記』「序文」（注⑬））、それは寿岳を奨



学資金受領者候補者として学士院に推薦した時のことであろう。次のような新村出自筆の「有栖川宮奨学金御下賜願書」の下書きが、重山文庫に残されている。(注⑭)

有栖川宮奨学金ノ御下賜ニ由リ別紙第一号ノ主旨ニテ関西大学文学部教授龍谷大学講師壽岳文章ヲシテ「本州四国九州ニ現存スル手漉紙業ノ地誌的調査」ノ事業ヲ達成セシメ度、何卒御詮議ノ上、可然御申請被下候様願上候也

費用総額（三ヶ年）	三四五六円・五〇
第一年度	一〇〇九円・五〇
第二年度	一三二〇円・五〇
第三年度	一一二六円・五〇

〔別紙第一号調査方法ノ條 及第二号費用概算参照〕

昭和十二年四月二十五日 帝国学士院会員 新村出 □

帝国学士院長桜井鑑二殿

ところで、有栖川宮記念奨学資金を得た寿岳の研究題目は「本州四国九州に現存する手漉紙業の地誌的研究」であった。「地誌的研究」とは何か。寿岳はこれを「歴史地理的研究」と言い換え、次のように説明する。

歴史地理的研究とは一体何をさすか、学者の見解は必ずしも定着していないようであるが、私は私なりに、歴史という時間的な流れと、地理という空間的な平面の交叉する接点を足場とし、言わば歴史と地理の谷間をくまなくあるいて調べることだと解釈する。そのためには、文献や史料の援用はもちろんのこと、民俗学や考古学の方法論もゆるがせにはできまい。しかし何よりも必要なのは、よく見、よく聴き、よく記録するフィールド・ワークであろう。(『寿岳文章しづ著作集5』「あとがき」)

すなわち、寿岳の調査は紙漉村の現状を調査するだけでなく、その歴史を捉えようとする目的も含まれていた。

実は、この紙漉村の「歴史地理的研究」は、昭和11年の秋に発足した新村を代表とする和紙研究会の機関誌『和紙談叢』（昭和12年2月）の刊行目的として設定されていたものである。『和紙談叢』は「三年十二冊を以て大体和紙の輪郭を終り、又現産地の大略を紹介」という計画で刊行されている。そして、創刊号には美濃紙に関する次の論考が載せられている。

美濃紙に関する文献二三	伊藤 信
美濃揖斐谷の抄紙	秋山桓士
美濃国抄紙の沿革と現況	奥本正人

右の奥本の論考には、奥本自身が若林春和堂主人若林正治と行なった実地調査の報告が含まれている。

しかし、『和紙談叢』の発行は思わぬ事情から創刊号（昭和12年2月）だけで頓挫した。新村出が寿岳を有栖川宮記念奨学資金受領者候補者として学士院に推薦したのは、その2ヶ月後の昭和12年4月25日である。すなわち、寿岳の紙漉村全国行脚は『和紙談叢』で計画された目的が引き継がれた形で行われたことになる(注⑮)。

### 2-3 寿岳の紙漉村調査報告と和紙の文化史的研究

寿岳の和紙に関する最初の文は『工芸』第28号（昭和8年4月）に載った「和紙復興」であるが(注⑯)、後に『工芸』第87号（昭和13年4月）「雑録」で、寿岳自身が言うように「自分の主観から和紙の美を色々と分析して、紙障子にさすほのかな光がいいとか、外形に应ずる柔軟性がいいとか」などといったことを記した『随筆めいたもの』にすぎず「和紙を実際に作る人の生活や仕事からどんなに遠くかけ離れたもの」でしかなかった。

まだほんの僅かしか紙場を廻つてみないが、今までに得た意見からでも、和紙の受けとり方と言つたやう

なものを随分強く感じさせられた。多くの紙場を実際に訪問せず、唯漉かれた紙の立派さだけを見てみた頃は、私も人並みに、自分の主観から和紙の美を色々と分析して、紙障子にさすほのかな光がいいとか、外形に応ずる柔軟性がいいとか随筆めいたものをよく書いた。……たいていの和紙讚美論が、和紙を実際に作る人の生活や仕事からどんなに遠くかけ離れたものであるか、それもとつくりと胸に入れておく必要があらうと思ふ。(中略) 諸方の紙を実際に集めてみると、単調なほどに同一性を有つ。それは恰も米の名称に種々あつても食べてみればさう大した相違が感じられないのと一律であらう。それでいいのだと私は思ふ。和紙の伝統が、最も奥深い山村でうけつがれてきたのは、ひとへに簡単なあの手法のゆゑである。しかも工程が単純なほどよい紙が作られる。手法が単純だから、これから先も紙は残らう。尤も、新しい生活様式に応ずるために、この単純な工程から多種多様な紙を創作する用意は、吾々工芸運動に携はる者たちへ課せられた大きな問題ではあるが。

しかしなお、この「雑録」が書かれた昭和13年4月時点においても、寿岳の和紙の美に対する目は柳の民芸に対するそれと同じである。

しかし、全国紙漉場調査以降は、そうした「随筆めいたもの」も民芸論風なものとはなくなり、次に掲げるように紙漉村調査の報告と文献研究とが中心となる。

#### イ 紙漉村調査報告

- 漉場紀行 (一) (『工芸』87号、昭和13年4月)  
漉場紀行 (二) (『工芸』93号、昭和13年9月)  
名塩紀行 (『和紙研究』1号、昭和14年1月)  
紀伊産紙考(上)(中)(下) (『和紙研究』2、3、4号、昭和14年4月、8月、12月)  
杉原谷紀行 (『和紙研究』7号、昭和15年11月)  
日向の紙 (『和紙研究』8号、昭和16年3月)  
両丹紙漉村紀行抄 (『和紙研究』11号、昭和18年6月)

\* 昭和13年4月の「漉場紀行」また9月の「漉場紀行 二」について寿岳は「これは昭和18年9月に寿岳が私版として刊行した『紙漉村旅日記』の萌芽とも言うべきもの」と記している(「民芸運動と和紙」『和紙落葉抄』昭和51年湯川書房刊所収)

\* 『紙漉村旅日記』の「序文」に「この旅日記からの抄録が『工芸』、『和紙研究』、『文明評論』、『現代』、『文春』、『旅』等の雑誌に掲載されたことがあるけれども、それはほんの一部分にすぎぬ」とある。

#### ロ 和紙に関する文献調査

- ハンタア氏の『極東紙漉国巡礼』 (『和紙談叢』昭和12年2月)  
和紙外伝考 (『工芸』87号、昭和13年4月)  
『源氏物語』に見えてゐる紙 (『和紙研究』4号、昭和14年12月)  
『枕草子』に見えてゐる紙 (『和紙研究』5号、昭和15年4月)  
『宇津保物語』に見えてゐる紙 (『和紙研究』6号、昭和15年7月)  
『栄花物語』『御堂関白記』に見えてゐる紙 (『和紙研究』8号、昭和16年3月)  
和紙の創制 (『和紙研究』9号、昭和16年9月)  
西鶴と紙 (『和紙研究』13号、昭和23年9月)  
本邦製紙史料としての地誌 (『和紙研究』14号、昭和26年1月)

\* 『和紙研究』の毎号に載せられた「和紙研究文献解題」も寿岳と禿氏祐祥によるものである。

#### ハ その他

和紙復興 (『工芸』第28号、昭和8年4月)  
下京の地紙漉 (『和紙研究』5号、昭和15年4月)  
セケベスのフヤ (『和紙研究』12号、昭和20年1月)  
和紙研究の回顧と展望。 (『和紙研究』16号、昭和54年12月)

また、単行本には『紙漉村旅日記』以外に次のものがある。

『和紙景観』 昭和14年 向日庵版  
『和紙風土記』 昭和16年 河原書店刊  
『日本の紙』 昭和19年 靖文社刊 (訂正再版昭和21年 大八洲出版社、第3版 昭和22年 靖文社刊)  
『日本の紙』 昭和42年 吉川弘文館刊  
『正倉院の紙』 昭和45年 日本経済新聞社刊  
『和紙落葉抄』 昭和51年 湯川書房刊

注目したいのは、寿岳の「和紙研究」の最初と言える「和紙外伝考」(『工芸』87号、昭和13年4月)は、新村の「和紙外聞抄」(『和紙談叢』昭和12年2月)を受けて、あるいは意識して書かれたと思われることである。また、『和紙研究』4号以降の『源氏物語』から始まる日本古典文学に現われる和紙についての一連の論考もまた、昭和14年の4月29日と30日の両日に龍谷大学図書館において、和紙研究会主催で行われた「昔の和紙展観と講演」での、新村の講演「文学に現れたる和紙」に示唆されたものと思われる。この講演については上村六郎「和紙研究会の歴史 前篇」『和紙研究』第16号にも書かれているが、新村のこの講演内容は活字化されていないようである。ただ、『和紙研究』第2号(昭和14年4月)に載せる「和紙覚書(二)」はその内容の一端を示すものであろう。この論文は「和紙文学資料とでも題すべき手控の一冊からそこはかとなき抄録を試みで埋め草をするまでである」と書き始められているが、おそらく新村の「文学に現れたる和紙」の調査はこの時既に全時代を通してなされていたものと思われる。この論文では江戸時代について扱われているだけであるが、新村の調査は例によって徹底しており、近松や西鶴の作品については言うまでもなく、談林派の句集、其角の虚栗集や俳書、さらには俗曲や俗謡俚歌等々に至るまで言及されている。例えば近松作品について次のように書かれている。

近松の作品からの分は、昨年六月の書窓に拾はれてゐるさうであるから、それは除くとしよう。尤も天の網島と冥途の飛脚と心中万年草との三篇からの取材だと寿岳氏の報道であるが、全集第十卷なる持統天皇歌軍法は、吉野の紙漉萬九郎とて都の町の紙問屋に名をしられた者と、その妹の紙漉女長歌といへる者と、楮売の風月と名のられる貴人と、それやこれらをあしらつて、紙屋ならぬ紙漉渡世を題材に取扱つた紙漉文学として絶好な作品と見なされるのである。漆漉の紙や鳥の子、名塩も杉原も美濃紙も、また延紙も半切紙も出てくれば、「楮とて紙に漉く木の皮を取て此所の紙漉にあきなひ世をいとなむ」吉野の紙業者を題材に使つて、そこに散見する資料は、片言隻句をも加へるならば、近松の作品の中では、この種のものでは随一のものではなからうか。

注目されるのは、寿岳が新村に「書窓」に紹介されている近松作品について報告していることである。この頃には二人の間でこのようなことも話題にしていたことが推測される。

新村はその後、こうしたテーマを扱った論文を自ら積極的に発表することはなかった(注⑰)。そして、それは寿岳に託されたように見えるのである。新村は、星の和名研究における野尻抱影の研究、紫式部の墓所などに関する角田文衛の研究のように、自ら調査した資料などを同様の研究を進めようとしている者に提供し、自らは論文を纏めないことがある。新村の学問観あるいは学友観を考える時に注目されるが、今は措く。

### 3 柳宗悦と新村出との交流

以上見てきたように、寿岳は柳と新村の両者に親しく交流し、柳の『工芸』の編集にも深く携わり、新村の和紙研究会の中軸として活躍していた。したがって、和紙に対する捉え方もまた両氏から直接に、また間接にも影響を受けたものと考えられる。端的に言えば、民芸としての和紙に対する関心は柳の民芸運動に触発されたものであり、その学問的研究方法は新村によって示唆されたものと言える。

しかし、以下に見るように、新村の「和紙研究」は柳の機関誌『工芸』によって触発されて始められたものである。したがって、新村の勧めで始められた寿岳の「和紙研究」の特徴を考える際には、新村の和紙研究の特徴を考慮にいれなければなるまい。迂遠のようであるが、寿岳の「和紙への敬念と情愛」が濃く働いている「和紙研究」の特徴の考えるためには重要であろう。

以下では新村と柳の交流関係をたどりながら、新村の和紙研究がどのような形で始められ、どのような形をとっていったかを見ていくことにする。

#### 3-1 新村と柳との交流

新村と柳とが初めて会ったのは、寿岳が新村の面識を得た昭和2年より前のことである。

柳が東京から京都へ転居したのは大正13年4月のことであった。柳は吉田下大路町に住み、翌年1月にその近くの吉田神楽岡三番地へ転居しているが、新村は最初の吉田下大路町の家に柳を訪ねている。こよなく草木を愛する新村らしく、その時のことを次のように記している（「思い出す樹木」『新村出全集』第11巻 p.414）。

日本で見た此木（引用者注一泰山木のこと）で印象の鮮やかなのは、柳宗悦がもと住んでみた京都吉田山上の柳宗悦の僑居の玄関のわきにあつた巨大な一本である。或夏の夕ぐれに人と共に初めて氏を訪ねたとき、何よりもこの一本に眼がとまつた。白い花が数多くさいてゐる頃であつた。

この頃、柳は武者小路実篤主宰の雑誌「大調和」に連載していた原稿を書いていた。それらが纏められて『工芸の道』として刊行されたのは、昭和3年12月のことである（その著の「序」には「昭和三年晩秋 洛東神楽岡にて」とある）。以降、新村と柳は交流を重ねたようであり、森豊宛新村書簡（昭和32年1月18日付。新村全集11巻所収）には「柳宗悦氏は京都（同大）に在住中、懇親しました英才です」と見える（当時柳は同志社大学文学部の英文学講師と同志社女学校専門学部教授を兼任していた）。

その後、柳は昭和7年に再び東京に居を移したが、柳と新村の交流は終生変わらなかった。柳から新村宛の書簡が重山文庫に何通か残されているが、次の昭和19年4月10日付書簡は、新村が柳の『和紙の美』（昭和18年9月刊）を注文したことに対する柳の礼状である。新村が民芸運動に理解を持ち続けていたこと、それに対する柳の感謝の念が窺える。

御芳墨拝誦致しました。例年より寒さ長びき春の暖かさが待たれますが、先生には別にお障りもなく御過ごしにや、厚く御見舞申し上げます。いつもお噂は致し乍ら御無音に打ち過ぎ申訳なきことであります。いつも吾々の仕事に対し、浅からぬ御好意を受け感謝の念に堪えませぬ。今回小著御申込みにあつては接し態々金子までお届け頂き恐縮に存じました。明日より小包発送が解禁になりますので、早速お届け申し上げます。近時旅行困難と相成りましたが、若し御東上のこともあれば、再び民芸館にお迎へ致し度、お忘れなく御立寄待上ます。

四月十日 柳宗悦

新村先生

#### 3-2 工芸としての書物

新村と柳とで共通する関心事の一つに「工芸としての書物」ということがある。このことへの関心は、新村は柳より早かったようである。新村は昭和2年11月に「書物芸術上のキリアム・モーリスと本阿弥光悦」という論文を『書物の趣味』（第1号、ぐろりあ そさえて発行）に発表しているが（注⑱）、それ以

前に刊行した『南蛮更紗』（大正13年、改造社刊 装幀恩地孝四郎）、『南蛮廣記』（大正14年、岩波書店刊 装幀平福百穂画伯）、『続南蛮廣記』（大正14年、岩波書店刊 装幀平福百穂画伯）などは、既に工芸的書物と言うことのできるものである。柳の『工芸の道』（昭和3年12月、ぐろりあ そさえて刊）もまた見事な「工芸としての書物」であることは前述のとおりであるが、新村は早速「大阪朝日新聞」（昭和4年2月26日発行）に「書物の工芸」と題する一文を寄せ、この書物を高く評価した（『新村出全集』第8巻所収）。

ここで私がいふところの書物の工芸とは、書物の外形的方面の技巧をさしていふのである。すなはち活字の字体や大小や配置はもちろん、紙質や挿画、表装、その地見かえしやとびらなどの意匠、さういつた方面に関する一切の技巧を綜括して、かりに書物の工芸と題しておく。（中略）私は近年かういふ方面に気を配り、書物芸術なり書物工芸なりの道のために、その道の奨励のために、展覧会のやうなものを開くのも一案ではなからうかなどと思つた。またかういふ書物工芸の道の指導ともなるところの、或はまたさういふ精神を鼓吹するところの著述もがなと望んでもゐた。柳宗悦氏の新著『工芸の道』の如きは単に書物工芸の道をのみ説いたものではないけれども、その精神においては、正しく私が平素期待しつつあつたところのものを与えてくれたものだと信じてゐる。柳氏が菊判参百六拾ページのずつしりとした大冊『工芸の道』に、まばら組の活字の配置でよみやすからしめて、力づよく顛正と破邪の両面から、来るべき工芸の本論三篇に及んだ後、工芸美論の先駆者たるわれらのラスキンとモーレスとを説、工芸の道に対する啓蒙的な問答をかかげて懇ろに人々に行く道を授け、最後に挿絵二六七図を掲げ、各種の民芸について、まづ綜括的に本質的説明を加へ次にそれぞれの解説を尽くしてもある。挿図には陶磁器と染織物とのみならず日用家具、雑器のかずかずを挙げ、また大津絵やカックストンの『イソップ』の挿図、浄瑠璃本のあの特色ある文字をも加へてある。むろん三色版もたくさん入つてゐる。論文中にも挿画中にも、私のいはゆる書物工芸の道をあちこちに説いてあるばかりでなく、装幀の織物といひ、見返しやとびらの他の意匠といひ、民芸のほひあぎやかであつて、著者柳氏と発行者グロリア・ソサエテとの、この道における精神を頗る良く發揮してゐる。

### 3-3 『工芸』と新村の和紙研究

「工芸としての書物」への関心は新村の方が柳に先行していたが、新村が和紙へ特別の関心を向けたのは柳の民芸運動からの受けた刺激に因るようである（注⑩）。具体的には新村が和紙の研究に取りかかったのは、柳が『工芸』に和紙を採りあげたことがきっかけであつたように思われる。柳もまた「和紙十年」の中で次のように書いている。

この号（引用者注一『工芸』59号）も前述の第二十八号と共に、和紙を紹介した画期的な出版となつた。

後年『和紙研究』の如き雑誌が出たのも、これらの『工芸』に刺激されることが大きかつたと思える。

以下、この柳の推測を検証してみたい。

#### 3-3-a 重山文庫所蔵の『工芸』

新村は『工芸』の定期購読者ではなかつたようである。重山文庫に所蔵されている『工芸』で最も古いのは第10号であり、新村はその冊子の背に「工芸 十 紙のこと 因州のかみ」と手書きしている。ただし、この『工芸』10号は「山陰の新工芸品紹介の特集号」であり、特に和紙だけを採りあげたものではない。口絵には4種の因幡紙（黄紙・三椏紙・古代紙・藍紙）と廣瀬緋と因州木綿の実物が貼られており、安木の皿立て・刳盆・垢取、鹽冶の団扇、鳥取の錠、牛の戸の壺・茶碗・飯碗・皿、喜阿弥の蓋物、袖師の土瓶、布志名の爛德利、湯町の鉢、母里の皿の写真が貼られている。因幡紙については柳の解説がある。論文には永松清一郎「古代因幡紙の再興」、太田直行「地方工芸の将来」、吉田璋也「因幡の民芸品試作」、柳宗悦「民芸と摸倣」、森永重治「廣瀬緋」、河井寛二郎「山陰の窯」、太田直行「喜阿弥の窯」、柳宗悦「美の標準」が収められている。次いで古

いのは「和紙特輯号」の28号である。口絵には島根の和紙実物18種の実物(最初の1枚は紙布)が貼付され、それぞれについて柳の「挿絵小解」があり、また写真9枚を挿入した和紙製作の「工程図解」がある。論文は太田直行「雲石紙考」、中村和「和紙の特徴と島根の紙」、柳宗悦「和紙の美」、寿岳文章「和紙復興」、中村直勝「和紙の二三」、内藤虎二郎「和紙のはなし」の6つ論考が収められている。新村はこの冊子の背にも「工芸 二十八 紙のこと 雲州石州のかみ」と書いており、裏見返しの遊び紙には次のように鉛筆の走り書きがある。

此の書きのふ神田南神保町にてもとめ、けふ箱根の山中より富士の裾野かけて汽車疾走せる間に一わたりよみをはりぬ。わかきころ駿河半紙をつかひしことなどおもひおこし、その紙いまはいかになりゆきたると考へめぐらしつゝ  
昭和八年五月二日 つばめ號にて 新村出

以上のように、重山文庫所蔵の『工芸』の最も古い号は、和紙の記事が載せられているものに限られている。新村がこれらを購入したのは和紙への郷愁に似た興味からであったと考えられる(注⑳)。

### 3-3-1b 『和紙談叢』と『和紙研究』

新村を代表とする和紙についての「研究会」の発足とその機関誌の発行には、確かに柳の言うように、『工芸』との関係が窺えるように思われる。和紙研究会の発足は昭和11年の秋のことである(注㉑)。この研究会の機関誌としては『和紙研究』(昭和14年1月創刊)が知られているが、前述のように、その前身というべき『和紙談叢』(昭和12年2月発行)があった。その『和紙談叢』が発行された経緯については、編集兼印刷人であった奥本正人が『和紙談叢』末尾の「雑録」で次のように記している。

#### 和紙研究会発会

和紙に就ての研究雑誌を作つて見たいと豫てから思つてみたが其の研究や調査は到底私どもの及ぶことではないと諦めてみたが、昨年の暑休中、禿氏先生をお訪ねしてこの話をしましたところ、即座に御賛成下さつたので、寿岳先生、新村先生、中村先生などをお訪ねして御協力をお願いしましたところ、皆々様が進んで御尽力下さる事を御約束下さつたので、大いに力を得て、具体案を練り、三年十二冊を以て大体和紙の輪郭を終り、又現産地の大略を紹介しようと思ふ考へで、若林君と自分が直接事務に当る事として和紙研究会の名のもとに紙に関する諸方面の仕事に及ぶ限り進めて行く事を誓つたのである。

先づ第一声として昭年(ママ)十月二十四日京都帝国大学楽友会館に於て、「紙に関する座談会」を開いた。お集り下さつた方々は、新村、禿氏、寿岳、大沢、日下の諸先生の外に三高のパーキンズ氏、表具屋さんの山川、吉村氏などで、三時間に亘つて色々参考になるお話があつたので、本誌に載すべく速記したのであるが、頁数の都合で割愛の止むなきに至つた。其の時寿岳先生の発案によつて誌名を「和紙談叢」と命名することになった。

其後着々と準備を進めて、第一輯を美濃産紙紹介号として年末までに発行する予定で会員募集に懸つたのであるが、美濃方面の調査に案外な手数を要したのと、お互にそれぞれ仕事を持つ身の年末の忙しさに、心ならずも年内刊行を思ひ止るより外なかつた。(下略)

奥本正人が「和紙に就ての研究雑誌を作つて見たい」と思つたのも、柳の『工芸』での和紙の特輯なども契機となつたのではないかと憶測されるが、具体的にどのような内容の雑誌にするかについては、協力を得た諸先生からアドバイスを得たものと思われる。ともあれ、『和紙談叢』創刊号の内容は次のとおりである。

(口絵) 和唐紙製祖碑拓本/美濃産紙標本十八種

和紙外聞抄 新村出 / 和紙の形態 禿氏祐祥 / 染紙紀談(一) 上村六郎 / 更紗紙 加工紙雑考の一 禿氏祐祥 / 檀紙考 大沢忍 / ハンタア氏の『極東紙漉国巡礼』読む 寿岳文章 / 美濃紙に関する文献二三 伊藤信 / 美濃揖斐谷の抄紙 秋山恒士 / 美濃国抄紙の沿革と現況 奥本正人口絵解説/雑録

注目したいのは巻頭論文として掲げられた新村の「和紙外聞抄」である。この論文は新村の和紙に関する最初の論文であるが、これは『工芸』第10号に掲載された柳の文章に触発されて（あるいは呼応して）書かれたもののように思われる。すなわち柳の文章に次のような一節があった。

日本紙の美しさに対して、日本人はもつと自覚してもいゝと思ふ。……皮肉な事の様であるが、日本紙が如何にいゝかは此頃西洋人の方で余計知つてゐるかも知れない。本に日本紙でも使うと必ず「日本製」と云ふ事を特別に自慢して書くからである。

そして、新村の文章の書き出しは次のとおりである。

和紙が海外にもてはやされる由来は甚だ古い。漢土にはともかく、欧州に知られたのも、南蛮貿易以来であることは云ふまでもないが、殊に和蘭通商の後和紙は益々その価値を認められる様になり、通行開始から半世紀を経たかと思ふ頃、レンブラントがエツチングやスケッチにいち早く和紙を利用したやうな事実も存する。

『和紙談叢』の第2号の発行が挫折した後、『和紙研究』が和紙研究会の新たな機関誌として出されることになる。その刊行を告げる宣伝文は次のとおりである。

研究と趣味の雑誌 和紙研究

和紙に心をひかれてゐる吾々の間で、その研究にのみさゝげられる雑誌を刊行したいとはかねてからの宿願でありましたが、このたび、東洋文化宣揚事業に立派な経験を持つ京都便利堂の深い理解のものに確実な基礎に立ち「和紙研究」を発刊する運びとなりました。左記会規御了承の上御入会下されば幸甚に存じます。

この宣伝文にも『和紙談叢』に出された『工芸』の宣伝文が意識されているように思われる（注②）。

『工芸』の宣伝文は次のとおりである。

月刊 工芸

此の雑誌は工芸を主題とし、其の各部門に渡り、或いは歴史を或いは価値を、新しき見方から紹介する使命を負ひるものです。毎号載せる所の豊富な挿図は、殆ど凡て今日迄知られてゐないものであつて、幾多の分野を開拓して来ました。近時の和紙勃興にも、本誌の尽したと既に大きく、特に左の二巻は和紙の特集号であつたことを御知らせします。

第二八号 出雲の紙 二円

第五九号 武州小川の紙 三円

『工芸』は和紙だけに限らず広く工芸の各部門を採りあげる雑誌であり、『和紙研究』は「和紙研究にのみさゝげられる雑誌」である。また『工芸』は柳のいわゆる「立場なき立場」「絶対的立場」、直感による「純粹立場」で和紙に対するのに対して、『和紙研究』は研究者の立場に立ち、さまざまな観点から和紙を分析し研究しようとする。『工芸』はモノに即した民芸学を目指すのに対して、『和紙研究』は、柳田国男の民俗学と同様に、コトを対象とする和紙学を目指したとも言える。両雑誌にはこうした違いがあるものの、なお柳の言うように、新村の和紙研究会の発足とその機関誌の発行は、柳の言うように『工芸』の和紙特輯に刺激されたものと思われる。

新村は民芸運動の理解者ではあつたが、共進者とはならなかつた。さまざまな観点から調査し研究することで、そのものをより深く理解することができるというのが新村のスタンスである。そこで、モノとしての和紙については『工芸』で扱われることであり、自らの雑誌は和紙に関するコトの学と規定したのであろう。雑誌名に「研究と趣味の雑誌」という角書が付いている所以はそういう理由からであると思われる。

そして、柳の『工芸』と新村の『和紙研究』の両方に深く関わっていた寿岳は、和紙に対するモノ学とコト学とを一身に行なつたのであり、その結果モノ学によって感得することのできた「和紙への敬念と情愛」が、その研究を「ただの考証家に墮した他の学者たちと、はっきりと区別され」るものとしているのであろう。そう

した研究を寿岳が成しえたのは、柳と新村との得難い交流によるのであるが、何よりも寿岳の真摯でひたむきな生き方によるものと思われる。

## おわりに 一二つの碑文撰文一

民芸運動家においては、和紙への「敬念と情愛」はそうした感情を抱かせる和紙の漉き手とその技術を守りつづけている人々へ及んでいく。寿岳夫妻が平素心をひかれていた人たちは「その仕事の分野が何であれ、気持ちの純粋で、清潔で、正直で、一途で、世俗的な体制や権威には強く抵抗し、自分の信念をあくまで貫き通した人たち」であったと言う（『寿岳文章しづ著作集 3』「あとがき」）。「世俗的な体制や権威には強く抵抗し」という部分はさておき、『紙漉村旅日記』を読むと、全国の手漉和紙の村々を行脚した時に会った多くの紙漉人に対しても寿岳夫妻は同様の思いを抱いていたことが分かる。

寿岳は「純粋に研究の分野だけを守」ろうとする「ただの考証家」ではなかった。和紙漉きの伝統と文化が存続の危機に直面しているときには、それらを根絶やさぬ方途を講ずることこそが何よりも大事であると考えてのが民芸運動家であった。寿岳もまた『和紙研究』16号（昭和54年12月発行）所載の「和紙研究の回顧と展望」で次のように言う。

会の機関誌『和紙研究』は、名詮自性、純粋に和紙の研究を主要目的とし、それも歴史的分野に目くばりを行き届かせたので、勢い和紙の「過去」がとりあげられることが多かった。しかし現実面では、戦局の苛烈化に伴ない、和紙生産の伝統は、それが残る各地方で分断され、消滅の一手手前まで来ていた。和紙の「未来」のために、この憂うべき「現在」を何とかせねば、との思いは、私の胸を強く打ってやまなかった。和紙へのそうした政策的顧慮が、私の場合、何号か和紙特集を出した日本民芸協会の月刊誌『工芸』に托される。（中略）こうした現状をまのあたりにしては、復刊した『和紙研究』も、純粋に研究の分野だけを守っておればよいというわけにはゆくまい、というのが私の感想である。文化の本質などまるで考えたことのない浅はかな為政者の、狂暴な政策のあおりを食って、まさに風前のともしびの運命にある和紙文化の担い手の主役、すなわち各地に残存する抄紙家たちや、抄紙道具の製作者たちと血の通う連絡をとり、和紙文化の伝統を根絶やさぬ方途を講ずることも亦、いやそのことの方こそが、これからの『和紙研究』同人に課せられた大切な宿題のような気がする。（下略）

寿岳が撰文した「岩野翁顕彰碑」と「杉原紙発祥之地」の碑がある。

### 「岩野翁顕彰碑」

\*原文は旧仮名遣いの漢字片仮名交じり文。寿岳自身が平仮名、新かなづかいに改めたものを掲げる（『紙漉平三郎手記』製紙博物館、昭和35年刊所載）

岩野平三郎翁は、明治十一年岡本村大瀧の製紙家に生まれ、刻苦よく祖先の伝統を守って各種の良紙を抄出す。ここにおいて岩野製紙場の名、遠近に聞こえ、東西の画家、相競うてその紙を求め、ついに悠紀主基両殿御屏風の料紙謹製を主として、屢々宮内省の御用命を拝し、また昭和八年秩父宮高松宮両殿下の台臨を辱くするに至る。まことに郷党の光栄なり。しかも翁、出でては村治に鞅掌し、勢を察しては越前製紙工業組合を設け、その長たる多年、もって造紙報国の村是を掲ぐ。すなわち五箇紙業の基礎いよいよ固し。翁、資性豪邁、敬神崇祖の念最も強く、親に事うるや孝、人に交わるや信、みずから奉ずる薄く、親旧を遇する篤し。翁、今志をとげて職を退くに当り、組合はその偉功を顕彰せんと欲し、碑を建て、もって欽仰の微衷を抒ぶることしかり。

昭和十六年五月 越前製紙工業組合 撰文並書 寿岳文章 施行 鈴木石材商会



「在来の伝統的・地方工芸の維持とその発展」は民芸運動の目的の一つであった（柳「民芸運動は何を寄与したか」『工芸』115号、昭和21年12月発行）。この寿岳の碑もまた岩野平三郎翁の業績を顕彰するとともに、岩野翁が守り嗣いで来た伝統を受け継ぐ組合へのエールでもあろう。

「手漉和紙の歴史地理的研究序説」「帝国学士院紀事」第1巻第3号〔昭和17年1月30日発行〕「はしがき」の最後に、「実地調査について言へば、……全旅行を通じて、工芸的な見方よりする和紙の現状調査は十分に行ふことができた。」とあるが、寿岳は紙漉村の現状調査の後、文献調査に取りかかることになる。次の「杉原紙発祥之地」碑の撰文内容はその文献研究の成果が盛り込まれたものである。

### 「杉原紙発祥之地」碑（句読点を加え、段落を分かち。）

播磨ハ南ニ水運至便ノ内海ヲ擁シ北ニ中国脊梁山脈ヲ負ヒ沃野千里夙ニ人文ニ啓ケシコト明石原人ノ発見ニ徴スルモ明也。

製紙ノ如キモ奈良時代既ニ美紙ノ産地トシテ聞ユ。平安時代紙屋院ノ機構衰フルヤ相原庄紙ノ名卒ニ京師ノ文献ニ出ヅ。最モ古キハ関白忠実ノ永久四年殿曆ニシテ実ニ十二世紀ノ初頭ニ至ル。此事ヤ蓋シ抄紙ニ適シタル相原庄ガ近衛家領タリシニ因ラン。

該紙爾来相原又ハ杉原ト呼バレ国内ヲ風靡シ、上下ノ愛用ヲ受ケ、中世ニハ品種ヲ示ス普通名詞トナリ、連綿近時ニ及ブ。紙歴斯ノ如ク永キハ比類無カラシ。

惜ムラクハ当今杉原谷ニ此紙ヲ漉ク者無シ。歴史ヲ考ヘ伝統ヲ尚ブ郷党、合議リ恰好ノ地トシテ杉原紙発祥ノ碑ヲ建テントス。

播磨ハ余ノ郷里、而モ先年杉原紙ノ源流ヲ尋ネ帝国学士院会員京都大学名誉教授新村出博士ニ從ヒ入村セン縁ニ因リ、博士ニ題字ヲ乞ヒ、余文ヲ撰ス。

時ニ昭和四十一年春三月

甲南大学教授文学博士 寿岳文章書

撰文中に「先年杉原紙ノ源流ヲ尋ネ」とあるのは、昭和15年8月2日から3日のことである。その詳細は寿岳の「杉原谷紀行」（『和紙研究』第7号）に報告されている。同号には新村の「杉原紙源流考（上）」も載せられており、揖斐谷杉原との間で論争があった杉原紙の原産地はこの播磨の杉原谷である可能性が高いと考えて行われたのが、この現地踏査であった。注目したいのは、播磨の杉原谷を原産地とするのが妥当であるとする説は、他ならぬ『和紙談叢』（昭和12年2月）の秋山桓士「美濃揖斐谷の抄紙」で提出されていたことである。その一部を引用する。

特に中世の美濃紙全体の市場進出が播磨杉原紙の出現する後であるといふ小野晃嗣氏の所説に聞くなりば、寧ろ播州相原が衰滅に傾き地方産の杉原紙が出現する頃、美濃紙の市場進出の並に乗じて、同名の美濃杉原紙が擡頭したのではあるまいか。

小野晃嗣の所説とは『歴史地理』第67巻第4号（昭和11年4月）所載の「中世に於ける製紙業と紙工業」の上編を指すが、新村もまたこの論文に早くから注目していた（『和紙談叢』所載「和紙外聞抄」）。重山文庫には、昭和14年1月から始められ、現地調査が行われた昭和15年8月までの間に纏められた研究ノート『杉原谷誌』が残るが、新村はこの小野論文と『和紙談叢』に発表された秋山論文を承けて、杉原紙播磨杉原谷原産説の正否を確かめていたものと思われる。その確証を得た後の現地調査であったろう。「播磨ハ余ノ郷里」という寿岳は同行したのである。のち寿岳もまた『和紙風土記』（昭和16年11月刊、pp.113-126）で新村の「杉原紙源流考（上）」と同様の説明を行ないつつ、播磨杉原谷を原産地とする説を支持した。

注①『和紙の美』（昭和18年9月刊私家版）のための書下ろし。岩波文庫『柳宗悦民芸紀行』所収）。

注②壽岳の「書物工芸」研究の前提には、英国の文献学者マケロウの書誌学があった。

嘗てわが国にも来り、明治三十年以降三ヶ年間、東京外国語学校で教鞭を執つてゐた英国の文献学者マケロウ博士（Dr. Ronald Brunlees McKerrow, 1872-1940）たちの唱道する書誌学（bibliography）は、文献伝達の途上に出現する一切の事象に対し、厳密周到な用意のもとに、極めて客観的科学的な究明を試みるものであるが、私は約二十年以前、博士が沙翁の本文校勘に当つて、それとは一見無関係と思はれる当時の印刷機構の細部一たとへば印刷工の労働条件のやうな一をも忽にせず、これを闡明することによつて、本文批評にぬきさしのならぬ実証を与へてゐる精緻な学風に心惹かれ、わが国の文献研究に於ても、写字、印刷、用紙、装幀、出版等に関する精密な考究が不可欠であるべき事実に想ひ到り、……（「手漉和紙の歴史地理的研究序説」「帝国学士院紀事」第1巻第3号〔昭和17年1月30日発行〕「はしがき」の冒頭）

注③ウィリアム・ブレイク研究に関わる壽岳と柳との関係については佐藤光「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」（『向日庵 3』2020.1）に詳しい。

注④注③に同じ。

注⑤壽岳編『ウィリアム・ブレイク書誌』は「ぐろりあ そさえて」社長伊藤長蔵の依頼による。昭和2年7月6日付新村出壽岳文章宛葉書に、「神戸の人にて出版界の新人なる伊藤長蔵氏、W.Blakeの事に付助力者を得たしとの事、貴所 Blakeの事御研究の由に付、推薦いたし置しが、一度御面談被下度、明後（金）午後三時頃大学へ来る筈に付、若し一中にでもお出の都合に在候はば御立寄被下まじきや。」とある。これにより壽岳が京大附属図書館館長室に新村を訪ねたことが『新村出全集』第九巻の壽岳の「解説」に書かれている。

注⑥長野裕子「寿岳文章と向日庵本」（『向日庵 3』2020.1）参照。

注⑦民芸運動と和紙との関係は、壽岳の「民芸運動と和紙」（『和紙落葉抄』昭和51年湯川書房刊所収）に詳しい。

注⑧壽岳『和紙落葉抄』P.150に拠る。

注⑨壽岳『ブレイク詩集』岩波文庫2013刊所載。

注⑩新村と壽岳との交流については新村恭「寿岳文章の生きた軌跡と新村出」（『向日庵 2』2019.2）に詳しい。本稿で利用した資料もこれに多くを負っている。

注⑪新村恭論文(注⑩)に拠る。

注⑫この壽岳の調査は民芸運動にとっても意義深いものであった。柳は昭和6年10月発行の『工芸』（第10号）で次のように言っていた（再掲）。

最もいゝ紙を作つた朝鮮は、日本の悪商人どもの犠牲になり、且つ国民の無自覚で近年急激に悪くなつて、再興は一寸むずかしからう。それに昔の手法を知つてゐる職人はまもなく絶え切るだらう。だが幸ひにも日本では状態はずつとよく、越前とか土佐とか云ふ有名な産地のほかに、各地の田舎ではまだ生紙を漉いてゐる所は中々多い。強靱だと云ふ事が、声価を細々乍らも今迄つないでゐる原因であらう。私は今後和紙は発展する余地の多いものと信じる。又どうしても発展させたい日本産業の一つである。

また、壽岳の全国調査が決定した時にも、柳は『工芸』87号（昭和13年4月）「編集後記」で次のように書いている。「寿岳の和紙調査も、有栖川宮家奨学金の恩沢に浴し、昨秋より進捗、逐次に探索の範囲が広がつてゐる。三ヶ年の計画であるから、吾々は其の結果に多大の期待を感じてゐる。題目は現在残る純和紙の地方的状態であるが、之は恐らく最も大切な基礎的調査であつて、過去の歴史や手法も、此の研究によつて多大の解明を受け、又之によつて将来の方針に確乎たる標準を定めることが出来やう。（下略）」さらに壽岳の調査旅行終了後にも、柳は次のように書いている。「現在各地に残る手漉和紙の工房も、大方同君の訪れを受けたであらう。その報告は和紙の未来に対して貴重な示唆となるに違いない。希くはこれが一片の報告書ではなくして、伝統を守護しその礎の上に立つて更に健全な創造へと進むことの上ない準備となることを望んで止まない。和紙の価値への認識と、その宣揚と高上とを計る

ことは、共々吾々に課せられた使命だと思える。（「和紙十年」昭和18年）

注⑬寿岳は新村に4部しか造られなかった『和紙景観』（この書名も新村による）の1部を贈っており、『紙漉村旅日記』（昭和19年明治書房刊）には次のように墨書して献呈している。

尽きぬ思出と感謝をこめて 新村先生にさしげまつる 昭和二十年春 文章 静

注⑭特に注目されるのは「壽岳文章ヲシテ……ノ事業ヲ達成セシメ度」という表現である。

なお、この願書は新村出の研究のノート『名塩紙誌（附 湊紙・天子鳥ノ子）』に挟まれた形で保存されているが、次のガリ版刷りの紙片も同書および『和紙談叢』に挟まれている。この紙片により佐佐木信綱の申し出による宮内省御用掛吉田増蔵氏の「皇国古語の研究」が同時に申請されたことが分かるが、寿岳氏に関する内容だけを抜粋して次に掲げる。表記の仕方を変える）。

有栖川宮記念奨学資金受領者候補者トシテ申出事項

[研究題目] 本州四国九州に現存する手漉紙業の地誌的研究

[補助年数] 新規

[補助要求額] 一、〇〇九円五〇 参考 第二年目 一、三二〇、五〇  
第三年目 一、一二六、五〇

[研究者] 関西学院教授 壽岳文章 [申出者] 新村会員

注⑮『和紙談叢』刊行の目的の一つであった「現産地の大略を紹介」という計画は新村の提案によると思われるが、美濃紙については奥野等によってなされたものの、その後の調査は奥野によってなされる見込みがなくなったために、寿岳に依頼したのではあるまいか。新村が寿岳に「和紙の文化史的研究は、かねて自分の念願とするところであるが、老来、山間僻遠の地の旅行など意に任せぬゆゑ、自分に代つてやるやうに」と言ったことは前述したが、昭和14年4月19日付新村出宛寿岳文章書簡に、「きょう帰宅いたしましたから、いただきました御心尽しのものを開封いたしましたところ、思いもよらぬ多額なのにびっくりいたしました。こんなにいただくわけはない、一部分だけいただいて、あとは御辞退せねばと何としても申訳がないと考えてもみましたものの、よくよく考えてみますとも和紙研究にできるだけ進ませようとの、先生のお心がかもっているように感ぜられ……感涙にくれました。」とあるのが、寿岳の全国調査に対する新村の個人的な資金援助に関することであったとすると、新村がそのような行為に出たのも理解できるように思われる。

注⑯柳による「同人雑録」には「寿岳君が『工芸』に書いたのはこんどが始めてだが、ブレイク学者でその道の人達にはよく知られてゐる。同君は本好きで、その為紙に関し特別な神経がある。それで原稿を態々書いてもらつたのである」とあり、柳からの依頼原稿であるが、そうした配慮もあったのであろうか。

注⑰『新村出全集』第9巻「和紙研究篇」（この巻の解説は寿岳文章による）所収の新村の和紙関係の論文などを内容によって分類すれば次のようになる。

### 和紙外聞

「和紙外聞抄」『和紙談叢』（昭和12年2月）

「和紙覚書」『和紙研究』第1号（昭和14年1月） \* 「和紙外聞抄」の補足

「和紙自讃他讃」『和紙研究』第15号（昭和26年12月）

### 文学における和紙

「紙漉の歌」『創作』（昭和12年7月） \* 『櫃』に収録

「和紙覚書（二）」『和紙研究』第2号（昭和14年4月） \* 江戸文学に見える和紙などについて。「俳句と吉野紙など」と改題して『櫃』に収録

「和紙の歌など」『和紙研究』第13号（昭和23年9月）

### 地方紙とその歴史

「和紙覚書（三）」『和紙研究』第3号（昭和14年8月） \* 「吉野の国栖紙」と改題して『櫃』に収録  
「和紙覚書（四）」『和紙研究』第4号（昭和14年12月） \* 美濃紙史料としての関口隆吉「御用紙一件」  
「和紙覚書（五）」『和紙研究』第5号（昭和15年4月） \* 吉野紙について  
「和紙覚書（六）」『和紙研究』第6号（昭和15年7月） \* 「和紙覚書（四）」の補足  
「杉原紙源流考（上）」『和紙研究』第7号（昭和15年11月）  
「越後の小国紙」『和紙研究』第14号（昭和26年1月）

## その他

堀部正二著「梶原紙筋記」跋 『和紙研究』第12号（昭和20年1月）

\* 堀部論文は『清閑』第16冊（昭和18年5月）に載ったもので、平安時代の公家日記『兵範記』及び『殿暦』に「梶原紙」「梶原庄紙」とあることを指摘し、播磨杉原谷を杉原紙の原産地とする説を確定させたものである。新村はこの論文に跋を付し、本誌に再掲した。

中山琇静著『名塩紙』序文（昭和22年9月）

小葉田淳著『岡本村史』序文（昭和31年9月）

注⑱新村は寿岳の向日庵私版についても、ウヰリアム・モーリスと本阿弥光悦に仕事に擬えて高く評価している。

申したいことは多々あります。殊に書物芸術について然りではありますが、これに関しては、寿岳さんが詳説されるだらうと存じますから、蛇足を加へることは無用であります。同君は西向日町をケルムスコットとしようと徐々に努力をしてみられるのではなからうかと想像されます。よしやモリスの一面でも京都の郊外に伝へられれば、以てモリスを記念するに足るよなきわざだと考へるのであります。私は嘗て近世初期の新人本阿弥光悦をモリスに比したことがありました。光悦は洛北鷹ヶ峰に新しき村を作りましたが、向日町あたりの新しき村に、モリスのやうな偉人の余光によつて新しき芸術的事業が昌えれば結構だと存じます。（「モリスを憶ふ」昭和9年10月刊『モリス記念論集』所収）

注⑲柳などによる新造語「民芸」を国語辞典に初めて掲載したのは『辞苑』（昭和10年2月初版）である。

注⑳重山文庫所蔵の『工芸』で28号の次に古いのは41号（昭和9・5）であり、以降、44号（昭和9・8）、45号（昭和9・9）、54号（昭和10・6）、61号（昭和11・3）、72号（昭和12・1）、76号（昭和12・6）、84号（昭和12・10）、86号（昭和13・2）、87号（昭和13・4）、92号（昭和13・10）、93号（昭和14・2）、99号（昭和14・10）、103号（昭和15・10）、107号（昭和17・3）、115号（昭和21・12）、116号（昭和22・3）の合計19冊である。これらの号も新村が雑誌の内容に興味を覚えて買い求めたもののようで、例えば41号は苗代川の黒物陶器の特集号であり、44号は寿岳の編集による装幀論の特集号であり、45号にはリーチ・柳・河井・浜田・水谷による「赤絵談議」があり、54号には新村の新刊『辞苑』に「民芸」「下手物」の語が載せられていることを書いた柳の文章が載っている。

注㉑上村六郎「和紙研究会の歴史 前篇」（『和紙研究』第16号）による。『新村出全集索引』「年譜」にも「昭和十一年（一九三六）六十一歳 十一月 和紙研究会結成、代表者となる。」とある。『壽岳文章しづ著作集2』「年譜」に「昭和十二年（一九三七）文章三十八歳・しづ三十七歳。新村出の主唱により、和紙研究会結成、文章を中軸として活動開始。」とあるのは、寿岳が実務に携わった『和紙研究』の創刊号の発行が昭和12年2月であることに拠るものと思われる。

注㉒この宣伝文が『和紙研究』に掲載されたのは、柳が和紙研究会の会員であったからであろう（『和紙研究』第5号附録「和紙研究会員名簿」に拠る）。

## 版名としての「向日庵」

玉城 玲子（向日市文化資料館館長）

### 「向日庵」の由来

2018（平成30）年12月に開催された公開研究会での発表は、『向日庵』第2号に「昭和初期の向日町と文化人」として掲載された。その中で、寿岳文章・しづ夫妻の私版「向日庵」の名に、私は疑問を呈していた。

当時、寿岳夫妻の業績をほとんど知らなかったため、向日町の西向日町住宅地（現在の向日市西向日住宅地）所在の居宅にちなみ「向日庵」、そこで作られた本だから「向日庵」本と単純に思い込んでいた。だがその後、向日葵が歌われたブレイクの詩、そしてゴッホの絵に版名が由来することを知った。さらに最初の向日庵本『唯理神之書（ゆりぜんのしょ）』が、夫妻が西向日町住宅地に転居する前年の1932（昭和7）年にはすでに出版されていたことを知った。寿岳夫妻にとって、地名としての「向日町」が版名の由来に大きくかかわってはいないという事実、地元民としての私はいささか失望していた。

だが、少しでも向日町と西向日住宅地に引き寄せたいあまりその一文に注をつけ、「1932年の秋には新居となる土地を下見して購入していた」という事実から、夫妻の念頭にはすでに「向日町」があったことを印象づけようとしている<sup>1</sup>。しかしより詳しく検討していくと、『唯理神之書』は1932年4月に発行されており、新居の地を見定めた時期からさらに半年近くさかのぼる。よって向日町由来説は依然として強調できるわけではなかった。

もっとも、版名がもたらす矛盾を気にしているのはどうやら私だけであり、一般的には「向日庵」という版名が向日町とまったく無縁で、後の転居地と偶然一致しただけ、との考え方はほぼみられなかった。向日庵本刊行当時であっても、名称は寿岳夫妻が居住する向日町にちなんだものだとものだ、と関係者には諒解されていたようである。そこでこの稿において、「向日庵」という私版の名称が、向日町という地名に由来するのは自明であるのだが、今一度、諸要素を時系列で整理して再認識しておきたい。

2021年3月に発行された『寿岳文章 人と仕事 展』図録の編集作業で、展示品の向日庵本をはじめとする寿岳夫妻の関係資料を配列し、記載する説明原稿を準備するなかで気づいたことがあった。図録をひもとけば自明ではあるが、あえて記録のためここに活字にしておきたい。以下に示す内容が、上記図録の写真図版で参照できるとき、本文中に掲載頁を付記しておく。図録を合わせて参照されたい。

### 「向日庵私版」の登場時期

向日庵本については、1984（昭和59）年までの寿岳文章の著作文献を収録した『壽岳文章書誌』（同刊行会、1985年刊）の第1部図書の部に「4. 向日庵本」として18点の書名が列挙され<sup>2</sup>、その最初にはウィリアム・ブレイクの詩集『唯理神之書』が掲げられている。しかし、『唯理神之書』を実見してみると、扉頁には「向日庵」の名称も、後に標識として用いられる「茶の実」の紋も記されていない。手彩色された図版を配した題扉には「訳者私版」と記入されている（『図録』p.19）。訳者とは寿岳文章のことである。巻末の刊記には「私版」とのみあり、「昭和七年四月 寿岳文章」と結ばれている。1932（昭和7）年4月の時点では、「向日庵」という私版の名称を冠せられてはいない事実を確認しておきたい。

<sup>1</sup> 玉城玲子「昭和初期の向日町と文化人」『向日庵』第2号（NPO 向日庵、2019年）、注1。

<sup>2</sup> 18点のなかには、向日庵本に準ずる「準向日庵本」とされる *Eastward*『東方へ』（プランデン詩集刊行会、1949年）が含まれるが、同じく準向日庵本のD.J.エンライトの詩集、*The Year of the Monkey*（甲南大学理事会、1956）は入っていない。向日庵本、準向日庵本については、高橋啓介『向日庵・宗悦・志功の限定本』（湯川書房、1983年）に詳しい。

『寿岳文章書誌』で次に掲げられている向日庵本は、同じくブレイクの詩集を寿岳文章が訳した『無染の歌』である。奥付によれば1933年2月20日発行とある。扉には「京都 向日庵私版」と記され、茶の実紋も中央に配されているゆえ（『図録』p20）、これが最初に明記された向日庵本となる<sup>3</sup>。

以上の事実より「向日庵私版」の名は、1932年4月の『唯理神之書』発行時には定まっておらず、『無染の歌』発行の1933年2月20日までの間に案出されたことになる、と推論してもよからう。さらに省察すれば、『無染の歌』の扉頁には、「向日庵私版」の下に「一九三二年」とあり、発行前年には「向日庵私版」の名称を入れて印刷作業が進んでいたのは自明である。

寿岳は1932年10月付の『無染の歌』刊行広告を、民藝月刊誌『工藝』第22号（聚楽社、1932年10月5日）に掲載している（『図録』p21）。内容と印刷・装幀を紹介し150部を翌11月に発行するとして、送料を含めた価格5円20銭の価格をあげて申し込みを募っている。この広告には「寿岳文章私版」とあり、まだ「向日庵」の名称はみられない。

寿岳文章が私版刊行の決意を表明した文として知られているのが、「向日庵発願記」であり、これが発表された1932年11月が私版「向日庵」の名が最初に明記された時期と断定できるのではなかろうか。前年1月からの2年間、寿岳は柳宗悦との共同編集によって、英米を代表する詩人であるウィリアム・ブレイクとウォルター・ホイットマンに特化した、書誌、詩の翻訳、研究論考などを紹介した月刊雑誌『ブレイクとホイットマン』（以下『B&W』と略記する）を発行する。その第二巻第十一号（1932年11月発行）の裏表紙に「向日庵発願記」は掲載されている。『B&W』は初年度である1931年の後半には、刊行作業の中心を担っていた寿岳家のしづ、文章、潤と、家族が次々と腸チフスに罹患し入院する事態となったが、すでに発刊から2年目早々には購読者数が減少して発行元から続刊の困難が伝えられ、1932年12月の第二巻第十二号を最後に休刊することになった。その前号で、寿岳は『B&W』の休刊と入れ替わるように私版の刊行を宣言している（『図録』に図版掲載はないが、長野裕子氏の論考[p.28]に一部引用されている）。版元の名称「向日庵」を明記し、ブレイクとゴッホにちなむ命名であることを紹介し、標識として茶の実の紋も掲げられている。また『B&W』の編集後記を引き継ぐような形となる「向日庵消息」を発行することや、式場隆三郎の『テオ・ファン・ホッホの手紙』などの刊行予定と予価も示されている。

向日庵私版という名称は1932年11月に記された「向日庵発願記」が初出となる。自明なこととは言え、半年前の『唯理神之書』刊行を最初とする私版刊行の活動に「向日庵」の名が付くのは、7ヵ月後の11月であることを、前後の印刷物の記載から確認することができるのである。

### 向日町への転居との関係

1932（昭和7）年11月となると、寿岳夫妻の念頭には、新居の予定地である向日町がはっきりとあったはずである。1926（大正15）年7月から南禅寺北門外僊壺庵に住んでいた当時の一家の生活を中心に、1933年6月に向日町に転居後しばらくの間までを、戦後に回想する形でしづが書いた作品『歳月を美しく』によれば<sup>4</sup>、文章の勤める学校の同僚が、新京阪電車西向日町駅の住宅地に土地を買い、同じ場所をすすめられたのが、1932年の「菊の花が香り、松茸御飯や新栗入りおこはが、秋の楽しさを食膳へも運ぶ季節になつてみたとき」だったという。前年の腸チフスの大病以来、僊壺庵の冬の日光の乏しさが住み辛く思い、また増える書物の置き場所に困っていた一家は、次の日曜日に西向日町住宅地を見に出かけている。地名通り陽に向かって東南に傾斜する健康に良さそうな地勢や、住宅地専用の水道、ガスの設備、街道筋の昔からの商店、学校、周囲の田畑や丘陵、竹藪のある風景などにひかれ、住宅地南寄りの百坪余りの土地を求めた、とある。翌1933年2月から建築が始まり、3月4日に棟上げをしている（『図録』

<sup>3</sup> 高橋啓介は『無染の歌』のことを「本書で初めて「向日庵私版」と銘記され、その標識である「茶の実の紋」が付されている」と指摘している。

<sup>4</sup> 『歳月を美しく』（靖文社、1947年）、のち『寿岳文章・しづ著作集1』（春秋社、1970年4月発行）所収。

p. 43)。

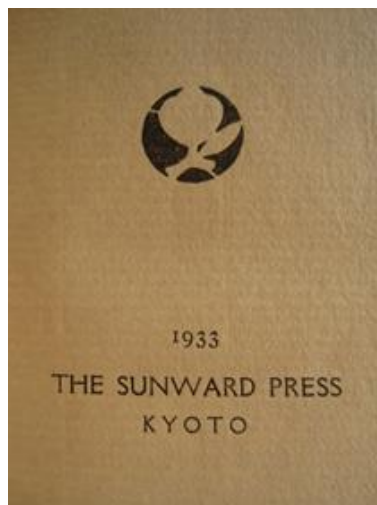
実際に転居したのは6月1日で、当日の文章の日記には「僊壺庵を引払つて向日庵にきたる」と簡潔に記されている<sup>5</sup>。同日付けの転居挨拶葉書も残されている（『図録』 p.43）。『向日庵消息』の第一信も、転居当日を発行年月日としている（『図録』 p.19）。

ちなみに、前年である1932年9月11日付けの文章の『日記』には、知人の家がある洛西等持院付近を一家総出で見に行き、日当たりや道のように、生活の利便性などを確かめている<sup>6</sup>。

以上のことを考え合わせると、1932年の夏過ぎには、寿岳一家は僊壺庵からの転居を検討しており、しかし向日町は、9月にはまだ候補地にあがっておらず、菊・松茸・栗を楽しむ秋、まさしく11月頃になって浮上し、すぐに話が決まったことがうかがわれる。文章は、それまで京都にある複数の学校へ出講していたが、この年4月からは週に2度ずつ、神戸にある関西学院高等学部へも出講しており、新京阪電車沿線への転居はより望ましいものだったと推測される。

#### おわりに

以上の検討により、「向日庵私版」と命名されたのは1932（昭和7）年11月のことであり、まさに同時期に向日町の西向日町住宅地への転居が決まっていたことを確認することができたわけである。「この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬ向日葵を歌ったブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家ファン・ホッホに因んで向日庵と名づけられた」（「向日庵発願記」）のはそのとおりであったろう。そして、それを構想した寿岳夫妻の念頭には、これから転居することになる向日町の自然のなかで陽が注ぐ住宅地がひろがっていたことは確実である。



向日庵本 *Blake's Exoteric Writings* の標題紙に印刷された「向日庵私版」のマーク

<sup>5</sup> 「寿岳文章日記」1933（昭和8）年6月1日付け。向日庵資料。

<sup>6</sup> 「寿岳文章日記」1932年（昭和7）年9月11日付け。向日庵資料。「昼すぎから、等持院の地形や模様を見ようとして、一家惣出で老田君の家を訪ねた。山をかなり離れた土地柄で、光線はよくあたるが、日常の生活には不便が多さうである。道もわるい。ふと「唯理神之書」を二冊買った伊藤泰造と云ふ人の住居を見つける。すばらしく大きな別荘である。老田君の家は、その邸の庭園の一角にちよこんしている始末だ。尤もこの庭園のお陰で前に家が建たず、甚だ有難いと言つてはみたけれども。かへりに京極へよつて、かねよで久しぶりにまむしを食ふ。（後略）」

### 1.1932年（昭和7年、32歳）から戦争の時代へ

向日市は、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法、2008年）」の対象として指定された。最初に「歴まち」からみた、西向日町、向日庵、寿岳文章について考えたい。「歴まち」は、歴史・文化を生かしたまちづくりを対象に指定されるが、京都府では、京都市・宇治市に続く三番目の指定である。

寿岳文章は1933年（昭和8）に、南禅寺僊壺庵より西向日住宅へと転居してくる。1935年頃の向日町の人口約7千人（1887年頃は約4千人）、1932年の西向日住宅地組合員約50戸であった。向日町域は、西向日住宅と隣接する上植野や寺戸など旧村と新旧が織りなす文化を形成していたといえよう（『向日市歴史的風致維持計画』向日市、2018年8月）。

ここで「歴まち」における「向日町らしさ」の構成要素を考えてみると、古代では長岡京大極殿（史跡）や古墳、中世では向日神社（重要文化財）や南北の真経寺の日蓮宗、近世の西国街道、農山村の生業が、象徴的にあげられる。そこで近現代においては、西向日住宅の今に景観を残す昭和初期の郊外住宅の町並み、そして藤井厚二門下の澤島英太郎による環境に配慮した住宅として向日庵が現存する。寿岳文章（1900-92）・静子（1901-81）が紡いだ市民文化は、ブレイクやダンテのイギリス・イタリア文学研究にとどまらず、和紙研究、私家本としての向日庵本など、向日町、京阪神、そして日本を越え世界につながるものであった。NPO向日庵の活動により芽吹いた「埋土種子」としての向日庵は、向日市民遺産といっても良い。寿岳が愛した、条里の田、西国街道、筍栽培・竹の径など、生活の中の市民遺産とともにあることが重要であろう。

日本の文化財保護は、古社寺保存法（1897年）の国宝指定にはじまり、東京・帝室博物館から、上からのファイン・アート指定の歴史であった。史蹟名勝や世界遺産も「京都らしさ」も政治的に切りとられた文化であった。ナショナリズムとかかわり、何が日本美術であり文化財であるかが選ばれ囲い込まれた領域であった。それに対して、日露戦後の社会改良が進む中での柳田民俗学の成立や、1923年関東大震災を契機とする、柳宗悦の京都移住と「民芸」運動の開始により、国家が定めた美術の規範を相対化し、庶民や市民の生活に寄り添った下からの美の再評価が始まった。まさに寿岳家・向日庵は、近代の市民文化を象徴する存在であり、上からの文化財指定ではない市民の文化遺産といえよう。明治以降、東京中心、上からの指定の文化財保護制度を相対化し、そこからこぼれ落ちる民芸の価値、「用の美」すなわち生活の中的美を柳宗悦は見出したが、そうした世界を寿岳文章は共有した。寿岳の「生活」を大切にす家庭生活のなかから、紙漉・和紙研究や、ブレイクやダンテを日本においてどう受容するかというまなざしを獲得していった。

寿岳文章が活動した場としての西向日住宅を考える。向日町は、豊臣秀吉が整備した向日神社の門前の町場として、乙訓郡の中心であり、乙訓郡役所、向日町役場、警察、郵便局といった官衙、乙訓高等小学校、乙訓銀行などが置かれた、求心的な町場であった。戦後、向日町は没落する「大英帝国」のごとく地盤沈下し、農村であった新興・長岡京市が乙訓郡の中心であったかのような錯覚をもたらした。新京阪電鉄が郊外住宅を千里山に続き、西向日に立地したのも、乙訓郡における向日町の中心的位置にあった。かくして寿岳文章・狩野直喜・河合卯之助らが、田園都市としての向日町に居を移す。

昭和戦前期には、大正デモクラシーをへた市民文化や、1923年関東大震災を契機とする大衆文化の光芒をみることができる。



手漉き和紙を用い、夫婦で彩色した、向日庵本は、彼が 30 代から 40 代の壮年期に取り組んだ日本の私家本の一つの到達点である（長野裕子「寿岳文章と向日庵本」『寿岳文章 人と仕事展』図録、向日市文化資料館、2021 年）。『唯理神<sup>ユリゼン</sup>之書』(1932 年)、『セルの書』(1933 年)、『無染<sup>むぜん</sup>の歌』(1933 年、**図 1**)、『無明<sup>むみょう</sup>の歌』(1935 年)、『永遠之福音』(1938 年)の詩人ウィリアム・ブレイク五部作、民芸運動の盟友、式場隆三郎訳『テオ・ファン・ゴッホの手紙』(1934 年)、芹沢銈介の合羽刷手彩の『絵本どんきほうて』(1936 年)、そして全国調査を踏まえた『紙漉村旅日記』(1943 年)と豊かな世界を生み出した。

寿岳はいう。

思想と工芸との二つの世界を密に結び合わせようとするのが私の願いである。この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬ向日葵を歌ったブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家フォン・ゴッホにちなんで向日庵と名づけられた。

そして茶の葉の紋をシンボルとし、「書物工芸」という言葉も生み出す（「向日庵私版発願記」『ブレイクとホキットマン』第 2 巻第 1 号 1932 年、『書物』1939 年、『寿岳文章書物論集成』沖積舎 1989 年所収、以下『集成』）。

昭和七年刊の『唯理神<sup>ユリゼン</sup>之書』を最初とする向日庵私版事業は、戦後間もなく、その活動をやめてしまった。  
(中略) 私が向日庵本作成に情熱をそそいだ期間は、日本国政府が英語や英文学の学徒を国賊のようにいくたし、大学の英米文学科がつぎつぎととりつぶされた時期にあたる（「わが『書物』の思い出」1986 年、『集成』所収）

との回顧からは、「思想と工芸」結びつけ、ブレイクやゴッホの向日葵に憧憬する、「向日庵」との名づけがうかがえる。向日庵本の時代は、まさに 1930 年代に始まり戦時下を通じての営みであった。英文学者としてのウィリアム・ブレイクやホイトマンへの「東洋人」としての独自の解釈や受容と、紙漉や民芸研究が花咲いた時代であった。また日本の大衆社会・文化が 1937 年の日中戦争の直前まで隆盛であった時代状況をも反映した。

別稿で述べるが、寿岳文章は 1941 年からのアジア・太平洋戦争下においても自由主義的思想を堅持するとともに、天皇崇敬をナショナリズム・日本文化論と結びつける日本主義の影響をも受けることとなる。

1943 年に向日庵本の集大成として 150 部限定で出版された『紙漉村旅日記』は、芹沢銈介による表紙と小間絵とともに、綿密な全国調査に裏づけられた紀行文学ともよめるものである。もともと寿岳は、ウィリアム・モリス (1834-96) の中世の手仕事を理想とする印刷工房「ケルムスコット・プレス」のイギリスの私家本や手漉紙に関心を持っていた。しかし文学者や思想家による日本ファシズム連盟が結成された 1932 年以後、「英語を国語とする英米両国との文化交流の排撃が日まじりに露骨となり」、研究に支障がでてくる。そうしたなか恩師、京都帝国大学国文学者新村出 (1876-1967) は、「しばらく外国の手漉紙研究をさしおき、和紙の歴史地理研究に専念してはどうか」(寿岳文章「和紙とわたくし」『別冊 太陽』40 号、1982 年)とアドバイスした。そこで 1937 年 10 月から 40 年 3 月まで、寿岳は妻静子と全国の紙漉村を調査旅行にかけた。



図 1 『無染の歌』(向日庵本、1933 年、向日市文化資料館写真提供) 扉絵

柳宗悦（1889-1961）の1935年7月23日付<sup>かなせき</sup>金関丈夫宛書簡には、「Hitler の実際の人気如何、日本も軍国主義でこまりものです。併し吾々の民芸運動は一番実質的な愛国運動である事を疑ひません、さうしてそれが単なる愛国でなく、却て国際的意義を有つ事をも疑ひません」（『柳宗悦全集』第21巻、筑摩書房、1989年）とある。この言葉からは、民芸運動が「一番実質的な愛国運動」として、日本文化を生活の中から掘り下げ、常に「国際的意義」のなかで進められていたことが理解できる。

戦時下における自由主義思想の堅持や日本文化への庶民や生活からのアプローチの営みと、天皇崇敬と国際情勢からの孤立する日本主義とのあわいという今後の研究課題もある。戦時下における自由主義と日本主義とのあわいという難題に、赤澤史朗はひとつのヒントを与えている。日本主義イデオロギーによって「保護された伝統文化の世界が、しばしば軍国主義や日本主義の圧迫から人々の逃避する場」であったと（赤澤史朗『戦中・戦後文化論』法律文化社、2020年）。

## 2. 日本における欧米文化の独自の受容と創造

寿岳文章の人生を考える上で、欧米への渡航体験がないことは一つの特色である。その理由として1934年に関西学院大学の講師となり生活も安定した34歳の壮年期に、すでに英米文学を研究することや英国への留学が困難な状況にあった一要因も考えられよう。

寿岳は、向日庵を拠点としながら、1930年代から欧米の学者・文化人と交流した。『仙人掌帖』（寿岳家来訪者記念著名録）には、1933年4月3日米国の手漉紙研究者ダード・ハンター、1934年7月23日英国の陶芸家バーナード・リーチ、1938年9月14日英国領事館員ジョン・ピルチャーの著名がみえ、1929年から日本的でオリジナルな造本の『ドン・キホーテ』の製作依頼をしたカール・ケラーやマサチューセッツ在住の陶工グリーンなどと、丁寧で親愛にみちた交友関係を築いた（『寿岳文章 人と仕事展』図録）。寿岳は向日庵という世界に開かれた小宇宙で、生活を大切にしつつ、書齋人としての読書・研究に没頭し、紙漉の全国フィールドワークにでかけた。寿岳は、1933年に来日したダード・ハンターの *Papermaking Pilgrimage, Japan, Korea and China* にちなみ、自ら全国の旅漉き村調査を、「papermaking pilgrimage」と称していた（『寿岳文章日記』1937年4月5日）。

さて寿岳文章の出発点になったブレイク研究は、関西学院高等学部文科英文学科のときの卒業論文題目が当初は「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華嚴思想の用語」との構想であった。このように、仏教やキリスト教の教養の中から「宗教的真理」を追求し、仏教思想の中からブレイクを理解しようとするものであった（中島俊郎「宗教的真理の探求」『向日庵』4、2021年）。

1922年（大正11）に寿岳は、東京の柳宗悦を訪問し、『キリヤム・ブレイク』（1914年）著したブレイク研究の先達と出会うこととなった。柳は、1923年の関東大震災後に京都の吉田山腹に移住し、東寺の骨董市の豊かな世界に触れ、従来の「下手物」から飛躍させて「民芸」概念を生み出していく。そして1927年のブレイク百年忌記念展の開催を寿岳と協業し、雑誌『ブレイクとホヰットマン』（同文館）の刊行をともに進めてゆく。そして寿岳は、ブレイク研究の集大成として『キルヤム・ブレイク書誌』（ぐろりあ そさえて、1929年）、『ブレイク抒情詩抄』（岩波文庫、1931年）を刊行した。

寿岳は詩人で宗教人であったブレイクの「彩色印刷法」を、「思想と工芸との世界」に結びつけた向日庵本として、独自に昇華させた。

こうしたイギリスの文学や文化研究の日本的な展開は、『キルヤム・ブレイク書誌』の執筆過程で、ブレイクの中国や朝鮮における受容にも寿岳が関心を示していることから理解できる。寿岳文章宛土田杏村書翰（1927年8月23日付）では、杏村は、吉野作造や周作人（日本文化研究者・魯迅の弟）らに直接、問い合わせることをアドバイスし、中国は「同人雑誌風の熱烈な団体」がある妙な国なので「何処かにブレイク愛好者」がいる

だろうと述べた。寿岳は、ブレイクの東アジア世界の受容という単なる西洋文化の紹介にとどまらない志を持っていた。

ウィリアム・モリスが草した「ケルムスコット・プレス設立の目的について」では、手漉紙については15世紀の製紙業者に倣い、材料はリネン（麻）をもちい「簀目」（針金の漉型）のケント州産の漉紙を使用していた（『書物工芸家としてのモリス』1934年、『集成』所収）。寿岳はモリスの本作りを充分理解した上で、すぐれた和紙の卓越性を、ダード・ハンターら外国の手漉紙研究家が気づいても日本人自身は無理解であると歎き、向日庵本の素材に手漉和紙をもちいることとした。

式場隆三郎（1898-1965）は、日本の私製本の「<sup>そうていし</sup>装釘史」において、大正期を岸田劉生の仕事を代表させ、昭和戦前期には寿岳と芹沢銈介（1895-1984）の協業に象徴されるとみた。

寿岳文章兄が今度「向日庵」といふものを創設して、良心的な出版を開始することになった。寿岳兄は人も知る如く書誌学者であるが、単なる書誌学者ではなく、美を生かすことに秀でてゐる。同兄の今迄の著作は内容のよさは云ふ迄もないが、装釘の美しさも無類である。私は同兄と芹沢兄とが結びついたことを意義深く思つてゐる。この二人のコンビナチオンによつて、我国の出版界に美しい光が照り輝くと思ふ。大正の装釘史には岸田劉生が不滅の足跡を印したが昭和はこの二兄〔寿岳・芹沢〕によつて飾られるであらう。（式場隆三郎「通信 静岡より（ろ）」『工芸』1933年、26号、玉城玲子氏の教示による。傍線高木、以下同じ）

戦時下に英米研究が難しくなる中で、寿岳は手漉き和紙による向日庵本という独自の世界を開拓してゆく。このこととかわり英文学者の佐藤光は、戦時下に日本の英文学者が矛盾なく戦時協力した理由について、明治以来、学術を思考停止で直輸入した伝統に位置づける（「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」『向日庵』第3号、2020年）。しかし寿岳は、仏教思想とキリスト教への深い理解の下、ブレイクの *Songs of Innocence* を蓮の花を指す『<sup>むせん</sup>無染の歌』と訳し、*Songs of Experience* を「無明」は「煩惱」であり本来<sup>いちじよ</sup>一如とする「大乘仏教の語彙」を用い『<sup>むみょう</sup>無明の歌』とした（「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大なる出会い」1990年）。

ドン・キホーテを鎌倉武士の冒険譚に翻案した芹沢銈介作『絵本どんきほうて』（1936年、向日庵本）への寿岳の貢献も、押しつぶされそうな時代のなかで既成の価値観を相対化し、自由や生きることを問う普遍性を求めたと思われる。

向日庵本の最高峰である『紙漉村旅日記』（1943年、向日庵）に結実する「手漉和紙の歴史地理的研究」も、和紙生産が総力戦下で資源となる追い風があったことは確かであるが、その本質は寿岳による欧米文化の独自の受容と創造がもたらしたことにあった。

### 3. 『絵本どんきほうて』（1936年）

騎士道物語『ドン・キホーテ』について、寿岳文章、自らが「演出家」、芹沢銈介を「演戯者」と称して完成させたのが、『絵本どんきほうて』（向日庵本、1936年）である。漆絵や題箋は、鈴木繁男の手になった。

『ドン・キホーテ』はスペインのセルバンテス(Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616)の傑作で、正篇は1605年に、続篇は1615年に出版された。「文芸復興期人」であるセルバンテスは、中世から近代への過渡期に、中世への「批判と諷刺」ととも



図2 『絵本どんきほうて』（1936年、多可町寿岳文庫所蔵）「世に名も高き初の手合はせ」

に、「中世精神」の「今や人間が失はうとする最も高貴なもの—愛と信仰に拠る不可能の可能化、摂理への絶対的な信頼、そこから生れる疑惑なき人生観—の魅力」にとらわれたと、寿岳はみなした。そして1936年10月に開版した『絵本どんきほうて』には、洋の東西を問わない「個性的でなくて普遍的であつた中世の精神」が表出した。たとえば第11図の滝の荒行の場面（古の物語に倣ひて山中の行）では、「滝壺の水が御輿かきの若者のやうに奔涌し、ドン・キホーテの顔に悲壯な皺が寄つてゐるにも拘はらず、山水の布置甚だ静かにして、無声の音を聞く思ひ」が伝わる。立体の動ではなく、平面の静の表現に、寿岳は中世の精神をみいだした（「挿絵説明」『工芸』76号1937年）。有名な、ドン・キホーテが風車に挑む場面は、第3図「世に名も高き初の手合はせ」であり、鎌倉武士の出で立ちのドン・キホーテが水しぶきを上げる水車に突進することとなった（図2）。

その製作の経緯は、寿岳文章「絵本どんきほうて由来」（『工芸』76号、1937年）に詳しい。

1929年9月9日付、寿岳文章宛てた柳宗悦の書簡、ボストンからの第1信に、「米国人でKellerと云ふ人がDon Quixoteに関する本を蒐集してゐる」と知らされ、ハーバード大学理事で実業家のカール・ケラーが、佐々木邦の翻訳本と松井松翁の「鈍機翁冒険譚」を必要としているとの話であった。寿岳は「早速古本屋を探し廻つて、島村抱月・片上伸共訳の二冊本以下、第一回目に数冊」を送付した。世界のお国ぶりのなかで世界文学としての『ドン・キホーテ』が受容されることへの関心を、ケラーを通じて柳宗悦も寿岳も共有していくことになった。

1930年2月4日、寿岳に宛てたケラー書簡（英文書翰は寿岳自身が訳している）では、

日本訳ドン・キホーテのわるい唯一の点は、日本の画家が、日本の手法を用ゐて挿絵すべきなのにそれを一向やつてゐないことである。それがあつかうと私はまづ第一に眼を光らせたのだが。セルヴンテスの心持を、日本人こそ真に同情して、興味深く新鮮に解釈するだらうと思つたからだ。思ふに、あらゆるアジア民族中、日本人こそその立派な伝統により、かの哀れな老「ドン」の心を動かした騎士道の精神—それは屢々誇張されてゐるが—を了解し感得する最善の国民であらう。

と、既成のドン・キホーテ訳の直輸入的解釈と挿絵手法に飽き足りないケラーの心情が吐露されていた。

ここで寿岳文章の日本的な『ドン・キホーテ』の解釈とその美術工芸的具現への模索が始まった。のちに述べるが、私はここに芹沢銈介という協業者を寿岳が見出した契機を、1932年11月8日から10日間にわたった、芹沢・<sup>とのむら</sup>外村吉之介・柳悦孝による「第1回新興民芸品展」に求めたい。京都の文化的なハブであった新聞記者岩井武俊の本拠、大阪毎日新聞社京都支局（京都大毎会館・三条御幸町・現1928ビル、図3）における、同展開催が契機と考えている。岩井武俊は、島津製作所での勤務を経て、大阪毎日新聞社の記者となり、1920年の茨木キリシタン遺物の発見後には、京都大学の考古学研究室とメディアの発信につとめ、1928年の明治維新60年には維新の史蹟の顕彰、そして『京郊民家譜』（大阪毎日新聞社京都支局編、便利堂、1931年）を発売するなど民芸、民俗学への関心も深かった。1928年に開館した京都大毎会館のホールでは市民向けの文化講座も開かれ、若き日の林屋辰三郎も登壇している。市民へのメディアと文化とアカデミズムをつなげる、メセナとしての新聞社の原形をつくった。

この1932年12月の「第1回新興民芸品展」に芹沢銈介は、物語を自らの美術工芸に昇華させた初めての作品として、「伊曾布物語四曲屏風」を出品し



図3 京都大毎会館（現1928ビル）

た。寿岳は、民芸にかかわる関西の催しには必ず足を運ぶ習いであった。寿岳はここでイソップ物語が日本的に翻案された作品を目の当たりにしたことが、その後、芹沢銈介とのコラボにつながるのではないか。「寿岳文章日記」に当該期の記載はないが、外国の物語を日本的に翻案する芹沢による最初の試みとして、「伊曾布物語四曲屏風」を『絵本どんきほうて』にむけての起点と考えたい。

式場隆三郎作成の「芹沢銈介年譜」(『工芸』76号)には、1933年2月の寿岳文章訳『無染の歌』の装幀を契機として「寿岳氏との友情結ばる」と記述される。同年6月に向日庵に転居した寿岳に芹沢はお祝いとして、伊曾保物語の軸物「狐と葡萄」を贈り、日々、寿岳は芹沢作品を眺めて暮らすこととなった(「絵本どんきほうて」のころ)『芹沢銈介全集』第1巻、中央公論社、1980年)。

ふたたび「絵本どんきほうて由来」の1935年の春から夏にかけての寿岳の回顧に戻る。

私は幾度か河井〔寛次郎〕さんを訪ね、画家に絵をかかせて送るよりは、いつそ丹緑本風の絵本を作った方がよくはないか、それならば小部数に限られるとしても、書物としての客観性も持ち得るしセルブンテスの作品を媒介として美の一つの姿が出現することにもなるし、と相談したところ、河井さんもそれに大賛成で、丹緑本によい理解があり、遠慮なくものの言へる間柄の芹沢君にたのむのが結局一番よからうと云ふことに話が落ちついた。

丹緑本とは、江戸初期の御伽草子・仮名草子などの墨摺の挿絵に丹や緑で彩色されたもので、寿岳文章のブレイクの四部作にもつながる技法や味わいがあった。のちの1980年に寿岳は回想して、当初、『大菩薩峠』の新聞連載の挿絵を受けもった石井鶴三の登用案も考えたが、柳宗悦、河合寛次郎との三人の協議の末、合羽版の技術をもつ芹沢銈介の起用が「西洋文化への日本文化の大きな寄与」になると結論づけている(「絵本どんきほうて」のころ)。そして河合寛次郎と寿岳は、芹沢銈介に正式に製作依頼することとなった。

1935年10月18日に芹沢の内諾が得られ、内閣統計局の民芸同人・水谷良一が古本屋でもとめた邦訳『ドン・キホーテ』を芹沢に送った。

同年11月23日に、三条の京都大毎会館で三人展が開催され、芹沢・外村吉之介が来宿した(「寿岳文章日記」)。そして芹沢の製作への苦悩が始まり、ドン・キホーテの長い物語を読むのに閉口したと後に述懐している。督促するケラーからの要求は厳しかった。

わしの欲しいのは日本の心に通ふドン・キホーテの精神で、その形態ではない。たとへば、日本にはスペインで使はれてみるやうな風車はないと思ふ。ないものをあるやうに見せかけるのはつまらぬことぢや。日本にある風物、伝統、精神によつて、ドン・キホーテを解釈したのでなけりや、わしは満足せねぞ、悴よ！(寿岳訳)

かくして1936年9月上旬、2場面の合羽刷手彩色「試し」が寿岳の下に送られ、「異様に眼を輝かして馬を囚人の中へ乗りすすめるドン・キホーテも、書巻を火中する牧師補も媼も、心憎いほどわが武家時代の人物」であると、翻案された『絵本どんきほうて』の合羽刷のできばえに寿岳は感嘆した。アメリカに試し刷りが送られ、ケラーとボストン美術館東洋部の富田幸次郎は、芹沢の合羽刷の近世原面の所在を尋ねるが、寿岳は彼らに「日本化されたドン・キホーテを識別」できない！と、快哉を叫んだ。

記念すべき1936年10月24日、日本民芸館の落成式に、芹沢の『絵本どんきほうて』の何場面かと、棟方志功(1903-75)の「華厳譜」が民芸同人による象徴的作品として飾られた。また同年12月10日からの大毎京都支局の第4回新興民芸会(芹沢・外村吉之介・柳悦孝)で京都でもお披露目された。

1937年3月28日、『絵本どんきほうて』15冊を寿岳はケラーに発送した。また柳宗悦は同年2月21日に、イギリスのバーナード・リーチに宛て、棟方志功の版画や芹沢の『ドン・キホーテ』を紹介している（『柳宗悦全集』第21巻）。

さて「寿岳文章日記」（向日庵所蔵）と「岩井武俊日記」（岩井家所蔵）により、この間の経緯を繙いてみよう。

1932年11月10日より10日間、京都大毎会館にて催された「第1回新興民芸品展」について、同年11月7日の「岩井武俊日記」には、以下の記述であった。

明日より開催の静岡芹沢銈介・平松実・浜松外村吉之助、柳悦孝<sup>よしただか</sup>氏等作、染織展準備のため、上記諸氏柳氏夜に入り河井・浜田・村岡氏等来局、階上ホールに陳列す。三島亭にて夕食饗応、十一時過、五養軒にて茶を供す。○出品点数約四百、型染更紗、着尺<sup>きじやく</sup>、帯地、刺物、ショール、ネクタイ、アルバム、紙挟等種類也○中赤毛白縁の敷物二枚（三十円）（内一枚大に過ぎ、織りなほしのため持ち帰り織り直して直送の筈）甲子用ショール一枚（七円）を購ふ。

このときにはまだ若輩の寿岳文章は岩井武俊との面識はなかったものと思われる。しかし先述したようにすでに寿岳は、柳と親交があり、民芸運動に強い関心を有しており、まずこの展覧会を訪れなかったことは考えられない。外村吉之介もゆかりの関西学院出身、織物作家でクリスチャンである。

岩井武俊との交友は、1934年4月のウィリアム・モリス生誕百周年を記念する「モリスの夕べ」の開催を契機に深まったようである。当初、新村出の紹介で大阪朝日新聞社と相談するがうまくゆかず、「柳さんとの関係にてかなり懇意の間なる」大阪毎日新聞社京都支局長の岩井武俊に寿岳が相談したところ快諾され、「〔京都大毎会館の〕会場の設備、紙上の予告等に極力応援するとの話にすぐとりきめ」となった。かくして4月24日にモリス生誕百年記念協会主催の「モリスの夕べ」では、寿岳文章「書物工芸家としてのモリス」、新村出「モリスを憶ふ」ほかの6講演が、京都大毎会館で執り行われた（新村宛寿岳書翰、1934年4月13日、同年4月19日、重山文庫）。

翌1935年3月27日の「寿岳文章日記」に岩井武俊が登場する。「午後三時すぎ、柳・河井氏来る。夕方より共に京都に出で、岩井さんが〔料亭の〕浜作へ招待する」。同年11月23日から25日と開催された京都大毎会館での「外村・芹沢・柳悦孝の三人民芸展」にかかわって、初日の11月23日の「岩井武俊日記」には、「今日より支局楼上にて外村・芹沢・柳三君の民芸展あり（二十五日まで）昨年に比し、種数少なきも作些優れたり」と記された。

同じ11月23日の「寿岳文章日記」は、興味深い。

芹沢・外村〔吉之介〕君等の展覧会あり。（三条大毎に）。午前中、静子と出かける。外村と三条のそば屋で昼食。この夜 DonQuixote 絵本の相談のため芹沢君、外村君泊り、〔岩橋〕文夫も来り、大繁昌。

三条のそば屋は「田毎」だろうか。外村と芹沢が、『絵本どんきほうて』の相談のために向日庵に泊まっている。岩橋文夫は静子の弟である。

1936年1月6日の「寿岳文章日記」には、「朝、潤をつれ静子と二人河井さんを訪問。良子ちゃんも一緒に松竹座へ案内せんとて。岩井さん来合せ、松竹座まで送ってくれる」とある。岩井武俊が、寿岳一家と河合寛次郎家の良子を新京極の松竹座まで車で送っている。

同年12月9日の「寿岳文章日記」。「明日から大毎で芹沢・外村・柳悦孝三人の展覧会あり、夜手伝ひにゆく。

Don Quixote の見本も出す。今夕、芹沢君来宿」とあり、『絵本どんきほうて』が京都で始めてお披露目される前夜、芹沢は向日庵に泊まっていた。

『工芸』76号「絵本どんきほうて」号が刊行された後、1937年5月2日に、新村出に宛てた寿岳文章書翰（重山文庫）では、「ドンキホーテゑとき」を伝えている。「所謂「風車の冒険」なれど、風車、ここにては水車となりをれり。日本の風物なり」と。

戦後に芹沢銈介は、「この時期の我々仕事する者は、一人一人ながらすべてが、理屈なしに貧しいながら恵まれた仕事の世界につつまれて働いていたと思います」と回想している（『これくしょん』第61号、1975年、吾八）。

向日庵本の時代を考えると、『唯理<sup>マツリ</sup>神之書』にはじまる五部作のブレイク詩集、『絵本どんきほうて』に象徴されるような紙漉和紙や合羽刷といった日本の技法、日本の文化・思想に裏づけられた外国文学の翻訳・翻案といった、独自の書物の創造がなされていた。そして素材としての紙漉和紙を調査、採集し、幅広い学知とあいまった向日庵本の金字塔が『紙漉村旅日記』（1943年）である。

#### 4. 『紙漉村旅日記』（1943年）と「実物貼附」の世界

戦時下1943年に刊行された『紙漉村旅日記』は、向日庵本の高みである。その「実物貼附」という方法論を、民芸の普遍的方法論の中にみることと、その現地における「実地調査」による採集という科学的実証性に着目したい。序文にいう。

書物工芸の重要な一部門としての紙、特に和紙に、私が興味を持ち始めたのは、もうかれこれ十五六年も昔のことになる。もとより本務の暇々にやる仕事なので、はかばかしい進展をもせなかつたのであるが、研究そのものはわが国固有の文化の闡明に資すると認められたためであらうか、昭和十二年以降引きつづき三ヶ年間、辱くも高松宮家から有栖川宮記念学術奨励金を頂き、わが国に現存する手漉紙業の歴史地理的研究に従ふこととなつた。その眼目とするところは、現地の実地調査にある。（中略）

旅に出ると、必ず日記をつけることにし、原則として、沿路の叙景や紙漉村の描写は妻が、紙漉に関する専門的な記述は私が、それぞれ担当した。しかし妻が役場に居残つて記録や文献を写し、私が漉家を経巡つて村情を描いた場合もある。また私だけが旅に出て、何もかも独りでやつたこともある。いづれにしても、あとから思ひ出して書くと言ふのでは、誤りも生じ易く、億劫にもなるので、私どもはその場その場で日記を整理する方針を立てた。そのために、朝は五時前に起きてみながら、夜は十二時を過ぎてなほ日記の筆を執ると言ふやうなことも少くなかつた。しかもその朝と夜との間には、二つも紙漉村を見てみたりする。今にして回顧すれば、あれでよく身体が続いたものと思ふ。

旅行中に取つた夥しい写真は、年経ると共に薄れてゆくであらうし、買ひ集め貫ひ集めた紙は、紙魚の餌食となる処がある。そこで私は、旅日記を整理し、これに写真百九十九枚、紙百三十四種を添へ、向日私版本の一つとして、出さうと思ひ立つた（中略）

時局下、まことにやむを得ないことであるが、わが国が戦争目的を完遂した暁には、この由緒正しい手技、この尊い伝統の和紙抄造の姿を忠実に録した私たちの旅日記は、よしささやかにせよ、文化史的な意義を持つ、と自負し得ないであらうか。

このように、1937年（昭和12）から3年間、寿岳は新村出の推薦で有栖川宮記念学術奨励金を得て、「手漉紙業の歴史地理的研究」に従事した。妻の静子とともに、東北・岩手県から九州・鹿児島県までの全国をまわり、江戸時代以来の手漉き紙が地方に広く残る最後の瞬間、1930年代の和紙134種を体系的網羅的に「実

物貼附」してみせた(図4)。府県庁を介した村々の調査には、内閣統計局労働課長・水谷良一の連絡によるお膳立てが大きく、個人の調査としては効率の良い仕事が可能となった。装幀や折込地図の装幀には、向日庵本の協業者、芹沢銈介の力を借りた。

『紙漉村旅日記』が公刊された、1943年(昭和18)という年は、「実物貼附」の方法論が、戦時下の困難のなかで民芸同人によって花開いた年であった。柳宗悦は、1939年の『琉球の織物』(日本民芸協会)に続いて『和紙の美』(私家本、図5)を、芹沢銈介は『琉球の形附』(私家本、図6)を刊行した。そして仙台の及川全三の『和染和紙』も当初は1943年刊行予定であり、物資の不足の中で頓挫して、戦後の1948年に発行された。

そもそも「実物貼附」は、1931年(昭和6)に創刊された日本民芸協会の月刊雑誌『工芸』の方法である。『工芸』(24号、1932年)芹沢銈介特集にいう。

本号の挿絵 凡て芹沢銈介君の作品である。写真に撮るのを止めて、実物を貼附してある。之以上の挿絵はない。只雑誌の大きさの関係上、又挿絵としての美しさを保たせる関係上、こゝには大柄のものを多く載せることが出来ない。それ故選んだものは必然小柄のものが多くなつてゐる。それに何れも断片より入れることが出来ない。併し布類の美しさを知るために寧ろ小裂れで見るのが便利である。恐らく此小さな幾つかの裂(きれ)に於て最もはつきり作者に逢へるであらう。それに細かいものは一層親しさを以て眺めることが出来よう。実物故、別に説明を要しない。

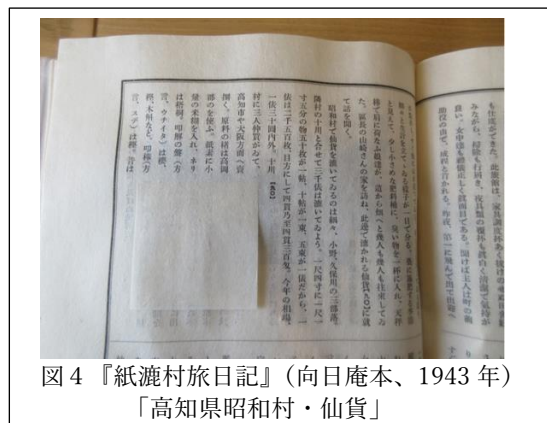


図4 『紙漉村旅日記』(向日庵本、1943年)  
「高知県昭和村・仙貨」



図5 柳宗悦『和紙の美』(1943年)  
「雁皮紙・天然色・出雲岩坂」

窓からの風景の手織紬、小紋風の紬、牡丹模様の紬、因州木綿、きびら麻、八戸の麻など6点が雑誌上に展覽され、そこで実物に触れて作者に逢える。

『工芸』小川紙の特集(59号、1935年、図7)は、26点の紙見本、総192頁からなる充実ぶりである。「挿絵小解」として「挿絵は凡て小川紙とその加工紙とで、紙料は一種の三椏紙みつまたと二種の桑紙こうぞとを除いて凡て楮皮。中に新作を交へ、就中絞紙と、色紙と、紋紙とは新規試作に係る」と説明している。

小川紙は、柳自身が「和紙好きの私達でも甚だ迂闊だつた」とするよう、東京近くの大きな紙漉場であった。柳は、埼玉県商工課長・山口泉の「熱心な慫慂」により、1934年秋に、水谷良一、バーナード・リーチとともに初めて訪れた。『工芸』特集号では、芹沢銈介が紙の色彩と紋様を、技術者として永松清一郎が紙の質を担当した。

1937年の『工芸』76号は、「どんきほふて」号である。その巻末に掲載された「月刊「工芸」会員募集」では、「装幀 別漉和紙型漆 用紙 手漉和紙約八十頁 挿絵 原色単色約十二葉小間絵入」と、基本的なコンセプトが広告されている。表紙に木綿織物や色染和紙、芹沢の型染を使うことも定着した。



図6 芹沢銈介『琉球の形附』(1943年)  
「型附裂・びん型・黄地・木綿」



柳宗悦ら民芸同人に「実物貼附」の方法論は共有されていた。1943年の及川全三『和染和紙』の完成にむけて、柳は仙台の及川に「和染紙の本〔和染和紙〕、是非々々九月半頃迄に完成希ひます、貼付すべき実物の大きさ、切り方など、御考へ詳しくおしらせ下さい」（1942年8月21日及川全三宛柳宗悦書簡『柳宗悦全集』21巻中）と指示している。1942年12月26日にも、柳は静岡の三代沢本寿宛に『和紙の美』（私家本）のために信州の代表的な紙をもとめ、そして同月28日には「君の型染紙も是非挿絵に入れたく、実物を貼附したい」との手紙を送っている（『柳宗悦全集』21巻中）。

『和紙の美』（私家本）に向けての柳の熱意は大きく、「〔和紙の美〕と題する本を出しその挿絵に、芹沢、及川〔全三〕、三代沢、鈴木〔繁男・漆絵〕、塩沢〔源吾・染物〕その他みんなのを入れ、実物を貼附したいのですが、若し貴君が紙布を織つて下されば此上ありません」と、外村吉之

介に書き送った（1942年12月31日外村吉之宛柳宗悦書簡『柳宗悦全集』21巻中）。同書は、「オールスターキャスト」になると豪語した（同年12月30日三代沢本寿宛柳書簡『柳宗悦全集』21巻中）。

こうした「実物貼附」という実証的な科学性にもとづく日本文化の独自の再発見という寿岳たち民芸同人の営みにさえも、戦時下という時代状況による日本主義の罣が待ち受けることとなった（この点については別稿で深めたい）。

#### まとめ

第1に、1932年の『唯理神<sup>ユリゲン</sup>之書』に始まる向日庵本の時代は、大正デモクラシー以来の市民文化・大衆文化の最後の光芒がみられるとともに、戦争の時代であった。そして30~40代の壮年期の寿岳文章は、充実した仕事をやり遂げた。

第2に、向日庵本には、寿岳が芹沢銈介に托した『絵本どんきほうて』（1936年）における合羽刷という日本近世の技法による鎌倉武士どんきほうて、作男さんちよの冒険譚、ブレイクの詩を寿岳が翻訳し夫婦で手彩色を施した五部作のブレイク詩集、3年間にわたる全国の紙漉場調査を踏まえ貴重な1930年代の日本の和紙文化を切り取り保存して見せた『紙漉村旅日記』（1943年）など、高い峰々が聳える。向日庵本の営みは、選び抜いた和紙を使った、装幀、本作りであった。それは寿岳独自の欧米文化の日本的な受容や創造であった。なぜなら寿岳には、仏教とキリスト教の思想を土壌とした体験・教養が基層にあり、彼は単なる「運び屋」の英文学者ではなかったからである。

第3に指摘したことに、和紙・織物・漆絵・型染などの「実物貼附」という方法は、1930年代に民芸同人の間に定着したものであった。それは科学的な実証に通じるものであり、読者が民芸や人々の生活に直にふれあうツールとなった。そして、寿岳文章の『紙漉村旅日記』が発刊された1943年は、物資不足のなかで、昭和戦前期の民芸同人の私家本の到達点として、柳宗悦の『和紙の美』、芹沢銈介の『琉球の形附』が同時に結実する、まさに戦時下最後の瞬間でもあった。

最後に、戦時下の日本主義と自由主義のあいについて展望を述べたい。

「寿岳文章日記」（向日庵所蔵）を繰っていくと、1937年の日中戦争勃発後も自由主義者として自己を貫く寿岳文章の姿がよみがえる。

1938年6月5日には、ブレイク詩集・向日庵本『永遠之福音』発刊について特高の聞き取りをうけ、新村出に相談している。翌1939年7月5日には、有栖川宮記念学術奨励金の高松宮邸御前講義を終えて、翌6日に氷川町の河上肇を訪問している（『紙漉き日記2』多可町寿岳文庫）。「紙漉き日記2」においては、河上の獄中



図7 『工芸』（小川紙特集、59号、1935年）「印刷紙・厚手生漉紙」

の話などを聞き、「不幸な日本の姿」と嘆息している。この記録は、そのまま戦後、随筆「氷川町時代の河上先生」として生かされ公表された。河上肇と接触すること自体が危険な時勢に、夭折した河上の息子の家庭教師を務めて以来の恩師とのつながりを大切に、英文学の師・石田憲次から河上の住所（東中野氷川町 37）を聞き出したのであった（1939年4月9日付寿岳文章・しづ子宛石田憲次ハガキ・向日庵）。同年7月26日には岡墨光堂で唐物の紙（15枚で3円）をもとめ、河上肇に送っている。10月16日には、河上から返礼として、「たどりつきふりかへりみれば山川を越えてはこえて来つるものかな」の色紙が届いている。

1939年8月16日には、治安維持法違反で捕まった新村出の息子猛に懲役2年の判決がでて、寿岳は心配のあまり新聞諸誌の報道を求めて健脾丸（薬屋）や向陽校へと町中を駆けまわる。同年9月3日、イギリスのドイツへの宣戦布告が報じられ、「またしてもこゝに人類の愚行が、くりかへされる。どこまでくりかへせばやむ文化の破壊か、この頃わが心憤懣にたへず」と記した。

1940年5月17日のドイツ軍のマジノ線突入を知り、「人間の大虐殺」と歎き、8月7日に救世軍幹部検挙の報に接し、「日本もいよいよ Nazism になってきた。宗教は事実存在し得ないのである」と嘆いた。9月18日の日独伊三国同盟には「憤懣やる方なし」と吐露した。

しかし一方で翌1941年1月19日には、「奉祝紀元二千六百年所感」として、「一億の民に代りて寿詞の「すすめむ」のみ声のあやにかしこし」「知るも知らぬも町のラヂオに寄りつどひこの感激の刹那をとどめよ」といった歌を詠んでいる。今後の検討課題である。

その後、アジア・太平洋戦争下の寿岳の思想には、大正デモクラシー以来の生活の尊厳や自由主義の思想を基層としつつも、単なるナショナリズムではなく日本文化を優越視し皇室への自然な崇敬を旨とする日本主義が覆うことが指摘できる。それは赤澤史朗が指摘する、戦時下で「伝統文化」に逃げ込む自由主義者のありように重なるだろう。

しかしながら民芸の思想である「用の美」や庶民・生活者の立場や思想は、戦時下に時局迎合の側面を有しながらも、戦後民主主義に芽吹く鉾脈を有し続けた。戦前・戦中時代の寿岳文章による向日庵本ダンテ詩集五部作や、『キルヤム・ブレイク書誌』（ぐろりあ そさえて、1929年）、『絵本どんきほうて』（向日庵、1936年）、『紙漉村旅日記』（向日庵1943年）などの仕事は、戦後にも生き続け影響を与える学問的な業績となった。

「寿岳文章日記」を繰ると、1938年3月30日に、寿岳一家4人はアメリカの陶工グリーン夫妻と都ホテルで昼食をともにし、その後、島津製作所で、グリーンが撮影した河井邸、国栖、信楽、長良川の鶴飼、製紙工程などの16mmフィルムを鑑賞している。寿岳は、家族との時間を大切に、夜には柳兼子のラジオを聴き、常に子供の健康・教育を気遣った。京都市中に連れ立って「オーケストラの少女」「舞踏会の手帖」「駅馬車」「無法松の一生」など、よく映画を鑑賞し、スター食堂・「うな井」かねよ・新京阪食堂で食事をした。

寿岳文章は、戦前・戦中においても「私たちは責任を重んずる生活者であり、思索者であり、また実行者でありたい」との矜持を持ち続けた（「向日庵消息第七信」1936年、『集成』所収）。寿岳文章の時代と向き合い葛藤した生き方には、日本国憲法下において市民社会の民主主義・平和主義の旗手として活躍する寿岳文章の営みが内包され、戦後、見事に開花したと考えたい。

## 寿岳文章の軌跡

中島 俊郎（甲南大学名誉教授）

2021年1月23日から3月21日まで開催された展覧会「寿岳文章 人と仕事展」（向日市文化資料館）は、じつに時宜をえた企画であった。と言うのも、寿岳の畏友であり、出版活動から民芸運動まで幅広い文化活動をともに展開した柳宗悦を検証する展覧会「柳宗悦没後 60 年記念展 民藝 100 年」（東京国立近代美術館、2021年10月26日-2022年2月13日）がほぼ半年後に開催された。また寿岳の親しい友人である、精神科医、式場隆三郎の展覧会「式場隆三郎 脳室反射鏡」（広島市現代美術館、2020年5月19日-7月26日）が少し先行して広島、新潟、東京において開催されていた。つまり寿岳文章展は、式場、柳展を合わせ鏡にして考察できる位置を獲得していたのである。加えて階上にて同時開催された展覧会「生誕 120 年 寿岳しづ展一書いて、暮らして、ともに生きて一」（NPO 向日庵主催）、ほぼ半年後に開催され、ズーム配信により世界中から参加をえた国際シンポジウム「20 世紀の和紙—寿岳文章 人と仕事—」（向日市文化資料館、10月16日）は、ともに寿岳理解に寄与する試みであった。

展覧会場へ入るとすぐに向日庵の床の間にかけてあった軸が展示されている。寿岳の筆で「但惜無上道」と墨蹟あざやかに書かれている。出典は『法華経』「勸持品第十三」にある「我不愛身命 但惜無上道」からであるが、仏の最上の教えを命をとして実践していくことを意味する。寿岳はこの言葉を指針として自らの人生を切り拓いていったのである。これは寿岳の事績を顕彰する本展覧会を要約する言葉にもなっているが、果たして寿岳はどのように人生を歩んでいったのであろうか。

展覧会は寿岳の多彩な活動が時系列に展示され、その幅広い文化活動を明瞭に映し出し、参観した人々から「寿岳さんって、すごい人だ！」という感嘆を吐露させた。そこには昭和初期からつくられた美しい向日庵本、全国の紙漉村を涉猟し集められた手漉和紙のコレクション、異なるジャンルを易々と越境する出版活動、民芸運動の推進などとともに、河上肇、新村出といった知識人との交流、詩人ブランデン、皇太子の家庭教師ヴァイニング夫人たちとの民間外交など、その広範囲にわたる文化活動が初めて一望のもとに紹介されたのであった。

時系列に陳列された展示は、文化活動を一目瞭然に示すには絶大な効果があった。だが逆にある種の「とまどい」を参加者に与えてしまった事実も否めまい。展示が幅広く密度が濃いゆえに、「寿岳さんって、すごいがどんな人だったのだろうか？」といった違和感も生れてきた。多彩すぎる活動が見る人々のなかで収斂できなかったのである。展示の最後の方に愛用した湯呑みが鎮座していたのが、私にはきわめて印象的であった。向日庵の居間に坐った寿岳が、「果たして私を理解できたかな？」と問いかけてきているような気がしたからだ。あの大きな湯呑みは、温和ながらも鋭い輝きを失わない寿岳の眼のごとく、展示場すべてを睥睨し象徴しているかのようであった。

寿岳文章がどのように生きたかという生涯の軌跡は、遅れて発行された図録『寿岳文章 人と仕事展』（寿岳文章人と仕事展実行委員会、2021年3月）の総論（pp.46-58）のなかに概略的ではあるが、描いておいた。また出版活動は「主要著作及び編纂本」として網羅はしていないが、リスト（pp.62-63）で明示した。それゆえ、展覧会とともになされた講演「寿岳文章の軌跡—新資料を中心に—」（3月21日）を基本にした本稿では、まず寿岳文章展の展覧会の意義を見据えて、その後、いかに人間形成がなされ、文化人として活動する表現力をどのような過程で体得したのか、といった根本的な問題を、幼少時代から関西学院高等部を卒業するまでの若き日々の行跡を通じて確認して考察しておきたい。

同じ播磨で明治の幼少時代をおくった寿岳よりもほぼ十歳年上の哲学者・思想史家、和辻哲郎（1889-1960）は、幼児期にある程度まで人格形成がなされると考えている。「人間の意識を発生的に考えると、最初の七、八年、あるいは十年くらいの中に、ほぼ一通りの意識の形態ができあがり、大人の世界に行なわれているいろいろな意味や価値を受け入れる準備が整うように思われる<sup>1</sup>」。鋭敏な幼き日の感受性は無数の経験を堆積し、意識の中で記憶を形づくっていく。その記憶の大部分は時や場所の烙印を押されていないもので、経験として思い出されることはない。そして意識の基底をなしているのは浮かびあがることのない「下積みの記憶」であり、ある刺激によって「思い出のからくり」から浮上してくる記憶は「例外的な経験の断片」であるという。幼少の日々、若き日の意識、記憶、そして営為は後年の活動と密接に結びついているだけでなく生み出す源になっているのである。よって本稿では、幼き日々の精神的な活動が後年の文化的な活動といかに連動しているのを考えてみたい。

## I 龍華院から竹林寺へー文学の開眼

寿岳は神戸の押部谷、高和にある真言宗、龍華院で四女二男の末っ子として生まれ、小林（後に鈴木）規矩王麻呂と命名されたが、十歳のとき、姉よしゑが嫁いでいた高野山真言宗石峯寺の塔頭である竹林院住職、寿岳賢隆の養子となって寿岳姓に改名し、十一歳で得度して文章と改名した。名前は父にあたる賢隆が兄敏一の法名文泉にちなみ文章と名づけた。その名前は、弘法大師の精神的自伝『三教指帰』の書き出しの「文の起り必ずゆえあり、天朗らかなるときは象をたれ、人感ずるときは筆を含む」を典拠にし、「筆を含んだ」ものが「文章」という意味である。やがて成長した文章自身は、名が体を表わすようにと自らを律して、「文章は千古の事、得失は寸心知る」（杜甫）という句意とともに、「質、文に勝てばすなわち野、文、質に勝てばすなわち史」（論語）という言葉も肝に命じ、「質」つまり先天的な素養、性格、そして「文」という後天的な知識、教養をいつまでも忘れまいと心に誓った。

**母親** まず先天的な素養という点では母とのつながりを考えて行きたい。亡くなる2年前に寿岳は「私が学芸というものに生涯を捧げるようになった発端<sup>2</sup>」は、母にあると感謝している。39歳で文章を生んだ母は「異様なほど普通の人ではなかった」が、文学的な素養があり独学で習字や歌をたしなんでいた。明石に同人雑誌を出していた歌の結社があり、一日がかりで歩いて往復し、檀家の漢学者が夫、快音のもとを訪ね、漢文や文人画を描きにきたのをよろこんでもてなした。明石を中心に儒者橋本関海（画家、関雪の父）の影響が強かった。寺での歌会が楽しみで、「ちりの中のいとくずをば拾いおきて心のあやも織りもこそすれ（いとくず）」という句をのこしている。小学生の文章少年が作った歌を一言でも批判すると、げんこつに見舞われたという。でも、寿岳は自分が人生を切り拓いていく原動力となったのは、母の不屈の精神と故郷の自然が後押し力づけてくれたからだと述懐している。大正から昭和にかけて20年間、母は庭の池に蓮を植え、自らの指で茎の組織を撚った糸をかがり藕糸（ぐうし）布を織り続けた。その半反ばかりの布を寿岳は終生大切に保存していた。この布を見にやってきた有名なハス博士こと、大賀一郎博士は同量の金に相当すると説いたというが、そうした物質的な価値は寿岳の眼中にはなかった。仏教徒の寿岳には、蓮の糸は現世と極楽浄土を結ぶものであり、「南無妙法蓮華経」という読経にたえず母の面影が見えたであろう<sup>3</sup>。画家村上華岳に観音像（図版1）を描い

<sup>1</sup> 和辻哲郎『自叙伝の試み』（中央公論社、1961）、p. 135。「フロイドの深層心理に味方をするわけではないが、抑圧とか、抵抗とか、宗教的情感とかいったものは、私の場合、幼年期や少年期にその原型をもっているように思われる。したがって私の心の自叙伝は、幼年期の思い出から書き始めねばならない」『わが心の自叙伝』（神戸新聞社、昭和47年）、p. 31。

<sup>2</sup> 寿岳文章・章子『父と娘の歳月』（人文書院、1988年）、p. 27。

<sup>3</sup> 寿岳文章「母ありき」（朝日新聞、昭和49年12月21日）、「藕糸の布一わが愛する断片」『芸術新潮』第20巻5号（1969年5月1日）。

てもらったことがあるが、それは母を追慕してのことであつたであろう。詩歌をことさら愛した寿岳にこの母ありき、という感が深い。

龍華院から石峯寺の竹林寺へ養子にやられた文章の孤独感はとめどもなく深くなり、望郷の念が強まっていった。文芸雑誌『女子文壇』（明治38年創刊）を読んでいて、すぐ上の姉ひでの感化もあり文章の孤独感は文学の世界と結びついていく。転校した好徳小学校では陰湿ないじめにあい疎外感はいっそう強まったが、ただ一人の友といえる芝田米吉（大西堯観）との出会いがあつた。やがて、この竹馬の友と文学的な世界へ沈潜していくことになる。肝胆相照らす友となった米吉の父は竹林寺の檀徒総代であり、叔父ふたりは出家して奥川総観僧正の弟子となり、文章の義父にして師僧である賢隆とは法兄弟の間柄であつた。そして二人を近づけたのは文学であつた。米吉には御影師範を出て小学校の教師をしていた読書好きな兄がいた。この兄が樗牛全集、紅葉全集、帝国文庫、有朋堂文庫などの蔵書を自由に読ませてくれ、なかでも『膝栗毛』は暗記するまで読み込み、十返舎一九から文体上の影響を受けた。

文学好きが高じた文章と米吉は、六年生のとき、『怪奇世界』という、ただ二人だけの読者しかいない文芸雑誌を編纂するまでになった。寿岳と親交のあつた明治文化史家木村毅（1894-1979）もまた中学講義録で勉強した。そして同じく押川春浪の冒険小説『新日本島』（1906）に夢中になり、一昼夜読みつづけ、「最後の頁をひるがえして気がついてみると、雨戸のすき間からは朝の光がさしこんで障子にうつっている<sup>4</sup>」と生れて初めて徹夜を経験したという。この小説は『海底軍艦』（1900）、『武俠の日本』（1902）に続く春浪の冒険小説だが、最後は主人公段原剣東次が雄獅子をひきつれ行方不明になっていた西郷南洲を救出するためシベリヤの要塞へ向かう、というように筋は展開していく。こうした押川春浪の冒険小説を樗牛の小説「わが袖の記」の文体で書いたものであつたという。それでも「夜を徹して、少年の智囊を傾け」、挿絵まで添えたこの冒険小説を熱心に筆写した。後年、亡き米吉の霊前に、大西堯観として自ら著した『三教指帰講話』よりも友情を記念する『怪奇世界』を捧げたいと寿岳は願っている<sup>5</sup>。

**芝田米吉** 同じ京都中学で修学した二人であつたが、文章は京都大学へ、米吉は龍谷大学へ進学し、芝田米吉は昭和13年7月14日に逝去した。その逝去後、十日ほどして一気に書きあげた、「芝田米吉を憶ふ」という追悼文は、好徳小学校時代、唯一の友人であつた学友を偲ぶと同時に、文章自らの精神的成長を語っていて興味深い。そこに引用されている『寿岳文章日記』のもっとも初期の記述であろうと思われる一節（大正2年1月3日）は、上述した文学的影響が色濃くにじみ出ている。「家にあればさほど寒からねど、外に出づれば流石に嚴冬、枯野風蕭颯（しゅうひょう）として霜さえ飛び、わが墨染めの衣も破れんかとばかりに吹きまくる。嘯々浪の寄せるが如く枝を鳴らし、大空かくる二羽の鴉、ために行く能わずして舞へり<sup>6</sup>」と仰々しいまでの風景描写は、「わが胸のうつろに似足る空の下に淋しきおのが影吹かれ行く」という心象風景を導くための措辞であつたことが分かる。そして、米吉が文章にとってどのような友人であつたかを示す一節もある。「帰途、琉璃鳥を伴い帰る。冬の長夜だに明るるなとおもうも友の心ならずや。げに世に友ほど嬉しきはなし。山巔水涯、憂を

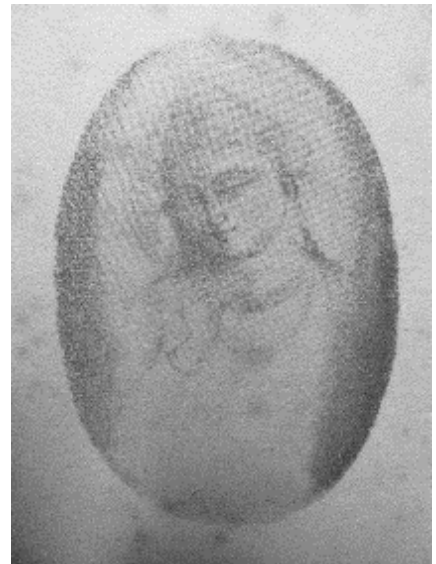


図1 村上寿岳描『みをつくし』第2号

<sup>4</sup> 木村毅『私の文学回顧録』（青蛙房、昭和54年）、p. 20.

<sup>5</sup> 寿岳文章「芝田米吉を憶ふ」『六大新報』（1938年）、p. 11.

<sup>6</sup> Ibid., p. 9.

のべ、神を養うに於て、彼と我とは多く其行を共にしたりき。彼は趣味に於て性質に於て多く吾と似通えり。心からなる友どちとは彼をや言うらむ」とあるように、無二の親友であったようだ。昵懇の間柄も具体的に語られている。「琉璃鳥と終日快談す。或は樗牛を論じ或はラブを語る今宵は泊れかし、又明日も語らばやと言うをも聞かて彼は竟に夕方帰り去りぬ。俄に憂愁の胸に迫るを覚えゆ」と、友と別れがたい心境が描写されている。ここにある「ラブを語る」というのは精神的な成長段階を示すものだが、東寺中学の生徒であったある年の夏、米吉は自らの性的体験を文章にもらした。文章は、「悩ましい愛欲体験談をきかされた寝もやらぬ一夜を<sup>7</sup>」過ごしたという。

**少年雑誌** 文章少年は土蔵の棚に残っていた雑誌、新聞の類を読みふける一方、『少年世界』、『日本少年』を定期購読するほどの愛読者となっていた。山深き里で孤独な少年が東京の博文館から送られてくる雑誌をいかに待ちわびていたか想像できよう。小説家で早稲田大学教授であった谷崎精二は、『少年世界』が書店に届くのを待ちきれず版元の博文館まで買い求めに行き、「ここでは売れない」と冷たく言われ、「すごすご帰って」来るしかなかった読書体験を語っている<sup>8</sup>。この雑誌に寄せた明治の少年たちの熱い想いが伝わってくるようだ。

『少年世界』、『日本少年』ともに血湧き肉踊る少年小説、冒険小説、戦記物、探検記などが掲載されていたが、いずれも投稿欄が充実していた。たとえば『日本少年』(第3巻8号、明治41年7月15日)の臨時増刊号を見ると「紀行文」のコンテストには4,130本もの応募があり、そして「冒険小説」(1,532)も多く、また他の部門である「想像文」(2,542)、「写生文」(4,053)、「書簡文」(3,680)、「暑中日記」(3,885)、「和歌」(6,831)、「俳句」(8,965)、「少年狂句」(4,251)などといった応募数をみただけでも、じつに文運盛んであると言わざるをえない<sup>9</sup>。寿岳と英文学者として深く交わった矢野禾積(峰人)は常連の投稿者であったが、その応募した手紙文が選外佳作で選ばれている。魚釣りや水泳のことを書いているのだが、「眼に見ゆものは何でも詩歌の種だ。この手紙を読んで田舎の詩趣がいかばかり豊かなるかが分るだろう<sup>10</sup>」とあるように、地方にいる文学志望の少年が投書を通じて文章力を高め、感性をみがいていく過程をみることができよう。後年に関西学院大学文学部英文科で同僚となる志賀勝も同様な投稿少年であった。『少年世界』の「少年文壇」において「日曜日の楽しみ」というテーマで全国から数多く投稿されてきた作文のなかから選ばれ賞を与えられている<sup>11</sup>。こうした雑誌を熟読することで文学的要求を満たし、文筆力をきたえ、自らの表現力を養うといった文化的環境を文章少年も共有していたのである。

さらに文章少年が愛読した少年雑誌に石井研堂が明治22年から編集した『小国民』がある。本誌はアメリカの少年雑誌 *Harper's Young People* に範をとり、少年読者に親しめるようにするため、記事を平易に書き、多くの彩色図版を挿入し、日清戦争時には一万五千部も発行部数をのばしていた。わが子が寝床に入ってもこの雑誌をはなそうとはせず読みふけている様子を見た父親は、「もし学校の教科書があれだけ愛読されるものならば理想的<sup>12</sup>」であるともらしている。また寿岳は愛読者として『少年国』にも言及しているが、ドイツ学者の中川重麗(四明山人)が筆をふるい無味乾燥な科学記事をおもしろく解説していた。少年を対象としていたが中学程度の内容で充実した投書欄が設けられていた。投稿者をみると後年に名をなした者が多く並んでいる。寿岳とおなじように和辻もまた『少年世界』を「一刻も早く手に入れたい」一心から、定期購読をして自宅に博文

<sup>7</sup> Ibid., p. 10.

<sup>8</sup> 谷崎精二『日本橋駿河町由来記』(中央公論社、1967)、p. 461.

<sup>9</sup> 『日本少年』第3巻8号(明治41年7月15日)、pp. 67-111.

<sup>10</sup> Ibid., p. 100.

<sup>11</sup> 『少年世界』第11巻6号(明治38年5月1日)、p. 124.

<sup>12</sup> 石井研堂「明治初期の少年雑誌」『太陽』第33巻8号[増刊号 明治大正の文化](昭和2年6月15日)、p. 414.

館から直接送ってもらうようにして、「本が郵便で届くの待つ間は、まことに楽しいものであった<sup>13</sup>」という。二人には八犬伝、流浪談、冒険物語などの共通の読書体験を見出すことができる。和辻も寿岳と同じように、蔵の二階で特異な読書体験を重ねていた。古い雑誌『太陽』に廣津柳浪の小説が載っていて、子守唄が出てきた。「ねんねんころりよ、おころりよ」という全国に流布している子守唄であったが、播磨地方では歌われておらず、和辻はこの子守唄に「耳からではなく眼」から初めて接し、意味が不明瞭な歌詞であるため、「実に不思議な、底知れぬ哀感」を覚えたという。この子守唄は「子供にとって未知の、広大な伝統の世界への、小窓の役目」を果たしていたことを後年に知ることになった。十一歳の文章少年は日露戦争後に起きた韓国併合をあしらった『少年世界』の表紙面に、「子供心にもこれはえらいことになったなど、はらはらした<sup>14</sup>」というように、何も文学世界だけを雑誌は伝えていなかったのである。

小説家、草川八重子は最晩年の寿岳から直話として、「嘘やまがい物を見抜く視力を鍛え、研ぐ基礎が、土蔵の二階で培われた<sup>15</sup>」との証言をえている。自らの読書体験を回顧した随筆「土蔵の二階」にはさらに重要な言及がある。寿岳は生涯を通じて詩歌をうたったが、とりわけ短歌は身につけていて揮毫などを求められると構えることなく流れでた。詩歌がいかに文学的な素養になったか、この随筆から理解できるのである。ここにはブレイクの訳詩、ダンテ『神曲』翻訳につながる文学修行の第一歩がしるされている。

**金子薫園** 具体的にみていこう。寿岳は自らの詩境をはぐくんだ詩人のひとりとして歌人の金子薫園（1876-1951）をあげている。「明星派の全盛時代に、これに反旗をひるがえした薫園とそのグループへ、講義録がとりもつ縁で近づき、天地自然の美しさに射程をしぼる詩歌の世界へ引かれて行ったことは、私にとって幸いであったと思う」と、人間の情感をつつみかくさず歌いあげる明星派よりも自然を友とする薫園の詩風を文章青年は好んだようである。「よく言えば温醇、わるく言えばなまぬるい薫園自身の作歌は、いま一首も私の記憶に残っていないが、その師落合直文の詩」が「何かの折あざやかに思いうかぶのは、師の歌の見どころを語る薫園の誘掖よろしきを得たためにほかならぬ<sup>16</sup>」と後年の寿岳は、歌人の薫園に否定的な評価を下しているようである。たしかに歌人としての薫園は寿岳にとって忘却のかなたにある存在であったかもしれない。だが、事はそれほど簡単なことではない。寿岳は「師の歌の見どころを語る薫園」に言及し、「母の背に昔眺めしわが身とは知るや知らずやふるさとの月」をあげているが、これは萩之家（落合直文）の歌である。短歌を教える初心者向けの自著のなかで薫園はこの歌に対して、「字義はいたって平易ではありますが、含まれている情味は深くこまやかであります」と評価し、この歌の面白味つまり生命は四句の「知るや知らずや」にあると指摘し、「一字一句もいやしくもしてはならない」と注意し、「ことに四句と五句とはもっとも意を用いな



図2 『歌の作り方』

<sup>13</sup> 和辻哲郎『自叙伝の試み』、p. 224.

<sup>14</sup> 和辻哲郎『自叙伝の試み』、p. 170. 住井すゑ・寿岳文章『時に聴く一反骨対談』（人文書院、1989年）、p. 129.

<sup>15</sup> 「土蔵の二階で」の初出「土蔵の二階で」の初出は、筑摩書房の『明治文学全集 明治詩集2』第61巻（昭和50年）の月報第85号「明治への視点」であったが、その巻には青春時代に愛唱してやまなかった有本芳水の詩篇が収録されていた。おそらくそれに触発されてこの一文は書かれたのであろう。以後、『わが日わが歩み』（昭和52年）、『寿岳文章集』（昭和58年）に転載される。草川八重子「慈父・文章先生」『向日庵』第4号、p. 90.

<sup>16</sup> 「土蔵の二階で」『わが日わが歩み』（荒竹出版、昭和52年）、pp. 364-65.

なければならない」と助言しているのである。文章少年はこの忠告をよく遵守し、手帖、日記などに数多く作詩している。後年の寿岳は薫園を微温な詩人として退けているが、その『歌の作り方』（図版2）からは多くを学んでいることが分る。というのも、作者名はあげていないが、他にも引用している萩之家の歌「緋緘の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山桜花」、「萩寺の萩おもしろし露のおくつきどころ此処と定めむ」は、いずれも薫園の同書で論じられているのである<sup>17</sup>。短歌の上達を説いた『歌の作り方』は大正5年に新潮社から上梓され、昭和3年には70版を数えている。文章少年は本書を何度も熟読したはずである。半世紀以上も経つというのに鮮明によみがえってきたのだから。

**講義録** 好徳尋常高等小学校を卒業して東寺中学へ進学するまでの三年間に書いた文章や日記をまとめ、「青山白雲」という雑文集を文章はつくっていた。このタイトル自体からして徳富蘆花の影響がすけて見えてくるが、ほかならぬ『自然と人生』『思出の記』は自然を友とした文章少年の愛読書であった<sup>18</sup>。

文章少年は好徳小学校を卒業しても学費がすぐに払えず、京都の宗立中学へ第2学年から編入学するため竹林寺で助法に従いながら3年間自主学習をするはめになった。通学できない青少年は通信教育で勉学を続行するしか手段はなかった。寿岳と面識があった小説家沖野岩三郎に、地震予知につとめ、「棕平虹」という地震の前兆現象を説いた京都・宮津の地震学者棕平広吉（1903-92）をモデルにしたという作品がある。この主人公は寿岳と同じ世代に属し、家庭が貧しいため望む進学できない。思い悩んだ末、「高等小学校を卒業しても中学校へ行くことができないので、中学校の講義録を取ってひとりで勉強して」いこうと決心する<sup>19</sup>。両親に経済的負担をかけたくない主人公は、さまざまな仕事をして13円を貯め、郵便局から東京の大隈重信が会長をつとめる国民中学会が発行する中学講義録を申し込む。この講義録が小包で自宅に届いた様子が、「かさの高い小包郵便が家の縁側にどっさり音を立てておきました」と描かれているが、この響きわたる音こそ主人公が待ち望んでいた学問の世界の重厚さを伝え、明日を拓くものであった。やがて「とうとう中学講義録24冊を読み通して大正5年3月には優等の成績で尋常小学校6年を卒業して、高等小学校の1年に編入してもらいましたが、それから早稲田大学の講義録を読みはじ



図3 『講義録』広告

<sup>17</sup> Ibid., pp.85、pp.98-99.

<sup>18</sup> 年少の文章少年にとって蘆花の描く自然は内省するためだけの手段にすぎず、人生との比較においてのみとらえようとする域をでていない。その自然は人生の煩悩をなぞらえるだけの抽象的な断片にとどまり、対峙して積極的に立ち向かっていく対象にまでになりえていないのである。文章少年が主体的自我をえて、自然と葛藤し、そこから何かを得るにはまだ成長する時間が必要であった。

<sup>19</sup> 沖野岩三郎『虹のおちさん』（金の星社、1942）p.17.



めました<sup>20</sup>」というように、文章少年と同じく講義録という通信教育で研鑽にはげむ青少年が大正末期には 36 万人もいたのである。(図版 3) 大日本国民中学会が主催していた「正則中学講義録」の広告によれば、「世に中学講義録と称するもの多し、只、最も正則なる組織の下に極めて懇切なる教授を受けんとする青年に向かって本会発行の講義録を薦む」と謳われており、「正則なる組織、懇切なる教授、平易な文章、低廉なる会費」が本会講義録の特徴である、と大書されている(図版 3)。

アーサー・ロイド(帝国大学教授)、山縣五十雄(萬朝報英文記者)、片山寛(早稲田大学教授)などが名をつらね、初等科(六ヶ月)と本科(一ヶ年)が設けられていて、講義録は毎月二回配布され、一冊ほぼ 80 ページ、全部で 3000 ページになる。そして説明文は、「何人にも解し易き言文一致体を用い、初学者及び中学生のために発音、綴方、訳読、会話、作文、英訳など一切を網羅し」、「自由に英文を読み英文を草し英語を話し得る程度まで」教えるとする。そして英語学習をおろそかにする者は時代遅れになるとまで強調している。「英語を知らざるものは昔時いろはを知らざるが如し。その不便不利益計り知るべからず」と英語学習をおこたると社会の不適合者になってしまうような強迫観念をうえつけようとする。

文章は 3 年間、日課として河野松之介が主宰する大日本国民中学会から月に二回配布される講義録で勉強した。この講義録の表紙裏には「本会講義録の特色」がうたわれていて、「本会講師は文部大臣直轄なる東京高等師範学校を中等教育」を担当する者ゆえ、「本会会員は実際この全国の模範学校に」入学しているのも同じであると説く。そして授業科目は各学科連携し、講義の分量・程度を「一定」にして、「丁寧懇切の講述を主となす」と授業方針を定めている。会は「全員に社会的智識と趣味教育を与える」のを目的として、「各科大一流の大家 30 余名を科外講師に」招聘するとある。ただ講義録は総体的に難解なきらいがあったが、堅苦しい授業の連続ではなかった。こうした教科書以外に月に一度、機関誌『新国民』が発行され、「修学上の侶伴」となり、「清き趣味と娯楽とを得せしむ」ため、会員は文学詩歌を投稿でき、「添削批評」を誌上で受けることができたのである。寒村に住むよるべなき文学少年がどれほどの歓びをこの講義録の世界から享けていたであろうか。後年、文章は「家貧しいゆえ中学へも進めない農村の少青年で、講義録をたよりに、知見への目を啓いた例は、案外おおいのではあるまいか」と明治から大正期にかけて、この通信教育が果たした重要性を説き、「明治を語る場合、講義録の存在は無視できないのではなかろうか」と結論づけている<sup>21</sup>。講義録の特徴は雑誌などが与える単発的な知識ではなく、学校の授業と同じく学問を体系化して教授してくれるところにあった。上述したように大正末には文章少年と同じく通学できず講義録で教育を受け独学にいそしんでいた学生が通学生よりも 7 万人以上も多く全国には存在していたのである。

読書、講義録、雑誌づくりで養われた読解力・文章力・鑑賞力は、一体となって寿岳の文筆活動の基礎を築くものであった。

## II 東寺中学校—ダンテ『神曲』翻訳への助走

13 歳のとき、文章少年は十八道如意輪法はじめにする四度加行を行い、契沖ゆかりの真言宗の寺、持明院(大阪)にて、住職の大阿闍梨である藤村叡雲僧正から伝法灌頂を受けた。こうした仏教の修業をつむかたわらで、弁論部の委員をしていた文章少年が京都中学時代にもっとも熱中したことは、同人誌『東密文壇』の編集であった。向日庵資料としてこの雑誌はまだ発掘されていない。ただ、寿岳の自筆年譜には「1916(大正 5)年、中学三年から四年に文学を愛好し、学友会雑誌『東密文壇』の編集と執筆に熱中」と記されており、さらに自筆の「執筆・著作リスト」には「1917(大正 6)年、ギッシング『ヘンリー・ライクロフトの手記』を抄訳、イエイ

<sup>20</sup> Ibid., pp. 23-24.

<sup>21</sup> 「土蔵の二階で」opp. cit., p. 363.

ツ、メイスフィールド、ダグラス・ハイドの詩、各一篇を訳出、載せる（東密文壇）」とある。早くも英詩への興味を示し、翻訳の筆をとっているのだが、いずれの作家、詩人も当時の英語雑誌で盛んに紹介されていた。そうしたなかで文学界の同人で英文学者であった平田秃木（1873-1943）こそ文章少年にとって英文学の指南役であった。大正二年に研究社から刊行された秃木の『最近英文学研究』は何度も読んだ愛読書であり、晩年にいたるまで寿岳はこの書をいつくしんで大切に保存していた。恐らく文章少年はこの研究書で小説家ジョージ・ギッシングの文名を初めて知ったと思われる。秃木はギッシングには「二つの美しい作がある」と紹介し、さらに「一小村に草堂を求め、田園の風光、四季折ふしの自然の移り変わりを静かに楽しんでいた」、ギッシングと思われる作者が書き残した随感録こそが『ヘンリー・ライクロフトの手記』であるとした<sup>22</sup>。そして「朗々として吟誦するに足るような音調の非常に美しい筆致」を高く評価している。さらに秃木はこの『手記』から「冬」の一節を「草堂日記」と題して訳出している。「もう暗くならぬばかりだ。十五分ばかりの間自分は文机を照らす爐火の光で書いてをつたに違いない。それがまるで夏の日の光のように思えた。雪はまだ降っている。暮れ行く空にちらちらと、怪し気な光が見える。あすは我が庭にあつく積もろう、五、六日は積もっているであろう。されど、それが溶ける時には、スノオドロップの花が跡に残ろう。クロオカスも亦地を暖むる白き衣の下に待っているのである<sup>23</sup>」。この一節は、文章少年のなかで蘆花の『自然と人生』、『青山白雲』などで描かれた自然にイギリス文学の自然が重なってきて、両者が心象風景として相交じりあってきたのであった。文章はギッシングの随想録とも言える、自然と書物愛に満ちた、この小説をことのほか愛し、関西学院高等学部時代も何度か訳出し、教師に訳文を見てもらっていた。向日庵資料として翻訳の草稿が複数保存されている。

**平田秃木** さらに『最近英文学研究』は寿岳にとって、きわめて重要な意味をもつ。『ヘンリー・ライクロフトの手記』が、じつはスウェーデンの思索家アンリー＝フレデリック・アミエルの日記に「倣って書かれたもの」であることを知ったのである。この日記はハンフリー・ウォード夫人によって英訳されたのだが、その影響について、秃木は、「翻訳ではあるが、これくらい熱心に読まれたものは少ない。またこれほど英国の思想界を動かしたものは少ない」と賛辞を呈した。さらに「宗教、哲学あるいは広く人生という問題について疑いを抱き、興味を有している人には是非この日記を御薦めしたい」と推奨したが、屈折した想いを胸に人生を彷徨し、いかに生きるべきかと未来を模索している文章にはまさに天啓の書となった。以後、文章は『アミエルの日記』を枕頭の書とするまでになっていく。若き日に『アミエルの日記』を愛読し感銘を受けた体験を幾度となく寿岳はエッセイに書いている。早くは大正14年に『英語研究』誌上にまだ邦訳されていない日記の一部に訳注をつけている。ロシアではトルストイがこの日記を娘に抜粋訳させて、自らが序文をつけて出版したことにふれ、寿岳は日記が広く世界で読まれていることに注意をうながしている<sup>24</sup>。

日記を自己省察の場として生涯にわたり寿岳は日記を書き続けたが、以下のような『アミエルの日記』の一節からはかなり影響を受けていたはずである。「生きるということ、それは日々に自分を改めてゆくことであり、自分を新しくしてゆくことであり、それはまた自分を再発見し、自分を取りもどすことでもある。日記は孤独な者の打ち明け相手であり、慰め手であり、医者である。この日々のひとりごとは、祈りの一つの形であり、魂とその根源にあるものとの会話であり、神との対話である。われわれのもとのままの姿を取りもどさせ、混乱から明晰へ、動揺から平静へ、分散から自己把握へ、偶然なものから永続的なものへ、特殊化から調和へとわれわれを導いていってくれるものこそは、このひとりごとなのである。磁気のように、それはわれわれに平衡を取りもどさせる。それは一種の意識的な眠りであり、その中でわれわれは、行動したり、欲したり、緊張

<sup>22</sup> 平田秃木『最近英文学研究』（研究社、大正2年）、pp. 148-49.

<sup>23</sup> Ibid., p. 163, pp. 166-67.

<sup>24</sup> 寿岳文章「アミエル日記抄」『英語研究』第17巻12号（大正14年3月1日、研究社）、p. 103.

したりすることをやめて、普遍的な秩序の中にもどり、平和を求めるのである。そういうふうにして、われわれは有限なものからのがれるのである。瞑想は静かに事物をながめながら魂をゆあみさせるようなものであり、日記はペンを手にしてやる瞑想にほかならない<sup>25</sup>」とアミエルは黙想をこらしている。

草深い農山村の貧しい寺で生まれた寿岳は明治、大正の頃、数多くいた苦学者のひとりであり、独学者であった。文章少年は努力をおこたらなかった。たとえば英語について言えば、中学時代からポケットに入る自作のノート（紙片）を用意し、表の頁に英語を、裏頁には訳語を書き込み、暗記につとめた。高等学校を卒業するまでにノートの嵩はほぼ五十センチにも達していたという。『神曲』翻訳への目に見えない第一歩である。

学資かせぎにこの中学へ京大から来ていた上田敏の門下生、百瀬清志（昭和16年没）との出会いがあった。授業中に『海潮音』を話題にし、敏から直伝による海外の文学思潮などを文章少年に伝え喜ばせた。百瀬は将来、小説家を志すほどの文学青年であり、京大の卒業論文に詩人ダンテ・ガブリエル・ロセッティを選んでいった。寺で習字をしていて能筆であった寿岳に卒論清書を依頼するところなり、ふたりは急速に昵懇となった。下鴨にあった百瀬の家で文章少年は、生れて初めてライスカレーを食したという。ただ、この未知の食体験同様に、文学においても新たな窓が開けはなれていたのである。卒業論文『ダンテ・ガブリエル・ロセッティ私考』の筆写から英文学の作品になれ親しむようになっていき、後年、「近代英文学とダンテの血縁的とも称すべきつながりの深さ知るに及んで、中学を了えたらいつかは上田敏について学ぼう、との私の英文学志向は決定的となった<sup>26</sup>」と述懐している。ここでもロセッティからダンテ翻訳へつながる糸が見えてくるのである。

経済的支援にめぐまれなかった文章の生活は逼迫したが、『神曲』への想いは胸奥でひそかに燃えるともしびとなった。いかに烈しく世の冷たい風がふこうともその炎が消えつゝいえることはなかった。高校の頃、関西学院の前にあった古書店で寿岳はD. G.ロセッティ翻訳のダンテ『新生』を入手し、一読したところ、「新しく出直して人生の可能性を試してみようとする希望」がわいてきた。『新生』はまさに「私の青春を光明に向かせる記念の書<sup>27</sup>」となったのである。D. G.ロセッティとの関係はこれだけで終らなかつた。ロセッティ稿本を主題としたとしたブレイク詩の博士論文を京都大学へ提出することになるのであった。

生涯を通じ寿岳のなかでは『神曲』への熱情は冷めることはなかった。たとえば、昭和10年の大晦日に、「ダンテを読まんとして果さず、来年は果さむ。全体と部分。線と点。歴史と今。不可欠なものとして」と自らの『日記』（1935年）にしるし、『神曲』への渴望を訴えている。寿岳は源信とダンテを比較して、「源信の生きた時代は、末法思想におののきおそれひれ伏す日本の中世であるが、ダンテは信仰と理性、中世と近世の境めに立って、過去・現在・未来の三世を、人間の汚辱と栄光を達観する<sup>28</sup>」と考察している。

**漱石批判** 『神曲』を『往生要集』として読み、過去の乱世と現在のそれを重層化しようとする寿岳の読み方は、恣意的な読み方を許さない激しさを加えていった。寿岳は漱石の微温的なダンテ解釈を許さなかつた。それは『神曲』の詩句に対する解釈をめぐる漱石批判となってあらわれたのである。漱石の「倫敦塔」の冒頭部分には『地獄篇』第三歌からの詩句が引用されている。漱石はケアリーが散文訳したテンブル古典叢書の英訳に依拠した。

愛の国に行かんとするものはこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。

<sup>25</sup> 「日記と瞑想」（1872年1月28日）『アミエルの日記』、pp. 42-43.

<sup>26</sup> 寿岳文章・池澤夏樹「ダンテ『神曲』はおとなの遊園地」『青春と読書』（集英社、1987年6月号）、p. 13.

<sup>27</sup> 寿岳文章「二十代 色あせぬ青春」『小説サンデー毎日』第3巻9号（1971年8月1日）

<sup>28</sup> 寿岳文章「神曲の今日性」『読売新聞』（1972年12月12日）

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なしただ無窮あり 我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

漱石の訳したダンテの詩篇は、この短篇にふさわしい華麗荘重な詞体である。だが、最初の三行が「この門を潜れ」と命令形になっているが、寿岳はダンテの原文には潜るか潜らないかその人に任せるといった命令形の自由意志はまったくない、と指摘する。なめらかな口調で訳されているからこそ、漱石の本短編は多くの読者をえたのであろうが、原文にしたがえば、地獄へ行く人は「この門を潜らねばならない」のである。こうした命運の厳しさは漱石の口ざわりのよいロマンティズムからはほど遠いのではないかと糾弾している。この詩句がもつ文学的意義を、「ダンテはトマス・アクイナスの『神学大系』の教えるところに従って、万能の聖なる力（父）と至高の智（子）と至上愛（聖霊）の三位一体の働きによって天地の創造がなされたと聞き神は正義の思いにかられて地獄の門をも作ったというのである」と説いている。ダンテの地獄には、甘えもなければ救いもない。『神曲』の文学的な深さはこの峻厳さからうまれてくるのではないかと、寿岳は模索している。そして、「描く者のハトスと、描かれる者のロゴスが、かほどまであざやかな自己顕現を対照的に行い得た例は少ないであろう<sup>29</sup>」と断言した。寿岳はこうした内省を繰返しながら、ほぼ三十年後に第一行目の訳筆をおろすことになる。つまり世寿七十になり、半世紀以上にわたり燃やしつづけてきた『神曲』を翻訳するという聖業にとりかかったのであった。

後年、『神曲』の翻訳を完成させた時には誰よりも先に献呈しなければならぬとした在野のダンテ学者、大賀寿吉が土曜日の午後、京都大学で開いた『神曲』をイタリア語で読む勉強会へ参加していく。寿岳の旧居宅であった「向日庵」の書斎には『神曲』翻訳の未定稿、初出稿が掲載された雑誌など保存されていて、ダンテ『神曲』の翻訳過程をつぶさにたどることができる。

**『神曲』翻訳** 寿岳文章訳ダンテ『神曲』は最初、宮柊二主宰の短歌雑誌『コスモス』に『地獄篇』第十二歌まで連載された。この雑誌には単行本にはない「小引」がある。それによると、「万葉集や詩経がいつもわが心の奥で律動しているように、ダンテの『神曲』がわが魂をゆさぶり初めてから久しい歳月が過ぎた<sup>30</sup>」と訳者と詩作品の関係を明らかにしてくれている。『神曲』は若き日から「魂をゆさぶり」、「心の奥で律動していた」詩にほかならない。さらに訳業の経緯と動機を語りつぐー「この春、さむざむとした教壇を捨てる代わりに多年の念願である『神曲』の翻訳にとりかかることとなったのは、わが晩年の大きな喜びである。外国では、また戦後は日本でも、この世界的古典の新訳がつぎつぎと出た。『神曲』の場合、いかほど多くの新訳が出て、決して無意味ではないからである。私もまた意を安んじて、さらに一つを加えようと思い立った」という。そして「小引」の最後に、『神曲』をどのようなかたちで訳出するか、その一端を語っている。

「私はゆめダンテ学者ではないが、書斎はいつの間にか数十冊のダンテ文献を蔵するに到った。それらを博引傍証して註記を作ればきりが無い。私は註釈を最小限にとどめ、いわばそれに基づいて神曲を講じ得る日本語での一つのテキストを作ってみたいと考える」と、学問的な訳注をほどこしながらも日本語として独立した訳文をつくりたいと念じている。そして古代の詩人が詩神に祈りをささげて詩行をつむいでいくように、「詩霊よ、願はくは我に冥加あらしたまへ」と祈り、第一歌の第一行目をまず「人の定命のなかば、ふと気がつくと

<sup>29</sup> 寿岳文章「地獄の門」『おしぜみ』第5号（大谷大学文学部、1952）、pp. 3-5.

<sup>30</sup> 寿岳文章「神曲・地獄」『コスモス』第17巻4号（コスモス短歌社、1969）、p. 46.

私は暗い森をさまようていた、探せど探せど真すぐな道は無い<sup>31</sup>」と訳出している。

まだ『神曲』が『コスモス』に訳出され連載されていたとき、『東京新聞』（1969年4月16日）は「大波小波」という欄で、「短歌雑誌『コスモス』に寿岳文章の『神曲・地獄』の翻訳連載がはじまり、この四月号で二十五回を数えている。実にゆっくりしたテンポで、まだ第六歌の途中である」と早くも翻訳の進行状態を伝えている。そして、訳者について、「寿岳は英文学者だが、日本のダンテ学の推進役をつとめてきた上田敏、中山昌樹、竹友藻風などに代表される京都ダンテ学会の衣鉢をつぐ最後の人でもある」と名指している。匿名で書かれた記事であるが、歴史的事実をじつに正確に押えている。加えて「今度の寿岳訳は一行一行の原意をできるかぎり正確に移し、しかも寿岳一流の平明で美しい日本の詩語をたくみに生かしながら、『神曲』の特色である清新体のスタイルを日本語によって再生させることを旨としているようだ」ときたる完成稿を期待している。

また寿岳は『コスモス』に「『新訳神曲』について」という一文を寄せていて、『神曲』との関わりはじめた契機を開陳している。文章少年が中学二年生の秋、白秋の『地上巡礼』が創刊され、同年10月に刊行された『真珠抄』、12月刊の『白金之独楽』とともに、「田舎から出てきたばかりの少年の私を、詩の世界へひきこむ強烈な刺激と」なり、白秋の詩才を認めていたのが上田敏であることも知っていて、「『邪宗門』や『思ひ出』は、『海潮音』とともに、私の愛読書中の愛読書であった」と熱く語っている。そして市井のダンテ学者、大賀寿吉が「上田敏のダンテ学統を生か」してくれとの負託した「熱情の心」と、上田敏と親しく、『ダンテ神曲未定稿』を編纂した新村出の温情にも浴したという<sup>32</sup>。（注32）寿岳は名高いブレイク研究者であるから、ブレイクを經由してダンテに開眼したように誤解している人が多い。むしろ逆である。



図4 岡本一平『大正7年 米騒動』

### III 関西学院高等学部—異文化との遭遇

当時、高等学校は全国に七校しかなく、競争率は四、五倍という高さのものであった。だがこれらの高等学校は大学の予備門ごときのものであり、入学すれば帝国大学への入学はほぼ約束されていた。高等学校へ入ることができれば入学試験の重圧から解放された。だから高等学校の生活は切羽つまることなく、じつにのどかなものであった。第三高等学校の同窓誌などをみれば学校生活を謳歌する記事があふれている。逆に高校への受験を失敗した者は専門学校へ進むしか進路はなかったのである。寿岳が三高の試験に失敗したことは、すでに迂回せざるをえない人生を強いられることを意味していた。

加えて学生生活を取りまく社会は激動のさなかにあった。そうした社会変動のひとつに身近に起きた米騒動をあげることができる。大正7年8月1日、東京新穀町の期米市場は立会停止となり5日間の休業の貼紙を出した。以後、白米の小売値段高騰が続き、品薄となり、全国で倉庫、商店、豪邸などが米を求める群衆に襲われ出した。（図版4）12日、すでに神戸は全市をあげて大動乱にまきこまれ、群衆の喚声があがり、栄町4丁目の鈴木商店の元本宅、精米所、鈴木商店の御用新聞と目されていた神戸新聞などが焼き打ちにあい、神戸製鋼所、神戸信託なども灰と化してしまった。湊川公園では野天演説が始まり、「寺内内閣を倒せ、米俵をかくしている某寺へ押し寄せよう」と叫び声があがった。やがて、喇叭を吹きならしながら援兵の小隊がかけつけ、投石す

<sup>31</sup> Ibid.

<sup>32</sup> 寿岳文章「『新訳神曲』について」『コスモス』第19巻9号（コスモス短歌会、1971）、p. 46.

る群集を銃剣で蹴散らそうとし、群集が逃げた跡には下駄や帽子が点々と残されていた<sup>33</sup>。13日の新聞は動乱の記事が掲載禁止となったが、米騒動は全国に飛火し、軍隊、警察は七、八千人を検挙したが無組織な暴動であった。

また、1年生の秋から葺合実業学校の夜間教師を卒業まででしたが、学生の多くは川崎・三菱造船所、などの労働争議が渦中にあった労働者であった。争議の指導者の一人、賀川豊彦が頻繁に来校して集会をもっていた。だが、ベストセラーになった『死線を越えて』（1920）の宗教的な感激と読者受けする感傷に寿岳は染まることはなかった。

**キリスト教** 貧しい苦学生であった。関学へ通っているとき、再度山大龍寺に寄宿していたため、精進料理しか供されず、弁当はいつも「椎茸の根の煮つけ」であった。学院の構内にある第二啓明寮で寮生活をしていた盲目の岩橋武夫は心の渇きを癒せる数少ない友人だった。在学中、孤独を友にしながらいはよく旅をしたが、旅先から岩橋に宛てて新しい信仰になじんでいく興味深い手紙を数多く認めている。『『月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり、船の上に生涯を浮べ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり—』幾度か読んでも読んでも深い旅の情趣をそそられるのは、この芭蕉の「奥の細道」です。武夫さん、私は十日の後には山と水との間にしばらくの巡礼となるにつけても、静かに「旅」ということをかんがえたいと思います。人生は旅であります。旅に死なんとした芭蕉や西行は最も人生に徹した人であります。人生に対する自然のままの哀楽と同情の念がなくては、どうしてこの「奥の細道」のような純真な涙のにじみでる文字ができません。/ かさねて言う。私は日ならずして旅に鹿島立とうとしています。さらに私の思うのは、人の世を人故の旅にすごしたキリストの心であります。私は今旅に立とうとして、かの『旅のためには何をも持つな、杖も袋も糧も銀も、また二つの下衣をも持つな、いづれの家に入るとも、そこに留まれ、而してそこより立ち去れ。人もし汝らを受けずは、その町を立ち去るとき證のために足の塵を払え』と仰せられたイエスのお言葉を思い起すのであります。芭蕉も、『一宿なすとも故なきに再宿すべからず。樹下石上に伏すともあたためた石筵と思うべし。腰に寸鉄たりとも帯すべからず。総て物の命を取るを勿れ。主あるものは一枝一草たりとも取るべからず。山川江澤にも主あり。勤めよや』と言っております。「夕を思い旦を思う」—私はいつもこの言葉を思っています。そうして旅に出ようとするのであります。過ぎ去った過去はいざしらず、これからの生きながらうべきあけくれを、人生の旅に出ようとするのであります<sup>34</sup>とあるように、愛唱する芭蕉とともに「キリストの心」への言及はキリスト教の環境に親しんでいく過程をうかがうことができる。そして翌年には「折にしもイエスの君のみ名をよべど秘めたる胸に誰を容れるべしや」とキリスト信仰に恋愛感情を託す歌を詠んでいる。だが同時に「寂光の如来のすがた拝めとや迷える身にはそれもはかなし<sup>35</sup>」というような自らを仮託した仏教的な歌も奏でている。寿岳のなかではふたつの信仰が葛藤していたのである。キリスト教の優位を説き仏教からの改宗を迫る教師たちが多くなか、ウッズワースだけはキリスト教への改宗を寿岳にすすめなかった。後年、新村出のアーネスト・サトウを追慕した『薩道先生景仰録』（ぐるりあ そさえて、昭和4年）のひそみにならって寿岳は向日庵本として『ウッズウォース博士追憶録』を

<sup>33</sup> 鈴木茂三郎「大正七年 米騒動回顧」『太陽』第33巻8号 [増刊号 明治大正の文化]（昭和2年6月15日）、p. 626。岡本一平「漫画明治大正史 大正7年米騒動」『太陽』、p. 570。

<sup>34</sup> 大正9年7月19日付、岩橋武夫宛、寿岳文章書簡、下線部は筆者による。

<sup>35</sup> 『手帖』詠雑（1921 [大正10]年12月31日）。『手帖』にある「日は暮れて道のみ白きふるさとに罪人のごとく販りたつ我」、「かかれとて神のさだめし掟ならばただに黙してあゆみ行くのみ」、などの歌にみる「罪人」、「神のさだめし掟」はキリスト教の影響であろう。

出し、当時の関学の教師、学園生活を回顧している<sup>36</sup>。

関西学院ではキリスト教を基盤とした英文学をはじめキリスト教文化を寿岳は深く学んだ。後年、ダンテ『神曲』を翻訳するにも、いかに関学の「精神風土」が必要であったかを痛感している。「四年間の関学生活を通じて、キリスト教というものもっている独特のこのメンタル・クライメイト（精神風土）の中へ自分を入れて、体験しなかったならば、『神曲』に対する私の十分な理解度、またそれを日本語化する場合に、しっかりと、これでいいというような満足感は、得られなかったのじゃないかと思わずにいられません」と学恩を吐露している。大学当局とのわだかまりから関学を去ることになった寿岳であったが、晩年には関学で過ごした日々を振り返り、「私が関学で学んだ四年、そして後に関学で教えた時間というものは、私にとって大きな文化財なのです<sup>37</sup>」と心からの謝意を表している。

キリスト教の優位を説く多くの教師にキリスト教がもっとも戒める不寛容を認めた寿岳は、逆に自らの仏教を絶対視し、キリスト教を排斥してはならないと自戒した。つまり各宗の真理の相対性を強く自覚するところとなったのである。こうした自覚は人との交友に顕在化するところとなった。人と接するのに分け隔て、差別があってはならないと考えた。異国の人々から親身になって薫陶をえて、平等で対等な人間関係こそ寿岳は重要であると考えた。学窓を去ってから人も人を対等に遇する姿勢をなおざりにしたことはなかった。自らは一度も渡航したことがないのに、数多くの異国の人々が向日庵を訪れ、寿岳一家と交わった。生涯を通じて寿岳は多国籍の人々を自宅にむかえ、「ちっとも隔てをつけないで」交際した。柳宗悦が寿岳家の『仙人掌帖』に「本来無東西」と記したように、まさに「もとより東西無きもの」の実践であった。寿岳自身、「民間外交という点では、市井の一私人としてはよくやったもんだと思う<sup>38</sup>」という自負も覚えていた。そうした交流のなか、『絵本どんきほうて』を介在させることで戦前から戦後を通じてもっとも長期にわたり文通したカール・ケラーがいた。ただ驚くことに両者は一度も会ったことすらなかったのである。

ウォーナー ケラーとの交友をより理解するため、まず美術史家ラグドン・ウォーナーとの交流を見ておきたい。1958年、寿岳は以前から文通を重ねていた旧知のウォーナーの『推古彫刻』を翻訳している。日本芸術に対するウォーナーの解釈の是非よりも、日本人といかに対話を重ねるかと心砕いているその態度を寿岳は評価している。「日本民族によって表現された造形芸術の底にひそむ連続と非連続との交わりとも言うべきものを、ウォーナーほどあざやかにときあかすことのできる芸術史家は、いつの時代にも、特に日本では、少ないであろう。西洋人ならばこそその緻密な分析と、それがみごとに総合され、一つの感覚にもりあがってゆく秘密を、われわれはまだウォーナーのこの著からも学びとらねばならないと思う<sup>39</sup>」と、異曲をつくして対話しなければならない必要性を訴えている。さらにウォーナー理解のためには、その奥にひかえている思想家の存在を等閑視すべきではないと注意する。「ウォーナーの思想を理解するためには、かれやブルーマーに深い影響を与えたハーヴァード大学の美学教授、故クーマラスワミの諸著を熟読する必要がある。インド人を父とし、英人を母として生れたクーマラスワミは、西洋と東洋の根底に鋤を入れた、おそらく二十世紀で最も深い思想家であった」とクーマラスワミに言及しているが、彼はエリック・ギルを通じて「用と美」の視座を寿岳に与え、その和紙研究の基盤形成に寄与した存在でもある。

この翻訳書が出た頃、世間ではウォーナーは空襲から古都を救った恩人であるか否かという議論がさかんに繰返されていた。寿岳は表面的な議論には組せず、ウォーナーの真意を説いた。「私の知っているウォーナーは、この上もなく平和を愛するヒューマニストであった。日米間に戦争のおこったことを、最も深く悲しんだ一人

<sup>36</sup> 中島俊郎「戦禍を越えた師弟愛―『ウッズウォース追憶集』―」『甲南大学紀要 文学編』第170号（2020年3月）、pp.33-46.

<sup>37</sup> 「寿岳文章―研究生活と関西学院を語る」『関西学院通信クレセント』第7号（1980年）、p.124.

<sup>38</sup> 寿岳文章・章子『父と娘の歲月』、p.199.

<sup>39</sup> 寿岳文章「訳者あとがき」ウォーナー『推古彫刻』（みすず書房、1958年）、p.180, p.182.

であった。平和を強く念願するヒューマニストであったればこそ、彼は、人種や宗教や国境にとらわれることなく、すぐれた文化財の保護に心をくれた。戦争は、人命の殺傷を与件としてのみ成り立つ。善意の人々の悲しみをふみにじって、日々おびただしいのちが殺傷されてゆく。理性を喪失したおろかしい戦争の場面で、守れるものなれば、せめて文化財だけでも守ろうというのが、ウォーナーの悲願であった<sup>40</sup>」というように、妥協が許されない戦争のなかで究極の立場を強いられる人間の現実を寿岳は静かに指摘している。関学時代に涵養された誰をも区別しない交友態度は寿岳に深い人間に対する洞察力を与え、文化活動を支える原動力ともなった。

**カール・ケラー** 寿岳はイギリスの詩人エドモンド・ブランデン、D. J. エンライト、在日英国大使ジョン・ピルチャーなどと深い交誼を結び、数々の文化活動を展開した。だが、息子潤とも変わらず交友が継続し、もっとも長期に及び深く交流したのは、向日庵本『絵本どんきほうて』の製作を介して戦前から戦後までその死でもって友情が終結するまで手紙を交換し続けたカール・ケラーであった。向日庵資料として百通をこえるケラー書簡が残されている。

寿岳とケラーの交友は、柳宗悦を介して製作をケラーから依頼されたことから始まる。当初、寿岳は文学作品に付ける挿絵くらいにしかケラーからの要請を考えていなかった。だがケラーはまったくちがった。文学作品に付随する単なる挿絵とは考えず、作品内容と不即不離な芸術作品として図版を考えていたのである。向日庵本『絵本どんきほうて』が完成するまでの経緯は寿岳自ら書いた「由来」（英文で書いた由来記を向日庵本として出版する計画があった）に詳しい<sup>41</sup>。

ケラーはドン・キホーテの書誌学者であったためこの古典に付された挿絵に流れる西欧の伝統を熟知していた。だから西洋流挿絵の模倣じみた図版は一切望まなかった。さらにハーヴァード大学の附属美術館には良質な日本美術品が展示されていて、日本美術の精髓をケラーは知悉していた。そのため日本独自のドン・キホーテを求めたのである。

長きに渡る寿岳とケラーの交流において特出すべきは、先に述べたように両者は生涯一度も会わなかったという点である。何百通にわたる手紙の交換によって友情は深められていった。『絵本どんきほうて』が完成をみるまでにお互いの姿を映した写真を交換しようとするがどちらもなく切り出した。ケラーはドン・キホーテ研究者らしくスペインの騎士に扮した写真を送ってきたのに対して、寿岳はわざわざ写真店に赴き羽織袴の正装で写真におさまった。向日庵本とともにその写真をケラーに送り届けたのだがケラーは写真を見て寿岳の人となりたちどころに理解している。「今、本とパンフレット、そして非常に魅力的な写真を拝受しました。あなたと小柄な奥さまは非常に魅力的です。あなたは知的で身体的にも頑強なようです。我われ西洋人が着るような醜い衣装ではなく、あなたご自身の美しい民族衣装を着用して写真を撮られたことにとても感動しています。向日庵本については、あなたの親しみやすさと奥さまの繊細な芸術性の証しにどれほど感動し慶んでいることでしょうか。地球の反対側に文通を続けられる友人がいて、時間の経過とともにますます親密になっていくのはとてもいいことです。むろん私たちはそれぞれ相手のことを少しずつ理解していき、その是非は別にして、少なくともはっきりと好感のもてるものになるはずです」。ここで言及されている「奥さまの繊細な芸術性の証し」とは妻静子がブレイクの挿絵に水彩絵具で彩色をほどこしたことを指している。

<sup>40</sup> Ibid., p. 179.

<sup>41</sup> 英文タイプされた「由来」記はこの二点あり、向日庵資料として保存されている。一点は製版フィルムを青写真感光紙に焼きつけて校正紙を作製しているところから、向日庵本としての出版を準備していたことがうかがえる。英文の「由来」記を翻訳した文献が「絵本どんきほうて由来『紙障子』（靖文社、昭和17年）、pp. 98-119.である。1955年2月28日付の寿岳宛ケラー書簡で秘書が代筆して、「ケラーは入院中である」との一報があり、5月23日付書簡で再び秘書から「5月13日、ケラーは逝去した」と知らされた。



1938年10月27日付の寿岳に宛てたケラー書簡（向日庵資料）の内容を見てみると、話題は多岐に及び知的なサークルが形成されていく過程が理解できるのである。まず寿岳が池田成彬（近衛内閣の蔵相）のことを問い合わせた返事で、「池田成彬は後のクラス、つまり私のクラスが1894年で、彼のクラスは1895年でした。池田は私と同じ年にハーヴァードに入学したのですが、卒業年度は1894年ではなく1895年でした。むろん、メモリアル・ダイニング・ホールで新入生歓迎のテーブルに座っていた日本人はおそらく彼だけでしょう。新入生は16人いましたが、貴国からの若き代表は、そこにいた唯一の紳士だったでしょう。彼は突然、野蛮人のなかに放り込まれたと思っているに違いないと私はよく考えたものです」とユーモアをまじえながら日本人留学生の姿を点描している。また同時に共通の友人である紙研究家ダード・ハンターの近況も伝えている。「数週間前、ダード・ハンターが会いにやってきましたが、あいにく私は留守でした。彼は『工藝』誌に掲載された手漉和紙に関する貴殿の記事に強い関心を抱きます。ハンターはビルマ旅行から帰ったところですが、近々にボストンに転居してくるのを期待しています」とあるようにケラーを通じて、書物工芸、紙研究を追究しているハンターの近業をも寿岳は詳しく知りえていたのである。

そして『絵本どんきほうて』が及ぼした影響は、研究のうでさらなる展開をみていたことが理解されるのである。「ハーヴァード大学のフォード教授と私は、最近フアン・スネ[スペインの書誌学者]が作成した『ドン・キホーテ文献書誌』の増補版（図版5）をハーヴァード大学出版局で印刷に付しています。この増補版の原稿は、70歳を過ぎたスネが亡くなる直前に、バルセロナの危険から守るために送ってくれました。スネは再び母国スペインで出版することを望んでいたが、かなわなかったため、ハーヴァード大学出版局、フォード教授と私は、老紳士への賛辞としてこの書誌を出版することにしました。完成したら、あなたにも献呈しましょう。…ところで、芹澤氏に簡単な手紙を書いてもらえませんか。むろん日本語でかまいません。私はその手紙を『絵本どんきほうて』の第一番本の表紙に貼付したいのです」。ここには学者と書物愛好家が一体となったケラーの姿がある。こうした友情の縁として、寿岳もケラーにならい、ケラーの蔵書票（膨大な文献に埋没して苦悩する蔵書家の姿が諷刺されている）を自らの『絵本どんきほうて』の表扉に貼付している<sup>42</sup>。

『絵本どんきほうて』向日庵版『絵本どんきほうて』が合羽摺手彩色本で、世に出てから四十年たったころ、再版を求められた芹澤銈介は当時を回顧して、「何か仕事全体に渾然と籠もるものがあって、はるはると思い出が溢れてきて、我ながら、始終仕事を看とり励まし、欣びを頂いた柳[宗悦]師をはじめ、初期協会の諸兄の熱い心が思い出されます。別して、種を蒔き、成熟をまつ間の自愛に満ちた寿岳文章さんの心遣いには、いまさらに感謝を新たにします<sup>43</sup>」と往時を回顧しているが、ここにケラーの名前はない。だが、寿岳は「種を蒔いた」人のことを忘れていなかった。同じく『絵本どんきほうて』の誕生を振り返った寿岳は、「日本の『ドン・キホーテ』文献を、ほぼ送り終わった頃、ケラーから手紙が届き、私の労を謝すると共に、一つだけ大きな不満があると言う。ボストン美術館の収蔵品だけについて見ても、過去にあれだけすぐれた芸術を残している日本人でありながら、なぜ『ドン・キホーテ』の挿絵に、その片鱗さえうかがえないのか。私はもう我慢ができなくなった。君の宰領で、日本の芸術家ならではの、すばらしい『ドン・キホーテ』挿絵を一つ実現してはくれないか。いや、是非とも実現してくれ、費用はいとわぬ、とその手紙には書かれてある」

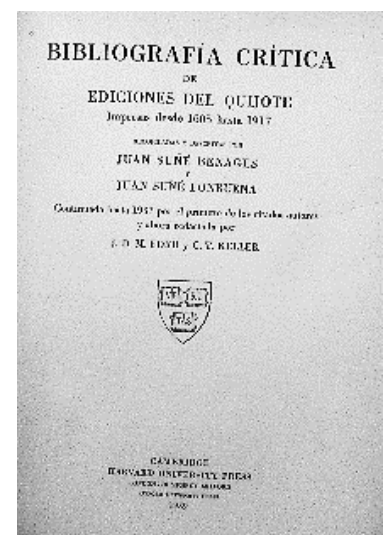


図5 『ドン・キホーテ文献書誌』

<sup>42</sup> 図録『寿岳文章 人と仕事展』（向日市文化資料館、2021）、p. 25.

<sup>43</sup> 芹澤銈介「絵本どんきほうて」『これくしょん』第61号「絵本どんきほうて」特集（ギャラリー吾八、昭和50年）

というように、寿岳は忘れずに『絵本どんきほうて』の生みの親のことを特記している。そしてその一文の最後に芹澤『ドン・キホーテ』絵本のすぐれている点を解明しているのだが、「あの尽きぬ魅力の秘密を解く鍵」は中世という時代にあるという。ほかならぬ中世は「古代を照らし、近世へ架橋する」時代であり、ここで寿岳はダンテ『神曲』をも想起しているのだが、中世と強い韌帯をもつ『ドン・キホーテ』は「奈良絵本や丹緑本もその系譜」に立つものでもあると改めて指摘している<sup>44</sup>。つまり『絵本どんきほうて』の名作たるゆえんは中世という時代において、騎士を侍に置き換えるというような表層的な解釈よりも、その精神性を忠実に翻訳したところに求められるのである。柳などの中世再評価をもここで思い出しておいてもよからう。

**文検** さて学者として生きる前途の教員生活を考えれば、寿岳が関学時代に取得した教員免許は大きな意味があった。語り草になるほど文検という文部省検定試験は難関をきわめていた。大正 11 年度第 36 回英語科検定本試験は、9 月 27 日（書取、聴取）、28 日（読方、解釈、文法）、9 月 27 日（書取、聴取）、28 日（読方、解釈、文法）、10 月 2 日（誤文訂正、会話）に文部省で執行された。試験委員は神田乃武、岡倉由三郎、市河三喜、岡田美津の四委員に英語教育学者ハロルド・E. パーマーが新たに加わった。受験生は一人ごと試験場に呼ばれ、読方、発音、意味を質される。受験者数は 35 名であった<sup>45</sup>。寿岳は神田乃武から飛行機の写真を見せられながら英語で質問を受けた。「私のもっとも不得手な主題だが弱味をみせてはいけない」と思って、寿岳は適当に「その通りです、分かりました」を連発した。すると試験監から「君は何も理解できてはいない！」と叱声が飛んできた。結果、みごとに落第した<sup>46</sup>。同時期の英語学習の広告に、「英語研究と鑑賞の法は眼の時代より耳の時代に入れり」とあり、蓄音機とレコードが大々的に推奨され、「日進月歩の学界の趨勢は一刻の躊躇をも許さず」と宣伝されている。すでに時代は聴力、会話力を要求していたのである。筆答試験を合格した者は二度口答試験を受けることができたので、翌年の 2 月 23 日、24 日、27 日に行われた第 37 回検定試験において寿岳は 3 月 5 日に合格した。受験者数は 36 名で合格者は 13 名であった。卒業後、寿岳のもとにはこの教員免許もっていたため、全国の中学校からわが校の英語教員になって欲しいとの要望が多く寄せられたという。

文検と略称されていた文部省の国家試験は狭き門で有名で、伊東勇太郎の『文検受験用英語科研究者の為に』（大同館、1925）などの指南書が盛んに読まれた。試験監の講評から合格者の感想までが英語誌に掲載された。沖縄出身の合格者は「無明の闇もあけにけり」という文検受験記を 2 回にわけて寄せ、これまでの勉強法、試験問題の解答などを詳しく語っている<sup>47</sup>。「英語教員検定試験合格者」という記事によれば、合格者の大半がすでに中学校教員であったことが分る。

### 結びにかえて—文化人

寿岳文章の文筆活動は、1955-75 年代にもっとも隆盛をきわめていく。右の統計グラフから分かるように驚くべき執筆量である。100 点以上も執筆した年が 3 年もある。しかもいずれの年も 50 点以上を書いている。1975 年度に執筆点数が急落した原因は、体調不良により 3 月、8-9 月には入院を余儀なくされ、加えて前年よりダンテ『神曲』翻訳に集中したためであった。いずれにせよ緩急自在の文章力である。こうした文章による表現力は先に論じた幼少時代から勤しんだ研鑽から体得したものである。

寿岳は新聞、雑誌、書籍、ラジオ、テレビ業界からは世論を先導するオピニオン・リーダーとして、また市井からも代表的な文化人のひとりとして認知されるまでになっていく。終戦直後から出版を通じて盛んにジャン

<sup>44</sup> 寿岳文章「古典と挿絵—芹澤絵本どんきほうての意義—」『これくしょん』第 61 号

<sup>45</sup> 『英語青年』第 48 巻 3 号（大正 11 年 10 月 1 日）、pp. 91-92.

<sup>46</sup> 寿岳文章「わが思い出の英語人 神田乃武」『わが日わが歩み—文学を中軸として』（荒竹出版、昭和 52 年）、pp. 384-85.

<sup>47</sup> 『英語青年』第 48 巻 4 号（大正 11 年 11 月 15 日）、pp. 120-21.

ルを問わず文化啓蒙の活動を展開した。1980（昭和55）年、読売新聞社は知識人、作家、画家などの自叙伝を集め出版しているが、寿岳の巻には水上勉、遠藤周作、吉村昭といった作家たちが収録されている。他の巻には文化人としてフランス文学の河盛好蔵、哲学の金子武蔵、ドイツ文学の高橋義孝、経済学の大塚久雄、比較文学の島田謹二なども所収された。寿岳の肩書は英文学者となっているが、こうした知識人のひとりとしてみなされていたのである。活動の場は、活字の世界だけではなかった。昭和初期からラジオ放送に積極的に出演していたが、やがてテレビというメディア媒体にも少なからず露出するようになっていった。

「私の立場はキリスト教と仏教の間に立って、相互の理解を深め合うところにあるのです」とふたつの信仰を融合して寿岳文章は真理を求めようとした。こうした視野に立つ文化人の貌は、世の人にどのように映っていたのであろうか。民芸運動の擁護、古典の翻訳、自然環境の保全などの活動とともに、非戦と平和思想、護憲問題、政治批判、人権問題などを論じる社会批評家、舌鋒鋭い警世家として知られるようになっていく。また人生をいかに生きるかという問いに指針を与えるヒューマニストとして著名で、人生相談や世相談義は世に広く受け容れられた。数多くの将来ある学徒を戦場に送り出してしまったという悲痛な反省のもと、戦後の寿岳は改めて非戦の誓いを立てるところから出発した。寿岳は、「今日のように核戦争時代になれば、いよいよ声を大きくして言わねばならないのは、戦争と絶対に縁を切ってしまうと鵜の毛ほども戦争に関係しないこと、これが仏教のいちばん根本にあることだと私は思うのです<sup>48</sup>」と逝去する前々年に誓いを新たにしているが、戦後の文筆による文化活動の根底には揺るぎない非戦の誓いが核として岩盤のように微動だにせず存在していたのである。



<sup>48</sup> 寿岳文章「ビニョン夫妻との一夜」『ブレイクとホキットマン』第2巻8号（同文館、昭和7年）、p. 359. 住井すゑ・寿岳文章『時に聴く—反骨対談』、p. 179.

## 寿岳文章・しづ —— 「思想と生活」の実践

長野 裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）

「寿岳しづ ～書いて、暮らして、ともに生きて～」展<sup>1</sup>では、生誕 120 年を迎えた寿岳しづの生涯を振り返り、その翻訳作品と文筆活動を通して、自然と人間、自立と愛情について考えた。それは時代のなかでいかに生きるかという人に問われる普遍的なテーマでもあった。女性が精神的に自立する大切さを行動に示したしづの生き方、野に生きる鳥や動物の息吹から教わる人間のあり方に、来場者からの共感の声が寄せられた。同時開催された「寿岳文章 人と仕事」展<sup>2</sup>と「寿岳しづ」展は連動するもので、両者はいいかえれば「文章としづ」展であった。これまで注目されることがなかった夫妻の軌跡を展覧する初めての機会として、「向日」の地において開催されたことは大きな意義であったといえよう。「ともに生きて」という言葉には、自然とともに、人々とともに、夫の文章とともに、という意味を込めたのであるが、展覧会では個々の軌跡を辿ることにとどまり、「文章としづ」という夫妻としての姿を十分に伝えることができなかったのではないだろうか。そこで本論では、夫妻であるふたりが「ともに生きて」こそ到達した「文章としづ」の生きようを、あらためて浮き彫りにしてみたい。

「寿岳しづ」展では、しづの自伝的小説『朝』（岩波書店、1927 年）と、兄である岩橋武夫の自伝的小説『動き行く墓場』（警醒社、1925 年）の登場人物や場面描写が一对の合わせ鏡となっていることに着目し、この二作品を“小説『朝』の舞台 大正デモクラシー期の大阪”と題した一枚の文学地図<sup>3</sup>に仕立てることにより、しづの娘時代を再現しようとした。本論では、これを武夫、文章、しづの三面鏡へと展開し、『動き行く墓場』と『朝』における描写と、その裏付けとなる著述とを照らし読むことにより、「文章としづ」それぞれの成長の軌跡をたどる。そして、向日庵私版の刊行や紙漉村調査の旅は夫妻としての姿がよくあらわれた仕事であるが、これらは常に「生活」と同義の一貫した動機にもとづいて成されたものであった。その動機はなぜ生まれたのか、文章としづが「僊壺庵」と「向日庵」において実践した「思想と生活」について検討し、夫妻が取り組んだ仕事の背景にある原動力の源をとらえたい。

### I 『動き行く墓場』

『動き行く墓場』（警醒社、1925 年）は岩橋武夫の自伝小説である。「動き行く墓場」という表題は、17 世紀イギリスの詩人ジョン・ミルトン（1608-1674）による劇詩『闘士サムソン』（*Samson Agonistes*, 1671）を由来とする。旧約聖書『創世記』において、ペリシテ人に捕らえられた「英雄サムソン」は両眼をえぐられて苦役に服し死に至る、その運命を題材にした作品である。武夫は劇詩中のサムソンの台詞 ‘O yet more miserable! / Myself my sepulchre, a moving grave,’ を「おお、それにもまして惨めなる運命こそ、ああ、わが體、わが墳墓、わが動き行く墓場」と翻訳し<sup>4</sup>、失明した詩人ミルトンが「サムソン」を歌う心持ちと、己の嘆きとを重ねあわせた。「動き行く墓場」という言葉が武夫の小説の表題として示すものとはなにか。「サムソン」も、ミルトン

<sup>1</sup> 2021 年 1 月 23 日～3 月 21 日に向日市文化資料館において開催（NPO 法人向日庵主催）

<sup>2</sup> 同上、（寿岳文章人と仕事展実行委員会、向日市主催、NPO 法人向日庵共催）

<sup>3</sup> 本誌に掲載する。（地図作成：橋渡眞）

<sup>4</sup> 岩橋武夫『失樂園の形而上学』（基督教思想叢書刊行会、1933 年）、pp. 41-44。『動き行く墓場』、pp. 249-252。

も、武夫も、生まれながらに盲目であったのではなかった。やがて失明するという恐怖と苦悩にとらわれた身はなかば死んだ生命である、「光の国を追い放たれ」て、「葬られたる身にしあれども死にもせず」、つまり「動く墓場」のようなものである。ミルトンが「サムソン」に歌わせたこの台詞は、武夫自身の言葉でもあるといえよう。

「闇の中に信仰の光を恵まれて立ち上り、最初に訪れた大阪市立盲学校、そこで不幸な運命の友と共に按摩や点字の稽古を受けた教室、(中略)これらの思い出は私の脳裏から去ることの出来ないものばかりであるが、その中でも按摩の時間、Hという教師の肩を揉みながら、『ミルトンの失樂園は失明して出来たものです。だから君だって、そう失望するには及ばない』と聞かされた時の印象は永久に忘れることの出来ないものであった。」<sup>5</sup>と武夫は振り返る。原稿は、武夫が口述し妹しづ(本名静子)が筆記した<sup>6</sup>。「主人公の若者がどんな切実の衝動にかられて生活の歩みを前へ前へと押し進めていったかを見てほしい」と「自序」にいう。本章では、『動き行く墓場』を武夫が語るしづと文章の成長記録としてとらえ、その軌跡をたどってみたい。

### しづの葛藤

鉦山技師の仕事をしていた父、乙吉の著書『袖珍鉦業法規』(1905年)は採掘に関する法規を網羅した実務書であるが、発行元は乙吉が大阪に構えた「岩橋鉦業事務所」である。奥付の記載によると、著者の住所と事務所の所在地は同じ「大阪市東区内久宝寺町二丁目九十八番」であり、当時の地図から、しづが入園した「大阪市立南大江幼稚園」や「兵舎のラッパの音」を耳にした「歩兵第八連隊」の所在を近隣に確認できる。このことは「久宝寺町(兵營の側にあった家)に居た時分」(『動き行く墓場』、p.260.)の描写を事実として裏付けている。

兄からみたしづはどのような少女だったのだろうか。ヘレン・ケラーを日本に招き、日本のライトハウス創立者として視覚障害者の自立に貢献した岩橋武夫を支えた妹として、しづの献身が語られる。しかし一方で、しづが年頃の内面を抱えた一少女でもあったということも忘れてはならないだろう。十七歳のしづにとって、自己を犠牲にして兄の看病に献身する日々は、ときには抑えきれない葛藤となって態度に表れた。武夫は、「人生の春に背かれた兄を同じく乙女の春に背かれた妹が、看病する東京の病院の明け暮れから、故郷の大阪に帰って一層悲劇的となった真暗い兄を、力づけようとする殆ど無効に近い努力は勿論、叱りつけられたり、小言をいわれたりしながらも、なお疲れ果てるまで、手当たり次第ありとあらゆる書物を読み聞かせる努力に至るまで、実に尋常ならぬ苦心と忍耐とが必要であった」と述懐する。そして、このような生活がしづの心境を幾度か暗くし、「いっそ東京へ飛び出し、女優にでもなって、太く短く人生を享楽しようか」などと考えるような自暴自棄に陥らせた、と振り返る<sup>7</sup>。

「女優になる」という逃避ともみえる思いつきには、東京に住む「歌沢の伯母」の影響があったかもしれない。「歌沢」は江戸時代後期に「端唄」から派生した俗謡であるが、のちに長女の章子はこう語る。「母ハナの従姉に、歌沢寅右衛門(のちに相模を名乗った)がいる。歌沢の寅派の家元であるこのひとは、しづの美しい声に惹かれていた。ほぼ同じ年齢の、これまたしづと甲乙なく美しいおひでちゃんという寅右衛門の娘は、母のよき後継者であり、三味線はすでに非常にすぐれた腕前であったが、惜しいことに声がややかすれた。しづはつややかないい声をしているということで、うちにこないかという誘いはしばしばあったらしい。娘時代、筑

<sup>5</sup> 岩橋武夫「序」『失樂園の詩的形而上学』、pp. 1-2.

<sup>6</sup> 「彼女は私のために、よく読み、よく書いてくれた。私が関西学院の学窓を卒業するまでの七年間の、女性として最も華やかなるべき憧れの時期を、兄のために犠牲にしたのである。しかしながら(中略)生きた万年筆となって、私の処女作『動きゆく墓場』の原稿を口述筆記したことが、自らもまた筆をとる才能に恵まれて行く動機となったではないか。」(岩橋武夫『母・妹・妻 女性に与ふ』[日曜世界、1933年]、p. 47.)

<sup>7</sup> 『母・妹・妻 女性に与ふ』、pp. 44-46.

前琵琶をいささかならったりして、まんざら芸能界に無縁でもなかったしづが、もしその世界に入っていたら、いったいどんなことになったか。」<sup>8</sup>『動き行く墓場』と『朝』にたびたび登場する「歌沢の伯母」とは、この「二代目歌沢相模」その人である<sup>9</sup>。文章としづが南禅寺に暮らした頃に交流があった湯朝竹山人(1875-1944)は、「歌沢」の事情に通じた小唄の研究者であるが、のちに文章は湯朝と語りあった日を回想する。「寺に生まれながら、いわば身をもちくずし、芸能専門の新聞記者になった身上、私も寺院出身者のせい、今だによく覚えている。また、私の妻が歌沢寅派の家元と近親関係にあり、現在の寅右衛門とは同い年で、姉妹のように親しかったことが、山人の私たち夫婦に対する特別の関心をそそったらしく、歌沢が寅派・芝派に分れた経緯、その芸風の違いなどを、ちびりちびりと酒盃を重ねながら、山人はくわしく、むしろくどくどと語ってやまなかった。」<sup>10</sup>

母の従姉にあたる伯母がいる「金沢町」の家を、当時東京に出て早稲田大学に通っていた武夫はよく訪ねていた。しづも、上京の折にはこの伯母の家に入りし、従姉妹が稽古する三味線の音色や伯母がうたう「歌沢」の美声に触れ、艶やかな芸事の世界を身近に感じながら育った。作品では、武田良一(武夫)、美沙子(しづ)、良助(乙吉)、芳子(ハナ)、桃代(二女)、勝(二男)を登場人物として一家の日常が描かれる。

「お前、毎日看病ばかりでつまらないだろう。神楽坂へでも行って来るがよい。僕は一人で居れるから心配しないで」と言って妹を遊びに出した彼はつくねんと物思いに耽った。(中略)「お前何を買って来たのかい」「なんでもないもの」と笑った。「いずれ肌につけるものだろう。お前の買うものなら」「そらろうやわ。その代り兄さんにもお土産を買って来ました。」(『動き行く墓場』、pp. 123-24.)

良一は芳子を向き合いに長火鉢を囲んだ。美沙子は茶の出花を三つの茶碗に汲み分けた。(中略)「この子はお茶の出し方も知らない。お父さんの流儀で、なんぞというと急須を火に懸ける。こんなお茶を番茶と一緒にする人があるものかい。お馬鹿さんだね。」「うち、癖になって。」「うちか?」良一は言葉尻を捕へた。「やっぱり茶の一杯も飲もうという気が無いから、そんな女書生の様な真似をするんだなあ。」

(『動き行く墓場』、pp. 316-17.)

半襟や帯締めのような品だろうか、「肌につけるもの」を買うことが好きな女学生である。「わたし」と言わずに「うち」と言って「女書生の風の様な真似」をするような、流行に敏感な一面もある。続く描写によると「家中の暗さに飽々して、反抗的に派手な方を夢見て」家族に心配をかけてもいた。一方、『朝』に登場するしづと同じ歳の従姉妹「光子」は「歌沢の伯母」がつけてくれる稽古に励んでいるが、兄の病室を訪ねてきた光子の「下町風なあで姿」を見ると兄のことがますます悲しく思えてくる。失明した兄に面会して涙もろく同情する「歌沢の伯母」は「あでに淋しく江戸の情緒を歌うにふさわしい人」、「お不動様にお百度を踏む代り」の御利益がある「こより」をこつづけてくれるような優しい人であった。(『朝』、p. 38、p. 53、p. 59.)

しづにとっては、兄のために繰り返されるだけの「無為の日々」は先の見えない将来への不安であり、自己実現に対する若者らしい欲求を満たすことができる状況ではなかった。十五歳のとき、女学校の二年に編入するほど成績が優秀でありながら、父の大病や生計の乏しさから学校をやめるしかなかった。そのようななか、芸事で立派に身を立てて生活する伯母と従姉妹の姿は若いしづの心にどのように映ったであろうか。学校へも

<sup>8</sup> 寿岳章子「献身と愛の“生活者、寿岳しづ”『十二支別易学解説 女性芸術家の人生 2 丑年編』(集英社、1980年)、pp. 72-73.

<sup>9</sup> 初代の孫で3代目実子、本名平田ゆき(1872年8月5日-1943年3月7日)は1905年に4代目寅右衛門を襲名した。1927年に長女に「寅右衛門」の名を譲って隠居し、二代目歌沢相模を名乗る。(ウェブサイト「ウィキペディア」参照)なお、ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」で二代目歌沢相模の唄声を聴くことができる(「梅が香」、歌沢相模二代目、歌沢寅右衛門[三味線]、ビクター製作、1933年)。(いずれも2022年1月確認)

<sup>10</sup> 寿岳文章「久しぶりの東山」『わが日わが歩み—文学を中軸として』(荒竹出版、1977年)、pp. 366-67.

通えない貧しさを経験するなかで、女性が自活できる術を身につけることの重要性を現実のなかに直視したかもしれない。のちにオピニオン・リーダーとして女性の自立を説き行動したしづの生き方には、あるいはこの頃の体験が影響しているかもしれない。十七歳のしづにとって「女優になる」という思いつきは、現実逃避のための夢物語ではなかったのである。

### 大阪のエスペランティストたち

良一は母親に連れられ、盲啞学校へ通い出した。馴れぬ手で針を差したり肩を按んだりする事は、流石に彼を淋しがらせた。側でみる芳子には、堪らなくそれが写った。(中略) 彼は昼になると学校から帰って色んな事を話しながら、良助の肩で按む稽古をした。天花粉を塗ってから後に廻り危気な手付くで擦り始めては、芳子や美沙子をほろりとさせた。彼は淋しく笑った。(『動き行く墓場』、pp. 231-32.)

来年の新学期、神戸にある西洋人の建てた学校へ入って、新天地を開いてみようと思が極まった。神学部に在籍したからとて、アメリカ人に紹介してやろうと谷牧師は言ってくれた。良一の心も両親の心も動いた。今度の家に移ってから盛り返した一家の財政状態は、一層両親を乗気にさせた。(中略) 八月の空を夏が駆け通った。良一はいつも机の前にいた。一家の者は蘇った人を迎えるようにして彼を見た。橋野とエスペラント語の講習会に出席した外は、一夏中聖書に読み耽った。(『動き行く墓場』、p. 239.)

彼には心からの微笑みが浮んだ。英国へ注文した点字の書物が着いたと言っては、それを書架に並べ嬉しそうに手をもんだ。(中略) 橋野と一緒に習ったエスペラント語の辞書や書籍までが届いた。「こんな物まで、あちらでは点字になっていますかね。」その言葉を教えた高木は驚いた。新聞記者も役者もやったというその人は、髪を長く伸ばしていた。「Bonan tagon (今日は)」これが口癖でよく訪ねてきた高木は、ある雑誌に『黒い眼鏡』という短篇を書いたとかいって、それを良一に読んで聞かせた。この夏の講習会を写したものであった。(『動き行く墓場』、pp. 240-41.)

登場人物の描写から実在する人物を特定すると、「橋野」は、大阪市立盲学校の理療科教員であった橋本喜四郎、「谷牧師」は関西学院で神学を学び、日本で初めての盲人牧師となった熊谷鉄太郎(1883-1979)である。武夫に「アンビシャス」を持つようにと励まし、英語を勉強して関西学院に入学することをすすめたのは谷であった。<sup>11</sup>「高木」として登場する高尾亮雄(1879-1964)は楓蔭と号し、とくに大阪において、社会主義運動、エスペラント運動、児童文化運動を牽引した人物で、新聞記者、宝塚少女歌劇の振付師、ヘボン式ローマ字の普及など多彩な足跡を残している<sup>12</sup>。日本のエスペラント史を伝える資料によると、1919年7月、大阪市立盲学校では高尾が講師となって第2と第4の土曜日にエスペラント講習会が開かれ、参加者のなかに橋本喜四郎、熊谷鉄太郎、岩橋武夫がいた。先立つ1918年には、大阪市内にある法案寺の住職和田達源が高尾を講師として講習会を開き、やはり橋本、熊谷、岩橋らが参加しており<sup>13</sup>、『動き行く墓場』における描写を事実として裏付けている。作品の描写は、高尾が、このエスペラント講習会に出席した武夫としづの様子を書いていたことを示しているが、「高木」が書いた短篇『黒い眼鏡』の掲載誌は現在特定できていない。『動き行く墓場』における『黒い眼鏡』からの引用によれば、高尾は、武夫が妹しづとともにエスペラント講習会に出席した場面をとらえて次のように書いている。

東の方の窓硝子にちらりと人の影が差した。丁度その時北の方の廊下から、涼しい風が石畳の上を吹いて

<sup>11</sup> 熊谷は岩橋との出会いについて『薄明の記憶－盲人牧師の半生』(平凡社、1960年)に詳述している。(pp.210-217) 先行論文として、室田保夫「岩橋武夫研究覚書－その歩みと業績を中心に」(関西学院大学人権研究、13号、2009年)がある。

<sup>12</sup> 堀田譲「高尾亮雄とその仕事」、高尾亮雄『大阪お伽芝居事始め』(関西児童文化史研究会、1991年)、pp. 107-125. 柴田巖・後藤斉編『日本エスペラント運動人名事典』(ひつじ書房、2013年)、p. 284.

<sup>13</sup> 片岡忠著、峰芳隆編『闇を照らすもうひとつの光』(リバーロイ社、1997年)、pp. 70-71.

来てカーテンを少し揺り動かした。そこには最前からこの講話を立ち聴く黒い眼鏡の人が居ると解った。三日目からこの講習会に、黒眼鏡の人が二人揃って加わる事になった。一人は何時も若い美しい婦人に手を引かれて居た。(『動き行く墓場』、p. 241.)

1919年、熊谷や高尾たちは日本の盲人にエスペラントを教えた人物として知られる、ロシアの盲目の詩人ワシリー・エロシェンコ(1890-1952)を大阪に呼びよせた。エロシェンコは二十日間ほどを岩橋家に滞在して過ごす。しづによると、母ハナは武夫と同じ盲人であるエロシェンコを愛しむ親心から世話を引き受けたのであった。「長髪長身のエロさんと、その腕をとる桃割姿の日本娘」が出かける姿を近所の人たちは目をみはって眺め、新聞記者や特高警察が幾度も家に訪ねてきた<sup>14</sup>。しづは「インドから国外追放され、再び日本へ帰ってきて間もないせい、インドやビルマに伝わる仏陀説話をよく聞かせてくれた」「エロシェンコや兄といっしょに、何度かエスペランティストたちの集まりに出た」<sup>15</sup>と記し、当時のエスペラント文化運動の一場面を伝えている。

熊谷は大阪でのエスペラント講習会と和田達源について、「日本橋北詰」にある「抹香臭い寺の本堂の後にある院主さんの居室では、時代の最先端をゆくエスペラント語の研究会」が開かれていた、と回想している。かつて熊谷が大阪に赴任してまもなく「東亜盲人文化協会」という盲人の文化団体をつくろうとした計画が失敗したとき、借財を黙って払って救ってくれたのも和田住職であった。和田は、仏教日曜学校を行う僧侶たちのために、大阪のキリスト教会の牧師である熊谷をよんで「キリスト教における日曜学校のやり方」について講演をさせるような「変わった坊さん」で、「肉食妻帯」を絶対にしないという仏教の信仰に徹底しながらも、聖書やキリスト教への理解も相当に深い人物であった<sup>16</sup>。

### 寿岳文章と法案寺

一方、寿岳文章は1918年春に東寺中学校を卒業する。小学校5年生のときに姉が嫁いだ寺の養子となったが、姉に男の子が生まれて養子となる理由を失うと学資の送金が途絶えてしまう。情緒不安定に陥り休学しながらも卒業することはできたが、「三高」の受験に失敗し日夜コンプレックスに悩まされていた。「私はむしばまれかけていた。しかし私の若いいのちは、腐りきった寺院の習俗の泥沼からはいあがるだけの力をもっていた。」と文章は青年時代を振り返り、こう続ける。「頼まれれば私は目をつぶって、そうしたぐうたらなあちこちの寺へ助法に行き、いくらかの「お布施」がたまると、中学時代の友人をたよって、逃げるように私はささやかな旅に出た。藤村の『春』や『桜の実の熟する時』が旅せずにはいられない私の暗い青春への甘美な伴侶であった。あるいは、その院主がエスペラントを学習していた関係で、ロシア生まれの盲目の詩人エロシェンコも出入りしていた大阪市中の不思議な寺の二階に、暑い夏をひと月近く暮したりした。」<sup>17</sup>この「不思議な寺」とは法案寺であり、文章もまた和田住職の印象を「一風変わった思想と行動の持ち主で、持戒堅固の僧でありながら、釜ヶ崎にいち早く養護施設を作り、熱心なエスペランティストとなり、弟子たちには好むままの進学をさせた」と語る。

文章がエロシェンコや、牧師で小説家の沖野岩三郎(1876-1956)を知ったのも、進歩的な考えの人たちが出入りしていたこの寺であった<sup>18</sup>。暗い旅のさなかにあつた文章青年は、法案寺にやってくるこのような人たちが

<sup>14</sup> 寿岳しづ「私の家にいたエロシェンコさん」『寿岳文章しづ著作集2』(春秋社、1970年)、pp. 187-191.

<sup>15</sup> 寿岳しづ「古い写真」『寿岳文章しづ著作集2』、p. 345.

<sup>16</sup> 『薄明の記憶』、pp. 208-09. pp. 215-17.

<sup>17</sup> 寿岳文章「わが青春―藤村」たずさえ旅『寿岳文章書物論集成』(沖積舎、1989年)、p. 849.

<sup>18</sup> 寿岳文章・しづ『樅と菩提樹』(白鳳社、1966年)、p. 247. 寿岳とエスペラント語の関わりについては、中島俊郎「宗教的真理の探究」『向日庵』4号、(特定非営利活動法人向日庵、2021年)、pp. 37-38. に詳述されている。



語る言葉や生き方から何を感じ取ったであろうか。体験したことの無い世界に目を見開かされ、あるいは生きる勇気を与えられたかもしれない。幼くして両親とわかれ祖父のもとで育った沖野は、やがて牧師として和歌山の新宮教会に赴任するが、のちに大逆事件で処刑される大石誠之助と親交があったために自身にも嫌疑がかかった。沖野が大逆事件を題材に描いた小説『宿命』(1919年)には、沖野自身や高尾亮雄をモデルとした人物が登場し、大阪で両者が出会う場面がある。また、『宿命』における高尾が『動き行く墓場』と同じ「高木」の名で登場するのは偶然であろうか、注目したい一致である<sup>19</sup>。

エロシェンコが滞在した1919年当時の武夫としづの家の所在地は「上本町七丁目」「生玉通りを北に折れる小路の奥」であり、法案寺のある「日本橋」にもほど近い。「道頓堀の川ぞいにある法案寺の離れ座敷をふりだしに、中之島にあった何かの事務所や、千日前の繁華街近くの「くれない」という喫茶店など」場所を変えながら「寒い夜も暑い夜もかわりなく、週に一度ずつの集まりはつづけられていた」としづは記す<sup>20</sup>。大阪のこの界隈を舞台に、武夫としづ、文章、エスペランティストたちが集っていた当時の様子がみえてくる<sup>21</sup>。

ここで、1918年という年に注目したい。先にみたとおり、この年、法案寺では和田達源が高尾を講師に招いてエスペラント講習会を開いていた。『動き行く墓場』の描写において、武夫が「神戸にある西洋人の建てた学校」である関西学院に入学するのは「来年の新学期」、つまり1919年4月であるから、主人公が「橋野」と「エスペラント語の講習会に出席」した「八月」とは1918年の夏である。したがって、1918年に法案寺に滞在中であった文章も、武夫としづが参加したエスペラント語講習会に同席していた可能性は高い。文章が当時購読していた英語学習誌に関西学院文科の紹介記事が載っており、すでに法案寺の弟子の一人が入学し「エスペラントを学んでいた岩橋武夫という盲目の青年」も来年入学するつもりであるらしいことを承知していた<sup>22</sup>。文章と武夫は1919年に関西学院に入学し、ここで文章は武夫としづに出会うのであるが、精神の内部にある闇とたたかう武夫と文章の二本の糸は、法案寺における1918年の一点においてすでに交差していたといえよう<sup>23</sup>。

## 関西学院

1919年、文章は関西学院高等学部文科英文学科に入学し、神戸市の再度山大龍寺の食客となり寺の仕事を手伝いながら学院に通った。「再度山の尾根づたいに緑の山みちを布引の谷にくんだり、原田の森への往復をくりかえす孤独な一苦学生」であったが、仏教への理解が増すにつれて寺の生活の矛盾が心に耐えがなくなると寺から脱出し、同年の秋には神戸市立葺合実業補習学校に夜学教師の職を得て自活をはじめ<sup>24</sup>。『動き行く墓場』における次の描写から学窓の様子をうかがい知ることができる。文章は「久岡」として登場する。

再度山からの遠い道を徒歩で通って居た久岡が、身を寄せている寺院を辞して街へ下り、生活の道を考えるに至ったのは九月の新学期からだ。その丈の高い淋し過ぎる様な容姿に、かつては僧服を身に纏ったと

<sup>19</sup> 堀田讓「大逆事件とお伽芝居—沖野岩三郎『宿命』にみる高尾楓蔭の活動」『人間文化研究』37号(京都学園大学人間文化学会紀要、2016年)

<sup>20</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、p. 187.

<sup>21</sup> 「丁度それは一家が静かな上本町へ居を移した頃、(中略)ふた月あまり通った盲啞学校も止めて、その秋は英国から届いた大きな点字の書物を抱えながら、神戸のある宗教学校を紹介してくれた牧師の許へ、タイプライターや英語を習いに通った。」(『朝』、p. 69.)「武夫君は、それからというものは、それこそ雨の日も風の日も、静ちゃんに手をひかれて、上本町七丁目から、市岡まで通ってくるようになったのです。」(熊谷『薄明の記憶』、p. 213.)

<sup>22</sup> 『樗と菩提樹』、p.248. 寿岳「わが青春」、pp. 849-850.

<sup>23</sup> 『朝』(p. 165)の描写によると、文章がしづの姿をはっきりと「心に印象」したのは「エロシェンコさんやあなた[武夫の恋人]と一緒に、野守君兄妹[武夫としづ]が写っている写真を見た時」、『動き行く墓場』(p. 480)にも同様の描写があるが、この写真は現在見つかっていない。

<sup>24</sup> 『樗と菩提樹』、pp. 248-49.

いう過去に、或いは芭蕉などを繙く趣味に、良一は自分の好きな作家の青年時代を思い浮べるのであった。彼は愛読した『春』に出て来る、放浪時代とも名付くべき作家自身の生活に久岡を比べてみた。(中略) 取り分けて秋は、久岡の黒い影を一層淋しくみせた。(『動き行く墓場』、p. 292.)

僧門の出である久岡は、一級上の此れも同じ経歴のある八森と交わり、従って良一もその人を知る様になった。(中略) 兵営生活を終えた年嵩の會川や久岡などと共々、毎日の様に登って行ったのもその会堂だ。丘の上に寝そべって草の芽を抜きながら、其処から響く合唱やピアノを聞く折りには、宗教学校らしい気分が四辺にあった。広場を飛び廻って居る西洋の子供等の楽しそうな遊び声までが、この気分を一層異国化させていた。(中略) 院長は八十に近い温厚な老人で、六尺の長軀を緩やかに運ばせながら彼の手を取って「善く来ました。」と耳の遠い夫人に紹介したりした。英文学を講ずる若いバタビア人を久岡と一緒に訪ねてみた夜は、星許りが静かに輝いていた。(『動き行く墓場』、p. 248.)

学友「八森」は文章の一級先輩である高野山中学出身の八田昇岳、「會川」は曾根保、また、「バタビア人」とあるが、ラトビア人の英文学教師オゾリンであろうか。「院長」は J.C.C. ニュートン (1848-1931) であろう、学生には必ず「My Brother!」と呼びかけて多くの院生に慕われていたという<sup>25</sup>。文章は「私が入学したころの関西学院は神戸市の東はずれ、原田の森にあり、青谷の田野と接し、牧歌気分がゆたかであった。(中略) 文科生の教室は、本館からかなり隔たった松林の中の、ハミル館という木造二階の建物で、ほど近くに寮があり、私と同じクラスの盲学生岩橋武夫は、その寮に住んでいた。」と回想する。仏教の寺院に生まれた文章にとって「心が若くてやわらかな時代を関西学院ですごした」ことは大きな意義であった。英文学をたんなる知識としてではなく、キリスト教への理解と体験のなかで学ぶことができたからである。その学院の宣教師たちのなかでも、英文学を講じていた H.F. ウッズウォースは「私に改宗をすすめなかったただ一人の宣教師」として特別な存在であった、と振り返る<sup>26</sup>。のちに文章は『ウッズウォース博士追憶集』(In Memoriam Harold Fredrich Woodsworth) (1952 年) を彼に捧げて刊行した。

『朝』においては、学窓の様子、文章が下宿する住まいの様子が次のように描かれる。

門を潜ると第一時間目の鐘が鳴った。赤い煉瓦造りのチャペルの前の、萌え初めた土手下には、大勢商科の学生が群がっていたが、言い合わたしたようにおしんの娘姿へ眼をやった。試験の度なので少しは馴れてきたとは言え、おしんは処処の樹立へ身をかくすようにして、うつむきがちに寄宿舍へ足を早めた。「野守の妹」と誰かが言った。(中略) 起伏の多いちょっとした松林を抜けたところでは、先生の一人に出逢った。牧師のように見えるこの温厚な教授は「兄さんのお手伝いですか」と自分の方から話しかけた。おしんは微笑んでお辞儀して別れた。寄宿舍は広い学院内の東北隅にあった。(『朝』、pp. 101-102.)

上筒井から三つ目の停留場の布引で電車を降りた兄妹が、ずっと山手から続く川に添うて歩いていたのは、正午の太陽が少し西に傾く時であった。(中略) 川添い道の二つ目の辻を左に折れて半丁程行くと、それらしい家が見えた。(中略) 取次ぎも待たないで曾我は二階の欄干からこやかな顔を見せた。おしんはこの訪問を喜ぶらしい笑顔が先ず嬉しかった。掃除のすんだあとに見える室には、苦学の中から買い溜めて行く書籍が、二つの本箱に詰められてあった。何の装飾もない質素な有様が却って曾我に似合っていた。

(中略) 夕なぎの海をわたる船をかぞえながら、時々おしんの盗み見る曾我は、草の葉の雫にも心おかれ

<sup>25</sup> 井上琢智「友情・勉学と愛—寿岳文章・岩橋武夫と妹静子—」『寿岳文章人と仕事展』(寿岳文章人と仕事展実行委員会、2021 年)、p. 8. 井上琢智「関西学院における英語教育の開始」『向日庵』4 号 (NPO 法人向日庵、2001 年)、pp. 1-12. 今村太朗「J. C. C. ニュートンと図書館の始まり」『時計台』No. 81 (関西学院大学図書館、2011 年)、pp. 23-25.

<sup>26</sup> 『樗と菩提樹』、pp. 248-251.

るらしい哀れさと、案じられる生活の中で静かに伸びて行く強さとおしんに与えるのであった。夜学へ行かねばならぬ時刻を心配して帰りを言い出した彼女の言葉に、惣吉は立ち上がり曾我も支度を始めた。

(『朝』、pp. 115-116.)

続く描写によると、しづは兄と文章の会話に耳を傾けながら「苦学」する文章を思いやる。武夫は、文章に訳した詩を読んできかせてほしいと願う。文章が顔を赤らめながら「あんなまずい訳でもよければ」と読んで聞かせると、しづは文章の「落ち着いた力のある声」から「生き活きとした優しい感情を後から後からと手繰り寄せて」いく。『朝』に引用されたその訳詩は、英国詩人ジョン・メイスフィールドの「西風」であるが、これは実際に文章が翻訳したものであると考えてよいであろう<sup>27</sup>。

### 寿岳文章の手紙

「ぢゃ兄さん」と惣吉に声をかけて、十日余り前にこの手紙を読んだ時にも、筆跡に残る何ものかに強く惹かされはしたけれども、それにしても、よもやこうした自分になろうとは。「曾我さん——」思わず唇を衝いて出た言葉におしんは顔を紅くした。紅くなった顔の上には直ぐ熱っぽい涙が流れた。やがて彼女は探さずにはおられない姿でも求めるように、去年の夏届いた数葉の旅便りをも取り出してきた。(『朝』、p. 12.)

読んでゆくうちに、悲しみとなるか喜びとなるか分らぬ国から、曾我の声が聞えて来た。言っても言っても言い尽せぬ寂寥を押し隠しているように響くその声は、如何なる時にも静かにこの世の旅を続けて行くという風な様子と一緒に、深くおしんに秘められている曾我の特徴である。(中略) 兄を通し、残された印象を通して見る曾我は、彼女が物心ついて以来、言い現し得ない不満足と淋しさとで、今日まで探すともなく探してきた「涙」、涙から輝く「幸福」の姿であるらしかった。(『朝』、pp. 15-16.)

『朝』におけるこの描写は、武夫に届いた文章からの手紙をしづが再び取り出してきて読み返す場面であるが、この「去年の夏に届いた数葉の旅便り」は「向日庵資料」として残っている。次に抜粋するのは、『動き行く墓場』に原文どおりに引用された、文章が旅の最後の日に認めた便りである。自作の詩であろうか、島崎藤村が『春』に描いた「放浪の旅」を連想させるような便りである。

旅人よ。——

八月は森の椎の木に微笑み、五色の蜻蛉は青い空の下を飛び廻って居るのに、お前は何故そんな悲しそうな顔をして帰って来たのだ。

旅人よ。——

私はお前がうら淋しい漁村の渚に立って、海の上に低く垂れた雲の佇を凝っと眺めて居るのを見た。その時私はお前が深い溜息を吐いて、『人の世の測り難きはいわずもあれ。懐しき母とのみ思う自然でさえ、何

<sup>27</sup> 『朝』において引用された、ジョン・メイスフィールド「西風」の訳詩(四行六連)のうち冒頭の二連を原詩とともに記しておく。「あたたかき風、西の風、もろ鳥の鳴く音にみつる西の風。／この風に心澄ませば、眼がしらを、熱く流るる涙かな。／ふるき片丘寂びし西の国より吹ききたり、／四月をしのび、水仙の花思はしむる西の風。」「わがごとく疲れはてにし心には、西の国こそ楽土なれ。／林檎畑は花咲きて、気は酒のごと香り立つ。／緑草いともすずしげに、憩へば二なき褥かな。／つぐみは巢より笛の音に、歌のしらべを吹きおくる。」(しづ『朝』、pp. 113-14.)、'It's a warm wind, the west wind, full of birds' cries; / I never hear the west wind but tears are in my eyes. / For it comes from the west lands, the old brown hills. / And April's in the west wind, and daffodils.' 'It's a fine land, the west land, for hearts as tired as mine, / Apple orchards blossom there, and the air's like wine. / There is cool green grass there, where men may lie at rest, / And the thrushes are in song there, fluting from the nest.' (John Masefield, "The West Wind")

故にかくは激しく人の心を裏切るのであろう。流転する。流転する。あゝ万物は刻々に流転する。山も裂け。水の嘆け。何という淋しい人生の姿だ。』と呟くのを聞いた。

旅人よ。――

私はお前が七重八重に廻る山々の中を、昔ながらの鐘の音に明け暮れて行く寺の廻廊に靠れ、夕は紫に染まる西の空を凝っと熟視て、はふり落つる果無き涙を止め様ともせず、淋しく微笑んで居るのを見た。幻の栖家と思ひ諦めし身に、何が悲しうて泣いたのか。寂光の都、弥陀の浄土に、此の世ならぬ恋をするのが淋しうてか。マリヤの顔が愛しうてか。蝸は桐の木に蝨蝨と泣いて居る。山には夕闇が迫って来て、お前の姿を蜘蛛の糸に包んだ。私はお前が何時迄あそこに佇んで居たか知らない。

旅人よ。――

お前はそんなに淋しいなら、人の世に千百の言葉を飾るより、一本の草に対して唯一言『おゝ。』と言ったがよい。美しき粉に肌を隠す女の胸に真実の涙を流す位なら、野に咲く花の一片を取って、熱い涙の接吻を与えて遣るがよい。然し旅人よ。そうしてみてもお前は矢張淋しいのだ。――

旅の終りし日に。

(『動き行く墓場』、pp. 385-86.)

文章がこの「旅」を終えた二年後、文章としづは互いに心を通わせ結婚を約束するが、一方『動き行く墓場』は、主人公が相手の父親から結婚を許されなかったために成就できなかった愛について記して完結する。

#### ウィリアム・ブレイク「病める薔薇」

おゝ花薔薇おん身は病む  
あれくるう嵐のなかを  
夜の暗きに飛び迷う  
眼に見えぬ蟲ありて  
深紅なす歓楽の  
おん身が臥床を見出でたり  
その蟲の黒く秘めたる恋  
おん身の生命を滅せしむ。

これは久岡が訳したブレイクの詩<sup>28</sup>だ。何時の日だったか良一は会て咲いた花の枯れ朽ちし根株に一つの薬を見出した。あゝそれは思懸ぬ獲物だった。今度こそは蟲食はせないで良一は心の奥の奥でそれを育てようと思った。あのイサベラが流し得た以上に尊い追憶の涙で培いながら――。然し復活したそれはもう過去の恋愛ではなかった。(完) (『動き行く墓場』、p. 650.)

英文学徒として学窓をともにした二人の友情があらわれた結びである。卒業論文に武夫は「ミルトンのソネット研究」を、文章は「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルサーレム』研究」を提出した<sup>29</sup>。つまり武夫は、ミルトンの劇詩に託した作品の最終部に、文章が翻訳したブレイクの詩「病める薔薇」を引用し、互いが傾倒した英国詩人の作品を紡ぎあわせたのである。「病める薔薇」(“The Sick Rose”)は、イギリスの詩人であり銅版画家のウィリアム・ブレイク(1757-1827)による詩集『無染の歌 無明の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*, 1794)のなかの一篇である。文章においてこの作品は、のちに刊行した向日庵本からダンテ『神曲』

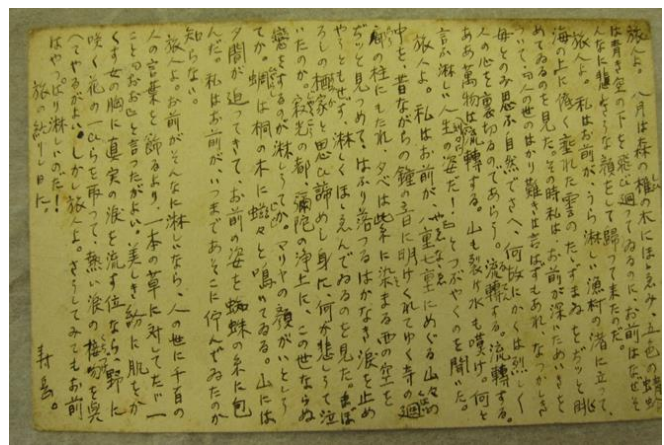
<sup>28</sup> ウィリアム・ブレイクによる原詩を記しておく。‘O Rose, thou art sick! / The invisible worm / That flies in the night, / In the howling storm, / Has found out thy bed / Of crimson joy: / And his dark secret love / Does thy life destroy.’ (William Blake, “The Sick Rose”)

<sup>29</sup> 井上琢智「友情・勉学と愛－寿岳文章・岩橋武夫と妹静子－」、p. 8.

の訳業<sup>30</sup>にいたるまで、生涯にわたり鍵となったブレイク作品である。ここで、武夫が作品の結びに引用した意図を理解するために、「病める薔薇」と『無染の歌 無明の歌』についてみておきたい。

ブレイクは、詩集 *Songs of Innocence and of Experience* の題扉に「人の心に宿る二つの対立した状態を示す (Shewing the Two Contrary States of the Human Soul)」と書き添えており、文章は‘Innocence’ ‘Experience’ を「無染」「無明」と仏教的な言葉を用いて翻訳したことについてこう説明する。「無染」とは、「汚泥より出てしかも汚泥に染まぬ蓮の花の美しさへの着想から、凡夫の心中にも尚存する本有の法性に対して用いられる言葉」であり、「般若理趣経」のなかの「無染無著眞無明」の一行を典拠とした言葉である。一方「無明」とは、「煩惱」の異名であり、大乘仏教においては「法性と無明とはあたかも水と氷の如く、本来一如である」と説かれる。文章はブレイクのなかに大乘仏教的な精神を認め、「無染 (Innocence)」と「無明 (Experience)」は、単なる平板な対立ではなく「そこへ自分が入りこんであらゆるものを見る深い対立」であるとした<sup>31</sup>。つまり、人の心には両者が「一对」のものとして宿っており、「病める薔薇」は両者のうち「無明 (Experience)」を示す一篇である。

『動き行く墓場』において引用されたブレイクの作品を検討する場合、ブレイクが詩句とともに一枚上に表現した彩色銅版画の検討が不可欠である。彩色銅版画では、たくさんの棘がある薔薇の茎が詩句を囲んでいる。下部には擬人化された薔薇の花が、深紅の花のなかに潜り込もうとする蟲から逃れようとし、上部には薔薇の蕾であろうか、花と同じ深紅色の服を纏った女性が二人、打ちひしがれた様子で茎のうえにうずくまり横たわっている。その姿は、左上に描かれた、薔薇の葉を喰う蟲を連想させる。古来より「愛」の象徴とされる「薔薇」であるが、ここでは男女の官能的快樂（「あれくるう嵐/howling storm」）を象徴している。18世紀当時、梅毒という病は「目に見えぬ蟲/invisible worm」が原因とされていた<sup>32</sup>。「歓楽の臥所」は「生」をも「死」をももたらす。ブレイクの「病める薔薇」をこのように解釈するならば、『動き行く墓場』における詩の引用は、武夫の失明、失恋（「死」）と、失明によって奪われた学問の道を再び見いだしたことによる自己の歓び（「生」）を象徴するものとして理解できる。そして文章は、「生」と「死」が象徴するものを対立するものではなく、人の心に宿る「一对」のものとして自己の内に受け入れるよう、あるいは武夫に語ってきかせたかもしれない。『動き行く墓場』の描写によれば、文章が失恋に苦しむ武夫のために、幾度も読み返した「無量寿経」を一心に読み聞かせる迫真の場面もある。(p. 629.) 文章がブレイクの詩のなかにみた大乘仏教的な精神は、生きる力を得ようともがく自身にも、武夫にも「救い」の手をさしのべたのではないだろうか。のちに武夫は『失樂園の詩的形而上学』を著し、「序文」に「挿画に関しては寿岳



1920年8月 寿岳文章から岩橋武夫宛て葉書 (向日庵資料)

<sup>30</sup> 寿岳は訳刊したダンテ『神曲』(集英社、1987年)において、ブレイクの訳詩をエピグラフとして、『地獄篇』に“The Sick Rose”を、『煉獄篇』に“Ah! Sun-Flower”を、『天国篇』に“The Lilly”をそれぞれ掲げた。

<sup>31</sup> 寿岳文章「ウィリヤム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い—向日庵本の思い出をこめて—」寿岳文章訳『ブレイク詩集』(岩波書店、2013年)、p. 295。寿岳文章「小序」寿岳文章訳『ブレイク叙情詩抄』(岩波書店、1931年)、p. 4。なお、寿岳が *Songs of Innocence and of Experience* をやはり仏教的用語を借りて「無心の歌 有心の歌」と訳刊したものもある(『ブレイク詩集』弥生書房、1968年、など)。

<sup>32</sup> Robert. N. Essick, *William Blake at the Huntington* (New York: Harry N. Abrams, 1994) pp. 58-59.

君を煩わした。君と私との友情の歴史は、またミルトンとブレイクとの関係を物語っているが、本書に採用した挿画はブレイクの手になったものであることを覚え、一入嬉しく思う次第である。」と書き記した<sup>33</sup>。その後、武夫はエジンバラ大学に留学、文章も京都大学に進学してそれぞれの学究の道をさらに歩み始める。付け加えるならば、『動き行く墓場』の「序文」を書くようにとの電報を武夫が受け取ったのは、英国への門出の時、神戸港から出航する「香取丸」の船上であった<sup>34</sup>。

## II 「僊壺庵」と「向日庵」の日々

文章としづは 1923 年に結婚し、京都での新生活が始まる。関西学院を卒業した文章は母校で英語を教え始め、まもなく長女章子が生まれた。福の川、白川、南座裏の小さな家へと転居をくりかえすが 1926 年に南禅寺北門僊壺庵に落ち着き、1933 年に現向日市の「向日庵」に居を移すまでの 7 年間に「僊壺庵」で過ごした。この間に出会った師友には河上肇、新村出、伊藤長蔵、柳宗悦、河井寛次郎がいた。彼らの親交は、いわば「美の実践」を生み出す磁場となったが、文章としづの場合、「僊壺庵」での日々は「美の実践」であると同時に「生活の実践」でもあった。文章は「知識の伝達者であるよりも前に、一個の厳正な生活者でありたい。」<sup>35</sup>と誓い、学問や思想が実生活と乖離することなく生かされることを理想とした。この「生活の実践」は、新居「向日庵」において文章としづが綴った『向日庵消息』へとひきつがれていく。『向日庵消息』は、文章が刊行をはじめた「向日庵私版」の読者に宛てたニュースレターであるが、心のままに書き付けた「日常」からはどのような「生活の実践」がみえてくるだろうか。時代のなかで、文章としづはどのような社会に向きあったのだろうか。

### 『みをつくし』と『ブレイクとホキットマン』

雑誌『ブレイクとホキットマン』（同文館、1931-32 年）は、両詩人の作品がもつ普遍性と永遠性に惹かれた寿岳文章と柳宗悦が編集した研究誌である。製本はおもに文章としづの手綴じによるもので、限定 500 部で予約刊行された。創刊にあたって文章は、『みをつくし』が廃刊になったとき「ぐろりあ そさえて」の伊藤さんと相談して、私は『思想と生活』という個人雑誌を出したいと思っていた、「そんな無反省な生活をしてそれでいいのかという憤りが、あらゆる社会層に向けられるようになった」と記し、「来りてわが生活を見よと言い得る人間でありたい、どんな天分に恵まれた芸術家でも、立派な生活者と言い得られぬ者の前に私の頭は下がらない」として「この『ブレイクとホキットマン』もそういう気持ちで編集してゆく」と堅く誓った<sup>36</sup>。

『みをつくし』（1929 年 10 月 1 日創刊）は文章が編集した文芸評論誌であるが、第 2 号（1930 年 1 月 31 日）で終刊する。創刊の言葉を要約すれば、「西洋思想が意識的にわが国へ輸入されて」以来「多くの主張、多くの主義が、さまざまな視野から論議され、検討され、拒否され」てきたなかで、文学の領域においても「古き権威を履えして、変化の相（すがた）のうちに存在の理由を見ようとする新しい文学論」が目立つ。このような混乱のなかでこそ人に必要にされるのは、「真実なる声」に心を開き、「静かなるもののささやきに耳を傾けるだけの美しき忍耐と節度」であり、『みをつくし』はそのための「道標、濤標（みおつくし）」でありたいと願った<sup>37</sup>。執筆者は寿岳文章ほか石田憲次、矢野峰人、市河十九、深瀬基寛、といずれも英文学者であり、「神」「恋」「戦争と文学」などのテーマがみうけられる<sup>38</sup>。

<sup>33</sup> 本書の挿画は、「ミルトン肖像」「稿本『失樂園』第一巻第一頁」と「ミカエルとサタン」（ブレイク画）「樂園に眠るアダムとエバ（ブレイク画）」「わが軍勢を召集するサタン（ブレイク画）」の 5 点である。寿岳は『向日庵消息』第一信（1933 年）に記している。「近く刊行される岩橋武夫の『失樂園の詩的形而上学』（略）のために、私はブレイクの失樂園挿画三枚を選んで複製しました」（『寿岳文章しづ著作集 2』p. 58.）

<sup>34</sup> 「自序」『動き行く墓場』、pp. 3-4.

<sup>35</sup> 寿岳文章「編集後記」『ブレイクとホキットマン』創刊号（1931 年 1 月）『寿岳文章しづ著作集 2』、p. 6.

<sup>36</sup> Ibid.

<sup>37</sup> 「Editorials」『みをつくし』創刊号（ぐろりあ そさえて、1929 年 10 月 1 日）、p. 1.

<sup>38</sup> 本誌の目次を挙げておく。第 1 巻第 1 号：創刊の言葉／石田憲次「外なると内なる神」／矢野峰人「アーノルドの恋」／Denis

文章の「憤り」とは「文学」や「思想」と乖離した学者自身の「生活」のありように対するものであろうか。「人類よ、もういい加減に恥を知れと怒鳴りたくなる」、「静かなる小さき声」を聴け、とくりかえし、『みをつくし』の意図は『ブレイクとホキットマン』に受け継がれ<sup>39</sup>、「向日庵私版」の刊行へとつながっていった。しづは、『ブレイクとホキットマン』の最終号に寄せて「この雑誌の編輯から製本まで、一切の雑事をもやるつもりだと文章が申しました時、それでなくても忙しさに困っている私共の生活には、少々無理だと思いました。けれども嬉しそうに色々と計画を話す文章の顔を見、またこうした仕事の意義あることを十二分に知り抜いている私は、喜んで体の続くかぎり手伝おうと思いました」と創刊を振り返る。そして、次に挙げるしづの言葉は、文章と同じ使命感をもって仕事に向き合うしづの姿勢を示すものである。

今の社会の状態、今の人心の状態、否、いつの時代にあっても、こうした種類の雑誌として、五百の読者は多すぎるのではないかと思います。これは、どうしてもあまく人間の本質を買いかぶることのできない私の眼にうつるこの世の姿です。(中略) 同文館の経済的理由で今月限りいよいよ休刊するとしても、(中略) 少数だとはいえ、私共の意図なり仕事なりを、とりもなおさず人生の大切なものに繋がろうとする念願と熱意と生活態度とを、親しい存在として下さった人々のあることは、ほんとうに嬉しうございます。<sup>40</sup>

しづは、この仕事を「人生の大切なものに繋がろうとする念願と熱意と生活態度」といい表わす一方で、「五百の読者は多すぎるのではないか」と、発行部数を思案する現実的な経営感覚も忘れない。一年が経った頃から読者が減り出して、五百の数が半分にまでなってしまったことに対して憤りを感じ、「ぐんぐんと、一つのことを突きつめる心なり態度なりを持つ人は、ほんに少ないもの、この雑誌に払われていた五十銭玉は、いったい何につかわれるのか」と嘆息する。夕食が終わってから深夜二時過ぎまでかかって製本をしたり、製本した雑誌を郵便局までに運ぶために、百冊ずつの包みを両手にさげて、「一丁行ったら風呂敷包みを路傍へ置いて休み、半丁行ったらまた汗を拭う」「こんなことなら、長男の潤をのせて使いふるした乳母車を、五十銭で質屋に下げるのではなかった」と二人して悔やんだものである<sup>41</sup>。質屋に下げた乳母車の五十銭という額が、『ブレイクとホキットマン』一冊の値段と同じであることを思えば、しづの「憤り」は「思想と生活」に無関心な人のありように対するものであったと理解できるのではないだろうか。

### 『向日庵消息』

1933年、「僊壺庵」から「向日庵」に居を移した文章としづは向日庵私版の刊行を開始した。私版の読者に宛てた『向日庵消息』(第一信～第十信、1933-1943年)は、『ブレイクとホキットマン』を引き継いで文章が翻訳したウィリアム・ブレイクの詩、「向日庵」での二人の生活と仕事を綴ったものであるが、ここで焦点をあてたいのは、文学や読書を通して時代と人のありようを問うた、文章としづの生活である。

他のうちに、また自己のうちに自己を見出すよりも、自己でないものを見出して育てることの必要さを、

---

Saurat「大戦後の仏蘭西文学」(「CANOPUS」のペンネームを用いた寿岳文章の翻訳による。)／行潦余滴、第1巻第2号:Editorials／寿岳文章「ブレイクとその時代」(余白に掲載した杜甫「春の嵐」は、「寿星」をペンネームに用いた寿岳文章の翻訳による。)／市河十九「愛蘭土古謡(Lionel Johnson)」／深瀬基寛「T.E. Hulmeの反人本主義」／矢野峯人「上田敏詩集」を讀みて／行潦余滴

<sup>39</sup> 寿岳文章「編集後記」『ブレイクとホキットマン』第2巻第2号(1932年2月)、第2巻第5号(1932年6月)、『寿岳文章しづ著作集2』、p. 30, p. 36.

<sup>40</sup> 寿岳しづ「編集後記」『ブレイクとホキットマン』第2巻第12号(1932年12月)、『寿岳文章しづ著作集2』、p. 48.

<sup>41</sup> 寿岳文章「雑記」『ブレイクとホキットマン』第1巻第7号(1931年7月)、『寿岳文章しづ著作集2』、p. 16.

この頃深く感じております。(中略) 自己の極限を知ったならば、その極限を少しでもひろげ、自己を大きく、深く、豊かにすることが、人間として誰しも積むべき教養でありましょう。(中略) 自己の発見や主張にいそがしい態度は、(中略) 浅薄な自己陶醉に終ることが多いようです。<sup>42</sup> (昭和八年八月二十七日文章「第二信」)

今私の仕事となっているハドソンの翻訳を、時間の許す限り一心に続けております。出来上った訳は文章に見て貰います。このため、鳥や草木を見る眼をハドソンから教わって、もともと好きな自然が一層親しくなりました。<sup>43</sup> (昭和九年八月二十五日しづ「第四信」)

わが国の英文学徒(中略)が「美」の問題に恐ろしく無関心であり無感覚であることを指摘したいのです。「美」は芸術を貫く最も基本的な問題です。(中略)「美」についてのラスキンやモリスの思想を紹介する前に、むしろそれらを育てる台木ともいふべき中世的な美の伝統を認識し体験せよと言いたいのです。それを知るばかりでなくそれに徹せよと言いたいのです。<sup>44</sup> (昭和十年一月十日文章「第五信」)

近代文学の世界において、男女の悲劇を取り扱った優れた作品の数々はあっても、それにくらべて男女の愛の完成を、その到達を描きつくした作品は、私の知る限りではないように思えます。(中略)ただ私は、愛の貧困せる家庭、社会、時代を何よりも厭い、その根本義とも思える男女の問題を一生の課題として、過去と未来に繋がる一日の生活を充実させたく、心していることを申し添えよう存じます。<sup>45</sup> (昭和十一年二月十九日しづ「第七信」)

昔、学生時代に始めてこれ[『永遠之福音』]を読んだ時には、ブレイクに対して随分反発的な気持ちをさえ覚えさせられました。爾後二十年にしてようやくその真意を把握できる(と信ずる)ようになったのは、結局人生の体験が、何よりも大きい解釈者であることの証拠でしょうか。<sup>46</sup> (昭和十三年一月十七日文章「第九信」)

これらの記述からみえてくるのは、教養の役割、自然と人間、男女の問題、美の貧困、といったテーマであるが、それは、『みをつくし』と『ブレイクとホキットマン』において一貫して文章が追求してきた「思想と生活」をめぐる問題であった。文章の声は、時代思潮が露呈する「人間性の喪失」に対して絶えず憤り憂いた、しづの声でもあるといえる<sup>47</sup>。教養とは、時代のなかで実生活での体験として生きてこそ人間を豊かにするものである。この「生活の実践」を文章は「人生の体験は何よりも大きい解釈者である」と言い表した。

### 『紙漉村旅日記』

『紙漉村旅日記』(寿岳文章・静子共著、向日庵、1943年)は、「日本に現存する手漉き紙業の歴史地理的研究」にもとづく記録性、文章が理想とした「書物工芸」を実践した私家版、という二点において重要である。有栖川宮記念奨学金を得て現地調査の旅を開始したのは1938年4月のことであり、前年には日中戦争が勃発、国による思想統制が強まった時代下であったが、費用と行程においては不自由なく恵まれた旅であった。とはいえ、文章の本務である学校の仕事のあいまを利用した調査旅行は、ときには村から村へと予定の汽車を乗り継いで移動しなくてはならない強行日程であった。文章は「朝は五時前に起きていながら、夜は十二時を過ぎてなお日記の筆を執る」、「しかもその朝と夜の間には、二つも紙漉村を見ていたりする。今にして回顧すれば、

<sup>42</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、p. 60.

<sup>43</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、p. 76.

<sup>44</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、pp. 84-85.

<sup>45</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、pp. 101-102.

<sup>46</sup> 『寿岳文章しづ著作集2』、p. 115.

<sup>47</sup> 『寿岳文章しづ著作集1』、pp. 302-303.



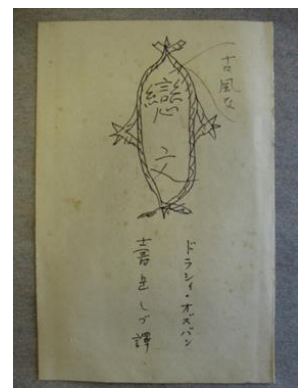
あれでよく身体が続いたものと思う。」と振り返る<sup>48</sup>。おもに「沿路の叙景や紙漉村の描写」はしづが、「紙漉に関する専門的な記述」は文章が担当した。

調査については四段抜きの新聞記事として報じられた。「有栖川宮奨学賜金で和紙の研究ほど完成 美しい夫婦愛に鼓舞されて 関学寿岳教授の輝く研究」（大正日日新聞<sup>49</sup>）、「貴重な和紙の研究と美しい夫婦愛 関学大・寿岳教授の努力」（「大阪日日新聞」昭和14年7月11日）、「苦心十年ぶりに和紙の研究成る 有栖川宮賜金拝受の光栄 関西学院の寿丘[ママ]教授」（「福岡日日新聞」昭和14年7月12日）といった見出しのもと、調査の内容と成果に加えしづの「内助の功」に注目した記事内容である。「その努力の蔭に静子夫人のかくれた涙ぐましい内助が秘められている」「夫君の研究完成のため冬期紙漉き現場調査には連日平均三里の強行軍をもいとわず常に同行し文献の筆写や一切の旅日記メモ記入を引うけ夫君の研究を容易ならしめているよき助手ぶりは日本女性ならではのかぐわしい愛情ぶりであると学界称讃の的となっている」<sup>50</sup>と報じるが、紙漉調査におけるしづの役割について文章は「内助の功などというものではない」と断言する。紙漉調査は文章としづ協働による仕事なのであった。

調査旅行で蒐集した和紙「百三十四種」と写真「百九十九枚」を添えた、向日庵私版としての『紙漉村旅日記』は、「外見の美しさよりも、記録としての持久性」に配慮を尽くした書物である。「まへがき」に文章は、「わが国が戦争目的を完遂した暁には、この由緒正しい手技、この尊い伝統の工芸は、正しい姿に於て、逞しく復活してほしいものである。」と述べ、「昭和十五年台初頭の和紙抄造の姿を忠実に録した私たちの旅日記」が「文化史的な意味を持つ」ことを自負し、「最も力のこもった向日私版本としてだけでも、私はこの書物を世に送りたい熱意に燃えている。」と刊行の意義を示す。そして、「紙のよしあし」を批判したり、生活の面に触れて厳しい言葉を吐くことも厭わないのは「ものの美しさに反応する謂わば私たちの平常心の現れ」であり、「私たちが、すべての生活に同義の裏づけを見ようとしているからである。」<sup>51</sup>と述べた言葉は重要であろう。「工芸美」とは「生活と結びついた手仕事の美しさ」であることを鑑みれば、作る人の「生活」そのものが美しくなくてはならない、この「平常心」と同義の「美」は、「外見よりも持久性」に尽くした『紙漉村旅日記』の装幀にあらわれている。文章としづが世に問うた『ブレイクとホキットマン』や向日庵私版の仕事は、「僊壺庵」と「向日庵」において実践した「生活と同義の美しさ」のひとつのかたちであるといえよう。

## 夫婦の記録

「夫婦で本を出版されたという方はありましようが、わたくしどもは文字通り共有といえますか、同じ目標で一つの本を書いています。珍しいといえば、その点でしょうか」<sup>52</sup>と文章は『寿岳文章しづ著作集』全六巻（春秋社、1970年）の出版にあたって語り、金婚式を三年後に控えた文章としづは、『著作集』を「生活の記録」と位置づけた。「老夫婦は、金も銀も何もほしくないが、できることなら、私たち夫婦が同じときにこの世の生を終えたい、と願った。（中略）幾年かすぎ、夫婦はかつて願ったとおりに、この世から消えて行ったが、いつからともなく、その家の前に二本の木、樅と菩提樹とが生えてきて、（中略）そよ風が吹けば、葉という葉がいっせいにこよなくやさしい歌をうたって、



『古風な恋文』に関するメモ  
(向日庵資料)

<sup>48</sup> 寿岳文章「まへがき」寿岳文章寿岳静子『紙漉村旅日記』（向日庵、1943年）、p. 1.

<sup>49</sup> 向日庵資料「寿岳文章スクラップ帖」記載による。

<sup>50</sup> 「貴重な和紙の研究と美しい夫婦愛 関学大・寿岳教授の努力」（「大阪日日新聞」昭和14年7月11日）

<sup>51</sup> 寿岳文章「まへがき」『紙漉村旅日記』、p. 2.

<sup>52</sup> 「わたくし共の生活記録」全六巻「紙漉村旅日記」など 夫妻の著作集を出版する 寿岳文章さんしづさん（『産経新聞』、1969年4月20日）（「寿岳文章スクラップブック」、向日庵資料）

その木陰に村人をいこわせた。とこしえに。」<sup>53</sup>しづがかつてより好んでいたルーマニアに古く伝わる物語であるが<sup>54</sup>、文章としづのリレー随筆『樅と菩提樹』（白風社、1966年）は理想の夫婦像をこの寓話に托したものであった。夫婦による著作をさかのぼれば、「寿岳文章同静子」と記して刊行したウィリアム・ブレイク『無染の歌』を端緒として、『向日庵消息』、『紙漉村旅日記』、『樅と菩提樹』、『寿岳文章しづ著作集』へと、刊行歴は常に生活の軌跡とともにしてきた。さいごに、出版が計画されながらも未刊に終わった、晩年の文章としづによる翻訳作品を加えておきたい。

雑誌『婦人之友』に文章としづが連載した「ドロシー・オズボーン 古風な恋文による伝記の試み」（1971年7-12月号）は、岩波文庫として出版される予定であった。文章がある対談のなかで「私たち夫婦でこれからやろうとしているのは、例の Dorothy Osborne の『手紙』、これを二人の共訳で「恋文」あるいは「古風な恋文」というような題で岩波文庫に入れることになっています」<sup>55</sup>と語っており、これを裏付けるふたつのメモが「向日庵資料」に見つかった。ひとつは、表題を「恋文」とするか、「古風な恋文」とするか、あるいは「恋文」に「ドロシーの」「内気な」と付すか、についてのメモであり、もうひとつは題扉であろうか、縦書きの「恋文」の文字を囲む意匠は、合本『ブレイクとホキットマン』の函の背<sup>56</sup>を連想させる。下部には「ドラシィ・オズバン」「寿岳しづ訳」と記され、表題にはあとから「古風な」と書き加えられている。ドロシー・オズボーンの『手紙』は、しづによる翻訳作品『古風な恋文』として出版する構想があったのだろうか。文章としづの共著として『婦人之友』に連載した「ドロシー・オズボーン 古風な恋文による伝記の試み」には「真実に生きた女性」という副題が付されているが、とくに本誌の読者である女性に伝えたいと願った翻訳の意図がかいまみえるようでもある。

ドロシー・オズボーン（1627-95）はイギリスの名門貴族の家に生まれ育った女性で、将来の夫となるイギリスの外交官、ウィリアム・テンプル（1628-99）にあてた 77 通の手紙が、後に往復書簡の範として注目された。『ガリヴァー旅行記』の作者であるジョナサン・スウィフト（1667-1745）は、作家活動を開始する以前にウィリアム・テンプルの秘書をつとめ、テンプルの回想録、書簡、遺稿集を世に送り出したことでも知られる。1652年12月から1954年10月にかけてドロシーがウィリアムに送ったこの私的な恋文について、文章としづは、「どちらかと言えば活字印刷が身分の高い人たちの間でさげすまれ、婦人の文筆活動などほとんど想像もされなかったイギリスの十七世紀の、全く閉ざされた貴族社会に育った少女の恋文が、長い間一目に触れなかったことに不思議はない。」とし、19世紀の後半になってから「伝記文学流行の波に乗り、彼女の恋文の一部が、その夫を語るための言わば刺身のつまとして、伝記のつつましい付録の形で初めて日の目を見」、そして「政治家であった肝心の夫の伝記よりも、付録のほうがはるかに面白いという批評家さえ現れた」と紹介している<sup>57</sup>。20世紀のイギリスの小説家、ヴァージニア・ウルフは、「もし一八二七年に生まれていたら、ドロシー・オズボーンはきっと小説を書いていたことだろう。一五二七年に生まれていたら、なにも書き残しはしなかったろう。しかし彼女が生まれたのは、一六二七年だった」といい、かつて女性が「書く」ことを許された唯一の手段である「手紙」が、ドロシー・オズボーンにおいては「手紙を書く技」とは異なる「文学のひとつの形式」として評価し、ドロシーの書簡の魅力について述べている<sup>58</sup>。

<sup>53</sup> 『樅と菩提樹』、pp. 5-7.

<sup>54</sup> 「菩提樹と樅」は、ルーマニアのトランシルヴァニア地方にてドイツ語で記録された民間伝承である。（日本民話の会 外国民話研究会編訳『世界の花と草木の民話』[三弥井書店、2006年]、pp.105-107.）

<sup>55</sup> 「寿岳文章 学問と人生と美の探究者」福田陸太郎『さまざまな出会い 対談・鼎談・会見記』（中教出版、1987年）、p. 70.

<sup>56</sup> [図版]『ブレイクとホキットマン』、『寿岳文章人と仕事展』、p. 13.

<sup>57</sup> 寿岳文章、寿岳しづ「ドロシー・オズボーン 古風な恋文による伝記の試み」（『婦人之友』1971年7月号）、p. 227.

<sup>58</sup> ヴァージニア・ウルフ、出淵敬子・川本静子監訳『女性にとっての職業』（みすず書房、2015年）、pp. 92-94.

ここで思い起こしたいのは、しづが書いた自伝的小説『朝』である。しづは、「書く」ことについて、「婚約中の二年間に夫ととりかわしたラブ・レターズが、書きたい思いをあらわす最初の練習だったのかもしれませんが。だが文章についての苦勞を身にしみて感じたのは、なんといっても処女作の『朝』を書いたときでしょう。」と振り返る。しづと文章がとりかわした「ラブ・レターズ」は、『朝』や『動き行く墓場』の作品中でも、現実においても、重要な役割をもって人生の糧となった。

文章は「ドロシー・オズボーンの手紙」への関心について、「青年時代から手紙、とりわけ love letters に特別の関心を持っていた私は、大学を出て間もなく、一つは中世の、もう一つは十七世紀イギリスの、それぞれ異色のある love letters の邦語訳を心がけ、文献の収集にとりかかった」と語り、「アベラールとエロイズの間にとりかわされた六通の手紙」と「ドロシー・オズボーンの手紙」を挙げている。文章の「手紙」に対する愛着は、「これ [『テオ・ファン・ホッホの手紙』] を最初として、続いて出す私の『ブレイクの手紙』や、その次に出したく思う『アベラールとエロイズの手紙』など、すべて手紙や日記を内容とするものは、手に取るから親しみの多い、やや小形の書物に仕立てたいと考え、既に自信ある形を得ました」と記していることからみてとれる。文章が青年時代から特別の関心を寄せていた love letters のひとつとして、「アベラールとエロイズの手紙」や「ドロシー・オズボーンの手紙」が計画どおりに刊行されなかったことは惜しまれる。『婦人之友』に連載した原稿については、あるいはドロシーの筆による手紙の翻訳文をしづが、伝記にあたる本文を文章が執筆を分け持ったとも考えられるが、わからない。

#### むすびに

「人が生きるうえで障害となるのは、ハンディキャップそのものよりも、そのハンディキャップに対する劣等感である」と熊谷鉄太郎はいう。しづは、武夫が失明による懊悩を退け喜びをもって生きる姿を目の当たりにしながら、学校を卒業できなかったという自身のハンディキャップを越えて小説を書き、翻訳に向かった。文章は小学生のとき、墨染めの衣を着せられ、檀家の法事などへ連れていかれるのを上級生がどこかで見て、それを種に徒党を組んで「坊主の子」といってからかわれるのが嫌でたまらなかった。助法でもらったお布施で文芸誌を購読することが楽しみで、「われは巡礼」と題して「人目はぢらう旅なれば、笠かたむけていそげども」と句を詠むような少年であった<sup>59</sup>。文章はしづとの恋愛と結婚、京都大学の学生としての新生活によって、少年時代のコンプレックスと感傷の念から脱皮することができた、と振り返る<sup>60</sup>。

文章としづは、常に自身の精神的体験を文学や思想に照らして真理を見ようとし、体得した信条に基づいて社会に関わり続けた。文章においては、武夫が立ち上げた「ライトハウス」の図書館設立のために尽力した点訳奉仕の活動<sup>61</sup>や、代表をつとめて牽引した「乙訓の文化遺産を守る会」の活動<sup>62</sup>、しづにおいては、文筆活動を通じて、人が持つ可能性を拓ける文学の力を伝え、一方でオピニオン・リーダーとして女性の自立を説き、市井の人々とともに行動したことは、その一端である。そして、非戦と自然保護に人間の生きる道を求めた文章としづの姿勢は、いずれも自らの体験から導き出した「思想と生活」に拠るものであった。

人は常に「生活」のなかに生きている。同時に、人から生み出された学術や芸術は、人の体験のなかに生かされなくてはならないのではないだろうか。

<sup>59</sup> 寿岳文章しづ『樞と菩提樹』、p. 236-242.

<sup>60</sup> 寿岳文章「若き日の読書」『寿岳文章書物論集成』、p. 847.

<sup>61</sup> 中島俊郎「宗教的真理の探究」、pp. 47-48.

<sup>62</sup> 寿岳文章は会を代表して、『乙訓文化』（乙訓の文化遺産を守る会）に「質問」「要望」を書き、文化遺産の保存の必要性を訴えている。（7号、10号、13号、25号、27号、30号 [1967年～74年]）

Ibe Kyoko, "On Gampi," in Tatiana Ginsberg ed., *The Papermaker's Tears: Essays on the Art and Craft of Paper* (Ann Arbor: The Legacy Press, 2019), pp. 136-207.

紙の造形作家として国際的に著名な伊部京子は、和紙の物語をつむぐすべを心得たアーティストである。京都の向日市に拠点をすえた寿岳文章が、伝統的な紙漉き技術の知見を世に伝播しようとしていた時期、伊部は寿岳の仕事に多大な関心をいだくようになった。やがて自身、和紙のなかに連綿と流れる歴史、科学、生活文化のなかに生きていく。やがて和紙の起源と技術、特性と美意識まで日本の紙をことごとく記録したい、との志をいだくようになった。伊部が作品に託した和紙をめぐる英知と物語は、優美な屏風、造形デザイン、そして荘厳な舞台装置となって語り継がれていくのである。

情熱的な紙の芸術家にして専門家でもある伊部は、雁皮に関する画期的な論考を最近発表した。それは心騒ぐかのように「雁皮について」と題されている。このたびの出版は、一世紀以上にわたり地球規模で育まれてきた紙研究から生まれてきた。1997年、紙の世界的権威者であり、かつてミシガン大学図書館で出品・保存を担当していたキャサリン・ベーカーは、紙、印刷、書物芸術を専門にする出版社を立ち上げた。レガシー・プレスと命名されたその出版社から、ベーカーは大出版社よりも迅速に、かつ適切な版型で紙に特化した書籍を出版している。

ベーカーと同じく、紙の研究者・アーティストであるタチアナ・ギンズバーグが紙漉きに関する現代的な思索をテーマとする新シリーズを立ち上げることになったとき、ベーカーは伊部の「雁皮について」を創刊号『製紙家の涙』に選んだのだが、それが「紙工芸に関する試論」(2019)である。インド、東欧、アメリカにおける紙の品種、道具、伝統、工芸、生産についての考察は、日本における雁皮とその魅力が世界中に広がったことについての伊部氏の精緻な研究を補完するものである。

いみじくも『製紙家の涙』と題された本書は表紙に魅力的なイメージがあしらわれているが、このイメージこそ本書の精神を明瞭に語っている。ギンズバーグによれば、製紙家の水滴とは、「紙ににじんだ水滴であり、陽にかざしてみるとすかし模様にもなる」という。いわゆる水滴は紙の汚れであるのだが、漉紙の品質を証明するばかりか、同時に紙のなかに製紙家の存在を証するものでもあるのだ。

伊部がつむぐ雁皮の物語は、製紙家の涙を活性化してみせる。雁皮を主人公にすえて、製紙家の眼と手を通じて雁皮の長い生涯をつむぎだしていく。まず冒頭でいかに雁皮が楮、三桮といった同類をしのぐ存在であるかを示唆してみせる。雁皮の歴史を展開するにあたり、それほど知られていない和紙—薄葉、唐紙、金唐革紙、局紙、鳥子、継ぎ紙、箔打紙、斐紙、奉書、間以合紙—と関連づけつつ雁皮をさらに特徴づけていく。

本論の第1部では、読者は書物愛好家とともに散策に誘われる。前世紀に展開した製紙の探究、展示、そして出版における雁皮の意義を追究していく。現代では柳宗悦と寿岳文章が雁皮を用い、広く流布させたのである。柳が著わした『和紙の美』、また編集した雑誌『工藝』はその媒体となった。今世紀、雁皮は欧米の紙愛好家、芸術家の耳目を集めている。とりわけ紙の権威者である著名なダード・ハンターは、伊部の紙に関する概観を形成していくのに顕著な寄与を果しているといえよう。

次に雁皮の本質を理解するために、雁皮の起源についての考察していく。正倉院に保管されていた奈良時代の和紙について、1960年から2005年にかけて行われた2回の画期的な研究の結果を、英語で説明した珍しい論文である。正倉院の研究は、化学者の町田誠之と紙漉き職人の阿部栄四郎の専門知識により、雁皮紙のユニークな吸収特性を指摘するものであった。町田は生涯にわたって化学分析に省察を加え、最大の雁皮推奨者に

なった。

一方、伊部は町田の紙の化学挙動に関する理論に基づき、雁皮の実験を進めた。正倉院に保存されている天平時代の雁皮が本来の姿を見せるという町田の説を確認するため、湯山賢一による延喜式（10世紀）の紙漉き研究に着目し、天平時代の雁皮の自作に挑む。延喜式の仕様にしたがって、簀（す）と桁（けた）を自作する。さらに、雁皮の性質や紙を漉く際の注意点などを記し、その全行程を丹念に記録している。10世紀の法律と習慣を記録した年代記『延喜式』所収の製紙法に注目し、正倉院に収蔵されている天平時代の雁皮類こそ雁皮の本質を示すものだ、と著者は推察する。

伊部論文の要諦は、雁皮製造にまつわる力強い取り組みにある。それは、いかに雁皮が人生と結びつき、心性を反映し、日本の自然観を例証しているかを提示するものである。

論考の第2部は、日本芸術の文脈のなかで雁皮が論じられていく。ここでは芸術作品、文化財の媒体としての、好奇心をそそってやまない雁皮観が提示される。まず福島久之の近作をとりあげ、藍紙に金文字で書かれた金光明経の経典を手本に試みた福島の書法を精査していく。理論を構築しながら実作の価値を検証していく福島の存在があつてこそ、雁皮の実験が可能になったと伊部は語っている。

一般的な雁皮理解を超えるが、藤原道長が11世紀に書いた日記のなかで言及している経典の重要な断章が700年も保存できたのは、雁皮に書かれているからにほかならない、と著者は指摘する。また雁皮のなめらかさこそが平安時代に育まれた書法の多様性をうながしたとも述べている。なおかつその耐久性ゆえ、継ぎ紙、唐紙などの装飾的な紙が発達していったのである。なかんずく箔打は金箔の繊細さと雁皮の強靱さが合体したものであった。

(16世紀)桃山襖に用いられた雁皮は、国境を越えてオランダへ移入されていく。また数々の屏風は内側に楮が使用されているものの、雁皮紙でもって表面が仕上げられている。レンブラントの版画がいささかも変色をこうむらないのも雁皮のうえに刷られていたからにほかならない。19世紀後半、ジェイムズ・マックネイル、ホイッスラー、フェリックス・ヴァロットン、ポール・ゴーギャンといった画家たちは、こぞって雁皮の多様性を偏愛した。

本論の第3部、最終部において、雁皮紙製造の終焉が語られるが、同時に、その新しい利用法が開陳される。白銀紙と謄写原紙に加えて、未来の表現形態に適応できる題材として雁皮紙が提唱されていく。

レガシー・プレスが紙に特化した出版社であることを証するがごとく、魅惑的な図版が70葉も挿入されている。本文がはじまる直前、まず目にする、搬入されてきたばかりの色あせた古い雁皮紙の写真がおかれている。それは伊部が購入した中古の雁皮紙で、新しい創意あふれる作品をつくるため再生していくものであった。膨大な資料から選ばれた図版の数々は、英語圏の紙研究ではそれほど言及されていない内容を提示するばかりか、著者が実践していく幾多の製紙過程を可視化して例証して見せてくれるのである。

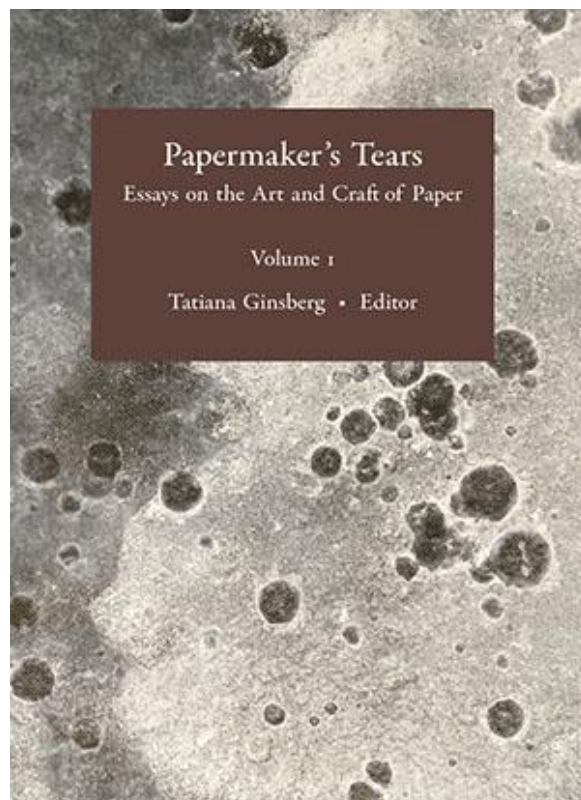
提示された図版の内容を以下に列挙してみよう—雁皮や他の和紙がかもし出す感覚的な（触覚的な）特質。各加工段階で使用される興味深い日本の製紙用具、材料。雁皮、三桎、楮の繊維の構造、粘液の拡大図。数々の書の見本。日本の書籍、雑誌の装幀、製本、活字、本文用紙、色彩など、世界では余り類例をみない、日本の出版史に脈々と流れる視覚的伝統、紙と印刷にかかわる民衆文化。紙と印刷技術における創意。古い屏風の補修紙。昔の屏風を革新しようとする職人。紙や他の文化財が今日保存されている、向日市にある寿岳文章の旧宅、向日庵。創意あふれ雄勁な伊部による創作品の提示などが図版で可視化されるのである。

英訳された本論には相対する日本語が挿入され、他の紙研究と正確に相互参照できるようになっている。日本語の用語法に注意をうながしているが、多様な読者のために雁皮の諸性質を説けば説くほど、「雁皮」という言葉は歴史ゆたかなことばであるがゆえにさらに謎めいてしまうのだ。そのため、著者は雁皮論の理解を深めるため、数多くの写真に加えて詳細な表示、脚注、和名用語集、日英以外の書誌なども提示している。

本書は読者を製紙という重層化された世界へと必然的に誘っていく。本書に所収された論考「雁皮について」は多面的な雁皮研究、日本・世界文化への意義を説いているだけではなく、雁皮を支持してきた過去の人々へのオマージュでもある。著者はいにしえの人々の雁皮の知見を擁護し、日本を越えて広く世界に伝播させていこうとする。他の諸論考と同じく本論は世界文化の核たる、「つくる」という奥深い意義にふれるものである。

(翻訳 中島俊郎)

**クレア・クッチオ** 国際シンポジウム『20世紀の和紙—寿岳文章 人と仕事—』の発表者の一人。日本の版画、紙漉文化、アジアの職人、世界の工芸を研究する研究者。工芸のスペシャリストとして日本、中国、インドネシア、ネパール、北米を中心に、職人や現代のクリエイターなどの工芸界の専門家とコラボレーションを行なう。同志社大学の京都アメリカ大学コンソーシアム、神戸市外国語大学、横浜市の BankArt1929 プロジェクト、北京外国語大学、カトマンズのトリブバン大学などで講演を行なった。国際木版画会議の議長もつとめ、世界クラフト会議や『現代の製紙』『手漉紙』『現代工芸』に寄稿するかたわら日本大使館の招きでスピーチも行なっている。総合学習ツールとして工芸をとらえるオンラインプラットフォーム「ウッドペーパーハンド」(<https://www.woodpaperhand.org/>) を最近立ち上げた。



# 小説『朝』の舞台 大正デモクラシー期の大阪

**寿岳しづ書『朝』と岩橋武夫著『動き行く劇場』**  
 寿岳しづと、兄、岩橋武夫が書いたこの小説の登場人物は、しづと武夫、寿岳文章がモデルになっています。しづと武夫が生まれ育った大阪を舞台に、自立した人生を歩みはじめたまでの物語がくわたりひろげられます。描かれた場面を当時の地図に重ねあわせて、しづの足跡をたどってみましょう。



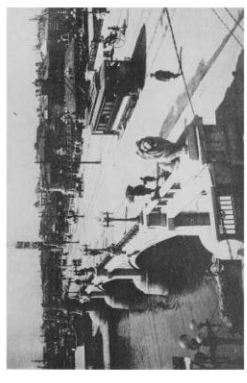
大阪全景  
 (大阪府写真帖「大阪府編」大正3(1914)年)

縁起の良い助が背から家風のようにつける牌標の音も、美沙子と母が風し下で交し合ふ話聲も聞らしい。河蒸気は業現かの舟を曳いて、笛を聞らしながら上った。後には一しきり舞出した娘が厚唇にぶつかつて胸入らせる娘を首を立てた。彼は東京の病院に居た頃と變り無い、無難な顔をした。淋しきには落ちた。  
 「あ、朝、其處からは生氣無い一日の生活か始まる」とは、春の雨が花しい病室の窓を濡した身分から、日毎に來た思ひであつた。  
 (岩橋武夫『動き行く劇場』)

「兄さん、今原の案の下にはお湯が流れてゐます。二階からは一日に新しい石の浪花輪が見えます」と美沙子は、此の十一月天王寺から浪花園の方へ引き移つたとおふぶぶ家の宿屋を引いて寄越した。  
 浪花園は直ぐ取り替はれる事になつてゐます。川邊の石壁に満潮が押し寄せると、狂瀾の打や何の岸の浪音電燈が水に寫つて、美しい夜のやうな眺めです。もう直ぐに冬休でせうが、兄さんは歸らないでゐますからね。私は淋しい顔が致します。桃代や勝もあんなに待つてゐましたのに」などとも書いて寄越した。指の裏を思はせる高い西洋建築、電気の河蒸気、河原の家の家など、胸うぶつた物を見一は妹の手紙から想像してみた。  
 (岩橋武夫『動き行く劇場』)

1916

■大正5(1916)年 浪花園の西、空母田の町に動き行く劇場

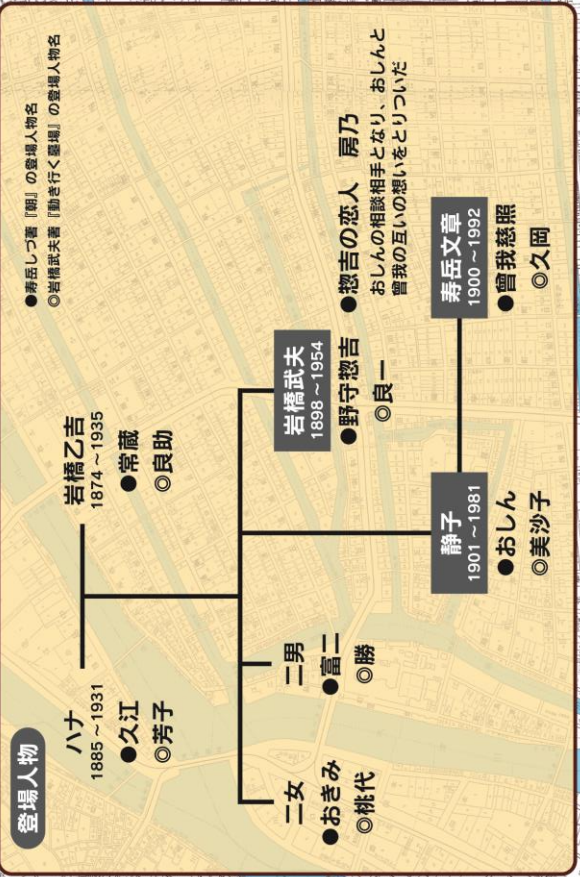


大阪難波橋通  
 (日本名劇川原産業写真集 近畿地方之部、西田繁雄編 富田屋書店 大正7(1918)年)



しづ 15歳のころ

地図：「明治前期、昭和前期大阪府地図」(柏書房1995年)より転載  
 写真：「国立国会図書館デジタルコレクション」より転載







## あとがき

特定非営利活動法人向日庵は、2015年8月から2017年1月までの間、「壽岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」（全6回開催）の準備期間をへて、2017年4月30日にその設立総会を開催し、7月3日に京都府より設立認証を得、本格的な活動を開始しました。本NPO法人向日庵はその定款の第5条（事業）において、①向日庵に保管されてきた文書、資料の調査研究、データベース化事業、②向日庵と目的が類似する国内外の文化機関との交流、連携事業の企画運営事業、③向日庵の保存、公的活用実現までの条件整備業務事業、さらに④出版物、企画商品の販売事業をすることになっています。

①については、2020年夏から会員のご協力をえて、主として、『壽岳文章日記』の解説、壽岳文章宛ての英文・日本語書簡の解説とデータベース化に努め、現在も鋭意つとめています。その中間報告として「壽岳文章人と仕事展」および「生誕120年 壽岳しづ展」を2021年1月23日から3月21日（コロナ禍のため当初の予定を1週間延長）まで開催され（詳細は玉城玲子向日市文化資料館長の「編集後記」『向日庵4』を参照のこと）、開催期間の大半がコロナ緊急事態宣言の影響を受けたにもかかわらず、2,066名の来場者をお迎えすることができました。

②については、コロナ禍を考慮して、Zoomを用いたオンラインによる国際シンポジウム「20世紀の和紙—壽岳文章 人と仕事—」を開催しました。向日市長の挨拶に始まり、日本から2名、海外から3名の方々に報告いただき、休憩時間中にはバーチャル展覧会「壽岳文章 人と仕事」の映像を放映しました。報告内容は、英語・日本語版のテキストを作成し、参加者360名全員に事前に配信しました（詳細は、同シンポジウム「報告」『向日庵だより』vol.15, 秋, 2021）。参加のなかにはアメリカはもちろん、ヨーロッパ、中国からもありました。現在、この国際シンポジウムの『日英語講演集』の編集を実施し、可能であれば公刊できればと考えています。

機関誌『向日庵』に対して国立国会図書館のISSN番号を2020年秋に取得ができ、2021年3月刊行の『向日庵4』から同番号（ISSN2435-9505）を付すことができただけでなく、既刊のものも含めてNPO法人向日庵のWebにも掲載されるようになりました。これにより同誌が同人誌の域を出て、学術誌として全国の研究者から壽岳文章研究の唯一の専門誌としての地位を得ることができると考えられます。

③については、2020年2月12日に寄付への減免が可能となる「特例認定」の資格を京都府より得ることができました（京都府指令2企参中第36号）。2つの展示会と国際シンポジウムの開催より、壽岳文章ご一家のことがより社会にも知られることとなると同時に、この減免措置が可能になることで、募金活動がさらに進むことが期待されます（2022年2月末日時点での寄付金総額は3,080,580円です）。

井上琢智（特定非営利活動法人向日庵副理事長）

### 【編集後記】

学際的な活動を展開した壽岳文章・しづにふさわしく、本号は多分野から充実した原稿が集りました。どの原稿も壽岳の人生、文化活動を読み解こうとする意欲にあふれ読みごたえあるものとなっている。改めて寄稿者に対して謝意を表したい。ただ、原稿の熱量に比例して編集作業は困難をきわめ、編集者を疲労の極へ追い込んでしまった。本当にご苦労様でした！どうか第6号にも個性あふれる原稿をお寄せ下さい。（T.N.） 数えると本号までの掲載文は38本、これまでご講演、ご寄稿くださいました皆様、活動を共にする皆様、読者の皆様に、あらためて感謝を申し上げます。一行一文字を惜しむばかりに余白がどんどん狭くなり、壽岳文章先生の書物道から遠ざかってしまいました。本誌から生まれる「雫」の波紋がさらに広がっていきますように。（Y.N.）